

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

1. 組織

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-04-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00009563

運営組織 (2018年3月31日現在)

●運営会議

窪田 幸子	神戸大学大学院国際文化科学研究科教授*1
栗田 博之	東京外国語大学総合国際学研究院教授*2
栗本 英世	大阪大学大学院人間科学研究科長*1
佐野 千絵	東京文化財研究所保存科学研究センター長*3
富沢 寿勇	静岡県立大学国際関係学部教授*1
松田 凡	京都文教大学総合社会学部教授*3
松田 素二	京都大学大学院文学研究科教授*2
山梨 俊夫	国立国際美術館長
渡邊 欣雄	東京都立大学名誉教授*2
(館内)	
韓 敏	超域フィールド科学研究部長*1*2*3
岸上 伸啓	学術資源研究開発センター長*1*2*3
關 雄二	副館長(企画調整担当)*1*2*3
園田 直子	人類基礎理論研究部長*1*2*3
西尾 哲夫	副館長(研究・国際交流・IR担当) *1*2*3
信田 敏宏	グローバル現象研究部長*1*2*3
林 勲男	人類文明誌研究部長*1*2*3
平井京之介	総合研究大学院大学文化科学研究科比較文化学専攻長／超域フィールド科学研究部教授*1
注) *1 人事委員会委員 *2 共同利用委員会委員 *3 研究倫理委員会委員	

●外部評価委員会

安達 淳	国立情報学研究所副所長
北野 尚宏	独立行政法人国際協力機構 JICA 研究所長
八村廣三郎	立命館大学情報理工学部特任教授
廣富 靖以	公益財団法人りそなアジア・オセアニア財団理事長
堀井 良殷	公益財団法人関西・大阪21世紀協会理事長
水沢 勉	神奈川県立近代美術館長
山極 壽一	京都大学総長
山下 晋司	帝京平成大学現代ライフ学部教授 東京大学名誉教授
山本 真鳥	法政大学経済学部教授

館内運営組織 (2018年3月31日現在)

●部長会議

●館内各種委員会

自己点検・評価委員会	大学院委員会
開館四十周年記念事業推進委員会	情報運営会議
福利厚生委員会	文化資源運営会議
安全衛生委員会	国際研修博物館学コース運営委員会
ハラスメント防止委員会	施設マネジメント委員会
広報企画会議	危機管理委員会
特別研究運営会議	大規模災害復興支援委員会
刊行物審査委員会	国際研究統括室会議
研究出版委員会	フォーラム型情報ミュージアム委員会
知的財産委員会	展示情報高度化事業推進委員会
地域研究拠点運営委員会	研究資料共同利用委員会

現員 (2018年3月31日現在)

区 分	館長	教授	准教授	助教	事務職員・技術職員	計
館長	1					1
管理部					27	27
情報管理施設					19	19
監査室					1	1
研究部		18(1)	20	3(1)		41(2)
学術資源開発センター		4	5			9
客員(国内)		7	6			13
客員(国外)*		6	6			12
計	1	35(1)	37	3(1)	47	123(2)

注) ()は特任研究員の人数を外数で示す
注) 客員(国外)*は、のべ人数

歴代館長・名誉教授 (2018年3月31日現在)

●歴代館長

初代/梅棹忠夫(故人)	1974年6月～1993年3月
第2代/佐々木高明(故人)	1993年4月～1997年3月
第3代/石毛直道	1997年4月～2003年3月
第4代/松園萬亀雄	2003年4月～2009年3月
第5代/須藤健一	2009年4月～2017年3月
第6代/吉田憲司	2017年4月～

●名誉教授

祖父江孝男(故人)	1984年4月1日	森田恒之	2002年4月1日	八杉佳穂	2015年4月1日
岩田慶治(故人)	1985年4月1日	石毛直道	2003年4月1日	朝倉敏夫	2016年4月1日
加藤九祚(故人)	1986年4月1日	栗田靖之	2003年4月1日	佐々木史郎	2016年4月1日
伊藤幹治(故人)	1988年4月1日	杉田繁治	2003年4月1日	杉本良男	2016年4月1日
中村俊亀智(故人)	1988年4月1日	熊倉功夫	2004年4月1日	須藤健一	2017年4月1日
君島久子	1989年4月1日	立川武蔵	2004年4月1日	塚田誠之	2017年4月1日
和田祐一(故人)	1990年4月1日	田邊繁治	2004年4月1日	竹沢尚一郎	2017年4月1日
垂水 稔(故人)	1991年4月1日	藤井龍彦	2004年4月1日		
杉本尚次	1992年4月1日	山田睦男(故人)	2004年4月1日		
梅棹忠夫(故人)	1993年4月1日	江口一久(故人)	2005年4月1日		
大給近達(故人)	1993年4月1日	大塚和義	2005年4月1日		
片倉素子(故人)	1993年4月1日	松原正毅	2005年4月1日		
竹村卓二(故人)	1994年4月1日	石森秀三	2006年4月1日		
周 達生(故人)	1995年4月1日	野村雅一(故人)	2006年4月1日		
松澤員子	1995年4月1日	大森康宏	2007年4月1日		
大丸 弘(故人)	1996年4月1日	山本紀夫	2007年4月1日		
友枝啓泰(故人)	1996年4月1日	松園萬亀雄	2009年4月1日		
藤井知昭	1996年4月1日	松山利夫	2010年4月1日		
佐々木高明(故人)	1997年4月1日	長野泰彦	2011年4月1日		
杉村 棟	1997年4月1日	秋道智彌	2012年4月1日		
和田正平	1998年4月1日	中牧弘允	2012年4月1日		
清水昭俊	2000年4月1日	小林繁樹	2014年4月1日		
黒田悦子	2001年4月1日	田村克己	2014年4月1日		
崎山 理	2001年4月1日	吉本 忍	2014年4月1日		
端 信行	2001年4月1日	久保正敏	2015年4月1日		
小山修三	2002年4月1日	庄司博司	2015年4月1日		

研究部教員の紹介 (2018年3月31日現在)

組織図に基づく現員一覧

館長		吉田憲司		
副館長(企画調整担当)		關 雄二		
副館長(研究・国際交流・IR担当)		西尾 哲夫		
研究部	職名・研究部門	教授	准教授	助教
人類基礎理論研究部	研究部長	園田 直子		
	第一超域	横山 廣子	福岡 正太 日高 真吾 山本 泰則	
	第二超域		川瀬 慈	吉岡 乾
	第三超域	出口 正之	丸川 雄三 菊澤 律子	八木 百合子
附置	日本財団助成 手話言語学	※飯泉 菜穂子	菊澤 律子(併)	※相良 啓子
超域フィールド科学研究部	研究部長	韓 敏		
	第一超域	平井 京之介 樫永 真佐夫 小長谷 有紀(併)	太田 心平	
	第二超域		菅瀬 晶子 松尾 瑞穂	
	第三超域	ピーター・J・マシウス 宇田川 妙子	新免 光比呂 丹羽 典生	
人類文明誌研究部	研究部長	林 勲男		
	第一超域		卯田 宗平 藤本 透子	寺村 裕史
	第二超域	池谷 和信	上羽 陽子	
	第三超域	關 雄二(副館長) 齋藤 晃 印東 道子	鈴木 紀	
グローバル現象研究部	研究部長	信田 敏宏		
	第一超域		河合 洋尚 廣瀬 浩二郎	
	第二超域	西尾 哲夫(副館長) 三尾 稔	相島 葉月 南 真木人 三島 禎子	
	第三超域	鈴木 七美 森 明子		
学術資源研究開発センター	センター長	岸上 伸啓		
	第一超域	野林 厚志 笹原 亮二	齋藤 玲子 佐藤 浩司	
	第二超域	寺田 吉孝	飯田 卓 山中 由里子	
	第三超域		伊藤 敦規	
国際研究統括室		西尾 哲夫(室長)(併) 池谷 和信(兼務) 野林 厚志(兼務)	卯田 宗平(兼務) 河合 洋尚(兼務) 山中 由里子(兼務)	吉岡 乾(兼務)

※は特任研究員を示す。

1955年生。【学歴】京都大学文学部哲学科美学美術史学専攻卒（1980）、大阪大学大学院文学研究科芸術学専攻博士前期課程修了（1983）、大阪大学大学院文学研究科芸術学専攻博士後期課程単位取得退学（1987）【職歴】大阪大学文学部美学科研究生（1980）、ザンビア大学アフリカ研究所共同研究員（1984）、大阪大学文学部助手（1987）、国立民族学博物館助手（1988）、国立民族学博物館助教授（1992）、総合研究大学院大学文化科学研究科助教授併任（1993）、総合研究大学院大学文化科学研究科教授（2000）、国立民族学博物館博物館民族学研究部教授（2000）、国立民族学博物館文化資源研究センター教授（2004）、国立民族学博物館文化資源研究センター長（2006）、放送大学客員教授（2010）、国立民族学博物館副館長（2015）、国立民族学博物館長（2017）【学位】学術博士（大阪大学大学院文学研究科 1989）、文学修士（大阪大学大学院文学研究科 1983）【専攻・専門】博物館人類学、文化人類学【所属学会】日本文化人類学会、日本アフリカ学会、民族藝術学会、王立人類学協会（Royal Anthropological Institute イギリス）、アフリカ学会美術協議会（The Arts Council of the African Studies Association アメリカ）

【主要業績】

[単著]

吉田憲司

- 2014 『宗教の始原を求めて——南部アフリカ聖霊教会の人びと』東京：岩波書店。
- 1999 『文化の「発見」——驚異の部屋からヴァーチャル・ミュージアムまで』東京：岩波書店。
- 1992 『仮面の森——アフリカ・チェワ社会における仮面結社、憑霊、邪術』東京：講談社。

【受賞歴】

- 2004 第1回木村重信民族藝術学会賞
- 2000 第22回サントリー学芸賞（芸術・文学部門）
- 1993 日本アフリカ学会研究奨励賞

【2017年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

文化の創造・継承と表象に関する博物館人類学的研究

・研究の目的、内容

文化の創造と継承、そしてその表象における博物館・美術館の役割に改めて注目が集まっている。文化の創造と継承の過程をいかに追跡し、いかなる形で自文化と異文化を含む文化の表象に結び付けていくのか。その作業に、博物館・美術館はいかなる形で関与するのか。本研究は、文化の研究と表象の課題を改めて検証し、問題点を洗い出すとともに、その将来に向けての新たな可能性を実践的に考究することを目的としている。

本年度は、科学研究費補助金・基盤研究（A）「アフリカにおける文化遺産の継承と集団のアイデンティティ形成に関する人類学的研究」の一環として、西アフリカ・ガーナのアサンテ社会と、南部アフリカ、チェワ社会における文化の伝統とその創造的継承の実態についての現地調査を実施し、とくに博物館建設を介した伝統的首長制度の再構築のプロセスを検証する。

さらに、2016年度から開始した科研費による研究基盤リソース支援プログラム「地域研究画像デジタルライブラリ」の構築を通じて、写真や映像による世界各地の自然と文化の記録と表象について多角的な分析をおこなうとともに、分野横断的な新たな展開の可能性をさぐる。

・成果

本年度は、科学研究費補助金・基盤研究（A）「アフリカにおける文化遺産の継承と集団のアイデンティティ形成に関する人類学的研究」の研究の一環として、ガーナ、ザンビア、マリと日本の研究者とともに、ガーナのアシエンティ王国都クマシのマンヒア王宮博物館において、「文化遺産の守り手としての博物館」「The Museum as a Guardian of Cultural Heritage」と題し、文化遺産の継承における博物館の役割に焦点を当てた現地ワークショップを開催した。このワークショップで報告されたアフリカ各地の事例から、文化遺産の継承と集団のアイデンティティ形成に、コミュニティ・ミュージアムが重要な役割をはたしていることが確認された。

南部アフリカのザンビアでは、政府の主導により、すべての首長領に博物館を建設するという動きが顕在化

していることを確認し、とくにンゴニ民族のコミュニティ・ミュージアム「ンシゴ博物館」の建設過程について詳細な追跡調査をおこなった。今後も博物館建設を介した伝統的首長制度の再構築のプロセスを検証していくこととしている。

これら、現地調査のほか、国内では、博物館による文化の表象のあり方について、2000年以降の世界の博物館の動向を踏まえて、実践を通じて新たな提言を各所でおこなった。

◎出版物による業績

[論文]

吉田憲司

- 2017 「伝統の創成と開かれたアイデンティティ——中南部アフリカ・ザンビアにおける民族集団の動きから」 飯田卓編『文明史のなかの文化遺産』pp.177-205, 京都：臨川書店。
- 2017 「文明の転換点における人類学と博物館——民博の開館40周年にあたって考える」『民博通信』158：4-9。
- 2017 「大津絵と近代におけるプリミティヴィズム（特集 プリミティブ絵画？——近現代を生きる大津絵）」『美術フォーラム21』36：21-26。
- 2018 「民族芸術学の構想——その成立と現代的意義」『民族芸術』34：33-35。

[その他]

吉田憲司

- 2017 「民博の展示のこれまでとこれから」『季刊民族学』162：7-18。
- 2017 「フォーラムとしてのミュージアムにおける資料保存の重要性」『文化財の虫菌害』。
- 2017 「こころの玉手箱① ザンビアのかぶりもの型仮面」『日本経済新聞』8月21日夕刊。
- 2017 「こころの玉手箱② 山に関する書物」『日本経済新聞』8月22日夕刊。
- 2017 「こころの玉手箱③ 学生時代のフィールドノート」『日本経済新聞』8月23日夕刊。
- 2017 「こころの玉手箱④ ガーナのキオスク」『日本経済新聞』8月24日夕刊。
- 2017 「こころの玉手箱⑤ 大英博物館の民族誌写真」『日本経済新聞』8月25日夕刊。
- 2017 「現代のこぼれ フォーラムとしての博物館と人類学」『京都新聞』8月30日夕刊。
- 2017 「この3冊」『毎日新聞』10月15日。
- 2017 「現代のこぼれ 武器をアートに」『京都新聞』10月31日夕刊。
- 2018 「ごあいさつ」『国立民族学博物館開館40周年記念事業報告 みんぱく2017』p.1, 大阪：国立民族学博物館。
- 2018 「現代のこぼれ 仮面の来訪者」『京都新聞』1月4日夕刊。
- 2018 「現代のこぼれ 再びの大阪万博開催」『京都新聞』3月7日夕刊。
- 2018 「世界の諸民族を知り、理解を深める」『週刊教育資料』（2018年3月12日号）No.1469。
- 2018 「他者に対する共感・理解の土台に」『週刊教育資料』（2018年3月19日号）No.1470。
- 2018 Welcome Remarks. *International Symposium Negotiating Intangible Cultural Heritage Report*, pp.124-125. Osaka: National Museum of Ethnology.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2017年4月23日 「報告2 民族芸術」民族芸術学会第33回大会シンポジウムⅡ『はじめにイメージありき——木村重信先生のご業績をたどる』鳴門教育大学
- 2017年5月21日 「パネル・ディスカッション」国際博物館の日記念シンポジウム『ICOM京都大会に向けて』京都国立博物館
- 2017年12月16日 「博物館とエスニック集団——国立民族学博物館の経験より」2017 International Conference of Museum and Hakka Studies, International Conference Hall of Taiwan Museum

・みんぱくゼミナール

- 2017年11月18日 「仮面の世界をさぐる——アフリカ、そしてミュージアム」第474回みんぱくゼミナール

・研究講演

- 2017年6月3日 「無形文化遺産とミュージアム——UNESCOにおける無形文化遺産保護条約成立から15年の時を経て」東京シンポジウム2017『文化遺産を考える』東京国立博物館
- 2017年7月23日 「イメージの力をさぐる——国立民族学博物館コレクションから」石川県立歴史博物館講演会、石川県立歴史博物館

2017年12月16日 「博物館と民族集団——文化遺産の保護・活用をめぐって」2017 International Conference of Museum and Hakka Studies、台湾客家文化館

2018年3月19日 「文明の転換点におけるミュージアムの可能性」全国美術館会議、国立新美術館

・広報・社会連携活動

2017年7月1日 「文明の転換点における博物館」国立民族学博物館友の会講演会、国立民族学博物館

2017年7月6日 「文明の転換点における人類学、これからのみんぱく」国立民族学博物館友の会午餐会、ホテル阪急インターナショナル

2017年7月10日 「文明の転換点における人文科学と博物館」関経連評議員会、中之島センタービル リーガロイヤルNCB

2017年7月14日 「みんぱくの新しい展示ができるまで——調査・収集・展示作業の記録」大阪高齢者大学校「世界の文化に親しむ科」

2017年7月15日 「文明の転換点における博物館」国立民族学博物館友の会講演会、モンベル御徒町店、東京

2017年7月21日 「武器をアートに——アフリカ、モザンビークにおける平和構築」大阪高齢者大学校「世界の文化に親しむ科」

2017年9月19日 「民博の新しい本館展示のできるまで 調査、収集、そして展示作業の記録」神戸市シルバーカレッジ校外学習、国立民族学博物館

2017年9月27日 「仮面の世界をさぐる——アフリカからミュージアムへ、私のフィールドワーク40年」大阪倶楽部午餐会講演会、大阪倶楽部

2017年11月4日 「文化人類学と霊長類学——人類文化の普遍性をさぐる」（国立民族学博物館開館友の会発足40周年記念 みんぱく大集合 記念対談 吉田憲司×山極寿一）国立民族学博物館

2017年11月5日 「仮面の世界に分け入る——長野県・遠山郷の霜月神楽から、アフリカ・チェワの仮面結社まで」信州出前講座、長野県立歴史館

2017年12月1日 「地域コミュニティと博物館」広島県歴史民俗資料館等連絡協議会第74回研究会、広島県立歴史民俗資料館

2018年3月4日 「先住民文化とミュージアムをめぐる世界各地の動向をふまえて」シシリムカ文化大学第6回講座、沙流川歴史館

2018年3月28日 「アートと人類学のあいだ 私の履歴書、人文科学の今」カレッジシアター『地球探究紀行』あべのハルカス近鉄本店

◎調査活動

・海外調査

2017年6月14日～6月18日—メキシコ（メキシコ国立人類学博物館表敬訪問と国際シンポジウム「博物館、人類学と文化間の対話」に参加）

2017年8月16日～8月31日—イギリス・ガーナ（大英博物館にて表敬訪問及び今後の共同研究の打合せ、ガーナにおける文化遺産の継承をめぐる実態調査と現地ワークショップへの参加）

2017年11月22日～11月27日—オーストリア（ウィーン民族博物館にてASEMUS（アジア・ヨーロッパミュージアム・ネットワーク）執行委員会に参加）

2017年12月15日～12月18日—台湾（国立交通大学客家文化院ならびに客家委員会客家文化発展センターとの学術協定の締結及びシンポジウムに参加）

2018年1月24日～2月4日—ザンビア（ザンビアにおける文化遺産の管理と集団のアイデンティティの研究ならびに国立博物館機構との連携に向けた協議）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（A））「アフリカにおける文化遺産の継承と集団のアイデンティティ形成に関する人類学的研究」研究代表者、科学研究費（基盤研究（A））「ネットワーク型博物館学の創成」（研究代表者：須藤健一）研究分担者、科学研究費（新学術領域研究（研究領域提案型）『学術研究支援基盤形成』）「地域研究に関する学術写真・動画資料情報の統合と高度化」研究支援代表者

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

African Arts (UCLA) Consulting Editor、独立行政法人国立文化財機構アジア太平洋無形文化遺産研究セン

ター理事、ICOM 京都2019組織委員会委員、公益財団法人大阪府文化財センター評議員、公益財団法人坂田記念ジャーナリズム振興財団理事、公益財団法人大阪ユニセフ協会理事、公益財団法人日本博物館協会参与、関西サイエンス・フォーラム理事、ASEMUS (Asia-Europe Museum Network) Executive Committee、京都大学人文科学研究所共同利用・共同研究拠点運営委員会委員、公益財団法人太平洋人材交流センター最高顧問、彩都（国際文化公園都市）建設推進協議会特別委員、独立行政法人国立美術館国立国際美術館評議員、Museum International (ICOM) Editorial Board Member、文化遺産国際協力コンソーシアム委員、民族藝術学会編集委員

- ・他大学の客員、非常勤講師
- 放送大学・客員教授

關 雄二 [せき ゆうじ] ————— 副館長(企画調整担当)、人類文明誌研究部教授

1956年生。【学歴】東京大学教養学部教養学科文化人類学専攻卒（1979）、東京大学大学院社会学研究科修士課程修了（1982）、東京大学大学院社会学研究科博士課程退学（1983）【職歴】東京大学教養学部助手（1983）、東京大学総合研究資料館助手（1986）、天理大学国際文化学部助教授（1995）、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（1999）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2001）、国立民族学博物館研究戦略センター助教授（2004）、国立民族学博物館研究戦略センター教授（2005）、国立民族学博物館先端人類科学研究部教授・部長（2007）、国立民族学博物館研究戦略センター教授（2009）、国立民族学博物館先端人類科学研究部教授（2016）、国立民族学博物館民族文化研究部研究部長（2016）、国立民族学博物館人類文明誌研究部教授（2017）、国立民族学博物館・副館長（2017）【学位】社会学修士（東京大学大学院 1982）【専攻・専門】アンデス考古学、文化人類学 古代アンデス文明の形成過程、現代ペルーの文化行政、考古学と国民国家形成、世界遺産と国別の文化遺産との相互関係【所属学会】日本文化人類学会、日本ラテンアメリカ学会、古代アメリカ学会、Society for American Archaeology、Institute of Andean Studies

【主要業績】

[単著]

關 雄二

- 2010 『アンデスの考古学 改訂版』東京：同成社。
- 2006 『古代アンデス——権力の考古学』京都：京都大学学術出版会。

[共編]

大貫良夫・加藤泰建・關 雄二編

- 2010 『古代アンデス 神殿から始まる文明』（朝日選書863）東京：朝日新聞出版。

【受賞歴】

- 2016 外務大臣表彰
- 2015 ペルー文化功労者表彰
- 2008 濱田青陵賞
- 2008 科学分野の功績に対する表彰（ペルー国立サン・マルコス大学）
- 2008 クントゥル・ワシ賞（ペルー文化庁カハマルカ支局）

【2017年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

古代アンデスにおける権力生成過程の研究

・研究の目的、内容

南米の太平洋沿岸部、とくに今日のペルー共和国を中心に成立した古代アンデス文明に焦点をあて、権力の形成について理論的な解釈を行う。具体的には、ペルー北部山中パコパンパ遺跡を調査し、文明の基礎が築かれた形成期（B.C. 2500～紀元前後）における経済やイデオロギーの様相を検出する。なお上記の調査部分は、科学研究費補助金基盤研究（A）をあてた。

・成果

2016年度から科学研究費補助金基盤研究(A)を取得し、フィールドワークを含め、研究を推進した。成果としては、「遺跡をめぐるコミュニティの生成——南米ペルー北高地の事例から」(飯田卓編『文明史のなかの文化遺産』臨川書店、単著)、「南米における農耕の成立と文明形成」(アジア考古学四学会編『アジアの考古学3 農耕の起源と拡散』高志書院、単著)、Early evidence of violence at a ceremonial site in the northern Peruvian highlands (PLOS ONE、共著)と Prevalence of cribra orbitalia in Pacopampa during the formative period in Peru (Anatomical Science International、共著)の計4本の論文を出版した。このほか内外の国際学会、研究集会、シンポジウムでは、XVIII Congreso de la Federación Internacional de Estudios sobre América Latina y el Caribe (FIEALC 2017)においてDaniel Saucedo SegamiとMotoi Suzukiとともにシンポジウム Patrimonio Cultural y memoria: Nuevas tendencias en América Latinaを組織したほか、La formación de la memoria social en relación a las investigaciones arqueológicas realizadas en Perú (FIEALC 2017)、「考古学におけるポストコロニアル研究」(民博共同研究会「政治的分類——被支配者の視点からエスニシティと人種を再考する」)、La cerámica utilizada en el festin en Pacopampa durante el Periodo Formativo (IV Congreso Nacional de Arqueología, Ministerio de Cultura del Perú, Lima, Perú、共同発表)、「パコパンパ遺跡の考古動物相: 多様性と類似性を評価する」(古代アメリカ学会第22回研究大会、共同発表)、「パコパンパ遺跡における儀礼的廃棄——饗宴儀礼同伴資料の分析を中心に」(古代アメリカ学会第22回研究大会、共同発表)、「ペルーの文化遺産の保存と活用——住民参加の可能性を探る」(客家文化発展センター国際シンポジウム「博物館と客家研究」)、El festín ceremonial, la creación de la memoria social y la veneración ancestral en Pacopampa (国際フォーラム Monumentalidad y Poder en los Andes)の計7本の研究発表をおこなった。

◎出版物による業績

[分担執筆]

関 雄二

- 2017 「遺跡をめぐるコミュニティの生成——南米ペルー北高地の事例から」飯田卓編『文明史のなかの文化遺産』pp.63-93, 京都: 臨川書店。
- 2017 「南米における農耕の成立と文明形成」アジア考古学四学会編『アジアの考古学3 農耕の起源と拡散』pp.307-326, 東京: 高志書院。

[論文]

Nagaoka, T., K. Uzawa, Y. Seki, and D.M. Chocano

- 2017 Pacopampa: Early evidence of violence at a ceremonial site in the northern Peruvian highland. *PLOS ONE* 12(9): e0185421. [査読有] DOI 10.1371/journal.pone.0185421

Paredes, D.A., P.A. Roldán, J.P. Villanueva Hidalgo, M. Arata, N. Nakagawa, Y. Seki, and D.M. Chocano

- 2017 El proceso de sello en la plaza cuadrangular hundida ubicada en la tercera plataforma del sitio arqueológico formativo “Pacopampa”: Cajamarca, Perú. In Ministerio de Cultura (ed.) *Actas: II Congreso Nacional de Arqueología Volumen II* (CD-ROM), pp.39-53. Lima: Ministerio de Cultura.

Nagaoka, T., Y. Seki, K. Uzawa, M. Takigami, and D.M. Chocano

- 2018 Prevalence of Cribra Orbitalia in Pacopampa during the Formative Period in Peru. *Anatomical Science International* 93(2): 254-261. [査読有] DOI 10.1007/S12565-017-0404-Z

[その他]

関 雄二

- 2017 「国立民族学博物館の収蔵品[®] 食文化のグローバル・ヒストリーと展示」『文部科学 教育通信』412: 2。
- 2017 「文化遺産国際協力コンソーシアムの役割」『チャスキ (アンデス文明研究会会報)』55: 1。
- 2017 「泉靖一生誕100年(3) コトシュ遺跡の発掘」『チャスキ (アンデス文明研究会会報)』55: 12。
- 2017 「日本人考古学者に仮装」特集 「異国をまとう」『月刊みんぱく』41(7): 8-9。
- 2017 「パコパンパ遺跡におけるヘビ・ジャガー神官の墓の発見」『希有の会会報』8: 7-10。
- 2017 「濱田青陵賞をもっともよく知る村」『岸和田市文化賞 濱田青陵賞三十周年記念誌』pp.43-44, 岸和田市、岸和田市教育委員会、朝日新聞社。
- 2017 「34万点超 知の集積共有 新生みんぱくの使命 開館40周年みんぱくモノ語り」『産経新聞』10月16日夕刊。

- 2017 「国立民族学博物館開館40周年」『チャスキ（アンデス文明研究会会報）』56：3。
- 2017 「泉靖一生誕100周年(4) コトシュ遺跡の発掘と文明起源論」『チャスキ（アンデス文明研究会会報）』56：8-11。
- 2018 「新世紀ミュージアム 記憶の場所——寛容と社会的包摂 ANFASEP 記憶博物館『繰り返されな
いために』』『月刊みんぱく』42(1)：16-17。
- 2018 「分科会の果たす役割と今後の課題」文化遺産国際協力コンソーシアム編『文化遺産国際協力コン
ソーシアム 設立10周年記念誌——コンソーシアム10年のあゆみと文化遺産からつながる未来』
pp.17-18, 東京：文化遺産国際協力コンソーシアム。
- 2018 「中南米の墓」『企画展示 世界の眼でみる古墳文化』pp.40-49, 千葉：国立歴史民俗博物館。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会での報告

- 2017年7月2日 「考古学におけるポストコロニアル研究」民博共同研究会『政治的分類——被支配者の視点から
エスニシティと人種を再考する』国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2017年7月26日 La formación de la memoria social en relación a las investigaciones arqueológicas reali-
zadas en Perú, XVIII Congreso de la Federación Internacional de Estudios sobre
América Latina y el Caribe (FIEALC 2017), Universidad Megatrend (Belgrade)
- 2017年8月8日 La cerámica utilizada en el festin en Pacopampa durante el Periodo Formativo, IV Con-
greso Nacional de Arqueología, Lima
- 2017年12月2日 「パコパンパ遺跡の考古動物相——多様性と類似性を評価する」古代アメリカ学会第22回研究
大会、茨城大学人文社会科学部
- 2017年12月3日 「パコパンパ遺跡における儀礼的廃棄——饗宴儀礼共伴資料の分析を中心に」古代アメリカ学
会第22回研究大会、茨城大学人文社会科学部
- 2017年12月16日 「ペルーの文化遺産の保存と活用——住民参加の可能性を探る」国際シンポジウム『博物館と
客家研究』客家文化発展センター、苗栗
- 2018年2月19日 El festín ceremonial, la creación de la memoria social y la veneración ancestral en Paco-
pampa, 国際フォーラム Monumentalidad y Poder en los Andes, 国立民族学博物館

・みんぱくウィークエンド・サロン

- 2017年10月15日 「ペルーの文化遺産を守る」第484回ウィークエンド・サロン

・広報・社会連携活動

- 2017年4月28日 「アンデスの文化遺産をめぐる問題——盗掘の実態」兵庫県阪神シニアカレッジ
- 2017年4月28日 「マチュ・ピチュの発見と出土品の行方」兵庫県阪神シニアカレッジ
- 2017年5月20日 「アンデス文明における農耕の成立と社会変化」アンデス文明研究会、東京外国語大学本郷サ
テライト
- 2017年6月16日 「アンデス文明における巨大神殿の登場」大阪府高齢者大学校「世界の文化に親しむ科」
- 2017年6月20日 「アンデスの文化遺産をめぐる問題——盗掘の実態」兵庫県阪神シニアカレッジ
- 2017年6月20日 「マチュ・ピチュの発見と出土品の行方」兵庫県阪神シニアカレッジ
- 2017年7月19日 「世界遺産 ナスカの地上絵 その謎と崩壊の危機」池田市中央公民館
- 2017年8月10日 'Preservando la historia: Patrimonio cultural peruano y la colaboración de Japón en su
estudio y salvaguarda.' Centro Cultural Peruano Japonés, Lima, Perú.
- 2017年10月5日 「アンデス文明の文化遺産の保護と活用」宝塚市国際理解ゼミナール、宝塚市立南口会館
- 2017年10月12日 「文化遺産管理における地域コミュニティの参加」JICA 博物館とコミュニティ開発、国立民
族学博物館
- 2017年11月15日 「アンデス文明の文化遺産の保護と活用」国立民族学博物館 MMP ステップアップ講座、国立
民族学博物館
- 2017年12月9日 「アンデス形成期の中心と周辺——神殿と住居址の対比を超えて」アンデス文明研究会、東京
外国語大学本郷サテライト
- 2018年1月14日 「アンデスの世界・神殿のヒミツ（南米・ペルー）」京都で世界を旅しよう！2017 地球たん
けんたい6 主催：マナラボ環境と平和の学びデザイン（京都府受託事業）、同志社大学大学
院総合政策科学研究科京町屋キャンパス「江湖館」

・その他

2017年7月26日 「シンポジウム Patrimonio Cultural y memoria: Nuevas tendencias en América Latina を組織」 XVIII Congreso de la Federación Internacional de Estudios sobre América Latina y el Caribe (FIEALC 2017)、Universidad Megatrend, Belgrade, Serbia

◎調査活動

・海外調査

2017年7月23日～9月3日—セルビア、ペルー（ラテンアメリカおよびカリブ海地域国際研究所連盟会議出席、中央アンデス地帯における発掘調査）

2018年3月3日～3月12日—ペルー（パコパンパ発掘調査出土遺物の分析および保存遺構のモニタリング）

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（3人）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（特別研究員奨励費）「現代ペルーにおける文化遺産の活用に関する文化人類学研究」受入研究者、科学研究費（基盤研究（A））「アンデス文明における権力生成と社会的記憶の構築」研究代表者、科学研究費（基盤研究（B））「生物考古学資料にもとづく古代アンデス社会の複雑化過程の解明」（研究代表者：鶴澤和宏（東亜大学））研究分担者

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

ペルーカトリカ大学PUCP 編集委員、ペルー・チャビン・デ・ワントル国際研究センターChavín 編集委員、日本文化人類学会評議員、東京外国語大学AA 研海外学術調査専門委員、ペルー全国学長会議編集局理事、公益財団法人 高梨学術奨励基金選考委員、金沢大学研究域附属研究センター外部評価委員、古代アメリカ学会会長、文化遺産国際協力コンソーシアム副会長、文化遺産国際協力コンソーシアム運営委員会委員、金沢大学国際文化資源学研究所アドバイザー、文化遺産国際協力コンソーシアム企画分科会委員、文化遺産国際協力コンソーシアム中南米分科会委員、アンデス文明研究会顧問、ペルー国クントゥル・ワシ文化協会（NGO）クントゥル・ワシ博物館監査役

西尾哲夫 [にしお てつお]————— 副館長（研究・国際交流・IR 担当）、グローバル現象研究部教授

1958年生。【学歴】大阪外国語大学外国語学部アラビア語科卒（1981）、京都大学大学院文学研究科言語学専攻修士課程修了（1984）、京都大学大学院文学研究科言語学専攻博士後期課程満期退学（1987）【職歴】東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助手（1989）、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助教授（1994）、国立民族学博物館第2研究部助教授（1996）、国立民族学博物館民族文化研究部助教授（1998）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（1998）、国立民族学博物館研究戦略センター助教授（2004）、国立民族学博物館民族社会研究部教授（2006）、国立民族学博物館民族文化研究部教授・部長（2008）、国立民族学博物館研究戦略センター教授・センター長（2011）、国立民族学博物館研究戦略センター教授（2012）、国立民族学博物館副館長（2012）、国立民族学博物館国際学術交流室室長（2012）、国立民族学博物館民族社会研究部教授（2013）、国立民族学博物館民族社会研究部教授・部長（2015）、国立民族学博物館研究戦略センター教授（2016）、国立民族学博物館副館長（2016）、国立民族学博物館グローバル現象研究部教授（2017）、国立民族学博物館副館長（2016）【学位】文学博士（京都大学大学院文学研究科 2005）、言語学修士（京都大学大学院文学研究科 1984）【専攻・専門】言語学・アラブ研究 アラブ遊牧民の言語人類学的研究、アラビアン・ナイトをめぐる比較文明学的研究【所属学会】日本言語学会、日本中東学会、日本オリエント学会

【主要業績】

[単著]

西尾哲夫

2013 『ヴェニス商人の異人論——人肉一ポンドと他者認識の民族学』東京：みすず書房。

2011 『世界史の中のアラビアンナイト』（NHK ブックス）東京：NHK 出版。

2007 『アラビアンナイト——文明のはざまに生まれた物語』東京：岩波書店。

【受賞歴】

- 2011 第28回田邊尚雄賞（東洋音楽学会）
- 1992 オリエント学会奨励賞
- 1992 新村出記念財団研究助成賞
- 1992 流沙海西奨学会賞

【2017年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

グローバル化と中東地域の民衆文化

・研究の目的、内容

「アラブの春」を主導した新興の都市部中流層が用いた「中間アラビア語」と呼ばれる新生の共通アラビア語は、新たなコミュニケーション空間を創出した。この空間では差異化された社会的アイデンティティ獲得をめぐり、グローバルな動向に感応する社会運動の場が確立しつつある。本研究では、民衆、大衆、地域住民という概念の再構築を通じて彼らがグローバル化されたコミュニケーション空間に感応している状況を具体的に分析することによって、「中間アラビア語」が創出した公共的コミュニケーション空間において民衆文化が資源化されて公共性を獲得するプロセス、および個人が生きるローカルな生活空間とグローバルな社会空間が接合し、個々の人間の社会的動員作用として働くメカニズムを解明する。また「中間アラビア語」による文学的社会位相の中で成立した、シンドバード航海記に焦点をあてて分析することによって、グローバル化の観点から多元的共創文学の可能性について考察する。

・成果

①民博の英文ニューズレター研究の中間報告として、「The Arabian Nights and Urban Middle-class Cultures in the Arab World: Revisiting the Formation of the So-called Egyptian Recension」を寄稿した。

②研究発表として、人間文化研究機構が包括的学術協定を締結しているパリ日本文化会館とネットワーク型基幹研究プロジェクト「現代中東地域研究推進事業」との共催による国際シンポジウム「French Orientalism and Its Afterlives in Japan and the Middle East」（パリで2018年2月7～10日に実施）にて、Joseph-Charles Mardrus and Orientalism: Re-evaluating his Translation of the Arabian Nights in Light of New Findings from “Mardrus Collection Bequest”と題して、キーノートスピーチの口頭発表をした。アラビアンナイト伝訳者マルドリユスの遺贈コレクションについて民博チームが独占的に進めてきた研究による新知見をもとにマルドリユスを再評価し、アラビアンナイトというグローバル文学が有する多元的価値共創文学の可能性を指摘した。さらに文化的知識のグローバルな還流経路を探るにあたって西洋とりわけフランスを基点として行われてきた中東と日本の文化交流の様相について検討し、グローバル化論における新たな研究地平を開拓した。

③研究発表として、ネットワーク型基幹研究プロジェクト「現代中東地域研究推進事業」との主催で、アラブ文学研究では初の試みとなる国際企画としてアラブ文学とくに詩の伝統における個人と社会をテーマにした国際シンポジウム「The Personal and the Public in Literary Works of the Arab Regions」（国立民族学博物館で2018年3月24～25日に実施）にて、The Role of Poetry and Character-shaping in an Early Nineteenth Century Vernacular Version of the Arabian Nights: An Attempt to Reconsider the Relationship between “Modern” and “Ego” in the Middle Eastと題して、民衆文学における近代的個人の発現に関して口頭発表した。

④一般向けの研究広報として、みんなくウィークエンド・サロン、産学連携事業としてUCCコーヒー博物館において同館開館30周年記念講演会「アラビアンナイトとコーヒー——禁忌から世界の嗜好品へ」を実施し、みんなく友の会との共同で第76回体験セミナー「発祥の地、アラブのコーヒー文化」を開催した。

⑤科学研究費助成事業基盤研究（B）（特設分野）「中東地域における民衆文化の資源化と公共的コミュニケーション空間の再グローバル化」（代表・西尾哲夫）ならびに科学研究費助成事業基盤研究（B）（一般）「シンドバード航海記の成立過程と多元的価値共創文学の可能性に関する物語情報学的研究」（代表・西尾哲夫）による国内調査ならびに文献調査をおこなった。

◎出版物による業績

[論文]

Nishio, T., S. Nakamichi, N. Okamoto, and A.M. Sumi

2017 The Arabian Nights and Urban Middle-class Cultures in the Arab World: Revisiting the Formation of the So-called Egyptian Recension. *MINPAKU Anthropology Newsletter* 44: 5-9.

[その他]

西尾哲夫

2017 「運べる家、動く家」国立民族学博物館編『国立民族学博物館 展示案内』pp.178-181, 大阪：国立民族学博物館。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2017年12月16日 「国立民族学博物館での取り組み」『アラビア半島の文化遺産保護の現状と展開——サウジアラビアを中心として』横浜情報文化センター、横浜

2018年2月7日 Joseph-Charles Mardrus and Orientalism: Re-evaluating his Translation of the Arabian Nights in Light of New Findings from “Mardrus Collection Bequest”, French Orientalism and Its Afterlives in Japan and the Middle East, パリ日本文化会館、パリ

2018年3月24日 ‘The Role of Poetry and Character-shaping in an Early Nineteenth Century Vernacular Version of the Arabian Nights: An Attempt to Reconsider the Relationship between “Modern” and “Ego” in the Middle East’ The Personal and the Public in Literary Works of the Arab Regions、国立民族学博物館第4セミナー室

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2017年12月2日 「グローバル現象としての文化の資源化について——ベリーダンス研究から」多元的資源観からみる現代中東、京都大学、京都

・研究講演

2017年10月8日 開館30周年特別講演「アラビアンナイトとコーヒー——禁忌から世界の嗜好品へ」UCC コーヒー博物館、神戸

・みんなくウィークエンド・サロン

2017年9月3日 「アラビアコーヒーにみるアラブ世界のおもてなし文化」第479回みんなくウィークエンド・サロン

・広報・社会連携活動

2017年10月18日 「世界的嗜好品、コーヒーを知る——発祥の地、アラブのコーヒー文化」みんなく友の会、UCC コーヒー本社、UCC コーヒー博物館、神戸

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（新学術領域研究（研究領域提案型）『学術研究支援基盤形成』）「地域研究に関する学術写真・動画資料情報の統合と高度化」（研究代表者：吉田憲司）研究支援分担者、科学研究費（基盤研究（B））「中東地域における民衆文化の資源化と公共的コミュニケーション空間の再グローバル化」研究代表者、科学研究費（基盤研究（B））「シンドバード航海記の成立過程と多元的価値共創文学の可能性に関する物語情報学的研究」研究代表者

人類基礎理論研究部

園田直子 [そのだ なおこ] ————— 部長(併) 教授

【学歴】パリ第1大学文学部美術史と考古学・美術史卒（1980）、パリ第1大学U.E.R Art et Archéologie Maîtrise des Sciences et Techniques: Conservation et restauration des oeuvres d’art, des sites et objets archéologiques et ethnologiques 修士課程修了（1982）、エコール・ド・ルーブル卒（1983）、パリ第1大学—美術史博士課程修了（1987）【職歴】Direction des Musées de France / Laboratoire de recherche des musées de France / アメリカ・

ゲッティ財団との共同プロジェクト研究員 (1987)、Direction des Musées de France / Service de restauration des peintures des musées nationaux / assistante scientifique (1989)、国立歴史民俗博物館助手 (1991)、国立民族学博物館第5研究部助手 (1993)、国立民族学博物館第5研究部助教授 (1997)、国立民族学博物館博物館民族学研究部助教授 (1998)、総合研究大学院大学文化科学研究科併任 (1999)、国立民族学博物館文化資源研究センター助教授 (2004)、国立民族学博物館文化資源研究センター教授 (2007)、国立民族学博物館情報管理施設長 (2009)、国立民族学博物館館長補佐 (2010)、国立民族学博物館民族社会研究部教授 (2016)、国立民族学博物館民族社会研究部研究部長 (2016)、国立民族学博物館人類基礎理論研究部教授 (2017)、国立民族学博物館人類基礎理論研究部研究部長 (2017) 【学位】博士 (美術史) Doctorat de 3ème cycle en Histoire de l'art (パリ第1大学 Université de Paris I 1987)、科学技術修士 Maîtrise des Sciences et Techniques - Spécialité: Conservation et restauration des oeuvres d'art, des sites et objets archéologiques et ethnologiques (パリ第1大学 Université de Paris I 1982)、文学士 Licence es Lettres (パリ第1大学 Université de Paris I 1980) 【専攻・専門】保存科学 【所属学会】ICOM (国際博物館会議)、IIC (国際文化財保存学会)、IIC-Japan (国際文化財保存学会日本支部)、文化財保存修復学会

【主要業績】

[編著]

Sonoda, N. (ed.)

2016 *New Horizons for Asian Museums and Museology*. Singapore: Springer.

園田直子編

2010 『紙と本の保存科学 (第2版)』東京：岩田書院。

[学位論文]

園田直子

1987 Identification des matériaux synthétiques dans les peintures fines pour artistes par pyrolyse couplée avec la chromatographie en phase gazeuse. Application à l'étude de quelques tableaux d'art contemporain, Thèse de Doctorat de 3ème cycle, Université de Paris I, Panthéon-Sorbonne.

【受賞歴】

2010 文化財保存修復学会第4回業績賞

【2017年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

持続可能な資料管理に向けた収蔵庫再編成

・研究の目的、内容

本館における収蔵庫再編成は、単なる収蔵スペースの狭隘化対策ではなく、保存科学研究と連動した持続的な資料管理の一環として、総合的有害生物管理 (IPM) 研究の延長線上に位置づけることができる。最終的には、長期的視点にたった収蔵庫再編成の基本的な考え方をまとめ、民族資料の配架および収納・保管方法のプロトタイプをつくりあげる。本年度は、準備段階として衣類資料を対象に調査を進める。並行して、生物生息調査や温度・湿度モニタリングなどの収蔵庫の環境データを総合的に分析し、現在の収蔵環境を再検証する。

・成果

本館収蔵庫の狭隘化対策は常に大きな課題であり、これまでも特別収蔵庫・毛皮 (2007年)、特別収蔵庫・絨毯類 (2008)、船を対象とした多機能資料保管庫 (2014年)、第1収蔵庫 (2015)、第3収蔵庫 (2016) と、計画的に収蔵庫再編成に取り組んできた。本館の収蔵庫再編成においては、資料にとって安全な配架・収納であることは当然ながら、研究者が調査・閲覧しやすいことにも留意している。保存科学の視点に基づいた収蔵庫再編成の方針とその実践については、第39回文化財保存修復学会で「国立民族学博物館における収蔵庫再編成——民族資料の収納・保管改善」として口頭発表をおこなった。また、収蔵環境 (生物生息調査、温度・湿度モニタリング) の検証結果は、国際博物館会議——保存国際委員会 (ICOM-CC) の査読を受け、2018年9月のトリノ大会での口頭発表が決定している。

◎出版物による業績

[論文]

Sonoda, N., S. Hidaka, and K. Suemori

2017 Challenges and Reflections on Sustainable Climate Control at the National Museum of Ethnology, Japan. *ICOM-CC 18th Triennial Conference, 2017 Copenhagen Preprints (1522_618_SONODA_ICOM-CC_2017.pdf)*. [査読有]

[その他]

園田直子

2017 「パリ国際IPMコンファレンス2016報告——世界のIPMの動向」『IIC-Japan Newsletter』pp.3-4。
2017 「『よみがえれ!シーボルトの日本博物館』によせて」(特集 シーボルトの日本博物館)『月刊みんぱく』41(8):2-3。
2017 「みんぱくでよみがえる、シーボルトの日本博物館」『みんぱく e-news』194号、8月1日。
2017 「『国立民族学博物館 園田直子教授』連載 みんぱく研究者めぐり」『hokcier』8:16-18。
2017 「民博の舞台裏——資料の活用と保存の両立をめざして」『季刊民族学』162:31-42。
2017 「紙布」『文部科学 教育通信』424:2。
2017 「学術潮流フォーラムI 人類基礎理論研究部・国際シンポジウム『変容する世界のなかでの文化遺産の保存』」『民博通信』159:26。

Sonoda, N.

2017 Exhibition Re-visiting Siebold's Japan Museum. *MINPAKU Anthropology Newsletter* 45: 13-14.

門屋智恵美・岡山隆之・園田直子・関 正純・殿山真央

2017 「劣化紙へのセルロースナノファイバーコーティング最適条件の検討」『文化財保存修復学会第39回大会於金沢研究発表要旨集』pp.262-263。[査読有]

河村友佳子・日高真吾・園田直子・末森 薫・和高智美・橋本沙知・國本信夫・本田光子

2017 「被災した民俗資料の応急処置——熊本地震の経験から」『文化財保存修復学会第39回大会於金沢研究発表要旨集』pp.140-141。[査読有]

末森 薫・園田直子・日高真吾・奥村泰之・河村友佳子・橋本沙知・和高智美・高橋由美子

2017 「十日町で発見された越後縮『御召縮』関連資料の光学調査」『文化財保存修復学会第39回大会於金沢研究発表要旨集』pp.150-151。[査読有]

日高真吾・園田直子・末森 薫・西澤昌樹・吉田憲司・和高智美・河村友佳子・橋本沙知

2017 「国立民族学博物館の失火対策について——消火剤の除塵を中心に」『文化財保存修復学会第39回大会於金沢研究発表要旨集』pp.34-35。[査読有]

岡山隆之・門屋智恵美・殿山真央・関 正純・園田直子

2017 「自然劣化紙の脱酸性化処理およびセルロースナノファイバー塗工による強化処理の併用効果」『文化財保存修復学会第39回大会於金沢研究発表要旨集』pp.72-73。[査読有]

園田直子・日高真吾・末森 薫・松田万緒・西澤昌樹・和高智美・河村友佳子・橋本沙知

2017 「国立民族学博物館における収蔵庫再編成——民族資料の収納・保管改善」『文化財保存修復学会第39回大会於金沢研究発表要旨集』pp.86-87。[査読有]

和高智美・日高真吾・園田直子・末森 薫・河村友佳子・橋本沙知・村山 歩

2017 「密閉型額装を用いた展示・保管方法の有効性の検証」『文化財保存修復学会第39回大会於金沢研究発表要旨集』pp.128-129。[査読有]

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2017年10月7日 「国立民族学博物館における環境にやさしい資料管理」学術潮流フォーラムI 人類基礎理論研究部・国際シンポジウム『変容する世界のなかでの文化遺産の保存』国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2017年7月2日 「国立民族学博物館における収蔵庫再編成——民族資料の収納・保管改善」文化財保存修復学会第39回大会、金沢歌劇座

2017年9月25日 「国立民族学博物館開館40周年記念特別展 よみがえれ!シーボルトの日本博物館」全日本博物館学会2017年度研究会、日本展示学会2017年度地域研究会、日本ミュージアム・マネジメント学会(JMMA)近畿支部研究会、国立民族学博物館

- 2017年10月20日 「写真・映像資料の保存 国立民族学博物館での取り組み」日本写真保存セミナー、富士フォトサロン、大阪
- 2018年2月27日 「博物館資料の保存と管理」関西大学国際文化財・文化研究センター主催2017年度文化財保存修復セミナー、国立民族学博物館
- ・ **みんなくゼミナール**
2017年8月19日 「シーボルトの日本展示と博物学——開館40周年記念特別展『よみがえれ！ シーボルトの日本博物館』の概要」第471回みんなくゼミナール
 - ・ **展示**
2017年8月10日～10月10日 開館40周年記念特別展「よみがえれ！ シーボルトの日本博物館」国立民族学博物館
 - ・ **みんなくウィークエンド・サロン**
2017年8月27日 「開館40周年記念特別展『よみがえれ！ シーボルトの日本博物館』——みんなくでの展示の工夫」第478回ウィークエンド・サロン
 - ・ **広報・社会連携活動**
2017年9月22日 「資料の保存と活用を考える1」大阪府高齢者大学校「世界の文化に親しむ科」
2017年9月29日 「資料の保存と活用を考える2」大阪府高齢者大学校「世界の文化に親しむ科」
2018年1月19日 「高大型白熱教室——博物館の舞台裏」大阪府高齢者大学校「世界の文化に親しむ科」
 - ・ **その他（「口頭発表・展示・その他の業績」で以上の項目に属さないもの）**
2017年7月22日 「資料の保存・取り扱いについて」MMP 2017年度新規メンバー養成研修、国立民族学博物館
2018年1月31日 「博物館の防災対策（収蔵庫）」JICA 国別研修「トルコ 博物館及び文化財の自然災害からの保護に係る能力開発」国立民族学博物館
- ◎上記以外の研究活動
- ・ **人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など**
科学研究費助成事業（基盤研究（B）（一般）（2015-2017））「セルロース系ナノファイバーの紙資料保存への応用」（研究代表者：園田直子）、科学研究費助成事業（基盤研究（B）（一般）（2015-2017））「映像人類学とアーカイブズ実践——活用と保存の新展開」（研究代表者：大森康宏）（研究分担者：園田直子）、科学研究費助成事業（基盤研究（B）（2015-2017））「東日本大震災で被災した民俗文化財の保存および活用に関する基礎研究」（研究代表者：日高真吾）（研究分担者：園田直子）、科学研究費助成事業（基盤研究（A）（2015-2019））「ネットワーク型博物館学の創成」（研究代表者：須藤健一）（研究分担者：園田直子）、科学研究費助成事業（新学術領域研究（研究領域提案型）『学術研究支援基盤形成』（2016-2018））「地域研究に関する学術写真・動画資料情報の統合と高度化」（研究代表者：吉田憲司）（研究支援分担者：園田直子）
- ◎社会活動・館外活動
- ・ **他大学の客員、非常勤講師**
橘大学「国立民族学博物館での資料管理」、橘大学「民族資料の収蔵と保管」

出口正之 [でぐち まさゆき] 教授

1955年生。【学歴】大阪大学人間科学部人間科学科卒（1979）【職歴】ジョンズ・ホプキンス大学国際フィランソロピー研究員（1991）、財団法人サントリー文化財団事務局長（1992）、総合研究大学院大学教育研究交流センター教授（1995）、総合研究大学院大学学長補佐（2001）、国立民族学博物館民族学研究開発センター教授（2003）、国立民族学博物館文化資源研究センター教授（2004）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2004）、内閣府公益認定等委員会委員（2010）、国立民族学博物館民族文化研究部教授（2013）、総合研究大学院大学教授（2014）、国立民族学博物館人類基礎理論研究部教授（2017）【専攻・専門】NPO、メセナ、フィランソロピー、ボランティア、言政学【所属学会】国際NPO・NGO学会（ISTR = International Society for Third Sector Research）、米国NPO学会（ARNOVA = The Association for Research on Nonprofit Organizations and Voluntary Action）、非営利法人研究学会、日本文化人類学会

【主要業績】

[著書]

出口正之

1993 『フィランソロピー』東京：丸善出版。

[共編著]

Vinken, H., Y. Nishimura, B.L.J. White, and M. Deguchi (eds.)

2010 *Civic Engagement in Contemporary Japan*. New York, Dordrecht, Heidelberg, and London: Springer.

本間正明・出口正之編著

1996 『ボランティア革命』東京：東洋経済新報社。

[分担執筆]

Deguchi, M.

2001 The Distortion between Institutionalized and Noninstitutionalized NPO: New Policy Initiative and the Nonprofit Organizations in Japan. In H.K. Anheier and J. Kendall (eds.) *Third Sector Policy at the Crossroads: An International Nonprofit Analysis*, pp.227-301. London and New York: Routledge.

【受賞歴】

1995 ESP 大来佐武郎賞

1988 東洋経済高橋亀吉賞最優秀賞

1988 日経産業新聞15周年記念論文最優秀賞

【2017年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

トランスフォーマティブな非営利研究

・研究の目的、内容

非営利組織・政策に関して政策人類学・会計学等の手法を取り入れたトランスフォーマティブ研究を実施する。外部資金として、科学研究費2017年度挑戦的研究（開拓）を取得した。

・成果

[論文等]

2017 Theoretical analysis on fragmented legal personalities and accounting standards in Japan. *ARNOVA-Asia Conference Paper Abstracts, The Nonprofit Worlds in Asia: Diverse Perspectives from a Fragmented Field of Study*, pp.18-19. China: China Institute for Philanthropy and Social Innovation, Renmin University of China and Association for Research on Nonprofit Organizations and Voluntary Action (ARVOVA)

2017 「理事の選解任，理事会・評議員会の運営方法」『公益・一般法人——公益社団・財団法人及び一般社団・財団法人の会計・税務・運営の実務専門誌』938：80-84。

2017 「トランスフォーマティブ研究としての共同研究 共同研究 会計学と人類学の融合」『民博通信』157：12-13。

2017 「法人形態から見た『チャリティ・公益法人制度』の国際比較——非営利の法人制度と会計を巡っての政策人類学的比較研究」『非営利法人研究会誌』19：31-40。[査読有]

2017 Philanthropy and Vice-Capital City: New Forms of Collaboration and Culture. ERNOP Conference Proceedings, *European Research Network on Philanthropy*, pp.1-13.

2017 「認定チャリティの75%は現金主義——徹底した『比例原則』（ニュージーランド訪問記——ニュージーランドと日本の非営利組織制度の違い）」『公益・一般法人』947：53-55。

2017 「論壇 減少を示した公益法人数」『公益・一般法人』951：1、10月15日。

2017 Charity Registration and Reporting: A Cross-Jurisdictional and Theoretical Analysis of Regulatory Impact. In C. Cordery and M. Deguchi (eds.) *Public Management Review*: 1-21。[査読有]

2017 Philanthropy. In A. Ogawa (ed.) *Routledge Handbook of Civil Society in Asia*, pp.390-406. Oxon and New York: Routledge.

2017 「賞誕生秘話と『慈善契機』の発見」『月刊フィランソロピー』12月号：8-9。

[口頭発表]

- 2017 「特定公益増進法人制度の変遷と公益法人制度改革の意義」 非営利法人研究会関西部会、近畿大学東大阪本部キャンパス 21号館 5階 542教室、2017.6.3
- 2017 Theoretical Analysis on Fragmented Legal Personalities and Accounting Standards in Japan. *ARNOVA-Asia Conference the Nonprofit Worlds in Asia: Diverse Perspectives from a Fragmented Field of Study* on 6-7th June. Renmin University of China, China.
- 2017 Philanthropy and Vice-Capital City: New Forms of Collaboration and Culture. *European Research Network On Philanthropy 8th International Conference* on 13-14th July. Copenhagen Business School, Denmark.
- 2017 「公益認定における収支相償に係る諸問題」 第21回非営利法人研究会全国大会招待講演、広島大学、2017.9.5-6
- 2017 「ジンバブエの会計現象のトランスフォーマティブ研究——超インフレ状況下におけるジンバブエの経済現象に関する試論」 日本会計研究学会、広島大学、2017.9.22
- 2017 「公益認定法における民間公益の一般原則とは何か」 日本公益学会、明治大学駿河台校舎リパティタワー10階、2017.10.28
- 2017 「番場資金収支会計基準とNPO法人会計基準」 非営利法人研究会NPO法人部会、愛知学院大学名城公園キャンパス アガスタワー10階、2017.11.25
- 2017 「領域設定総合化法によるトランスフォーマティブ研究序説 人類学と会計学のマッピング」 国立民族学博物館共同研究会「会計学と人類学の融合」 国立民族学博物館第4セミナー室、2017.12.25
- 2017 Japanese strictness and costs of the filing: Views from the comparative studies between Public Interest Corporations in Japan and Charities New Zealand. *Tenth Asia Pacific Regional Conference of the International Society for Third Sector Research (ISTR)*. Global Challenges and Sustainability in the Asia Pacific, New Zealand.

◎出版物による業績

[分担執筆]

Cordery, C. and M. Deguchi (ed.)

- 2017 Philanthropy. In A. Ogawa (ed.) *Routledge Handbook of Civil Society in Asia*, pp.390-406. Oxon and New York: Routledge.

[論文]

出口正之

- 2017 「法人形態から見た『チャリティ・公益法人制度』の国際比較——非営利の法人制度と会計を巡るの政策人類学的比較研究」『非営利法人研究会誌』19: 31-40。[査読有]

Deguchi, M.

- 2017 Philanthropy and Vice-Capital City: New Forms of Collaboration and Culture, ERNOP Conference Proceedings, *European Research Network on Philanthropy*, pp.1-13.

Cordery, C. and M. Deguchi (ed.)

- 2017 Charity Registration and Reporting: A Cross-Jurisdictional and Theoretical Analysis of Regulatory Impact. *Public Management Review* 20: 1-21. [査読有]

[その他]

出口正之

- 2017 「理事の選解任、理事会・評議員会の運営方法」『公益・一般法人』938: 80-84。
- 2017 「トランスフォーマティブ研究としての共同研究」『民博通信』157: 12-13。
- 2017 「認定チャリティの75%は現金主義——徹底した『比例原則』」『公益・一般法人』947: 53-55。
- 2017 「論壇 減少を示した公益法人数」『公益・一般法人』951: 1。
- 2017 「賞誕生秘話と『慈善契機』の発見」『月刊フィランソロピー』383: 8-9。

Deguchi, M.

- 2017 Theoretical Analysis on Fragmented Legal Personalities and Accounting Standards in Japan. *The Nonprofit Worlds in Asia: Diverse Perspectives from a Fragmented Field of Study*, China Institute for Philanthropy and Social Innovation. Renmin University of China and Association for Research on Nonprofit Organizations and Voluntary Action (ARVOVA). [査読有]

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会での報告

2017年12月25日 「領域設定総合法によるトランスフォーマティブ研究序説 人類学と会計学のマッピング」『会計学と人類学の融合』、国立民族学博物館第4セミナー室

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2017年6月3日 「特定公益増進法人制度の変遷と公益法人制度改革の意義」非営利法人研究会関西支部、近畿大学東大阪本部キャンパス21号館5階542教室

2017年6月6日 Theoretical Analysis on Fragmented Legal Personalities and Accounting Standards in Japan, ARNOVA-Asia Conference, Renmin University of China, Beijing, China

2017年7月13日 Philanthropy and Vice-Capital City: New Forms of Collaboration and Culture. *European Research Network on Philanthropy 8th International Conference*, Copenhagen Business School Copenhagen, Denmark

2017年9月5日 「公益認定における収支相償に係る諸問題」第21回非営利法人研究会全国大会、神戸学院大学

2017年9月21日 「ジンバブエの会計現象のトランスフォーマティブ研究——超インフレ状況下におけるジンバブエの経済現象に関する試論」第76回日本会計研究学会全国大会、広島大学

2017年10月28日 「公益認定法における民間公益の一般原則とは何か」日本公益学会全国大会、明治大学駿河台校舎リバティタワー10階

2017年11月25日 「番場資金収支会計基準とNPO法人会計基準」非営利法人研究会NPO法人部会、愛知学院大学名城公園キャンパス アガルスタワー10階第1会議室

2017年12月4日 Japanese Strictness and Costs of the Filing: Views from the Comparative Studies between Public Interest Corporations in Japan and Charities in New Zealand, Tenth Asia Pacific Regional Conference of the International Society for Third Sector Research (ISTR), Pullman Hotel Central Park, Hosted by CECT Trisakti University

・みんなくウィークエンド・サロン

2017年6月4日 「直前解説——音楽の祭日を100倍楽しむ法」第468回ウィークエンド・サロン

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費助成事業（挑戦的研究（開拓）（2017-2022））「個別文化の標準化問題に関する文化人類学と会計学の学際的共同研究」研究代表者

横山廣子 [よこやま ひろこ] ————— 教授

【学歴】 東京大学教養学部教養学科文化人類学専攻卒（1977）、東京大学大学院社会学研究科修士課程修了（1981）

【職歴】 東京大学教養学部人類学助手（1981）、東洋英和女学院短期大学国際教養科専任講師（1986）、東洋英和女学院大学人文学部社会科学科助教授（1989）、国立民族学博物館第2研究部助教授（1994）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（1994）、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（1998）、国立民族学博物館民族社会研究部教授（2015）、総合研究大学院大学地域文化学専攻長（2015）、国立民族学博物館人類基礎理論研究部教授（2017）【学位】 社会学修士（東京大学大学院社会学研究科 1981）【専攻・専門】 文化人類学 雲南省大理ペー族社会の研究、中国における国家とエスニシティに関する研究、中国西南部から東南アジア大陸部における民族集団の移動と包摂に関する研究【所属学会】 日本文化人類学会

【主要業績】

[編著]

横山廣子編

2004 『少数民族の文化と社会の動態——東アジアからの視点』（国立民族学博物館調査報告50）大阪：国立民族学博物館。

2001 『中国における民族文化の動態と国家をめぐる人類学的研究』（国立民族学博物館調査報告20）大阪：国立民族学博物館。

[共編]

塚田誠之・瀬川昌久・横山廣子編

2001 『流動する民族——中国南部の移住とエスニシティ』東京：平凡社。

【2017年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

東アジアにおける文化と社会の動態に関する人類学的研究

・研究の目的、内容

中国や日本など東アジアにおいては近年、政治・経済・科学技術・環境の変化などにもない、人々の生活のあり方が大きく変化してきている。現地調査や民族誌的データに基づき文化や社会がどのように変化し、どのような社会的課題が生じているのかを実証的に明らかにし、それらを比較考察することにより、東アジアの文化と社会の動態を分析・解明する視座を提供する。

・成果

昨年度に実施した民博国際シンポジウム「現代アジアにおけるお盆・中元節・七月の祭り——あの世とこの世をめぐる儀礼」の研究成果として、盆行事の起源と変遷、東アジアへの伝播を展望した上で、中国雲南省のペー族の7月の祖先祭祀儀礼について、中国地域の文化の中での位置づけを論じた論文を執筆した。シンポジウムに参加した日本および中国文化圏の報告者の論文と合わせて、日本語および中国語の2種類の成果を発表するために、現在、翻訳と編集作業を進めている。

『世界の暦文化事典』中で、中国雲南省のペー族における暦についての記述を担当し、かつてペー族の一部の地域でおこなわれていた1年が13ヶ月で構成される古い暦と、現在のペー族の農村での暦のあり方について記した。ペー族の場合、中国で広く使われるの「農曆（太陽太陰暦）」が農村生活に浸透しており、年齢や行事の日取りがそれに基づいて数えられたが、近年、市街地の住民や若年層を中心に西暦への傾斜が見られる。

◎出版物による業績

[分担執筆]

横山廣子

2017 「中華人民共和国（ペー族）」中牧弘允編『世界の暦文化事典』pp.70-73, 東京：丸善出版。

[その他]

横山廣子

2017 「国立民族学博物館の収藏品⑮ 熟女たちがリードするファッション」『文部科学 教育通信』409:2。

2018 「〇〇してみました世界のフィールド 中国の携帯用万能充電器」『月刊みんぱく』42(3):10-11。

2018 「展示とウェブ空間のはざままで考える」『民博通信』160:12-13。

◎映像音響メディアによる業績

・国立民族学博物館映像音響資料の制作・監修

横山廣子

2017 「新築祝い——雲南省回族の家屋落成式典」24分

2017 「アラビア書道家——雲南省大理市南五里橋村の回族」27分

2017 「回族の村の生活——雲南省大理盆地のイスラム教徒」12分

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2017年10月8日 『『中国地域の文化』展示のフォーラム型情報ミュージアム』学術潮流フォーラムⅠ 人類基礎理論研究部・国際シンポジウム『変容する世界のなかでの文化遺産の保存』国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2017年11月23日 「雲南大理白族の地方保護神——従事田野調査の人類學家如何相遇和應對歷史資料」Seminar of Area of Excellence Scheme “The Historical Anthropology of Chinese Society”, Chinese University of Hong Kong

・研究講演

2017年8月5日 「旧暦7月に祖先を迎え、送る人びと——中国雲南省の事例から東アジアの祖先祭祀を考える」第17回無形文化遺産理解セミナー、堺市博物館

- 2017年12月6日 「云南白族的食文化 and 環境——礼仪食品の角度来看」 浙江農林大学茶文化研究院
- 2018年2月14日 「伝承される民族衣装のいま——中国の多様性とファッション」 カレッジシアター「地球探検紀行」あべのハルカス近鉄本店
- 2018年2月21日 「中国少数民族の民族衣装——多彩な華々とその土壤」 泉佐野市市民大学講座、レイクアルスタープラザ・カワサキ生涯学習センター
- 2018年3月15日 「人類学の森を歩く——雲南でのフィールドと研究」 退職記念講演、国立民族学博物館
- ・みんぱくウィークエンド・サロン
- 2018年1月28日 「フィールドワークの醍醐味——雲南省大理での30年を通して」 第496回ウィークエンド・サロン

川瀬 慈 [かわせ いつし] ————— 准教授

1977年生。【学歴】立命館大学文学部卒（2001）、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士課程修了（2010）【職歴】日本学術振興会特別研究員PD/京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科（2007）、日本学術振興会海外特別研究員/マンチェスター大学グラナダ映像人類学センター（2010）、メケレ大学 Abba Gorgoryos Guest Professor（2011）、SIC-Sound Image Culture 客員講師（2011）、国立民族学博物館文化資源研究センター助教（2012）、ハンブルグ大学アジア・アフリカ研究所 Hiob Ludolf Guest Professor（2013）、プレーメン大学人類学・文化調査学部客員教授（2014）、国立民族学博物館人類基礎理論研究部准教授（2017）【学位】博士（地域研究）（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 2010）、修士（地域研究）（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 2007）【専攻・専門】アフリカ研究、映像人類学、民族誌映画制作【所属学会】英国王立人類学協会、日本映像民俗学の会、日本文化人類学会、日本アフリカ学会、日本ナイル・エチオピア学会

【主要業績】

[共編]

鈴木裕之・川瀬 慈編

2015 『アフリカン・ポップス！——文化人類学からみる魅惑の音楽世界』 東京：明石書店。

[論文]

川瀬 慈

2016 「エチオピアの音楽職能集団アズマリの職能機能についての考察」『国立民族学博物館研究報告』41(1)：37-78。

2015 「コミュニケーションを媒介し生成する民族誌映画——エチオピアの音楽職能集団と子供たちを対象とした映画制作と公開の事例より」『文化人類学』80(1)：6-19。

【受賞歴】

2013 第19回日本ナイル・エチオピア学会高島賞

2008 最も革新的な映画賞 Premio per il film più innovative イタリア・サルデーニャ国際民族誌映画祭

【2017年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

コミュニケーションを媒介し生成する民族誌映画の研究

・研究の目的、内容

本研究の目的は、自身の映画制作や上映活動を事例に、コミュニケーションによって生成する人類学的な映像実践を示すことにある。報告者は、撮影者の存在や行動を前景化し、撮影の過程でかわされる撮影者・被写体間の議論を映像の中であえて開示し、撮影プロセスを明示する方法論を發展させてきた。民族誌映画においては、観察型、解説型の映画様式が重視され、制作中の撮影者・被写体間の相互作用や、映画を視聴する幅広いアクターの役割が軽視される傾向にあった。そのようななか本研究では、民族誌映画を固定的で完結した表象としてではなく、視聴する人々とのたえまない相互作用のなかに位置づける。さらにその相互作用が、研究の新たな展開を生成させる創発的な営みであることを自身の民族誌映画制作の実践や映画公開の活動を基軸に提示する。

・成果

エチオピアの音楽や儀礼をはじめとする無形文化を対象とした報告者による映像記録方法論の変遷をテーマにした研究論文を執筆し、ドイツのフロベニウス研究所が発行する雑誌『Studien zur Kulturkunde』の第131号において発表。その他、映像人類学研究の最新潮流について『Lexicon 人類学』（以文社）において報告。10月に韓国済州島において開催された韓国映像人類学会発足記念の映像フォーラムにおいて基調講演を行い、研究関心を共有する研究者や学生たちと民族誌映画制作の方法論についての意見交換を行った。徳島県と岐阜県の民謡の継承と創造をテーマに制作した映像民族誌『めばえる歌——民謡の継承と創造——』を完成させ、11月のみんぱく映画会で上映し、出演者や関係者とともに登壇し、無形文化の継承と映像記録に関する討論を行った。3月には、JSPS海外研究動向調査受諾金（代表：森明子）のサポートのもと、国際会議『Frontiers of East Asian Visual Anthropology: Perspectives from Ethnographic Filmmaking』を企画、実行した。韓国、台湾、中国、日本の映像人類学研究の最新の動向に関する報告を行うとともに、映像人類学に関する東アジアを基盤とした共同研究ネットワークの構築について意見交換を行った。

◎出版物による業績

[分担執筆]

川瀬 慈

- 2017 「蠟と金——エチオピアの楽師アズマリが奏でるイメージの世界」『異貌の同時代 人類・学・の外へ』 pp.339-352, 東京：以文社。
- 2017 「映像がとらえる儀礼と音楽——エチオピアのザール憑依儀礼と楽師アズマリを事例に」『文化遺産と生きる』 pp.163-183, 京都：臨川書店。
- 2017 「エチオピア連邦民主共和国」中牧弘允編『世界の暦文化事典』 pp.276-279, 東京：丸善出版。
- 2018 「民族誌映画の革新」奥野克巳・石倉敏明編『Lexicon 現代人類学』 pp.168-171, 東京：以文社。
- 2018 「センサリーメディア」奥野克巳・石倉敏明編『Lexicon 現代人類学』 pp.172-175, 東京：以文社。

[論文]

Kawase, I.

- 2017 Ethnographic Filmmaking in Ethiopia, the Approach and the Film Reception. In S. Dinslage and S. Thunbauville (eds.) *Studien zur Kulturkunde*, pp.75-86. Berlin: Reimer-Verlag.

◎映像音響メディアによる業績

・国立民族学博物館映像音響資料の制作・監修

川瀬 慈監修・監督

- 2017 映像民族誌『めばえる歌——民謡の継承と創造』（日本語）

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2017年10月8日 「Creative Use of Archival Films: The Case from Encyclopedia Cinematographica」学術潮流フォーラムⅠ 人類基礎理論研究部・国際シンポジウム『変容する世界のなかでの文化遺産の保存』国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2017年12月17日 「『精霊の馬』上映——ザール憑依儀礼の映像記録・表現をめぐる——『音楽する身体間の相互作用を捉える——ミュージッキングの学際的研究』国立民族学博物館第7セミナー室

2018年3月21日 “Anthropological Imagination through Audiovisual Storytelling: Cases from Japan”, ‘Frontiers of East Asian Visual Anthropology: Perspectives from Ethnographic Filmmaking’, National Museum of Ethnology

・研究講演

2017年6月3日 “The Art of Audiovisual Storytelling” 情報科学芸術大学院大学

2017年6月21日 “Transcultural Encounter and Audiovisual Storytelling”, Alle School of Fine Arts and Design, Addis Ababa University

2017年7月6日 「移動する音と映像」京都市立芸術大学芸術資料館収蔵品展『移動する物質』京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA

2017年10月16日 「映像制作と“リアリティ”へのダイビング」秋田公立美術大学アーツ&ルーツ専攻

2018年2月3日 “Audio-visual storytelling in Anthropology”, Center for African and Oriental Studies, Addis Ababa University, Addis Ababa, Ethiopia

・研究公演

2017年11月11日 映像民族誌「めばえる歌——民謡の継承と創造」司会・解説、国立民族学博物館

◎学会の開催

2018年3月21日 Commission on Visual Anthropology, IUAES 'Frontiers of East Asian Visual Anthropology: Perspectives from Ethnographic Filmmaking', National Museum of Ethnology

菊澤律子 [きくさわ りつこ] ————— 准教授

1967年生。【学歴】東京大学文学部文科三類言語学専修課程卒（1990）、東京大学大学院人文科学研究科言語学専攻修士課程修了（1993）、東京大学大学院人文科学研究科言語学専攻博士課程退学（1995）、ハワイ大学大学院言語学部言語学専攻博士課程修了（2000）【職歴】東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助手（1995）、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助教授（2000）、国立民族学博物館先端人類科学研究部准教授（2005）、総合研究大学院大学人文科学研究科准教授（2006）、国立民族学博物館人類基礎理論研究部准教授（2017）【学位】Ph. D. (Linguistics)（ハワイ大学 2000）、文学修士（言語学）（東京大学 1993）【専攻・専門】言語学 音声言語と手話言語の対照言語学、言語学 記述言語学、フィジー語諸方言、マラガシ語諸方言、他分野との協働による研究 2 オセアニアの先史研究、ヒトの移動誌、動植物のドメスティケーション、文化接触・文化交流、他分野との協働による研究 1 言語情報と地理情報システム（GIS）、フィジー語諸方言、言語学 歴史（比較）言語学、言語類型論、オーストロネシア語族、歴史（比較）統語論【所属学会】日本言語学会、日本オセアニア学会、Association of Linguistic Typology、Australian Linguistic Society、日本歴史言語学会、The Philological Society (UK)、日本展示学会、International Society for Historical Linguistics、日本手話学会、Sign Language Linguistics Society、関西言語学会

【主要業績】

[単著]

Kikusawa, R.

2003 *Proto Central Pacific Ergativity: Its Reconstruction and Development in the Fijian, Rotuman and Polynesian Languages*. Canberra: Pacific Linguistics.

[編著]

Kikusawa, R. and L.A. Reid (eds.)

2013 *Historical Linguistics, 2011: Selected papers from the 20th International Conference on Historical Linguistics, Osaka, 25-30 July 2011* (Current Issues in Linguistic Theory 326). Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.

[論文]

Kikusawa, R. and K.A. Adelaar

2014 Malagasy Personal Pronouns: A Lexical History. *Oceanic Linguistics* 53(2): 480-516.

【受賞歴】

2015 2014年度学融合推進センター公開研究報告会学融合推進センター賞

2014 2013年度学融合推進センター公開研究報告会学融合推進センター賞

2009 ラルフ・チカト・ホンダ優秀研究者賞

2008 第4回日本学術振興会賞

2005 第4回日本オセアニア学会賞

【2017年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

オーストロネシア諸語の比較形態統語論的研究——受動態再考

・研究の目的、内容

オーストロネシア諸語の形態統語論的特徴のうち、いわゆる「受動態」と呼ばれるものを比較再建し、具体的な発達メカニズムの解明を目標として研究を進める。オーストロネシア諸語においては、早い時期に分岐した

言語ほど動詞の形態法が複雑であり、オーストロネシア祖語の動詞のシステムは、これをほぼ直接反映させて再建される傾向にある。これに対し菊澤（印刷中）では、形態統語論的な特徴の変遷はシステムの変遷として捉えるべきであり、音韻や語彙の再建におけるものとは異なる視点および手法が必要であることを示した。これを受けて、菊澤2012で論じたインドネシアの諸言語における受動態の発達史を再分析すると同時に、他の言語グループへの手法の応用を試みる。

外部資金との関連については、りそなアジア・オセアニア財団助成金による研究プロジェクト「地理情報システム（GIS）を用いたフィジー語方言地図の作成とそれに基づくヒトの移動史の解析」をすすめる。また、ベルギー・ヘント大学における欧州研究会議（ERC）の研究プロジェクト「印欧語の項構造の史的変遷解明のためのプロジェクト」（研究代表者：ヨハンナ・バースダル）と、「格構造の変化に伴う主語性の分布の変化」に関する共同研究を行うための基盤形成を進めたい。

・成果

研究プロジェクト「地理情報システム（GIS）を用いたフィジー語方言地図の作成とそれに基づくヒトの移動史の解析」については、りそなアジア・オセアニア財団助成金を獲得することができ、国際・学際共同研究を着実に進めることができた。2018年3月の段階で、言語データのGIS化のめどがたつところまでデータ処理を進めており、現在、成果報告と還元の方法について、メンバーと協議中である。

ベルギー・ヘント大学における欧州研究会議（ERC）の研究プロジェクト「印欧語の項構造の史的変遷解明のためのプロジェクト」（研究代表者 ヨハンナ・バースダル）と、「格構造の変化に伴う主語性の分布の変化」に関する共同研究を行うための基盤形成については、研究計画を含め、共同研究のための資金確保に関する検討を進めている。オーストロネシア諸語の受動態再考については、ヘント大学との共同研究の内容も反映させながら進めるのが理想的であるため、こちらと合わせての研究推進に切り替えることにした。

この他、日本手話関連では、日本手話における語彙形態素の水平化現象について理論面での裏付けをし、データ提供および分析者の相良啓子と共同で国際歴史言語学会において研究報告を行った。

編集出版関連では、民博で1970年から続いていたサタワル語のデータを整理し、辞書の形に編集した *Satawalese Cultural Dictionary* の部分執筆と編集作業を行い、2018年3月の刊行に至った。また、2013年に主催した歴史言語学における系統樹の扱いに関するシンポジウムの論文集の編集をすすめ、2018年3月に刊行した。

[編書]

Kikusawa, R. and L. A. Reid (eds.)

2018 *Let's Talk about Trees: Phylogenetic Diagrams and Approaches to Genetic Relationship of Languages* (Senri Ethnological Studies 98). Osaka: National Museum of Ethnology.

Sauchomal, S., T. Akimichi, S. Ishimori, K. Sudo, H. Sugita, and R. Kikusawa (comps.) and L. A. Reid (ed.)

2018 *Satawalese Cultural Dictionary* (Senri Ethnological Reports 146). Osaka: National Museum of Ethnology.

[論文]

Kikusawa, R.

2018 What the Tree Model Represents: Language Change, Time Depth, and Visual Representation. In R. Kikusawa and L. A. Reid (eds.) *Let's Talk about Trees: Phylogenetic Diagrams and Approaches to Genetic Relationship of Languages* (Senri Ethnological Studies 98), pp.171-193. Osaka: National Museum of Ethnology.

[分担執筆]

Kikusawa, R. and L. A. Reid

2018 Introduction. In R. Kikusawa and L. A. Reid (eds.) *Let's Talk about Trees: Genetic Relationships of Languages and Their Phylogenetic Representation* (Senri Ethnological Studies 98), pp.1-8. Osaka: National Museum of Ethnology.

Kikusawa, R.

2018 Introduction. In S. Sauchomal et al., *Satawalese Cultural Dictionary* (Senri Ethnological Reports 146), pp.xii-xvii. Osaka: National Museum of Ethnology.

2018 Orthography. In S. Sauchomal et al., *Satawalese Cultural Dictionary* (Senri Ethnological Reports 146), pp.xviii-xix. Osaka: National Museum of Ethnology.

2018 Supplement to Grammatical Notes: Directional Suffixes. In S. Sauchomal et al., *Satawalese Cultural Dictionary* (Senri Ethnological Reports 146), pp.xxxiv-xxxv. Osaka: National Museum of

Ethnology.

- 2018 Cultural Notes. In S. Sauchomal et al., *Satawalese Cultural Dictionary* (Senri Ethnological Reports 146), pp.3-93. Osaka: National Museum of Ethnology.

◎出版物による業績

[編著]

- Sauchomal, S., T. Akimichi, S. Ishimori, K. Sudo, H. Sugita, R. Kikusawa (comps.) and L.A. Reid (ed.)
2018 *Satawalese Cultural Dictionary* (Senri Ethnological Reports 146). Osaka: National Museum of Ethnology. [査読有]
- Kikusawa, R. and L.A. Reid (eds.)
2018 *Let's Talk about Trees: Genetic Relationships of Languages and Their Phylogenic Representation* (Senri Ethnological Studies 98). Osaka: National Museum of Ethnology. [査読有]

[分担執筆]

- Kikusawa, R.
2017 Comparative Linguistics and Oceanic Languages. In H. Satoh and J. Bradshaw (eds.) *Languages of the Pacific Islands: Introductory Readings*, pp.17-28. California: Create Space Independent Publishing Platform. [査読有]
- 2018 Orthography. In S. Sauchomal, T. Akimichi, S. Ishimori, K. Sudo, H. Sugita, R. Kikusawa (comps.) and L.A. Reid (ed.) *Satawalese Cultural Dictionary* (Senri Ethnological Reports 146), pp.xviii-xix. Osaka: National Museum of Ethnology. [査読有]

[論文]

- Kikusawa, R.
2017 Ergativity and language change in Austronesian languages. *The Oxford Handbook of Ergativity*. Oxford: Oxford University Press. [査読有]
- 2018 Cultural Notes. In S. Sauchomal, T. Akimichi, S. Ishimori, K. Sudo, H. Sugita, R. Kikusawa (comps.) and L.A. Reid (ed.) *Satawalese Cultural Dictionary* (Senri Ethnological Reports 146), pp.3-93. Osaka: National Museum of Ethnology. [査読有]
- 2018 Introduction. In S. Sauchomal, T. Akimichi, S. Ishimori, K. Sudo, H. Sugita, R. Kikusawa (comps.) and L.A. Reid (ed.) *Satawalese Cultural Dictionary* (Senri Ethnological Reports 146), pp.xiii-xvii. Osaka: National Museum of Ethnology. [査読有]
- 2018 Supplement to Grammatical Notes. In S. Sauchomal, T. Akimichi, S. Ishimori, K. Sudo, H. Sugita, R. Kikusawa (comps.) and L.A. Reid (ed.) *Satawalese Cultural Dictionary* (Senri Ethnological Reports 146), pp.xxxiv-xxxv. Osaka: National Museum of Ethnology. [査読有]
- 2018 What the Tree Model Represents: Language Change, Time Depth, and Visual Representation. In R. Kikusawa and L.A. Reid (eds.) *Let's Talk about Trees: Genetic Relationships of Languages and Their Phylogenic Representation* (Senri Ethnological Studies 98), pp.171-193. Osaka: National Museum of Ethnology. [査読有]

Yoshida, Y. (Translated by R. Kikusawa)

- 2018 The Family Tree Model and “Dead Dialects”: Eastern Middle Iranian Languages. In R. Kikusawa and L.A. Reid (eds.) *Let's Talk about Trees: Genetic Relationships of Languages and Their Phylogenic Representation* (Senri Ethnological Studies 98), pp.123-152. Osaka: National Museum of Ethnology. [査読有]

Kikusawa, R. and L.A. Reid

- 2018 Introduction. In R. Kikusawa and L.A. Reid (eds.) *Let's Talk about Trees: Genetic Relationships of Languages and Their Phylogenic Representation* (Senri Ethnological Studies 98), pp.1-8. Osaka: National Museum of Ethnology. [査読有]

[その他]

菊澤律子編

- 2017 特集「手話の世界をめぐる」『月刊みんぱく』41(5) : 2-9。

菊澤律子

- 2017 「手話の世界をめぐる」特集「手話の世界をめぐる」『月刊みんぱく』41(5) : 2-3。

- 2017 「声の言葉と手の言葉 手話の言語学①「手話」というコトバ(1)」『ミネルヴァ通信「究」』67：20-23。
 2017 「声の言葉と手の言葉 手話の言語学②「手話」というコトバ(2)」『ミネルヴァ通信「究」』68：20-23。
 2017 「声の言葉と手の言葉 手話の言語学③コトバの規則」『ミネルヴァ通信「究」』69：20-23。
 2017 「声の言葉と手の言葉 手話の言語学④コトバの成り立ち(1)文を構成する要素」『ミネルヴァ通信「究」』70：20-23。
 2017 「国立民族学博物館の収蔵品⑥ 「世界の言語」パネル」『文部科学 教育通信』425：2。
 2017 「声の言葉と手の言葉 手話の言語学⑤コトバの成り立ち(2)手話言語の音素」『ミネルヴァ通信「究」』71：20-23。
 2017 「声の言葉と手の言葉 手話の言語学⑥コトバの成り立ち(3)右手と左手」『ミネルヴァ通信「究」』72：20-23。
 2017 「声の言葉と手の言葉 手話の言語学⑦非手指表現と非音声表現」『ミネルヴァ通信「究」』73：20-23。
 2018 「声の言葉と手の言葉 手話の言語学⑧線条性再考」『ミネルヴァ通信「究」』74：20-23。
 2018 「声の言葉と手の言葉 手話の言語学⑨ことばを書きとる方法」『ミネルヴァ通信「究」』75：20-23。
 2018 「声の言葉と手の言葉 手話の言語学⑩モードの違いと「ある」と「ない」」『ミネルヴァ通信「究」』76：20-23。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2017年10月8日 「映像を活用して言語を展示する」学術潮流フォーラム I 人類基礎理論研究部・国際シンポジウム『変容する世界のなかでの文化遺産の保存』国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2017年6月10日 「音声言語と手話言語をつなぐもの——共通点と相違点&アーカイブ化の意義」, 日本学術会議公開シンポジウム『音声言語・手話言語のアーカイブ化の未来』東京女子大学
 2017年8月3日 Paradigm Leveling in Japanese Sign Language (JSL) and Related Languages, The 23rd International Conference on Historical Linguistics (ICHL23), University of Texas at San Antonio
 2017年8月28日 「音声言語と手話言語をつなぐもの——言語学からみた聴覚システムと視覚システム」徳島大学医学部循環器内科学セミナー、日亜メディカルホール
 2017年12月5日 「オーストロネシア諸言語における系統・変異・多様性と数理分析の可能性」『言語における系統・変異・多様性とその数理』研究発表会、国立国語研究所
 2017年12月9日 「歴史言語学における系統樹モデルの利用——オーストロネシア歴史言語学の事例より」第7回日本歴史言語学会 公開シンポジウム『言語系統論の過去(これまで)と未来(これから)』大阪学院大学
 2018年2月2日 「言語の統語構造の変化を追う——統計数理処理での応用に向けた基礎概念の整理」『言語における系統・変異・多様性とその数理』シンポジウム、大手町カンファレンスセンター
 2018年3月21日 「オセアニア言語研究の過去(これまで)と未来(これから)——言語研究と系統論的アプローチ」日本オセアニア学会40周年記念シンポジウム、沖縄県立博物館・美術館講堂
 2018年3月22日 「地理情報システム(GIS)を利用したフィジー語諸方言の歴史研究プロジェクト」第35回日本オセアニア学会研究大会、海洋博公園内・美ら海水族館イベントホール
 2018年3月31日 「マダガスカルの言語はなぜ『オーストロネシア系』なのか——歴史言語学の方法と今後の展開の可能性」第22回マダガスカル研究懇談会、京都大学稲盛記念会館

・みんなくウィークエンド・サロン

2018年1月7日 「『数』をあらわす——音声言語と手話言語の1から10」第493回ウィークエンド・サロン

・その他(「口頭発表・展示・その他の業績」で以上の項目に属さないもの)

2017年8月28日 徳島大学医学部循環器内科学セミナー「音声言語と手話言語をつなぐもの——言語学からみた聴覚システムと視覚システム」徳島大学医学部日亜メディカルホール

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費(挑戦的萌芽研究)「日本手話と台湾手話の歴史変化の解明——歴史社会言語学の方法論の確立に向

けて」(研究代表者:相良啓子) 研究分担者、「The 6th Meeting of Signed and Spoken Language Linguistics 手話言語と音声言語に関する民博フェスタ2017」

・民間の奨学金及び助成金からのプロジェクト

日本財団助成金「手話言語学研究部門の設置および手話言語学事業の推進」(研究代表者:菊澤律子) 研究代表者、りそなアジア・オセアニア財団調査研究助成「地理情報システム(GIS)を用いたフィジー語方言地図の作成とそれに基づくヒトの移動史の解析」研究代表者

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

「日本歴史言語学会」会長、「大阪大学2017-2019年度全学教育リレー講義『手話の世界と世界の手話言語☆入門』」コーディネーター、「Brill's Studies in Historical Linguistics」編集顧問委員、「Editorial Board」member、「Journal of Historical Linguistics」編集顧問委員、「Editorial Advisory Board」member、「Journal of Historical Syntax」編集顧問委員、「Editorial Board」member、「大阪大学博士論文」審査委員、「日本歴史言語学会」副会長、「日本歴史言語学会」理事、「International Society for Historical Linguistics (ISHL) 国際歴史言語学会」理事・Board member

・他大学の客員、非常勤講師

山口大学大学院「歴史言語学概論」(集中講義)

日高真吾 [ひだか しんご] ————— 准教授

1971年生。【学歴】東海大学文学部史学科日本史学専攻卒(1994)【職歴】財団法人元興寺文化財研究所研究員(1994)、国立民族学博物館博物館民族学研究部助手(2002)、国立民族学博物館民族学研究開発センター助手(2003)、国立民族学博物館文化資源研究センター助手(2004)、国立民族学博物館文化資源研究センター准教授(2008)、国立民族学博物館人類基礎理論研究部准教授(2017)【学位】文学博士(東海大学 2005)【専攻・専門】保存科学、保存修復【所属学会】文化財保存修復学会

【主要業績】

[単著]

日高真吾

2015 『災害と文化財——ある文化財科学者の視点から』大阪:千里文化財団。

2008 『女乗物——その発生経緯と装飾性』神奈川:東海大学出版会。

[編著]

日高真吾編

2012 『記憶をつなぐ——津波被害と文化遺産』大阪:千里文化財団。

園田直子・日高真吾共編

2008 『博物館への挑戦——何がどこまでできたのか』東京:三好企画。

【受賞歴】

2016 文化財保存修復学会 業績賞

2009 日本文化財科学会第4回ポスター賞

2008 文化財保存修復学会第2回奨励賞

【2017年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

日本列島における地域文化の再発見とその表象システムの構築

・研究の目的、内容

本研究では、グローバル化や災害を原因として大きな変貌を遂げている地域社会において、どのような文化が継承され、新たな文化が構築されているのかについて調査・研究をおこなう。さらに、地域社会の動向に対して人間文化研究がいかに貢献しうるかを考察することを研究の主眼とする。

この研究からは、①豊かな地域社会の創生に向け、災害時における地域文化の重要性の提示、②博物館を積

極的に活用し、平常時に地域住民の意識が希薄となっている地域文化の大切さを節目で感じることができるプログラムの策定、③地域の文化を発掘し、その実践活動を検証する人間文化研究の新たなモデルの構築、④研究成果を地域において活用するための、地域と研究者の結節点の発見を目指す。

なお、本研究を進めるにあたっては、人間文化研究機構基幹プロジェクト「日本列島における地域文化の再発見とその表象システムの構築」（代表 日高真吾）および、科学研究費補助金基盤B「東日本大震災で被災した民俗文化財の保存および活用に関する基礎研究」（代表 日高真吾 15H02954）の研究プロジェクトと関連付けながら実施する。

・成果

2017年度は、大学教育と地域文化の再発見を連結させる活動として、京都造形芸術大学、別府大学の活動について調査をおこなうとともに、地域主体の地域文化の活用について神戸大学、宮城資料ネットワークによる古文書調査の活動のフィールド調査をおこなった。その結果、人間文化研究機構基幹プロジェクト「日本列島における地域文化の再発見とその表象システムの構築」の一環として、2016年度におこなった別府大学の地域文化を活用した大学教育の実際についての調査の結果を基に、2017年10月に別府大学において国際フォーラム「地域文化の再発見——大学・博物館の視点から」を開催した。また、村上市、京都市、枚方市、気仙沼市で研究会を開催し、教育キット「地域文化の宝箱」（仮称）の制作に向けての調査をおこない、2018年度、2019年度に本格制作をおこなうための準備を整えた。加えて、大学間連携の体制の構築のため、本研究課題を推進するため、大妻女子大学、京都造形大学と協定を締結した。なお、東北大学については、人間文化研究機構において協定を締結した。

次に、科学研究費補助金基盤B「東日本大震災で被災した民俗文化財の保存および活用に関する基礎研究」の一環として、2009年の台風による土砂災害で壊滅的な被害を受けた台湾の小林村の文化振興をもとにした復興活動の現地調査と、高雄における地域文化の発見と活用に関する市民活動の実態調査を台湾芸術大学とおこなった。これらの調査結果は、来年度台湾で開催予定の国際フォーラム「地域文化を保存する——その手法と意義を考える」（仮称）に反映していく予定である。

◎出版物による業績

[編著]

日高真吾編

2018 『地域文化の再発見、保存と活用』 京都：Knit-K。

2018 『市民と語らう文化財』 京都：Knit-K。

[論文]

日高真吾

2017 「地域文化遺産の継承」『文化遺産と生きる』 pp.373-394, 京都：臨川書店。

2018 「災害をテーマとした展示活動についての一考察——東日本大震災関連展示『津波を越えて生きる——大植町の奮闘の記録』の展示経験から」『展示学』 55：20-29。[査読有]

2018 「国立民族学博物館『日本の文化展示場』の展示資料をデータベース化する試み」『民具研究』 160：67-83。[査読有]

[その他]

日高真吾

2017 「新世紀ミュージアム 雲仙岳災害記念館」『月刊みんぱく』 41(7)：16-17。

2017 「国立民族学博物館の収蔵品②④ 田の神（タノカンサア）」『文部科学 教育通信』 418：2。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2017年10月7日 「小規模な博物館等施設で活用できる化学薬剤を用いない可動式殺虫処理」学術潮流フォーラムⅠ 人類基礎理論研究部・国際シンポジウム『変容する世界のなかでの文化遺産の保存』国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2017年6月10日 「東日本大震災を契機に開発した『津波の記憶を刻む文化遺産「寺社・石碑」データベースの可能性』第34回日本文化財科学会、東北工科芸術大学

2017年6月14日 「神恵院扁額の分析と保存（研究課題番号15H01780）」観音寺市民会館

2017年6月18日 「東日本大震災関連展示『津波を越えて生きる——大植町の奮闘の記録』を考える」第36回日本展示学会、名古屋大学

- 2017年 7月 1日 「国立民族学博物館の失火対応について——消火剤の除塵を中心に」第39回文化財保存修復学会大会、金沢歌劇座
- 2017年 7月 1日 「災害対策調査部会2016年度活動報告」第39回文化財保存修復学会大会、金沢歌劇座
- 2017年 7月15日 「生活文化の記憶を取り戻す——文化財レスキューの現場から」『負の歴史遺産、歴史認識と博物館』国立台湾歴史博物館
- 2017年 9月 5日 ‘Challenges and Reflections for Sustainable Climate Control at the National Museum of Ethnology, Japan’, ICOM-CC 18th Triennial Conference 2017, Tivoli Hotel, Copenhagen, Denmark
- 2017年10月31日 「被災した民俗文化財の応急処置」2017年度文化財等防災ネットワーク研修、奈良文化財研究所
- 2018年 2月 3日 基調報告「廃校を利用した民具の收藏と求められる環境改善」2017年度 新潟県民具学会研究会、新潟県立歴史博物館
- 2018年 2月10日 基調講演「女乗物の歴史の変遷をたどる」2017年度山内家資料修理保存説明会『女乗物を解き明かす——修理とその成果』高知県立高知城歴史博物館

・研究講演

- 2017年10月26日 「災害で被災した文化財のレスキューについて——文化財保存修復学会の活動を中心に」愛知県立芸術大学文化財保存修復研究所、愛知県立芸術大学
- 2018年 2月17日 「地域に根ざした民具の保存と活用」福崎町教育委員会、福崎町立神崎郡歴史民俗資料館

・みんなくウィークエンド・サロン

- 2017年 4月23日 「民博の展示資料を守る」第462回ウィークエンド・サロン

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費助成事業（基盤研究（A）（一般））「彩色塗装のある歴史的木造文化財建造物の加湿温風処理による虫害処理方法の検討」（研究代表者：木川りか（独立行政法人国立文化財機構九州国立博物館））研究分担者、科学研究費助成事業（基盤研究（B）（一般））「セルロース系ナノファイバーの紙資料保存への応用」（研究代表者：園田直子）研究分担者、科学研究費助成事業（基盤研究（B）（一般））「東日本大震災で被災した民俗文化財の保存および活用に関する基礎研究」研究代表者、科学研究費助成事業（基盤研究（B）（一般））「アイヌ民族の衣文化交流——博物館資料から北東アジア史を見直す」（研究代表者：佐々木史郎（独立行政法人国立文化財機構東京国立博物館））研究分担者、科学研究費助成事業（挑戦的研究（萌芽））「被災地芸能の二次創作に関する実践研究」（研究代表者：橋本裕之（追手門学院大学））研究分担者、人間文化研究機構広域連携型「地域における歴史文化研究拠点の構築」（研究代表者：小池淳一）メンバー、人間文化研究機構広域連携型「日本列島における地域文化の再発見とその表象システムの構築」研究代表者

福岡正太 [ふくおか しょうた]————— 准教授

1962年生。【学歴】東京藝術大学音楽学部楽理科卒（1986）、東京藝術大学大学院音楽研究科修士課程修了（1991）、東京藝術大学大学院博士課程単位取得退学（1994）【職歴】国立民族学博物館第2研究部助手（1994）、国立民族学博物館博物館民族学研究部助手（1998）、国立民族学博物館博物館民族学研究部助教授（2003）、国立民族学博物館文化資源研究センター准教授（2004）、国立民族学博物館人類基礎理論研究部准教授（2017）【学位】芸術学修士（東京藝術大学大学院 1991）【専攻・専門】民族音楽学、東南アジアとくにインドネシア西ジャワのスダ伝統音楽についての研究【所属学会】東洋音楽学会、日本音楽学会、日本ポピュラー音楽学会

【主要業績】

[論文]

福岡正太

- 2003 「音楽からみた『インドネシア民族』の形成」端信行編『民族の二〇世紀』（二〇世紀における諸民族文化の伝統と変容9）pp.144-160、東京：ドメス出版。
- 2003 「小泉文夫の日本伝統音楽研究——民族音楽学研究の出発点として」『国立民族学博物館研究報告』28（2）：257-295。

Fukuoka, S.

- 2003 Gamelan Degung: Traditional Music in Contemporary West Java. In S. Yamashita and J.S. Eades (eds.) *Globalization in Southeast Asia: Local, National, and Transnational Perspectives*, pp.95-110. New York and Oxford: Berghahn Books.

【2017年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

映像音響メディアが伝統的音楽芸能に与える影響に関する研究

・研究の目的、内容

音声および映像の記録技術は、学術的な記録および分析の手段として、音楽芸能研究において一定の役割を果たしてきた。民族音楽学の誕生と展開は、映像音響メディアの影響を抜きにして論じることはできない。一方、20世紀を通じて、映像音響メディアは、人々が音楽芸能を楽しむ媒体として普及定着し、メディアの変化が音楽芸能の展開に大きな影響を及ぼすようになった。さらに、手軽なビデオ撮影機器の普及により、音楽芸能の伝承や創造、研究の過程において、関係者が自ら映像を作成して発表するようになり、映像は音楽芸能にかかわる活動に不可欠なものとして組み込まれつつある。こうした状況の中、研究機関等にとって、映像音響資料をいかに活用可能な形でアーカイブ化するかが大きな課題となってきた。本研究は、様々な位相における音楽芸能と映像音響メディアの結びつきについて明らかにすることを目的としている。

具体的には、①20世紀前半から半ばの日本とインドネシアにおいて、レコードやラジオなどのメディアの登場が音楽にもたらした変化を明らかにする研究に取り組む。②楽器資料に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築を通じて、資料に関わる多様な知識を交換し共有することを目指す。③鹿児島県徳之島および三島村の芸能を例として、芸能の映像記録を音楽芸能の関係者と記録者との相互関係を築くメディアとして位置づけ、映像記録が音楽芸能の上演や伝承に与える影響について研究する。

・成果

①インドネシアのラジオ放送におけるスダ音楽の変化についての論考を執筆、今日「伝統音楽」とよばれるジャンルにおいても、1930年代にはラジオ放送の導入とともに、主に欧米から流入した流行音楽の影響を取り込みながら「モダン」なプレゼンテーションが広まり、新しいレパートリーが形成されたことを論じた。共同研究「東南アジアのポピュラーカルチャー——アイデンティティ、国家、グローバル化」（代表者：福岡まどか）の成果として編集作業をおこない、館外での出版を奨励する民博の制度を利用して出版した。②楽器に関するフォーラム型情報ミュージアムを構築し、「世界の音楽と楽器」を完成させた。沖縄県立芸術大学で開催された東洋音楽学会において研究発表をおこない、これが世界の広い範囲にわたる楽器資料に関する情報を蓄積する通文化的な性格をもった双方向的データベースであり、1人の研究者、1つの研究機関では実現が難しい、世界の楽器に関する広範な知識を蓄積して共有することを目的としたシステムであることを論じ、関係者への協力をよびかけた。今後、このシステムを利用して研究者等の協力により、楽器に関する情報を集積することを目指す。③映像記録を芸能の伝承にどのように役立てることができるのかを実践的に明らかにすることを目的として、徳之島の小学校におけるフォーラム型情報ミュージアム「徳之島の歌と踊り」の利用を想定した教育プログラム開発のための調査および打ち合わせをおこなった。2018年度にプログラムの実現を目指す。また、民博とアジア太平洋無形文化遺産研究センター、文化庁の共催による国際シンポジウム「無形文化遺産をめぐる交渉」において、徳之島の各集落の文化の伝承において小学校の役割が高まっていることを踏まえ、フォーラム型情報ミュージアムの試みが見つ可能性を論じる研究発表をおこなった。その成果を出版するための論文を執筆中である。

◎出版物による業績

[編著]

福岡まどか・福岡正太編

2018 『東南アジアのポピュラーカルチャー——アイデンティティ・国家・グローバル化』東京：スタイルノート。[査読有]

[分担執筆]

福岡正太

2017 「人はなぜ踊るのか」国立民族学博物館編『国立民族学博物館展示案内』pp.198-20, 大阪：国立民族学博物館。

- 2018 「あとがき」福岡まどか・福岡正太編『東南アジアのポピュラーカルチャー——アイデンティティ・国家・グローバル化』 pp.465-471, 東京：スタイルノート。[査読有]
- 2018 「イスラーム・ファッション・デザイナー」福岡まどか・福岡正太編『東南アジアのポピュラーカルチャー——アイデンティティ・国家・グローバル化』 pp.166-167, 東京：スタイルノート。[査読有]
- 2018 「スダ音楽の『モダン』の始まり——ラジオと伝統音楽」福岡まどか・福岡正太編『東南アジアのポピュラーカルチャー——アイデンティティ・国家・グローバル化』 pp.258-281, 東京：スタイルノート。[査読有]

Fukuoka, S.

- 2018 Tradition of Folk Performing Arts in Tokunoshima: Practices under the Cultural Property Regime in Japan. In International Centre for Intangible Cultural Heritage in the Asia-Pacific Region (ed.) *International Symposium Negotiating Intangible Cultural Heritage: Report*, pp.42-48. Osaka: International Centre for Intangible Cultural Heritage in the Asia-Pacific Region.

[論文]

福岡正太

- 2017 「書評 徳丸吉彦著『ミュージックスとの付き合い方——民族音楽学の拡がり』(放送大学叢書031)」『音楽学』63(1)：38-40。[査読有]

[その他]

福岡正太

- 2017 「楽器の分類とデータベースの作成」『民博通信』158：10-11。
- 2017 「新世紀ミュージアム 浜松市楽器博物館」『月刊みんぱく』41(11)：16-17。

Fukuoka, S.

- 2018 Tradition of Folk Performing Arts in Tokunoshima: Practices under the Cultural Property Regime in Japan. In International Centre for Intangible Cultural Heritage in the Asia-Pacific Region (ed.) *International Symposium Negotiating Intangible Cultural Heritage: Report*, pp.42-48. Osaka: International Centre for Intangible Cultural Heritage in the Asia-Pacific Region.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

- 2017年10月8日 「音楽展示場における画像の利用」学術潮流フォーラムⅠ 人類基礎理論研究部・国際シンポジウム『変容する世界のなかでの文化遺産の保存』国立民族学博物館
- 2017年11月29日 ‘Tradition of Folk Performing Arts in Tokunoshima: Practices under the Cultural Property Regime in Japan.’ International Symposium “Negotiating Intangible Cultural Heritage.” National Museum of Ethnology, Osaka
- 2018年3月5日 「フォーラム型情報ミュージアムによる徳之島の芸能記録の活用」『フォーラム型情報ミュージアムによる音楽関連資料の活用』国立民族学博物館
- 2018年3月5日 「楽器に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築」『フォーラム型情報ミュージアムによる音楽関連資料の活用』国立民族学博物館

・共同研究会での報告

- 2017年12月25日 「比較音楽学から民族音楽学へ」『会計学と人類学の融合』国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2017年8月29日 「コメント」『ユネスコの無形文化遺産保護をめぐる「当事者」と「文化仲介者」としての実務担当者の役割』成城大学
- 2017年10月22日 「東南アジアにおける南アジア起源の楽器について」『南アジアの弦楽器——歴史の変遷と現代的展開』(2017年度MINDAS「音楽・芸能班」第1回研究会) 国立民族学博物館
- 2017年11月12日 「楽器資料のフォーラム型情報ミュージアム構築の試み」東洋音楽学会、沖縄県立芸術大学

・みんぱくウィークエンド・サロン

- 2017年7月23日 「ジャワ島のガムランのリズム」第474回ウィークエンド・サロン

・広報・社会連携活動

- 2017年7月24日 「ジャワの伝統芸能ワヤンの楽しみ」芦屋川カレッジ大学院、芦屋市民センター
- 2017年10月11日 「インドネシアの伝統芸能ワヤン」カレッジシアター「地球探究紀行」あべのハルカス近鉄本店

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

国立民族学博物館共同研究「音楽する身体間の相互作用を捉える——ミュージッキングの学際的研究」(研究代表者：野澤豊一) メンバー

◎社会活動・館外活動

- ・他大学の客員、非常勤講師

広島市立大学「音楽人類学Ⅱ」(集中講義)、広島市立大学「音楽人類学Ⅰ」(集中講義)

- ・その他の社会活動・館外活動

日本民俗音楽学会理事

丸川雄三 [まるかわ ゆうぞう] ————— 准教授

【学歴】 東京工業大学理学部応用物理学科卒 (1996)、東京工業大学大学院理工学研究科地球惑星科学専攻修士課程修了 (1998)、東京工業大学大学院情報理工学研究科計算工学専攻博士課程単位取得退学 (2001) **【職歴】** 東京工業大学精密工学研究所助手 (2001)、科学技術振興機構 CREST 研究員 (2003)、国立情報学研究所高野明彦研究室特任助手 (2004)、人間文化研究機構本部プロジェクト研究員 (2006)、国立情報学研究所連想情報学研究開発センター特任助手 (2006)、国立情報学研究所連想情報学研究開発センター特任准教授 (2007)、国際日本文化研究センター文化資料研究企画室准教授 (2012)、国立民族学博物館先端人類科学研究部准教授 (2013)、国立民族学博物館人類基礎理論研究部准教授 (2017) **【学位】** 博士 (工学) (東京工業大学大学院 2003)、修士 (理学) (東京工業大学大学院 1998) **【専攻・専門】** 文化財情報発信、連想情報学 **【所属学会】** アート・ドキュメンテーション学会

【主要業績】

[論文]

丸川雄三

2008 「文化財情報発信の実際——文化遺産オンラインの取り組みについて」『画像ラボ』19(4) : 26-29。

水谷長志・川口雅子・丸川雄三

2014 「アジアからの美術書誌情報の発信——東京国立近代美術館・国立西洋美術館 OPAC の artlibraries.net における公開の経緯とその意義」『東京国立近代美術館研究紀要』18 : 6-31。

丸川雄三・阿辺川武

2010 「横断的連想検索サービス『想-IMAGINE』——データベース連携が拓く新たな可能性」『情報管理』53(4) : 198-204。

【受賞歴】

2017 第11回野上紘子記念アート・ドキュメンテーション学会賞 (身装画像データベース)

2011 文部科学大臣表彰科学技術賞 (理解増進部門)

【2017年度の活動報告】

◎各個研究

- ・研究課題

連想情報学に基づく文化財情報発信に関する研究

- ・研究の目的、内容

連想情報学とは、情報システムを、データと利用者を含む統合的な「場」として扱う考え方であり、発信対象の特性に応じた情報発信手法を主な研究対象としている。本研究課題においては、このうち文化財情報を対象に、データ処理技術および情報検索技術、ユーザインタフェースなどの研究開発を行う。

2017年度は、近代日本の身装 (身体と装い) 関係資料を対象とする情報サービスの研究開発を実施する。この研究は、これまで、JSPS 科学研究費助成事業 (基盤研究 (B)) 「近代日本の身装画像デジタルアーカイブの構築——文化変容に視点を据えて」(代表：高橋晴子、2012年度~2014年度) の助成を受け実施されてきたものであるが、研究成果をふまえ今年度も継続して研究を進める。さらに美術情報分野を中心とする制作者データベースとその発信環境の研究開発を実施する。この研究は、JSPS 科学研究費助成事業 (基盤研究 (B)) 「ミュー

ジウムと研究機関の協働による制作者情報の統合」(代表：丸川雄三、2014年度～2016年度)の助成を受けて実施するものである。

・成果

近代日本の身装(身体と装い)文化に関する研究として「身装画像データベース」の活用手法およびインタフェース改善の検討を進めた。その成果の一部を2017年6月に「アート・ドキュメンテーション学会研究大会」で発表した。この研究は、JSPS科学研究費助成事業(基盤研究(B))「近代日本の身装画像デジタルアーカイブの構築——文化変容に視点を据えて」(代表：高橋晴子、2012年度～2014年度)の研究成果をふまえて実施したものである。また美術情報分野の情報統合手法の研究として、東京文化財研究所と美術雑誌『みづゑ』を対象とした美術研究資料アーカイブズ発信環境の研究を進め、ウェブサイト『『みづゑ』の世界』の開発と公開準備を進めた。成果の一部は論文として2018年3月に発行の「アート・ドキュメンテーション研究」にて発表した。この研究は、JSPS科学研究費助成事業(基盤研究(B))「ミュージアムと研究機関の協働による制作者情報の統合」(代表：丸川雄三、2014年度～2017年度)の助成を受けて実施したものである。

◎出版物による業績

[論文]

丸川雄三

2017 「ミュージアムの情報発信力を高める文化遺産オンラインの活用法」『情報の科学と技術』67(12)：628-632。[査読有]

2018 「美術関係資料アーカイブズにおける情報管理発信システムの研究」『アート・ドキュメンテーション研究』25：3-17。[査読有]

[その他]

丸川雄三

2017 「アート・コミュニケーションを支援する情報システムの研究」『2017年度アート・ドキュメンテーション学会年次大会予稿集』pp.14-15、東京：アート・ドキュメンテーション学会。

2017 「研究資料アーカイブズにおける資料情報の記述と公開——講演会『アーカイブズ・オブ・アメリカンアート(AAA)のすべて』より」『民博通信』158：29。

2018 「写真原板アーカイブの活用とデータベースシステム」『文化庁「文化関係資料のアーカイブの構築に関する調査研究」報告書』pp.32-35、東京：公益社団法人日本写真家協会。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2017年6月11日 「アート・コミュニケーションを支援する情報システムの研究」2017年度アート・ドキュメンテーション学会年次大会、東京工業大学博物館・百年記念館、東京

2017年10月8日 「日本アニメーション映画クラシックスの構築と発信」学術潮流フォーラムI 人類基礎理論研究部・国際シンポジウム『変容する世界のなかでの文化遺産の保存』国立民族学博物館

2017年10月26日 「展示場情報システムにおけるデジタルビューアの活用」博物館2017：新科技應用論壇、國立臺北教育大學、台北

2017年12月7日 「国立民族学博物館における地域研究画像デジタルライブラリの構築と研究者支援」デジタルアーカイブ学会関西支部第1回例会、エルおおさか本館、大阪

2018年1月28日 「建築における意匠とアーカイブズ」アート・ドキュメンテーション学会第94回研究会、国立近現代建築資料館、東京

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費補助金(基盤研究(B))「ミュージアムと研究機関の協働による制作者情報の統合」研究代表者、科学研究費(新学術領域研究(研究領域提案型))『学術研究支援基盤形成』「地域研究に関する学術写真・動画資料情報の統合と高度化」(研究代表者：吉田憲司)研究支援分担者、国立情報学研究所客員准教授、国立美術館客員研究員、東京文化財研究所「近現代美術資料の収集、整理、公開に関する調査研究」客員研究員、奈良国立博物館「仏教美術に関する共同調査研究」調査員、立命館大学アート・リサーチセンター「歌舞伎・浄瑠璃データベースの活用に関する研究」客員協力研究員

◎社会活動・館外活動

- ・他の機関から委嘱された委員など

日本写真家協会「文化関係資料のアーカイブの構築に関する調査研究」諮問委員

山本泰則 [やまもと やすのり] ————— 准教授

【学歴】大阪大学基礎工学部生物工学科卒（1978）、大阪大学大学院基礎工学研究科物理系専攻生物学分野博士前期課程修了（1980）、大阪大学大学院基礎工学研究科物理系専攻生物学分野博士後期課程退学（1983）【職歴】国立民族学博物館第5研究部助手（1983）、国立民族学博物館博物館民族学研究部助手（1998）、国立民族学博物館博物館民族学研究部助教授（1998）、総合研究大学院大学文化科学研究科助教授（併任）（2000）、国立民族学博物館文化資源研究センター助教授（2004）、総合研究大学院大学文化科学研究科准教授（併任）（2007）、国立民族学博物館文化資源研究センター准教授（2007）、国立民族学博物館人類学基礎理論研究部准教授（2017）【学位】工学修士（大阪大学大学院基礎工学研究科 1980）【専攻・専門】博物館情報学【所属学会】情報処理学会、情報知識学会

【主要業績】

[論文]

Yamamoto, Y., F. Adachi, and K. Hachimura

2013 Common Metadata to Search for Non-digital Cultural Resources in Heterogeneous Databases. *Proceedings of the International Conference on Culture and Computing 2013*, pp.224-225. IEEE Computer Society. [査読有]

宇陀則彦・山田太造・村田良二・山本泰則

2012 「転写資料記述のための概念モデルの特徴と課題」『国立歴史民俗博物館研究報告』176：239-266。[査読有]

山本泰則

2011 「国立国会図書館 PORTA と人間文化研究機構統合検索システムの連携について」『人間文化情報資源共有化研究会報告集』pp.53-68, 東京：人間文化研究機構研究資源共有化事業委員会。

【2017年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

博物館資料・情報・展示の関係性について

・研究の目的、内容

本研究では、博物館資料（モノ）とそれがもつ情報、情報提示としての展示の3者の関係性について考察をおこなう。民博を含む博物館では所蔵資料を情報化し、データベースに蓄積している。一方、博物館でおこなう展示は、記号化することなくモノの情報を直接観覧者に提示する行為である。民博が所蔵する民族誌資料の記述に必要な不可欠な情報項目や音楽展示・言語展示、ドキュメント展示の方法を分析することにより、モノ資料がもつ情報と展示を介してモノから観覧者に伝わる情報の本質を明かにする。

・成果

今年度の研究部改組後に所属した人類基礎理論研究部内のミーティングで本研究のアイデアを発表し、議論を行ない論考を深化させた。また、新しい形の図書館をめざす近畿大学の「アカデミックシアター」を訪問し、ドキュメント展示の実践事例として図書の提示方法について調査を行なった。

◎出版物による業績

[その他]

山本泰則

2017 「国立民族学博物館の収蔵品⑥ 標本資料の四面画像」『文部科学 教育通信』420：2。

2017 「ビデオテークの過去・現在・未来」『人類基礎理論研究部・国際シンポジウム「変容する世界のなかでの文化遺産の保存」Preliminary Program』大阪：学術潮流フォーラム I 人類基礎理論研究部・国際シンポジウム「変容する世界のなかでの文化遺産の保存」実行委員会。

Yamamoto, Y.

2017 The Videotheque: Past, Present and Future. *Preliminary Program of the International Sympo-*

sium “Preservation of Cultural Heritage in a Changing World”. Osaka: Executive Committee of the International Symposium “Preservation of Cultural Heritage in a Changing World”.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2017年10月8日 「ビデオテークの過去・現在・未来」学術潮流フォーラムⅠ 人類基礎理論研究部・国際シンポジウム『変容する世界のなかでの文化遺産の保存』国立民族学博物館

・みんなくウィークエンド・サロン

2017年12月24日 「みんなくシンボルマークをえがく（再）」第492回ウィークエンド・サロン

・その他（「口頭発表・展示・その他の業績」で以上の項目に属さないもの）

2017年12月1日 「Databases at Minpaku」（博物館とコミュニティ開発コース 個別研修F: Documentation and Databases）国際協力機構、民博社会連携室

八木百合子 [やぎ ゆりこ] ————— 助教

1977年生。【学歴】天理大学国際文化学部イスパニア学科卒（2001）、三重大学大学院人文社会科学研究所修士課程修了（2004）、総合研究大学院大学文化科学研究科博士課程単位取得退学（2011）【職歴】在ペルー日本国大使館専門調査員（2012）、国立民族学博物館研究戦略センター機関研究員（2015）、国立民族学博物館助教（2018）【学位】博士（文学）（総合研究大学院大学 2012）、修士（人文科学）（三重大学 2004）【専攻・専門】文化人類学、アンデス民族学、ラテンアメリカ地域研究【所属学会】日本文化人類学会、日本ラテンアメリカ学会

【主要業績】

[単著]

八木百合子

2015 『アンデスの聖人信仰——人の移動が織りなす文化のダイナミズム』京都：臨川書店。

[論文]

八木百合子

2012 「聖人に捧げられた大聖堂——近代ペルーの都市建設に埋め込まれたコンフリクト」染田秀藤・關雄二・網野徹哉編『アンデス世界——交渉と創造の力学』pp.243-267, 京都：世界思想社。

2009 「サンタ・ロサ信仰の形成と発展——20世紀ペルー社会における展開を中心に」『総研大文化科学研究』5: 5-28。

【2017年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

現代アンデス地域における宗教的なモノの所有と継承に関する人類学的研究

・研究の目的、内容

本研究は、宗教的なモノに焦点をあて、現代のアンデス地域における宗教の展開について人類学的に追究するものである。ペルーを中心とするアンデス地域では近年、カトリックの聖像をはじめとする宗教的なモノの商品化が著しい。以前は特定の地域や信仰者のあいだでのみ崇拜あるいは使用されてきた聖なるモノでさえも、その複製品が大量に世に出回り、人びとが容易に入手・所有することが可能になっている。本研究では、こうしたモノの生産・流通・消費の拡大を視野に、それが現代のアンデス地域の人びとの宗教実践に及ぼす影響について検討する。本年度は特に聖像の所有と継承の局面に着目しながら、モノを介して展開される信仰の様態について明らかにする。研究の遂行にあたっては、科研費（若手研究B）「現代アンデス地域における聖人信仰の展開に関する人類学的研究——聖像の所有と継承に注目して」をあてる。

・成果

本年度は聖像の所有状況および入手方法の把握を目的に、ペルーにおいて現地調査を実施した。10月にはリマ市にある聖具店街で、12月にはクスコ市で開催される聖像販売市でそれぞれ調査をおこなった。これらの調査から、人びとの聖像所有の経緯のほか、所有者と購入者の関係性について明らかにすることができた。とくに後者の点からは、聖像の継承にも関わる重要な問題が浮かび上がった。

本研究にかかる成果は、日本ラテンアメリカ学会第38回研究大会のパネル発表およびスペイン・サラマンカ

大学で開催されたラテンアメリカ・カリブ社会科学学会（FLACSO）研究大会において報告した。なお後者の発表にあたっては、公益財団法人日本科学協会の海外発表促進助成の支援を受けた。また本年度は、「モノをとおしてみる現代の宗教的世界の諸相」と題する共同研究を立ち上げ、人類学・宗教・美術・芸術など隣接分野の研究者を交えた研究活動を開始した。第1回目の研究会においては、昨年おこなった調査結果をふまえ、ペルーにおける聖像の所有と継承に関する研究を発表した。

◎出版物による業績

[その他]

八木百合子

2018 「モノから信仰をとらえる」『民博通信』160：16-17。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2018年3月17日 Estampando el pasado andino: cambio y creatividad en los diseños de las capas de la Virgen de la Natividad del Cusco, Perú, Simposio Internacional “La valoración y uso del pasado en América Latina contemporánea: las civilizaciones prehispánicas y culturas indígenas como recurso estratégico”, 国立民族学博物館

・共同研究会での報告

2018年1月21日 「モノがつながる信仰——ペルーにおける聖像をめぐる実践から」共同研究会「モノをとおしてみる現代の宗教的世界の諸相」国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2017年5月30日 「現代のキリスト教文化にみる歴史表象——クスコの教会堂の奉納品の事例から」『パネルC：「現代」アンデス文明を構想する——アンデス地域における資源としての過去の活用』日本ラテンアメリカ学会第38回定期大会、東京大学

2017年7月17日 Representación andina del pasado en una fiesta cusqueña: cambio de la imagen de la Virgen Natividad de la Almudena, 4º Congreso Latinoamericano y Caribeño de Ciencias Sociales (FLACSO), Universidad de Salamanca

・研究講演

2017年7月1日 「アンデス文明の足跡を探す——クスコの刺繍職人の営みから」国立民族学博物館

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費助成事業（若手研究（B））「アンデスにおける聖人信仰の展開に関する人類学的研究——聖像の所有と継承に注目して」研究代表者、国立民族学博物館共同研究「モノをとおしてみる現代の宗教的世界の諸相」研究代表者、国立民族学博物館共同研究「ネオリベラリズムのモラルティ」（研究代表者：田沼幸子）メンバー

◎社会活動・館外活動

・他大学の客員、非常勤講師

神戸市外国語大学「ラテンアメリカ文化特殊講義2」、神戸市外国語大学「中南米文化史2」、神戸市外国語大学「ラテンアメリカ文化特殊講義1」、神戸市外国語大学「中南米文化史1」

吉岡 乾 [よしおか のほる]————— 助教

1979年生。【学歴】東京外国語大学外国語学部ウルドゥー語学科卒（2003）、東京外国語大学大学院地域文化研究科アジア第三専攻博士前期課程修了（2007）、東京外国語大学大学院地域文化研究科博士後期課程単位取得退学（2012）【職歴】国立国語研究所言語対照研究系プロジェクト奨励研究員（2013）、日本学術振興会特別研究員PD（2013）、東京外国語大学世界教養プログラム非常勤講師（2013）、国立民族学博物館民族社会研究部助教（2014）、国立民族学博物館人類基礎理論研究部助教（2017）、神戸大学国際教養教育院非常勤講師（2017）【学位】博士（学術）（東京外国語大学 2012）、修士（言語学）（東京外国語大学 2007）【専攻・専門】言語学 記述言語学、ブルシャスキー語、ドマーキ語、カティ語、南アジア（パキスタン）研究【所属学会】日本言語学会、関西言語学会、日本南アジア学会、Societas Linguistica Europaea

【主要業績】

[論文]

Yoshioka, N.

2017 Nominal Echo-Formations in Northern Pakistan. *Bulletin of the National Museum of Ethnology* 41(2): 109-125. [査読有]

吉岡 乾

2015 「ブルシャスキー語の動詞語幹と他動性」P.バルデシ・桐生和幸・H.ナロック編『有対動詞の通言語的研究——日本語と諸言語の対照から見えてくるもの』pp.321-33, 東京：くろしお出版。[査読有]

2014 「格配列パターンを決める動詞的要素と名詞的要素——パキスタンの言語を対照して」『思言——東京外国語大学記述言語学論集』10：159-20。[査読有]

【2017年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

北パキスタン諸言語の記述言語学的研究

・研究の目的、内容

本研究は、北パキスタンのギルギット・バルティスタン自治州フンザ・ナゲル県モミナバード村などで話されている、消滅の危機にある言語であるドマーキ語を中心にしつつ、ブルシャスキー語、シナー語、カティ語といった周辺言語も併せて、現地調査によって得られたデータを基に言語記述をしていくことを目的とする。この研究は主に、科学研究費補助金（若手研究（A））「北パキスタン諸言語の記述言語学的研究」により進める。

・成果

2017年度は6月にパキスタン北東部へ現地調査に行き、ブルシャスキー語フンザ方言、ドマーキ語フンザ方言とナゲル方言との調査をした。7月には去年に引き続いてインド北西部へ現地調査に行き、ブルシャスキー語スリナガル方言（仮）とカシミリー語を調査した。8月にパキスタン北西部へ行く予定だった調査は、シリア、イラクでの「Islamic State (ISIL)」の状況悪化に伴い、アフガニスタン（並びにパキスタン西部）の「Islamic State (ISIL-KP)」の動向変化が予期されたため、見送った。

研究の成果は、国際学会、国内学会での発表という形で公表した。カティ語を中心に北パキスタン諸言語に関して5月に国際学会で、ブルシャスキー語スリナガル方言に関して11月に国内学会で発表をした。少数言語・危機言語の実情をアウトリーチする目的の一般書も、8月に刊行した。予定していたブルシャスキー語の参照文法（日本語版、英語版）、ドマーキ語の文法スケッチ（参照文法の骨組みとなる簡易な文法解説）の執筆が遅延しているので、今後集中的に取り組んでいく。

◎出版物による業績

[単著]

吉岡 乾

2017 『なくなりそうな世界のことば』大阪：創元社。

[論文]

Yoshioka, N.

2017 Iron: South Asia (IE (Aryan, Iranian, Nuristani), Dravidian, Andamanese, Nihali, Burushaski). In Y. Taguchi and M. Endo (eds.) *Studies in Asian Geolinguistics V*, pp.23-24. Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa (ILCAA), Tokyo University of Foreign Studies.

2017 Means to Count Nouns in South Asia (Aryan, Iranian, Nuristani, Dravidian, Andamanese, Nihali, and Burushaski). In K. Kurabe and M. Endo (eds.) *Studies in Asian Geolinguistics VI*, pp.19-20. Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa (ILCAA), Tokyo University of Foreign Studies.

2017 Wind: South Asia (IE (Aryan, Iranian, Nuristani), Dravidian, Andamanese, Burushaski). In Y. Saito and M. Endo (eds.) *Studies in Asian Geolinguistics IV*, pp.22-23. Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa (ILCAA), Tokyo University of Foreign Studies.

[その他]

吉岡 乾

- 2017 「パキスタン・イスラム共和国」中牧弘允編『世界の暦文化事典』pp.134-137, 東京：丸善出版。
- 2018 「ネコ歩きで世界を横切れば」特集「ねこ 猫 ネコ」『月刊みんぱく』42(1)：2-3。
- 2018 「アンダマン諸島」インド文化事典編集委員会編『インド文化事典』p.741, 東京：丸善出版。
- 2018 「危機言語」インド文化事典編集委員会編『インド文化事典』pp.142-143, 東京：丸善出版。
- 2018 「未来から見た過去への口惜しさ」特集「万博資料収集団」『月刊みんぱく』42(3)：8。

南 真木人・吉岡 乾

- 2018 「インド・中近東 異彩を放つEEMの思想」野林厚志編『国立民族学博物館開館40周年記念特別展 太陽の塔からみんぱくへ——70年万博収集資料』pp.73-88, 大阪：国立民族学博物館。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会での報告

- 2018年3月10日 「言語学と博物館との（非）親和性」『高等教育機関を対象にした博物館資料の活用に関する研究』国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2017年5月15日 “Echo-formation in Kati as a Neighbouring Language of Kalasha and Khowar”. 33rd South Asian Languages Analysis Roundtable, Adam Mickiewicz University, Poznań, Poland
- 2017年11月25日 「ブルシャスキー語スリナガル方言で再構成された名詞クラス」日本言語学会第155回大会、立命館大学、京都
- 2018年2月17日 「ブルシャスキー語の名詞修飾表現」Prosody and Grammar Festa 2、国立国語研究所、東京

・みんぱくウィークエンド・サロン

- 2017年4月30日 「『異教徒の地』と『光の地』——パキスタン・アフガニスタンのカタ人とカラージャ人」第463回ウィークエンド・サロン

◎調査活動

・海外調査

- 2017年6月5日～6月27日—パキスタン北東部（ドマーキー語、ブルシャスキー語に関する調査）
- 2017年7月11日～7月27日—インド北西部（ブルシャスキー語、カシミリー語に関する調査）

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費助成事業（若手研究（A））「北パキスタン諸言語の記述言語学的研究」研究代表者

◎社会活動・館外活動

・他大学の客員、非常勤講師

神戸大学「言語科学B」

飯泉菜穂子 [いいずみ なおこ]——特任准教授

【学歴】 早稲田大学法学部卒（1985）、お茶の水女子大学家政学研究科修士課程修了（1989）**【職歴】** 日本アイビーエム株式会社入社（本社人事部）（1989）、NHK 手話ニュースキャスター（1990）、フリーランス手話通訳、手話講師（1993）、学校法人大東学園・世田谷福祉専門学校手話通訳学科および手話通訳専攻学科学科長（2002）**【学位】** 家政学修士（お茶の水女子大学、1989）**【専攻・専門】** 手話通訳論、手話通訳養成**【所属学会】** 日本通訳翻訳学会、日本手話通訳士協会、全国手話通訳問題研究会

【主要業績】

[著書]

飯泉菜穂子

- 2013 「手話通訳士専門養成機関（世田谷福祉専門学校）における養成について」『手話通訳士試験の在り方等に関する検討会』pp.64-72。

[共著]

小谷真男・下城史江・飯泉菜穂子

2011 「新しいリベラルアーツとしての日本手話 お茶の水女子大学における『手話学入門』導入の経験から」
『手話学研究』20：19-38。

[映像教材]

飯泉菜穂子

1995 『DVDで学ぶ手話入門講座』<http://www.hj.sanno.ac.jp/ps/course/4092> (構成、テキスト・スクリプト執筆、演出、ナビゲーターとしての出演) 産業能率大学通信教育講座。

【2017年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

学術手話通訳者養成の実践とカリキュラムの検討および検証

・研究の目的、内容

学術手話通訳者養成のための研修会とその関連事業（現役手話通訳者および手話通訳者をを目指す人を対象とした言語学講座・手話言語学講座、公的資格である手話通訳士を目指す人を対象とした技術講座など）を展開していく。平行して関西地区における学術手話通訳者養成の基盤・しくみを構築するために公的機関や高等教育機関とのネットワーク作りを進める。

・成果

質の高い言語通訳としての「学術手話通訳者養成」という飯泉のみんぱくでの研究テーマの達成に向け、主に以下の3点を中心に学術手話通訳養成（研修）事業を展開した。

1) スクリーニングにより選考した現役手話通訳者を対象に、月1回程度の集中研修会をコーディネートし実施した。

2) 新規・継続合わせて、以下の4つの研修事業関連講座をコーディネートし実施、多くは講師を担当した。
①『みんぱくで手話言語学を学ぼう！（継続）』：現役手話通訳者および手話通訳者をを目指す人を対象とした手話言語学および周辺領域に関する専門家からの講義を提供する講座（全12コマ。うち2コマについては飯泉が講師を担当）
②『みんぱくで手話通訳士を目指そう！（新規）』：公的資格である手話通訳士試験二次（技術）試験突破を目指す人を対象とした手話通訳技術夏期集中講座（3日間）。手話通訳養成および手話教育の専門家による通訳技術検証を実施
③『みんぱくで手話通訳技術を磨こう！（新規）』：地域等で手話通訳業務を担当している現役手話通訳者を対象とした手話通訳技術ブラッシュアップ講座。8日程、昼（みんぱく）・夜（梅田駅周辺貸し会議室）2クラス編成で計16クラスを実施。すべて飯泉が講師を担当
④『楽しい言語学を学ぶ会（たのげん：継続）』：みんぱく助教の吉岡乾先生による言語学入門講座（各回3時間×6講座）。2)を1)の研修員の学術通訳OJTとして活用したり、2)を1)の研修員発掘の場と位置づけて受講者を観察しつつ指導に取り組むなど、1)と2)を密接に関連づけ一貫性を持たせるようにした。

3) 将来的に「言語通訳としての手話通訳養成」の仕組みを関西圏に構築するための基盤を構築すべく、公的機関や高等教育機関、手話・手話通訳養成機関等（大阪府福祉課、NHK報道局、京都大学、大阪大学、NPO法人手話教師センター、国立障害者リハビリテーションセンター学院等）とのネットワーク作りに取り組んだ。また、そのネットワークに基づく協働作業・共同事業を実施した。

手話部門部門設立前のトライアルプロジェクト時代から部門設立初年度であった昨年度までの5年間に比べて、この一年は、外部機関からの学術手話通訳OJT機会の提供が大幅に増加した。また、各関連講座は（④を除き）有料で展開しているにもかかわらず、多くの熱心な参加者を得、特に、手話通訳技術系の講座は募集後すぐに定員を満す申込があるほどの人気講座となった。これは、みんぱく手話部門の展開する学術手話通訳養成事業が、関西地区において、その存在意義を年々高めてきていることの証左であると評価している。一方、事業の中核である「研修」そのものについては、研修員募集時のスクリーニングの方法に工夫を加えることなどにより、もっと、将来的な伸びしろの見込める「若手通訳者」の発掘・育成に方向転換する等の見直しを要するのではないかと考えている。来年度の研究計画に反映させ、改善を図りたい。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2017年5月～12月 『学術手話通訳研修事業』全体コーディネート・研修員スクリーニング（運営全般・評価・選考）・運営・通訳技術検証講師（全8回の研修実施）、国立民族学博物館

- 2017年5月7日 「第二言語としての日本手話——実感・体感の手話言語案内」第466回国立民族学博物館友の会講演会、国立民族学博物館
- 2017年6月3日～8月5日 連続講座『みんなくで手話言語学を学ぼう！』全体コーディネーター・講義・ワークショップ講師・学術手話通訳研修事業研修員手話通訳OJT検証講師『手話通訳者と手話言語学』、国立民族学博物館
- 2017年7月1日 『日本手話教育の課題と展望——過去・現在・そして20年度の手話の行方は？』第17回日本手話教育研究大会、シンポジウムパネラー、国立民族学博物館
- 2017年8月11日～8月13日 夏期集中講座『みんなくで手話通訳士を目指そう！』全体コーディネーター・技術検証講師、国立民族学博物館
- 2017年9月2日 開館40周年記念「エジプト映画『ヤギのアリーとイブラヒム』上映会」人間文化研究機構基幹研究プロジェクト「現代中東地域研究」国立民族学博物館拠点主催手話通訳・手話通訳コーディネーター（学術手話通訳研修事業OJTとして）、早稲田大学
- 2017年9月9日 開館40周年記念「エジプト映画『ヤギのアリーとイブラヒム』上映会」人間文化研究機構基幹研究プロジェクト「現代中東地域研究」国立民族学博物館拠点主催手話通訳・手話通訳コーディネーター（学術手話通訳研修事業OJTとして）、シンポジウムパネラー、国立民族学博物館
- 2017年9月22日～9月24日 『手話言語と音声言語に関する民博フェスタ2017』実行委員として日本手話通訳者に関するコーディネーター（学術手話通訳研修員（通訳OJT）を含む全通訳者の配置・調整、研修員の通訳技術評価、フィードバック）、国立民族学博物館
- 2017年10月23日～12月18日 連続講座『みんなくで手話通訳技術を磨こう！』全体コーディネーター・講座講師、国立民族学博物館
- 2018年1月27日～2月25日 連続講座『楽しい言語学を学ぶ会』全体コーディネーター・ろう通訳コーディネーター

・研究講演

- 2017年5月 講演会『手話との出会いで広がる世界』兵庫県聴覚障害者協会
- 2017年10月 特別講義『障害者福祉の基礎』手話奉仕員養成講座（基礎課程）、兵庫県赤穂市
- 2017年10月 理論講座『手話通訳の理念と仕事Ⅰ』手話通訳養成講習会、兵庫県西宮市
- 2017年12月 上映会パネラー『バリアフリー映画をスタンダードに』柿落とし公演 映画「もうろうをいきる」地域生活支援拠点ゆうかり
- 2018年3月 講演会『ろう文化と聴文化の違い——聴者の手話習得への影響』磐田ろうあ協会、静岡県磐田市

◎社会活動・館外活動等

・他機関から委嘱された委員など

- 栃木県鹿沼市登録手話通訳者現任研修、横浜市登録手話通訳者現任研修、日本手話通訳士協会愛知県支部（愛士会）技術研修会、学術手話通訳研修事業における外部依頼通訳OJT、秋田県登録手話通訳者研修会

相良啓子 [さがら けいこ] ————— 特任助教

【学歴】 筑波大学大学院教育研究科障害児教育専攻修士課程修了（1999）、英国セントラル・ランカシャー大学国際手話ろう文化学研究所大学院 MPhil 修士課程修了（2014）**【職歴】** 株式会社JTB首都圏新橋支店営業三課バリアフリーツアー推進担当（2002）、英国セントラル・ランカシャー大学国際手話ろう文化学研究所研究官（2010）、国立民族学博物館プロジェクト研究員（2014）、国立民族学博物館先端人類科学研究部特任助教（2016）、国立民族学博物館人類基礎理論研究部特任助教（2017）**【学位】** 手話言語学修士（M. Phil.）（セントラル・ランカシャー大学国際手話言語学・ろう者学研究所（iSLanDS）2014）、修士（筑波大学大学院教育研究科障害児教育専攻 1999）**【専攻・専門】** 手話言語学類型論・聴覚障害児教育**【所属学会】** 日本手話学会、日本言語学会、日本歴史言語学会、社会言語科学会

【主要業績】

[編著書]

Zeshan, U. and K. Sagara (eds.)

2016 *Semantic Fields in Sign Languages: Colour, Kinship and Quantification*. Berlin: Mouton de Gruyter

& Nijmegen: Ishara Press.

[論文]

Sagara, K. and U. Zeshan

2016 A Comparative Typological Study. In U. Zeshan, and K. Sagara (eds.) *Semantic Fields in Sign Languages: Colour, Kinship and Quantification*, pp.3-37. Berlin: Mouton de Gruyter & Nijmegen: Ishara Press.

Nonaka, A., K. Mesh, and K. Sagara

2015 Signed Names in Japanese Sign Language: Linguistic and Cultural Analyses. *Sign Languages Studies* 16(1): 57-85.

【2017年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

日本手話と台湾手話における歴史変化の解明：歴史社会言語学の方法論の確立に向けて

・研究の目的、内容

本研究の目的は、日本手話と台湾手話の歴史変遷の解明に取り組み、具体的な分析を通して、手話言語学においても科学的な比較研究を行うことである。本研究は、3年度計画の2年目である。まず、昨年台湾に1ヶ月間滞在して収集したデータの分析を進める。台北と台南の両地域でそれぞれ収集した約200語の語彙リストについて、日本手話から影響を受けた語彙、中国手話から影響を受けた語彙、それ以外の手話への区別を行い、日本手話から影響を受けて使用されている語彙のうち、類似している表現については、それぞれの語彙変化の特徴について音韻また形態の変化からまとめる。また、同じ地域でも年齢によって異なる手話表現がどうかについても分析を行う。

・成果

本年は、『歴史言語学』第6号に「日本手話と台湾手話の語彙における変化をさぐる」をテーマとした論文が採択された。主に数の表現を中心として、音韻及び形態論的側面から変化の特徴について論じた。また、科研費(16K13229)を受けて、6月にイギリスに訪問し、手話言語学の専門家らと歴史言語学研究について議論を行った。8月にはサンアントニオで開催された第23回国際歴史言語学会で、研究分担者の菊澤と共に「Paradigm Leveling in Japanese Sign Language (JSL) and Related Languages」について発表した。日本手話と台湾手話、そして韓国手話の比較を通して、パラダイム全体が変化した例、部分的に変化した例があること、また部分的に変化した箇所は言語が異なっても共通した変化がみられ、音を表出する手形の構音上の制約によるものであることを述べた。他に、国内での地域変種を見るために大阪の手話と関連があると思われる北海道で語彙調査をおこなうとともに、台湾へ2度目のフィールドワークを行った。これらのフィールド調査や海外での中間報告等を通して、歴史変遷の解明に向けて必要なデータや論文構想が整ってきた。最終年は更なる分析を進め、歴史変化の解明についての研究報告をまとめていく。

◎出版物による業績

[論文]

相良啓子

2017 「日本手話と台湾手話の語彙における変化をさぐる——数の表現を中心に」『歴史言語学』6: 13-40。

[査読有]

◎口頭発表・展示・その他の業績

・民博研究懇談会

2017年11月15日 「日本手話、台湾手話、韓国手話における語彙の変化——数詞・親族・曜日の表現を対象に」

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2017年7月26日 “Japanese Sign Language and Deaf Culture, Sign Language Workshop”. Austin Community College, Austin Community College Riverside Campus, Austin, U.S.A.

2017年7月31日 Paradigm Leveling in Japanese Sign Language (JSL) and Related Languages. The 23rd International Conference on Historical Linguistics, San Antonio, Texas, U.S.A.

2017年12月2日 「日本手話、台湾手話、韓国手話の二桁から四桁の数の表現の構成とその変化——『10』『100』『1000』に着目して」日本歴史言語学会2017年大会、大阪大学

・みんぱくウィークエンド・サロン

2018年1月7日 「『数』をあらわす——音声言語と手話言語」第493回ウィークエンド・サロン

◎調査活動

・国内調査

2017年11月10日～11月12日—山口県における日本手話の方言に関する調査

2017年11月23日～12月1日—北海道（函館・旭川・札幌）における日本手話の方言に関する調査

・海外調査

2018年3月13日～3月20日—台南・台中における台湾手話に関する調査

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費助成事業（挑戦的萌芽研究）「日本手話と台湾手話の歴史変化の解明——歴史社会言語学の方法論の確立に向けて」研究代表者、科学研究費助成事業（基盤研究（B））「アジア太平洋諸国における手話の対照言語学的研究——外国手話事典の編集をめざして」（研究代表者：加藤三保子（豊橋技術科学大学））研究分担者

超域フィールド科学研究部

韓 敏 [ハン ミン]————— 部長(併) 教授

【学歴】 中国吉林大学外国語学部日本語科卒（1983）、中国吉林大学大学院外国文学言語研究科日本文学専攻修士課程修了（1986）、東京大学大学院総合文化研究科文化人類学専攻修士課程修了（1989）、東京大学大学院総合文化研究科文化人類学専攻博士課程修了（1993）**【職歴】** 武蔵大学人文学部非常勤講師（1992）、東京大学教養学部客員研究員（1994）、東洋英和女学院大学社会科学部専任講師（1995）、東洋英和女学院大学社会科学部助教授（1998）、国立民族学博物館民族学研究部助教授（2000）、総合研究大学院大学文化科学研究部助教授併任（2001）、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（2004）、国立民族学博物館民族社会研究部教授（2011）、国立民族学博物館民族社会研究部長（2012）、国立民族学博物館超域フィールド科学研究部教授（2017）、国立民族学博物館超域フィールド科学研究部研究部長（2017）**【学位】** 学術博士（文化人類学）（東京大学大学院総合文化研究科 1993）、学術修士（文化人類学）（東京大学大学院総合文化研究科 1989）、文学修士（中国吉林大学大学院外国文学・言語研究科 1986）**【専攻・専門】** 文化人類学、現代中国の漢族研究**【所属学会】** 日本文化人類学会

【主要業績】

[単著]

韓 敏

2015 『大地の民に学ぶ 激動する故郷、中国』（フィールドワーク選書18）京都：臨川書店。

Han, M.

2007 『回応革命与改革——皖北李村的社会変遷与延続』（陸益龍・徐新玉訳）南京：江蘇人民出版社。

2001 *Social Change and Continuity in a Village in Northern Anhui, China: A Response to Revolution and Reform* (Senri Ethnological Studies 58). Osaka: National Museum of Ethnology. 313p.

[編著]

韓 敏編

2009 『革命の実践と表象——現代中国への人類学的アプローチ』東京：風響社。

【2017年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

社会、歴史と象徴に関する超域フィールドの研究

・研究の目的、内容

本研究は、近代社会における聖地作り、社会記憶と歴史の資源化に焦点を当て、超域フィールドの視点から国家と社会の多様な関係性を考察する。

具体的に共同研究「聖地の政治経済学——ユーラシア地域大国における比較研究」（代表者：杉本良男）の分担者として、近代中国の聖地作りのプロセスとメカニズムを明らかにする。

また、科研「中国周縁部における歴史の資源化に関する人類学的研究」（代表者：塚田誠之）の分担者として、歴史の資源化を調べる。

さらに終了した機関研究「中国における家族・民族・国家のディスコース」の成果をまとめ、代表者として論文集の出版を準備する。

・成果

共同研究「聖地の政治経済学——ユーラシア地域大国における比較研究」（代表者：杉本良男）の分担者として、ユーラシア地域との関連性を配慮しながら近代中国の聖地作りのプロセスとメカニズムを明らかにして、「近代中国の指導者ゆかりの聖地構築」という論文を執筆した。現在、投稿して査読を受けている。

科学研究費補助金「中国周縁部における歴史の資源化に関する人類学的研究」（基盤研究（A） 代表者：塚田誠之）の分担者として、多民族国家の中国と多文化主義のオーストラリアにおいて、自然、文化と歴史の資源化の実態を調査し、国家や政府主導による文化行政の特徴を明らかにした。中国での調査成果をまとめ、「岳飛の社会記憶とその資源化——杭州岳王廟を中心に」という論文を刊行した（『国立民族学博物館調査報告』No.142 pp.9-29）。

終了した機関研究について、代表者として Family, Ethnicity and State in Chinese Culture under the Impact of Globalization (Han Min, Kawai Hironao and Wong Heung-Wah 2017 Echino, Carif: Bridge21 Publications 総ページ数388) と、『人類学視野下的历史、文化与博物馆——当代日本和中国人类学者的理论实践』（韓敏・色音 2018 国立民族学博物館 SESNO.97 総ページ数383）を刊行し、東アジア人類学者による最新成果を世界に向けて多言語で発信することができた。

◎出版物による業績

[編著]

Han, M., H. Kawai, and H.W. Wong (eds.)

2017 *Family, Ethnicity and State in Chinese Culture under the Impact of Globalization*. California: Bridge 21 Publications.

韓 敏・色 音編

2018 『人類学視野下的历史、文化与博物馆——当代日本和中国的理论实践』（Senri Ethnological Studies 97). Osaka: National Museum of Ethnology. [査読有]

[論文]

韓 敏

2017 「岳飛の社会記憶とその資源化——杭州岳王廟を中心に」塚田誠之・河合洋尚編『中国における歴史の資源化の現状と課題』（国立民族学博物館調査報告142）pp.9-29, 大阪：国立民族学博物館。[査読有]

2017 「日本の食文化的展示与研究——以日本国立民族学博物館为例」万建中編『第二届中国食文化研究论文集』pp.17-28, 北京：中国轻工業出版社。

2018 「日本与中国的人类学互动——以国立民族学博物館为例」韓敏・色音編『人類学視野下的历史、文化与博物馆——当代日本和中国的理论实践』（Senri Ethnological Studies 97), pp.33-61. Osaka: National Museum of Ethnology. [査読有]

Han, M.

2017 Family, Ethnicity and State: Historical and Global Perspectives on Chinese Society. In M. Han, H. Kawai, and H.W. Wong (eds.) *Family, Ethnicity and State in Chinese Culture under the Impact of Globalization*, pp.7-22. California: Bridge21 Publications.

2017 Political Pilgrimage and Sacred Sites in Socialist China: Shaoshan, the Birthplace of Mao Zedong. In M. Han, H. Kawai, and H.W. Wong (eds.) *Family, Ethnicity and State in Chinese Culture under the Impact of Globalization*, pp.175-196. Carifornia: Bridge21 Publications.

韓 敏・色 音

2018 「历史、文化与博物馆——日本和中国人类学者的理论与实践」韓敏・色音編『人類学視野下的历史、文化与博物馆——当代日本和中国的理论实践』（Senri Ethnological Studies 97), pp.1-15. Osaka: National Museum of Ethnology. [査読有]

[その他]

韓 敏

2017 「新世紀ミュージアム 良渚博物館」『月刊みんぱく』41(8)：16-17。

2017 「世界の結婚——祝福のかたち」国立民族学博物館編『国立民族学博物館 開館40周年 展示案内』pp.206-209, 大阪：国立民族学博物館。

2017 「ロシア革命100周年——中国革命の契機と社会主義近代化の模索」特集「20世紀革命の足跡」『月刊みんぱく』41(12)：2-3。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2017年8月14日 「多元包容的文化展示与人文研究——日本国立民族学博物館的40年历程」2017年中国人类学会学术年会 / 包容发展的人类学、内蒙古呼和浩特市内蒙古师范大学

・みんぱくウィークエンド・サロン

2017年9月24日 「アジアの婚礼——祝福のかたち」第481回ウィークエンド・サロン

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（A））「中国周縁部における歴史の資源化に関する人類学的研究」（研究代表者：塚田誠之）研究分担者

◎社会活動・館外活動

・他大学の客員、非常勤講師

浙江農林大学「環境与飲食」講座「从亚洲婚礼的食物来看自然与文化的逻辑」（集中講義）

宇田川妙子 [うだがわ たえこ] ————— 教授

1960年生。【学歴】東京大学教養学部教養学科第一卒（1982）、東京大学大学院社会学研究科修士課程修了（1984）、東京大学大学院総合文化研究科博士課程単位取得退学（1990）【職歴】東京大学教養学部助手（1990）、中部大学国際関係学部講師（1992）、中部大学国際関係学部助教授（1995）、国立民族学博物館第3研究部併任助教（1997）、金沢大学文学部助教授（1998）、国立民族学博物館民族文化研究部助教授（2002）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2002）、国立民族学博物館先端人類科学研究部助教授（2004）、国立民族学博物館民族社会研究部准教授（2010）、国立民族学博物館超域フィールド科学研究部准教授（2017）【学位】社会学修士（東京大学大学院社会学研究科 1984）【専攻・専門】文化人類学 イタリアおよびヨーロッパ地域の人類学的研究、ジェンダーとセクシャリティ研究、ヨーロッパ近代をめぐる問題群【所属学会】日本文化人類学会、日本女性学会

【主要業績】

[単著]

宇田川妙子

2015 『城壁内からみるイタリア——ジェンダーを問い直す』京都：臨川書店。

[共編]

宇田川妙子、中谷文美編

2016 『仕事の人類学——労働中心主義の向こうへ』京都：世界思想社。

2007 『ジェンダー人類学を読む——地域別・テーマ別基本文献レビュー』京都：世界思想社。

【2017年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

公共性と親密性の再検討と再編

・研究の目的、内容

本研究は、近年さらなる注目を浴びている公共性と親密性（私性）という概念を、理論的に再検討していくことによって、生産的な意味での再編・陶冶につなげていくことを目的とする。具体的には、まずは、これまでの社会科学理論等における両概念の変遷や背景、多様性などを探っていく一方で、個別事例としてはイタリア

社会を取り上げて、公共性と親密性という概念・構図が孕む限界や可能性を考察しながら、この概念図式のさらなる再編を試みていくつもりである。今年度は、昨年度に引き続き、特に地域性との関わりから考察をしていくが、なかでも食という観点からの研究調査を本格化させる。

・成果

本年度は、ジェンダー問題の理論的な考察に取り組むとともに、私的領域の現代的な変遷をイタリアにおける婚姻や生殖という事例に即して具体的に考察して、以下のような論文にまとめた。

2018年3月「ジェンダーとセクシュアリティ」、『詳論 文化人類学：基本と最新のトピックを深く学ぶ』桑山敬己・綾部真雄編 ミネルヴァ書房、75-91頁。

2017年11月「『ほどける』結婚：イタリアにおける同居カップル増加からみる結婚の意味と変容」、『出会いと結婚』（家族研究の最前線②）平井晶子・床谷文雄・山田昌弘編（比較家族史学会監修）日本経済評論社、167-196頁。

地域性の問題については、すでに科学研究費（基盤研究（C））「現代イタリア社会におけるローカルティに関する文化人類学的研究」（2014-2017）を取得し、本年度はその最終年度としてローマ近郊およびナポリでの現地調査を行い、とくに食との関わりという観点から、地域性をめぐる人々の意識の変容に関する具体的な資料収集をおこなった。その成果の一端は、以下の『vesta』（味の素食の文化センター発行）誌上での連載（連載タイトル「すべての道は『食』に通ずる～イタリア～」）、および本館の公開講演会での発表で公表されている。

2018年1月「グローバル化の中を生きる食と『地域』」、『vesta』no.109、58-65頁。

2017年10月「『共食』がつくる地域と食のつながり」、『vesta』no.108、60-65頁。

2017年7月「家族の食卓から見えてくるもの」、『vesta』no.107、58-61頁。

2017年4月「変化のなかのイタリアの食」、『vesta』no.106、52-55頁。

2017年11月17日民博公開講演会「イタリア料理から見るグローバル、ナショナル、ローカル」（東京、日経ホールにて）

◎出版物による業績

[分担執筆]

宇田川妙子

2017 「イタリア共和国」中牧弘允編『世界の暦文化事典』pp.202-205、東京：丸善出版。

2017 「『ほどける』結婚——イタリアにおける同居カップル増加からみる結婚の意味と変容」平井晶子・床谷文雄・山口昌弘編『出会いと結婚』pp.167-196、東京：日本経済評論社。

2018 「イタリア 生殖医療の制度的変遷を考える」村上薫編『不妊治療時代の中東——家族をつくる、家族を生きる』pp.43-50、千葉：アジア経済研究所。[査読有]

2018 「ジェンダーとセクシュアリティ」桑山敬己・綾部真雄編『詳論 文化人類学——基本と最新のトピックを深く学ぶ』pp.75-91、京都：ミネルヴァ書房。

[その他]

宇田川妙子

2017 「変化のなかのイタリアの食」『vesta』106：52-55。

2017 「家族の食卓から見えてくるもの」『vesta』107：58-61。

2017 「『共食』がつくる地域と食のつながり」『vesta』108：60-65。

2017 「聖人信仰とカトリック」『文部科学 教育通信』423：2。

2018 「グローバル化の中を生きる食と『地域』」『vesta』109：58-65。

2018 「変わらない生活用品から見たイタリア文化」『季刊民族学』163：85-94。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・研究講演

2017年11月17日 「イタリア料理からみるグローバル、ナショナル、ローカル」国立民族学博物館、日経ホール

・みんぱくウィークエンド・サロン

2017年8月6日 「変化するイタリアの結婚」第476回ウィークエンド・サロン

・広報・社会連携活動

2017年5月24日 「イタリアの家族と結婚」カレッジシアター「地球探究紀行」あべのハルカス近鉄本店

◎大学院教育

・指導教員

副指導教員（3人）

・大学院ゼミでの活動

1年生ゼミ「地域文化学基礎演習」

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（C））「現代イタリア社会におけるローカリティに関する文化人類学的研究」研究代表者、科学研究費（挑戦的研究（開拓））「個別文化の標準化問題に関する文化人類学と会計学の学際的共同研究」（研究代表者：出口正之）研究分担者

樫永真佐夫 [かしなが まさお] ————— 教授

1971年生。【学歴】早稲田大学第一文学部日本文学専修卒（1994）、東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻修士課程修了（1997）、東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻（文化人類学コース）博士課程単位取得退学（2001）【職歴】日本学術振興会特別研究員（1997）、ベトナム民族学博物館客員研究員（1997）、放送大学学園非常勤講師（1999）、国立民族学博物館民族社会研究部助手（2001）、国立民族学博物館民族社会研究部助教（2007）、国立民族学博物館民族社会研究部准教授（2008）、国立民族学博物館研究戦略センター准教授（2010）、総合研究大学院大学准教授併任（2012）、総合研究大学院大学教授併任（2016）、国立民族学博物館研究戦略センター教授（2016）、国立民族学博物館超域フィールド科学研究部教授（2017）【学位】学術博士（東京大学 2006）、学術修士（東京大学 1997）【専攻・専門】文化人類学（東南アジアにおけるタイ系民族の民族誌的研究）【所属学会】日本文化人類学会

【主要業績】

[単著]

樫永真佐夫

2013 『黒タイ歌謡「ソン・チュー・ソン・サオ」——村のくらしと恋』東京：雄山閣。

2011 『黒タイ年代記——「タイ・プー・サック」』東京：雄山閣。

2009 『ベトナムの祖先祭祀——家霊簿と系譜認識をめぐる民族誌』東京：風響社。

【受賞歴】

2010 第6回日本学術振興会賞

【2017年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

ベトナムにおける黒タイ文字と文書／東南アジアにおけるボクシングの文化人類学

・研究の目的、内容

ベトナム西北地方からラオス北部にかけて居住している盆地民、黒タイの伝統文化の継承に焦点を当てた現地調査と文献調査に基づく民族誌的研究を継続する。黒タイ文字の創成に関する近代史的考察と、および伝統歌謡テキストの分析に基づく黒タイの自文化イメージと自然観の考察を継続する。

また昨年度に引き続き、スポーツとしてのボクシングの成立と発展について、日本と東南アジア（ベトナム、タイ、ラオスを中心とする）を中心とした現地調査と文献調査を継続する。

・成果

ベトナム西北地方のマイチャウに居住する白タイ（黒タイと同じく、ターイの地方集団の一つ）の伝承を紹介した「くにゆずりした先住の人たちのゆくえ——ベトナム、マイチャウにおけるターイの伝承から」（『季刊民族学』160号）に発表した。

ベトナム一般を扱ったものとして、「日越交流史研究の新局面——ベトナム語ローマ字表記をめぐる」（『民博通信』158号）でベトナムと日本との近世における交流とベトナム語ローマ字表記の関わりを紹介し、また中

牧弘允編『世界の暦文化事典』（東京：丸善出版）に「ベトナム社会主義共和国」を執筆しベトナムの暦の多様性を歴史と民族の観点から概説した。

2月に刊行されたベトナム社会文化研究会編『ベトナムの社会と文化』8号で「追悼：カム・チョン先生」コーナーの編集を担当し、「カム・チョン先生の業績」「カム・チョン最終講義」の2編を執筆したほか、グエン・ティ・ホン・マイ著「カム・チョン：『西北ベトナムのターイ』の功績による2002年国家表彰受賞者」をベトナム語から翻訳した。

一般誌『TRANSIT』38（ベトナム——懐かしくて新しい国へ）の監修に携わり刊行された。また同誌で「ベトナム少数民族の今昔——ターイの家からなくなった囲炉裏」も執筆した。

展示に関わるものとしては、『文部科学 教育通信』416号に「国立民族学博物館の収蔵品（22） 東南アジア展示場の囲炉裏」が掲載された。

いずれも外部資金との関わりはない。

◎出版物による業績

[分担執筆]

樫永真佐夫

2017 「ベトナム社会主義共和国」中牧弘允編『世界の暦文化事典』pp.102-105, 東京：丸善出版。[査読有]

[論文]

樫永真佐夫

2017 「くにゆずりした先住の人たちのゆくえ——ベトナム、マイチャウにおけるターイの伝承から」『季刊民族学』160：63-74。

2017 「日越交流史研究の新局面——ベトナム語ローマ字表記をめぐって」『民博通信』158：28。[査読有]

[その他]

樫永真佐夫

2017 「国立民族学博物館の収蔵品② 東南アジア展示場の囲炉裏」『文部科学 教育通信』416：2。

2017 「ベトナム少数民族の今昔——ターイの家からなくなった囲炉裏」『TRANSIT』38：126-127。

2018 「カム・チョン先生の業績」ベトナム社会文化研究会編『ベトナムの社会と文化』8：259-265。

2018 「カム・チョン最終講義」ベトナム社会文化研究会編『ベトナムの社会と文化』8：284-292。

2018 「カム・チョン——『西北ベトナムのターイ』の功績による2002年国家表彰受賞者」ベトナム社会文化研究会編『ベトナムの社会と文化』8：266-280。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2017年7月9日 「ベトナム、マイチャウにおけるターイの移住伝承の資源化」『資源化される「歴史」——中国南部諸民族の分析から』国立民族学博物館

2017年10月7日 「パイ・キン・パー・マー・キン・ラウ？」『H.P.E 谷由起子の仕事 ラオス少数民族との布づくり』キチム、東京

・みんなくウィークエンド・サロン

2017年10月29日 「フィールドワークとケガ——ベトナム西北部調査より」第485回ウィークエンド・サロン

・広報・社会連携活動

2017年10月25日 「ベトナム、黒タイのいろいろ」カレッジシアター「地球探究紀行」あべのハルカス近鉄本店

◎大学院教育

・指導教員

副指導教員（1人）

◎社会活動・館外活動

・他大学の客員、非常勤講師

神戸親和女子大学「『ベトナムの食の多様性』神戸親和女子大学共通教育科目『アジア文化研修（ベトナム）』事前指導」

・その他の社会活動・館外活動

「みんなくにおける来館者サービスの基本方針について」みんなくミュージアムパートナーズ研修（国立民族学博物館）

小長谷有紀 [こながや ゆき] 教授

1957年生。【学歴】京都大学文学部史学科卒（1981）、京都大学大学院文学研究科修士課程修了（1983）、京都大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学（1986）【職歴】京都大学文学部助手（1986）、国立民族学博物館第1研究部助手（1987）、国立民族学博物館第1研究部助教授（1993）、総合研究大学院大学文化科学研究科兼任（1993）、国立民族学博物館民族文化研究部助教授（1998）、国立民族学博物館民族学開発センター助教授（2000）、国立民族学博物館民族社会研究部教授（2003）、国立民族学博物館研究戦略センター教授（2004）、総合研究大学院大学地域文化学専攻長（2005）、国立民族学博物館研究戦略センター長（2007）、国立民族学博物館民族社会研究部長（2009-2011）、人間文化研究機構理事（2014）【学位】文学修士（京都大学大学院文学研究科 1983）【専攻・専門】文化人類学【所属学会】日本文化人類学会、日本モンゴル学会、人文地理学会、生き物文化誌学会

【主要業績】

[単著]

小長谷有紀

2014 『人類学者は草原に育つ——変貌するモンゴルとともに』（フィールドワーク選書9）京都：臨川書店。

[編著]

小長谷有紀・シンジルト・中尾正義編

2005 『中国の環境政策「生態移民」——緑の大地、内モンゴルの砂漠化を防げるか?』京都：昭和堂。

小長谷有紀編

2004 『モンゴルの二十世紀——社会主義を生きた人びとの証言』（中公叢書）東京：中央公論新社。

【受賞歴】

2016 第3回ゆとろぎ賞

2015 モンゴル国科学アカデミー 名誉博士

2013 紫綬褒章

2013 教育研究に関する感謝状ならびに優秀学術研究者徽章（モンゴル国教育文化科学省）

2009 大同生命地域研究奨励賞

2007 モンゴル国ナイラムダルメダル（友好勲章）

【2017年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

調査記録写真の分析による地域像の再構築——モンゴル高原へのエクスペディション

・研究の目的、内容

19世紀末から20世紀初頭にかけて実施された、布教・軍事・商業・学術など多様なエクスペディションの記録写真を用いることによって、グローバルな関係性の束としての地域の成立、現代との比較による社会の変容、エクスペディションによる視線の多様性などを明らかにし、人類学における画像利用の可能性を模索する。

・成果

海外調査等については、科学研究費補助金（基盤研究（A））17H00897「モンゴルに関する画像記録を用いた地域像の再構築」を利用した。ハンガリー、ポーランド、ロシア、モンゴルなど資料整備にあたっている研究者たちと協業体制を構築した。フィンランドについては、自ら訪問し、現地の文献学者等のサポートにより、すでにオープンアクセスできる記録写真の整備状況を確認した。これらの情報をもとに、世界各地からの多様なエクスペディションの記録写真を総覧できるよう、ポータルサイトを作成した。

◎出版物による業績

[単著]

小長谷有紀

2017 『ウメサオタダオが語る、梅棹忠夫』京都：ミネルヴァ書房。

[分担執筆]

小長谷有紀

2017 「ロシアのシベリアに対する使命感」川田順造編『ナショナル・アイデンティティを問い直す』pp.122

-124, 東京：山川出版社。[査読有]

Konagawa, Y.

2017 Modern Origins of Chinggis Khan Worship. In M. Rossabi (ed.) *How Mongolia Matter: Wars, Law, and Society*, pp.147-164. Leiden: Brill.

[論文]

小長谷有紀

2017 「遊牧エコシステムの終焉？」『BIOSTORY』28：76-79, 神奈川：生き物文化誌学会。[査読有]

[その他]

小長谷有紀

2017 「みんぱく、こぼれ話⑰ みんぱくワールドシネマが本になりました！」『TOYRO BUSINESS』176：30。

2017 「みんぱく、こぼれ話⑱ 『ウメサオタダオ』をご賞味ください！」『TOYRO BUSINESS』177：30。

2017 「みんぱく、こぼれ話⑲ 『みんぱく友の会』の研修ツアーでモンゴルへ」『TOYRO BUSINESS』178：30。

2018 「みんぱく、こぼれ話⑳ 夢見る力を鍛える」『TOYRO BUSINESS』179：30。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2017年11月5日 「西モンゴルにおける農耕技術と民族アイデンティティ」国際蒙古学会、中央民族大学、北京

2017年11月23日 「蒙古学的潮流在日本」蒙古語文学系海外名師系列講座、北京

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（A））「モンゴル仏教のグローバル実践に関する学際・国際的地域研究」（研究代表者：島村一平（滋賀県立大学））研究分担者、科学研究費（基盤研究（A））「モンゴルに関する画像記録を用いた地域像の再構築」研究代表者

平井京之介 [ひらい きょうのすけ] ————— 教授

【学歴】 東北大学文学部社会学科社会学専攻卒（1988）、ロンドン大学ユニバーシティ・カレッジ人類学部社会人類学修士課程修了（1992）、ロンドン大学ロンドン経済政治学院人類学部博士課程修了（1998）**【職歴】** 国立民族学博物館第1研究部助手（1995）、国立民族学博物館民族文化研究部助手（1998）、国立民族学博物館民族文化研究部助教授（2001）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2006）、国立民族学博物館研究戦略センター教授（2013）、総合研究大学院大学比較文化学専攻長（2016）、国立民族学博物館超域フィールド科学研究部教授（2017）**【学位】** Ph. D.（ロンドン大学ロンドン経済政治学院人類学部 1998）、M. Sc.（ロンドン大学ユニバーシティ・カレッジ人類学部 1992）**【専攻・専門】** 社会人類学 水俣病被害者支援運動の人類学的研究、タイのコミュニティ博物館についての人類学的研究**【所属学会】** 日本文化人類学会、The Royal Anthropological Institute

【主要業績】

[単著]

平井京之介

2011 『村から工場へ——東南アジア女性の近代化経験』東京：NTT 出版。

[編著]

平井京之介編

2012 『実践としてのコミュニティ——移動・国家・運動』京都：京都大学学術出版会。

Hirai, K. (ed.)

2015 *Social Movements and the Production of Knowledge: Body, Practice and Society in East Asia* (Senri Ethnological Studies 91). Osaka: National Museum of Ethnology.

【2017年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

水俣病被害者支援運動の人類学的研究

・研究の目的、内容

本研究は、人びとが水俣病被害者を支援する運動を通じて新たにコミュニティを形成し、国家や社会との関係をつくりかえようとする過程を、人類学的アプローチを用いて明らかにする試みである。本研究では、熊本県水俣市の水俣病被害者支援NPOをコミュニティという観点から調査研究することによって、1970年代半ばから現在までのあいだに、この運動の活動や組織、関係性、資源と、そこに参加する人びとの志向する社会のイメージがいかに変化してきたか、またその過程において、国家統治や資本主義との関係をどのように変化させてきたかを解明することを目的とする。

・成果

2013年度から2015年度まで実施した、科学研究費助成事業プロジェクト（基盤研究（C））「水俣病被害者支援運動のコミュニティに関する人類学的研究」のなかで収集した熊本県水俣市のNPOに関する民族誌データについて、今年度も継続して整理を進めた。また、このNPOのその後の活動の変化をフォローするため、および、水俣市の水俣病に関する施策の動向を探るために、2017年6月、2018年1月、3月にそれぞれ短期で現地調査を実施した。

◎出版物による業績

[その他]

平井京之介

2017 「〇〇してみました世界のフィールド タイ王国の展示を秋田へ」『月刊みんぱく』41(8)：10-11。

2017 「タイ王国」中牧弘允編『世界の暦文化事典』pp.94-97, 東京：丸善出版。

2018 「もうひとつの『東南アジア紀行』」『国立民族学博物館開館40周年記念特別展 太陽の塔からみんぱくへ——70年万博収集資料』pp.57-72, 大阪：国立民族学博物館。

2018 「コメント」『新しい地域文化研究の可能性を求めて（人間文化研究機構 日高真吾編）』pp.114-119, 京都：Knit-K。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・みんぱくウィークエンド・サロン

2017年5月28日 「新しい東南アジア展示場ができるまで——生業と寺院を中心に」第467回ウィークエンド・サロン

・国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2017年10月21日 「水俣病の経験を伝える博物館活動——手作り資料館のすすめ」国際フォーラム『地域文化の再発見——大学・博物館の視点から』別府大学メディアホール

・他の機関から委嘱された委員など

熊本大学文学部「水俣病資料館資料整理等に係る業務」専門家会議委員

MATTHEWS, Peter Joseph [マシウス、ピーター・ジョセフ]——教授

1959年生。【学歴】オークランド大学生物科学部人類科学部植物学卒（1981）、オークランド大学大学院生物科学植物学修士課程修了（1984）、オーストラリア国立大学大学院先史考古学遺伝学博士課程修了（1990）【職歴】科学技術庁農水産省野菜茶業試験場特別研究員（1990）、日本学術振興会 Plant Science 特別研究員（京都大学理学部）（1993）、Freelance Editor/Self-employed Editor（1994）、国立民族学博物館第4研究部助手（1995）、国立民族学博物館民族学研究開発センター助教授（1999）、総合研究大学院大学文化科学研究科兼任（2002）、国立民族学博物館研究戦略センター助教授（2004）、国立民族学博物館民族社会研究部准教授（2008）、国立民族学博物館民族社会研究部教授（2015）、国立民族学博物館超域フィールド科学研究部教授（2017）【学位】Ph. D.（オーストラリア国立大学 1990）、M. Sc.（オークランド大学 1984）【専攻・専門】民族植物学、先史学【所属学会】Society for Economic Botany, Indo-Pacific Prehistory Association, Society of Writers, Editors and Translators, International Aroid Society, European Association of Science Editors, World Archaeology Congress, Royal Society of New Zealand

【主要業績】

[単著]

Matthews, P.J.

2014 *On the Trail of Taro: An Exploration of Natural and Cultural History* (Senri Ethnological Studies 88). Osaka: National Museum of Ethnology.

[編著]

Spriggs, M., D. Addison, and P.J. Matthews (eds.)

2012 *Irrigated Taro (*Colocasia esculenta*) in the Indo-Pacific: Biological, Social and Historical Perspectives* (Senri Ethnological Studies 78). Osaka: National Museum of Ethnology.

[論文]

Ahmed, I., P.J. Matthews, P.J. Biggs, M. Naeem, P.A. McLenachan, and P.J. Lockhart

2013 Identification of chloroplast genome loci suitable for high-resolution phylogeographic studies of *Colocasia esculenta* (L.) Schott (Araceae) and closely related taxa. *Molecular Ecology Resources* 13 (5): 929-937.

【2017年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

1. Mapping Genetic Diversity in Taro (*C. esculenta*) to Test Domestication Models (Matthews project)
2. Conservation of Traditional Plant Knowledge Among Ethnic Minorities in Marginal Areas, and Assessment of the Impacts of Local and Global Development. Collaborative research project led by Kazuo Watanabe, Tsukuba University.
3. Natural and Cultural History of the Paper Mulberry (*Broussonetia papyrifera*) in Asia and the Pacific (Matthews project).
4. George Brown Collection Info-Forum Project. Project leader: Isao Hayashi, National Museum of Ethnology.
5. Ethnography of Archaeology: Diversity in the Production, Utilization, and Transformation of Archaeological Knowledge (Joint research project of Kanazawa University and Minpaku, edited by J. Ertl and Y. Yoshida)

・研究の目的、内容

1. Wild Taro Research Project (Matthews project).

Funding for research on wild taro was approved by the Japan Society for the Promotion of Science (JSPS KAKENHI Grant Number JP17H04614). Project period: 1st April 2017 - 31st March 2020, Grant project title: Mapping Genetic Diversity in Taro to Test Domestication Theories. I am the Principle Investigator for this project, which is being carried out in collaboration with several colleagues outside Japan. For samples previously obtained in Taiwan and the Philippines, sequence analysis and data processing continued. New fieldwork was carried out in northern and southern Vietnam and in southern China, in collaboration with the Institute of Ecology and Biological Resources, Hanoi, and the Ethnobotany Laboratory, Minzu University, Beijing.

I also attended the XIX International Botanical Congress, Shenzhen, China, 23. - 29. July 2017. At this congress, I participated in in Session T6-10 Capturing biodiversity for food security (organizer: Robert Henry, University of Queensland, Australia), presented a paper (poster) on “Perception gaps that may explain the status of taro as an “orphan crop”, despite global distribution and value as a starchy root crop and green vegetable.”, and co-organised the “Economic Aroids Workshop” (Satellite event ST-24, 24th July 2017). Project website: <http://colocasianet>

2. Plant genetic resources and related traditional knowledge in semi-autonomous ethnic minority areas with political and geographic isolation. Collaborative research project led by Kazuo Watanabe, Tsukuba University.

For this project, I visited the Kohima Institute, Kohima, Nagaland, India, and presented the ‘5th Annual Hutton Lecture’ on taro (origins, domestication, and recent research). Discussions regarding possible future

collaboration were held.

3. Natural and Cultural History of the Paper Mulberry (*Broussonetia papyrifera*) in Asia and the Pacific (Matthews project).

This project is unfunded, but correspondence continued with colleagues in Japan, Chile and Taiwan.

4. George Brown Collection Info-Forum Project. Project leader: Isao Hayashi, National Museum of Ethnology.

This project ended, but I continue to correspond with project participants regarding publication of further results from the project.

5. Ethnography of Archaeology (Joint research project of Kanazawa University and Minpaku, led by J. Ertl and Y. Yoshida).

I joined meetings of this project held at Minpaku on 4th June and 19th November 2017, and continued writing for the project publication.

In addition to the above planned activities I carried out editorial duties for the Minpaku Anthropology Newsletter, organised the monthly Minpaku Wednesday seminar series, and collaborated with colleagues in West Africa, Italy and Vietnam on further research writing projects related to taro (for papers now in press).

・成果

Publication:

Matthews, P.J. (2017) Evolution and Domestication of Clonal Crops. In D Hunter, L Guarino, C Spillane, PC McKeown (eds), *Routledge Handbook of Agricultural Biodiversity*, Chapt. 10, pp.168-191. Oxford: Routledge.

Public outreach & exhibition

I remain lead curator the Oceania Gallery, Minpaku, and continue to manage the following website: The Research Cooperative (<http://researchcooperative.org>) - an international social network for better research communication. I also became a board member for the New Zealand Studies Society - Japan (NZSSJ) and have developed a website for the Society (<http://nzstudies.org>).

◎出版物による業績

[分担執筆]

Matthews, P.J.

2017 Evolution and Domestication of Clonal Crops. In D. Hunter, L. Guarino, C. Spillane, and P.C. McKeown (eds.) *Routledge Handbook of Agricultural Biodiversity*, pp.168-191. London: Routledge.

[論文]

Matthews, P.J., P.J. Lockhart, and I. Ahmed

2017 Phylogeography, ethnobotany, and linguistics: Issues arising from research on the natural and cultural history of taro *Colocasia esculenta* (L) Schott. *Man in India* 97(1): 353-380.

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（A））「政治的及び地理的に隔離された少数民族独自生存圏での植物遺伝資源及び伝統知の賦存」（研究代表者：渡邊和男（筑波大学））研究分担者、科学研究費（基盤研究（B））「東南アジアにおけるサトイモの遺伝的多様性のマッピングによる栽培化モデルの検証」研究代表者

太田心平 [おおた しんぺい] ————— 准教授

1975年生。【学歴】大阪大学人間科学部人間科学科社会学専修卒（1998）、大阪大学大学院人間科学研究科人間学専攻博士前期課程修了（2000）、ソウル大学大学院人類学科博士課程単位取得退学（2003）、大阪大学大学院人間科学研究科人間科学専攻博士後期課程修了（2007）【職歴】文部科学省アジア諸国等派遣留学生（2000）、ソウル大学社会文化研究院比較文化研究所研究員（2003）、暁園大学歴史・哲学部非常勤講師（2003）、ソウル女子大学教養教育部非常勤講師（2003）、日本学術振興会特別研究員（PD）（2004）、京都産業大学文化学部非常勤講師（2004）、天理

大学国際文化学部非常勤講師（2005）、大阪大学大学院人間科学研究科特任助手（2005）、国立民族学博物館先端人類科学研究部助教（2007）、同志社大学社会学部嘱託講師（2007）、大阪大学大学院人間科学研究科招へい研究員（2007）、神奈川大学国際常民文化研究機構共同研究者（2009）、国立民族学博物館研究戦略センター助教（2010）、宮崎公立大学人文学部非常勤講師（2010）、アメリカ自然史博物館人類学部門上級研究員（2011）、国立民族学博物館民族社会研究部助教（2012）、国立民族学博物館民族社会研究部准教授（2013）、総合研究大学院大学文化科学研究科准教授（2014）、大阪大学大学院人間科学研究科非常勤講師（2014）、国立民族学博物館超越フィールド科学研究部准教授（2017）【学位】博士（人間科学）（大阪大学 2007）、修士（人間科学）（大阪大学 2000）【専攻・専門】北東アジア研究、博物館学、社会文化人類学【所属学会】日本文化人類学会、韓国文化人類学会（韓国）、Association for Asian Studies（米国）、韓国・朝鮮文化研究会、American Anthropological Association（米国）

【主要業績】

[分担執筆]

太田心平

2012 「国家と民族に背いて——アイデンティティの生き苦しさ、韓国を去りゆく人びと」太田好信編『政治的アイデンティティの人類学——21世紀の権力変容と民主化にむけて』pp.304-336, 京都：昭和堂。

[論文]

오타 심페이

2006 「료한: 일본에서의 한국문화 표상양식에 관한 지식인류학적 연구,」『한국문화인류학』39(2): 85-128. Seoul: 한국문화인류학회 (Korean Society for Cultural Anthropology). [査読有]

Ota, S.C.

2015 Collection or Plunder: The Vanishing Sweet Memories of South Korea's Democracy Movement. In K. Hirai (ed.) *Social Movements and the Production of Knowledge: Body, Practice, and Society in East Asia* (Senri Ethnological Studies 91), pp.179-193. Osaka: National Museum of Ethnology. [査読有]

【2017年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

韓国・朝鮮における社会文化の統合性と多様性

・研究の目的、内容

韓国・朝鮮の社会は民族的な均質性が高く、その文化も統合的に捉えられている傾向が強い。しかし、社会の表面に色々な対立項が看守できるように、韓国・朝鮮の社会には多様性が秘められている。この研究の目的は、韓国・朝鮮の事例をもとに、社会文化の統合性と多様性の両立状況がいかに可能であり、それによりもたらされる緊張状態がいかに文化変容の原動力となっているのかを明らかにすることにある。

この期間には、この研究に2つの柱を立て、それらを中心として研究を推進した。

第1の柱は、1980年代以降の政治文化を対象としたもので、韓国の社会文化が、「民主化」とその前後の過程において、どのようなマクロ-ミクロ双対性をもっていたのかを明らかにするものである。こうした分野の研究は、大きな物語としてのイデオロギーと、小さな物語としての民衆世界という二項対立で論じられてきたが、この研究はそういった先行研究の蓄積を脱構築しようとした。援用したのは、20世紀後半の社会科学がイデオロギーに着目する反面で、軽視してきたユートピアという概念である。対象化したのは、先行研究が韓国国内の社会に寄り添うあまり、蔑ろにしてきた在外韓人の社会である。

第2の柱は、現在進行形の事象を研究対象とするものであり、韓国・朝鮮の社会文化が、世界の博物館展示としていかに編成されるか、そのメカニズムを明らかにするものである。この分野を遂行するため、科学研究費助成事業（若手研究（B））（課題番号：25871066、2013～2016年度）を1年間延長し、研究代表者として受諾した。また、研究者はアメリカ自然史博物館人類学部門の上級研究員を兼業したが、この兼業の研究課題はこの分野だった。本年度は、欧州諸国における比較調査を加えておこなうことで、研究成果を公刊する前に、その精緻化をはかった。

・成果

第1の柱、韓国・朝鮮の社会文化の「民主化」前後のマクロ-ミクロ双対性の研究に関しては、国際学会での発表が1本採択されたが、学会側の事情により招請が取り消しとなった。代わりに、このために韓国語で準備

した発表内容を日本語で執筆しなおして、日本語書籍の1つの章とし、公刊された。また、この韓国の文化現象を、同時進行しながらも相反して見える日本の文化現象とも比較してきたことについて、東アジア日本学会(韓国)・東北アジア文化学会(韓国)・日本文芸研究会(日本)より招聘を受け、同3学会の連合国際学術大会(東亜大学(韓国))の基調講演とした。この内容は、同大会のプロシーディング輯に韓国語で掲載された。

第2の柱、韓国・朝鮮の社会文化の現在進行形の編成メカニズムに関しては、共編著の日本語書籍において、1つの章および2つのコラムとして公刊した。また、この柱に含まれる別の部分について、国際人類学民族学連合(IUAES)の2017年大会で英語により発表し、その内容を英文書籍の章として執筆した。現在、出版を待っている段階にある。また、韓国文化人類学会秋季学術大会に招聘されたさい、この研究に基づく知見により、セッション「文化変容と韓国文化人類学の課題II」に対するコメントを受け持った。さらに、本年度より本館のフォーラム型情報ミュージアムプロジェクトとして採択された「朝鮮半島関連の資料データベースの強化と国際的な接合に関する日米共同研究」により、この柱のさらなる展開を試みることとなった。その第一段階の成果は、慶北大学人文力強化事業による特別講演として、同大学に招聘を受けたさい、韓国語で口頭発表した。加えて、これらの研究のために受領した科学研究費助成事業によって共同研究を進めてきたオランダ国籍とベルギー国籍の研究者とともに、共著論文を英語で執筆し、『国立民族学博物館研究報告』にて公刊した。

◎出版物による業績

[編著]

上水流久彦・太田心平・尾崎孝宏・川口幸大編

2017 『東アジアで学ぶ文化人類学』京都：昭和堂。

[分担執筆]

太田心平

2017 「家族と親族——韓国と日本の血縁から考える」上水流久彦・太田心平・尾崎孝宏・川口幸大編『東アジアで学ぶ文化人類学』pp.27-43, 京都：昭和堂。

2017 「慰安婦問題」上水流久彦・太田心平・尾崎孝宏・川口幸大編『東アジアで学ぶ文化人類学』p.78, 京都：昭和堂。

2017 「東アジアの学生運動」上水流久彦・太田心平・尾崎孝宏・川口幸大編『東アジアで学ぶ文化人類学』p.149, 京都：昭和堂。

2018 「脱ヘル朝鮮という希望——もうひとつの非政治経済的な移民動機の事例研究」瀬川昌久編『越境者の人類学——家族誌・個人誌からのアプローチ』pp.75-91, 東京：古今書院。

[論文]

오타 심페이

2017 「한국의 ‘헬 조선’과 일본의 내면지향: 상반되는 키워드로 읽는 양국 젊은이 문화 시론」『동아시아일본학회・동북아시아문화학회・일본문예연구회 2017년 추계 연합국제학술대회』(-): 22-29. Busan: 동아대학교 중국일본학부。

[その他]

太田心平

2017 「米国人に日本酒をきちんと知ってほしい」『vesta』106: 26-29。

2017 「真正なコリアンBBQとは何か——米国で考える」『vesta』108: 27。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2017年5月5日 Academic Hypothesis and Social Reliability: on the Dual Structure of the Korean Spiritual World, CASCA/IUAES2017: MO(U)VEMENT ‘a Joint Canadian Anthropology Society & International Union of Anthropological and Ethnological Sciences Conference/InterCongress’, University of Ottawa, Ottawa

2017年10月21日 「세션 “문화 변동과 한국문화인류학의 과제 II”에 대하여」 한국문화인류학회 2017년도 가을 국제학술대회, Jeju Hanhwa Resort, Jeju

2017年10月28日 「한국의 ‘헬 조선’과 일본의 내면지향: 상반되는 키워드로 읽는 양국 젊은이 문화 시론」 동아시아일본학회・동북아시아문화학회・일본문예연구회 2017년 추계 연합국제학술대회, Dong-ah University, Busan

2017年11月11日 「韓国の反日と親日、あなたはどう見る？」宮崎公立大学韓国文化研究会講演会、宮崎公立大学

2018年2月5日 「일본 국립민족학박물관의 연구, 전시, 교육과 한국문화연구」 동아시아를 바라보는 두 인 류학자의 시선, Kyungpook National University (Daegu)

2018年3月25日 Escape from Hell Chosun: Young South Koreans' Quest for Alternative Socialities, Association for Asian Studies Annual Conference 2018, Marriott Wardman Park, Washington

・展示

2017年1月1日～6月30日 「特別展『よみがえれ！シーボルトの日本博物館』ワーキング」国立民族学博物館

・みんぱくウィークエンド・サロン

2017年6月25日 「世界都市ランキングと大阪」第470回ウィークエンド・サロン

・広報・社会連携活動

2017年4月4日 「春の遠足ガイドランス——みんぱくの紹介」国立民族学博物館

2017年4月6日 「春の遠足ガイドランス——みんぱくの紹介」国立民族学博物館

2017年11月9日 「異文化理解と文化人類学」山陽女子高等学校

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（1人）、副指導教員（1人）

・大学院ゼミでの活動

博物館研究演習Ⅰ「東アジア人類学の教育と展示」

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（若手研究（B））「博物館展示の再編過程の国際比較による『真正な文化』の生成メカニズムの解明」研究代表者、国立民族学博物館フォーラム型情報ミュージアムプロジェクト（強化型）「朝鮮半島関連の資料データベースの強化と国際的な接合に関する日米共同研究」研究代表者、人間文化研究機構ネットワーク型「北東アジア地域研究拠点」（研究代表者：池谷和信）メンバー

・民間の奨学金及び助成金からのプロジェクト

AHRC International Placement Scheme, Art & Humanities Research Council, UK “Identifying the Urban in the History of Premodern Northeast Asia”（研究代表者：PURSEY, Lance（University of Birmingham, Doctoral Student））Research Advisor

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

日本文化人類学会日韓合同パネルタスクフォース、韓国文化人類学会海外理事、味の素食の文化研究所責任編集委員

・他大学の客員、非常勤講師

American Museum of Natural History・Research Associate、大阪大学大学院人間科学研究科「政治経済の人類学」

◎学会の開催

2017年6月14日 Cross-Field Research Seminar #2 “Museum Management: Who Is Leading? (by Alex de Voogt)” National Museum of Ethnology

2018年2月8日 Cross-Field Seminar #4 / Center for Northeast Asian Studies Monthly Seminar, February, 2018 “Brooding Necropolis, beside the Spirit Hills: Space, Place & Landscape in the Epitaphs of Liao Elites (by Lance Pursey)”, National Museum of Ethnology

新免光比呂 [しんめん みつひろ]

准教授

1959年生。【学歴】早稲田大学政治経済学部政治学科卒（1983）、東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了（1986）、東京大学大学院人文科学研究科博士課程満期退学（1992）【職歴】帝京大学非常勤講師（1992）、横浜国立大学非常勤講師（1992）、東方研究会専任研究員（1992）、国立民族学博物館第3研究部助手（1993）、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（2000）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2002）、国立民族学博物館民族文化研究部助教授（2004）、国立民族学博物館超越フィールド科学研究部准教授（2017）【学位】文学修士（東京大学大学院人文科学研究科 1986）【専攻・専門】宗教学・東欧研究【所属学会】東方研究会

【主要業績】

[単著]

新免光比呂

2000 『祈りと祝祭の国——ルーマニアの宗教文化』 京都：淡交社。

[共著]

新免光比呂・保坂俊司・頼住光子

1998 『比較宗教への途3 人間の文化と神秘主義』 東京：北樹出版。

[論文]

新免光比呂

1999 「社会主義国家ルーマニアにおける民族と宗教——民族表象の操作と民衆」『国立民族学博物館研究報告』
24(1)：1-42。

【2017年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

第二次世界大戦後の世界とルーマニア知識人について

・研究の目的、内容

昨年度は、ルーマニアの社会主義体制下における知識人のありようを、その思想と体制との関わりのなかで考察し、社会主義政権に迫害されながらもソクラテス的な教育によって民主革命後のルーマニア社会をリードする知識人を生み出したコンスタンティン・ノイカを扱ったが、今年度はシオランを中心として、第二次世界大戦後の世界とルーマニア知識人との関わりについて考えたい。

・成果

第二次世界大戦後の世界とルーマニア知識人との関わりを明らかにするために、シオランを中心として戦間期から社会主義体制初期までの体制と思想的潮流について文献を中心に考察を深めた。その一端として日本宗教学会第76回学術大会において科学研究費（基盤研究（B））「ファシズム期の古代理解に関する総合的研究」グループの一員として「歴史の欠如と民族の聖化——ルーマニア知識人の課題と苦悩」という題目で発表した。

◎出版物による業績

[分担執筆]

新免光比呂

2017 「ルーマニア」中牧弘允編『世界の暦文化事典』 pp.262-265, 東京：丸善出版。

2017 「ボスニア・ヘルツェゴビナ」中牧弘允編『世界の暦文化事典』 pp.254-257, 東京：丸善出版。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2017年12月16日 「歴史の欠如と民族の聖化——ルーマニア知識人の課題と苦悩」日本宗教学会第76回学術大会、東京大学

・みんなくウィークエンド・サロン

2018年2月11日 「一神教と多神教——宗教学からみた世界の宗教」第498回ウィークエンド・サロン

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（B））「ファシズム期の古代理解に関する総合的研究」（研究代表者：平藤喜久子（國學院大學））研究分担者

菅瀬晶子 [すがせ あきこ] ————— 准教授

【学歴】 東京外国語大学外国語学部アラビア語学科卒（1995）、東京外国語大学大学院地域文化研究科アジア第三専攻博士前期課程修了（1999）、総合研究大学院大学文化科学研究科地域文化学専攻博士後期課程修了（2006）【職歴】 総合研究大学院大学葉山高等研究センター上級研究員（2006）、日本女子大学文学部史学科非常勤講師（2006）、日本女子大学文学部史学科非常勤講師（2008）、日本女子大学文学部史学科非常勤講師（2008）、総合研究大学院大学学融合推進センター特別研究員（2010）、大阪大学外国語学部非常勤講師（2010）、神奈川大学経営学部非常勤講師

(2010)、共立女子大学国際学部非常勤講師(2010)、国立民族学博物館民族社会研究部助教(2011)、滋賀県立大学非常勤講師(2012)、神戸女子大学非常勤講師(2015)、国立民族学博物館研究戦略センター准教授(2016)、国立民族学博物館超域フィールド科学研究部准教授(2017)【学位】博士(文学)(総合研究大学院大学 2006)、修士(学術)(東京外国語大学大学院 1999)【専攻・専門】文化人類学・中東地域研究(パレスチナ・イスラエルを中心とした、東地中海地域アラビア語圏)【所属学会】日本中東学会、日本文化人類学会、京都ユダヤ思想学会

【主要業績】

[単著]

菅瀬晶子

2012 『豊穡と共生への祈り——パレスチナ・イスラエルにおける聖者アル・ハディル崇敬』(民族紛争の背景に関する地政学的研究19) 大阪：大阪大学世界言語研究センター。

2010 『イスラームを知る 6 新月の夜も十字架は輝く——中東のキリスト教徒』東京：山川出版社。

2009 『イスラエルのアラブ人キリスト教徒——その社会とアイデンティティ』広島：溪水社。

【受賞歴】

2006 長倉研究奨励賞

2006 総研大研究賞

【2017年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

東地中海アラブ諸国における宗教的アイデンティティの表象

・研究の目的、内容

20世紀前半にガリラヤ地方で活躍したアラブ・ナショナリスト、ナジブ・ナッサールの活動について調査し、宗教をこえたナショナル・アイデンティティの創出の過程をあきらかにするとともに、キリスト教徒であった彼自身の宗教的アイデンティティが、彼の執筆活動に与えた影響をさぐる。

・成果

イスラエル国立図書館やハイファ大学など、イスラエル内外で収集したナジブ・ナッサールとイーサー・アル・イーサーの著作や資料の精読を続行したが、膨大な量の資料が集まったため、内容の分析に非常に時間がかかっている。成果公開のため、論文執筆の準備をしてきた。また、調査の過程でナッサールやイーサーが発行していたアラビア語紙に幾度も寄稿し、アラブ人にシオニズムのプロパガンダを広めようとしていた中東系ユダヤ教徒の知識人たちの存在を知り、彼らについての調査も平行してはじめた。これらの調査の成果を、次年度以降に発表することが今後の最大の課題である。

また、東地中海地域アラビア語圏の食文化研究の一環として、また新着資料展示「標交紀の咖啡の世界」の準備として、あらためてパレスチナ・イスラエルにおけるコーヒー文化の調査をおこなった。新着資料展示は9月27日～11月14日に開催され、ワークショップやウィークエンド・サロンで、調査の内容を生かすことができた。新着資料展示を契機としてコーヒー文化研究会を立ち上げたため、研究会内でサウジアラビアなど周辺地域のコーヒー文化との比較をおこない、西アジア展示への還元をめざしてゆく予定である。

◎出版物による業績

[分担執筆]

菅瀬晶子

2017 「イスラエル国」中牧弘允編『世界の暦文化事典』pp.178-183, 東京：丸善出版。

菅瀬晶子

2017 「第7章 ギリシア正教会」三代川寛子編『東方キリスト教諸教会——研究案内と基礎データ』pp.302-305, 東京：明石書店。

2017 「第8章 メルキト・カトリック教会」三代川寛子編『東方キリスト教諸教会——研究案内と基礎データ』pp.306-311, 東京：明石書店。

[その他]

菅瀬晶子

2017 「旅・いろいろ地球人 カフワから咖啡へ① 始まりはアラブ」『毎日新聞』10月5日夕刊。

- 2017 「旅・いろいろ地球人 カフワから咖啡へ② コーヒーを出す心」『毎日新聞』10月12日夕刊。
 2017 「旅・いろいろ地球人 カフワから咖啡へ③ 変わりゆく好み」『毎日新聞』10月19日夕刊。
 2017 「旅・いろいろ地球人 カフワから咖啡へ④ そして芸術に」『毎日新聞』10月26日夕刊。
 2017 「主食——人を生かすもの」国立民族学博物館編『国立民族学博物館展示案内』pp.170-173。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・みんなくウィークエンド・サロン

2017年11月12日 「心の扉を開ける鍵としてのコーヒー——パレスチナ・イスラエルでのフィールドワークから」第487回ウィークエンド・サロン

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（C））「ガリラヤ地方とレバノンのキリスト教徒によるアラブ・ナショナリズムの再考」研究代表者

丹羽典生 [にわ のりお] ————— 准教授

【**学歴**】慶應義塾大学文学部卒（1996）、東京都立大学大学院社会科学研究科修士課程修了（1999）、東京都立大学大学院社会科学研究科博士課程単位取得退学（2005）【**職歴**】法政大学経済学部教育補助員（2004）、法政大学社会学部兼任教員（2005）、日本学術振興会特別研究員PD（2005）、国立東京工業高等専門学校非常勤講師（2006）、首都大学東京非常勤講師（2006）、ハワイ大学マノア校人類学科客員研究員（2006）、筑波大学非常勤講師（2007）、法政大学非常勤講師（2008）、国際基督教大学非常勤講師（2008）、国立民族学博物館研究戦略センター助教（2008）、国立民族学博物館民族文化研究部准教授（2012）、国立民族学博物館研究戦略センター准教授（2013）、国立民族学博物館超域フィールド科学研究部准教授（2017）【**学位**】博士（社会人類学）（東京都立大学 2006）、修士（社会人類学）（東京都立大学 1999）【**専攻・専門**】社会人類学、オセアニア地域研究【**所属学会**】日本文化人類学会、日本オセアニア学会、東京都立大学社会人類学会、早稲田文化人類学会、Association for Social Anthropology in Oceania、The International Union of Anthropological and Ethnological Sciences

【**主要業績**】

[単著・共著]

丹羽典生

- 2016 『〈紛争〉の比較民族誌——グローバル化におけるオセアニアの暴力・民族対立・政治的混乱』神奈川：春風社。[査読有]
 2013 『現代オセアニアの〈紛争〉——脱植民地期以降のフィールドから』京都：昭和堂。[査読有]
 2009 『脱伝統としての開発——フィジー・ラミ運動の歴史人類学』東京：明石書店。[査読有]

【**受賞歴**】

2010 第9回オセアニア学会賞

【**2017年度の活動報告**】

◎各個研究

・研究課題

応援の人類学：政治・スポーツ・ファン文化からみた利他性の諸相

・研究の目的、内容

本研究は、〈応援〉という視角から人類の諸文化を通文化的に比較することを通じて、利他性という人間性の根源について文化人類学的に考察することを目的とする。〈応援〉の下位項目として、政治、スポーツ、ファン文化をさしあたり設定し、世界の事例を取り上げ検討する。日本の事例では、大学を中心とする応援団の諸活動を具体的な民族誌的研究の対象とする。調査の遂行に当たっては、科学研究費助成事業への応募も計画している。

・成果

調査としては東京六大学応援団連盟第六十四回「六旗の下に」にて参与観察を行った。研究としては、みんな

く共同研究「応援の人類学—政治・スポーツ・ファン文化からみた利他性の比較民族誌」の推進を通じて研究会を4回開催した。研究発表（「ノリをめぐる身体の政治学——高校野球における『沖縄らしい』応援の形成とその問題」）とエッセイ（「応援を考える——人間と感情の動員という視点から」）を成果公開した。

◎出版物による業績

[編著]

丹羽典生編

2017 『国立民族学博物館展示案内』大阪：国立民族学博物館。

[分担執筆]

丹羽典生

2018 「独立と民族自決への転換期でみたもの——民芸立国論から戦争の傷跡まで」野林厚志編『国立民族学博物館開館40周年記念特別展 太陽の塔からみんぱくへ——70年万博収集資料』pp.169-184, 大阪：国立民族学博物館。

[その他]

丹羽典生

2017 「インタビュー 吉田憲司新館長に聞く——開館40年、これからのみんぱく」『月刊みんぱく』41(4)：2-3。

2017 「異国装考」特集「異国をまとう」『月刊みんぱく』41(7)：2-3。

2018 「応援を考える——人間と感情の動員という視点から」『民博通信』160：22-23。

2018 「本館展示でEEM資料を見る」特集「万博資料収集団」『月刊みんぱく』42(3)：9。

2018 「万博資料収集団のオセアニアにおける収集活動」『民族誌コレクションの役割とその未来——人間の理解にむけた博物館の挑戦』。

2017-2018 「編集後記」『月刊みんぱく』41(4)~42(3)。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2018年3月25日 「万博資料収集団のオセアニアにおける収集活動」開館40周年記念シンポジウム『民族誌コレクションの役割とその未来——人間の理解にむけた博物館の挑戦』国立民族学博物館

・共同研究会での報告

2018年2月10日 「ノリをめぐる身体の政治学——高校野球における『沖縄らしい』応援の形成とその問題」共同研究会『応援の人類学——政治・スポーツ・ファン文化からみた利他性の比較民族誌』国立民族学博物館共同研究、国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2018年3月16日 「再帰する理想郷——オセアニア神学とフィジーにおける宗教的社会運動の系譜」シンポジウム『汎オセアニアの世界観としての伝統・教会・政府』グローバル化と宗教の再帰性に関する横断的研究、神戸大学

・展示

2018年3月8日～5月29日 「国立民族学博物館開館40周年記念特別展 太陽の塔からみんぱくへ——70年万博収集資料」国立民族学博物館

・みんぱくウィークエンド・サロン

2017年8月20日 「太平洋の探検家朝枝利男——その生涯と資料について」第477回ウィークエンド・サロン

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

日本オセアニア学会理事

松尾瑞穂 [まつお みずほ] ————— 准教授

【学歴】南山大学文学部人類学科卒（1999）、名古屋大学大学院国際開発研究科国際協力専攻博士前期課程修了（2002）、総合研究大学院大学文化科学研究科比較文化学専攻博士後期課程単位取得退学（2007）【職歴】日本学術振興会特別研究員（PD）（2007）、新潟国際情報大学情報文化学部情報文化学科講師（2010）、新潟国際情報大学情報文化学部情報文化学科准教授（2013）、国立民族学博物館先端人類科学研究部准教授（2014）、国立民族学博物館超域フィールド科学研究部准教授（2017）【学位】文学博士（総合研究大学院大学文化科学研究科 2008）、学術修士

(名古屋大学大学院国際開発研究科 2002)【専攻・専門】文化人類学、ジェンダー医療人類学、南アジア研究【所属学会】日本文化人類学会、日本南アジア学会、日本宗教学会、宗教と社会学会

【主要業績】

[単著]

松尾瑞穂

2013 『ジェンダーとリプロダクションの人類学——インド農村社会の不妊を生きる女性たち』京都：昭和堂。

2013 『インドにおける代理出産の文化論——出産の商品化のゆくえ』東京：風響社。

[論文]

松尾瑞穂

2009 「『回復』を希求する——インド農村社会における不妊と『流産』経験」『文化人類学』74(3)：423-440。

[査読有]

【2017年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

インドにおけるリプロダクションとサブスタンスに関する研究

・研究の目的、内容

本研究の目的は、インド社会において、グローバル化、医療化、生殖医療技術、優生学、開発によってリプロダクション（性と生殖）の実践はいかに変化しているのかを検証することを通して、ヒト、家族、親族、カーストといった自他を区別する社会的カテゴリーの生成や、親子や他者との関係性／つながり（relatedness）の様態の変容について、明らかにすることである。特に、サブスタンス（身体構成要素）の共有がいかに個と集団のカテゴリーの同定や差異を形成するののかについて、血液、母乳、精液といった、南アジア社会における伝統的なサブスタンス概念と、卵子、精子のような配偶子や遺伝子といった新しいサブスタンス概念との比較に注目する。具体的には、以下の研究活動を行う。

1) 文献調査および現地調査

リプロダクションの変容をとくに生殖医療技術との関わりにおいて考察するうえで、南アジア地域におけるサブスタンスの概念は重要な出発点となる。ヒトの形成に関しては、南アジアの文脈でいえば、子どもの形成における種と大地という象徴的な民俗生殖理論がよく知られている。また、血液や体液のような身体部品や、食、環境の共有を通して身体が構成され、つながりが生み出されるということも議論されてきた。生殖医療がもたらす遺伝子をつなぐと、身体サブスタンスを介したつながりはどのように接合、あるいは断絶しているのか。今年度は、昨年度に引き続き遺伝子と母乳という異なるサブスタンスの差異と共通点に注目するとともに、出産から家族計画、不妊までインドにおけるリプロダクションの全体像を量的に把握する。

2) 共同研究の遂行：前半期は、民博の共同研究会「グローバル化時代のサブスタンスの社会的布置に関する比較研究」および人間文化研究機構現代南アジア地域研究（MINDAS）の「社会変動と親密圏」の研究代表として、それぞれ研究会を開催、運営する。また、後半期には、受託研究・日本学術振興会二国間交流事業「近代マハーラーシュトラにおけるカースト観の構築」（代表者：松尾瑞穂）の一環として、国内研究メンバーとともに、インドのカウンターパートとの国際ワークショップを主催する。これらの共同研究を通して、他分野、他地域の研究者と討議し、上述の研究課題の進展に努める。

・成果

上記のテーマに関し、文献収集と文献読解、共同研究会の組織、運営、インドでの国際ワークショップ、インド現地調査を実施した。なお、2017年度は、産休・育休による休業のため、活動期間は前半と後半の約3か月半であったことをあらかじめ断っておきたい。

今年度は受託研究・日本学術振興会二国間交流事業「近代マハーラーシュトラにおけるカースト観の構築」（研究代表：松尾瑞穂）の最終年度であり、サヴィトリ・パーイー・フレ・プネー大学（インド）南アジア研究センターおよび歴史学部をカウンターパートとして、昨年引き続き3月にプネー大学にてワークショップ「Caste formation in Modern Maharashtra」を開催した。このワークショップでは、日本側から4名、インド側から4名の計8名が報告し、近代マハーラーシュトラにおける社会集団の構築と形成について、主にマラーティー語文献や資料を用いながら、研究交流を行った。この成果は、今後、Senri Ethnological Report (SER) として英語論集で刊行するとともに、マラーティー語に翻訳したものを、プネー大学出版会からインドで刊行

する予定である。本事業は、科学研究費助成事業（挑戦的萌芽研究）「インド・マハーラーシュトラにおける集団意識とカースト・ダイナミクスの学際的研究」（研究代表：足立享佑東京大学特任研究員）とも連動するものであり、研究分担者として、マラーティー語文献資料の収集と研究機関とのネットワーク構築、およびプネー市における現地調査を実施した。

また、新規に採択された科学研究費助成事業（基盤研究（B））「現代アジアのリプロダクションに関する国際比較研究：ジェンダーの視点から」（研究代表：白井千晶静岡大学教授）の分担者として、インド・マハーラーシュトラ州において、リプロダクションの変容に関し、産婦人科、助産師など専門家への聞き取りと出産経験女性へのアンケート調査を実施した。これは来年度、スリランカで実施予定の調査とあわせ、比較研究の基礎データとなるものである。

さらに、民博の共同研究会「グローバル化時代のサブスタンスの社会的布置の比較研究」を研究代表として組織し、共同研究会を開催・運営するとともに、および人間文化研究機構地域研究推進事業「現代南アジア地域研究」（MINDAS）の一環で、松尾がリーダーを務める「社会変動と親密圏」班の開催と報告を行った。

論文等の成果としては、編集幹事を務めた丸善出版『現代インド文化事典』が刊行された。本事典の全体のとりまとめ作業を行うとともに、第三章「家族とジェンダー」の編集委員として執筆および編集作業を行った。また、いくつかの論集にインドにおける生殖医療および生殖ツーリズムに関する論文・エッセイを寄稿し、それらが刊行された。

◎出版物による業績

[編著]

インド文化事典編集委員会編

2018 『インド文化事典』東京：丸善出版。

[分担執筆]

松尾瑞穂

2018 「インド 医療ツーリズムと不妊治療」村上薫編『不妊治療の時代の中東——家族をつくる、家族を生きる』（アジ研選書49）pp.149-155, 千葉：アジア経済研究所。[査読有]

2018 「錯綜する『家族』の作り方——生殖医療と代理母問題」粟屋利江・井上貴子編『インドジェンダー研究ハンドブック』pp.142-146, 東京：東京外国語大学出版会。

[その他]

松尾瑞穂

2018 「インディラ・ガーンディー」インド文化事典編集委員会編『インド文化事典』p.117, 東京：丸善出版。

2018 「プネー」インド文化事典編集委員会編『インド文化事典』p.736, 東京：丸善出版。

2018 「リプロダクティブ・ヘルス」インド文化事典編集委員会編『インド文化事典』pp.96-97, 東京：丸善出版。

2018 「医療ツーリズム」インド文化事典編集委員会編『インド文化事典』pp.462-463, 東京：丸善出版。

2018 「巡礼」インド文化事典編集委員会編『インド文化事典』pp.410-411, 東京：丸善出版。

2018 「民俗生殖理論」インド文化事典編集委員会編『インド文化事典』pp.92-93, 東京：丸善出版。

2018 「肥満と健康ブーム」インド文化事典編集委員会編『インド文化事典』pp.464-465, 東京：丸善出版。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2017年5月8日 「高カースト女性にとっての公的世界とその経験——ポスト独立期インド社会の変化」現代南アジア地域研究「南アジアにおける社会変動と親密圏」第一回研究会、国立民族学博物館、大阪

2018年3月5日 The Formation of class in Modern Maharashtra: Birth control movements and the emergence of new middle class, JSPS bilateral seminar on 'Caste formation in Modern India', Sabitribai Phule Pune University, Pune, Maharashtra, India

・みんなくウィークエンド・サロン

2018年3月25日 「カーストの歴史的変化——あるバラモン集団の事例」第504回ウィークエンド・サロン

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（挑戦的萌芽研究）「インド・マハーラーシュトラにおける集団意識とカースト・ダイナミクスの学際的研究」（研究代表者：足立享祐（東京外国語大学））研究分担者、科学研究費（その他）「近代マハーラーシュトラにおけるカースト観の構築」研究代表者、科学研究費（若手研究（B））「現代インドにおける遺伝子の社会的布置に関する人類学的研究」研究代表者、科学研究費（基盤研究（B））「グローバルなアジェンダとなった月経のローカルな状況の比較研究」（研究代表者：杉田映理（大阪大学））研究分担者、科学研究費（基盤研究（B））「現代アジアのリプロダクションに関する国際比較研究：ジェンダーの視点から」（研究代表者：白井千晶（静岡大学））研究分担者

人類文明誌研究部

林 勲男 [はやし いさお] ————— 部長（併）教授

【学歴】立教大学文学部史学科卒（1980）、立教大学大学院文学研究科地理学修士課程修了（1983）、一橋大学大学院社会学研究科地域社会研究専攻博士課程単位取得退学（1992）【職歴】シドニー大学人類学科客員研究員（1992）、国立民族学博物館第4研究部助手（1994）、国立民族学博物館民族社会研究部助手（1998）、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（1999）、総合研究大学院大学文化科学研究科准教授（2001）、国立民族学博物館文化資源研究センター准教授（2012）、国立民族学博物館人類文明誌研究部教授（2017）、国立民族学博物館人類文明誌研究部研究部長（2017）【学位】文学修士（立教大学大学院文学研究科 1983）【専攻・専門】社会人類学 パプアニューギニアにおける社会組織と世界観に関する研究、オセアニア近代史の人類学的研究、自然災害への対応に関する人類学的研究【所属学会】日本文化人類学会、日本オセアニア学会、地域安全学会、日本災害復興学会、The International Union of Anthropology and Ethnological Sciences (IUAES)、Japan Anthropology Workshop (JAWS)

【主要業績】

[編著]

林 勲男編

2016 『災害文化の継承と創造』京都：臨川書店。

2015 『アジア太平洋諸国の災害復興——人道支援／集落移転・防災と文化』東京：明石書店。

2010 『自然災害と復興支援』（みんぱく実践人類学シリーズ9）東京：明石書店。

【2017年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

災害の記憶：遺構と語り継ぎ

・研究の目的、内容

「災害の記憶」と言った場合、一般には発災後から現在までの出来事を経験を指す場合がほとんどである。しかし、被災者が遺構や遺物を前にして語り始めると、災害が発生する以前の暮らしや懐かしい思い出などが、遺物や遺構によって喚起されていることがわかる。そして、それらの物や構造体が被災したことによって、物質と強く結びついた記憶の脆弱性にあらためて気づかされる。そうした記憶の脆弱性を補完するために、人びとによる言葉による語りや記述の活動が生まれてくる。こうした現象を、他の災害や戦争、感染症などの災厄の記憶をめぐる問題を視野に引きながら、東日本大震災をはじめとする近年に発生した災害被災地での現地調査と文献調査によって考察する。さらに記憶の集合性、社会性を考えながら、防災・減災への寄与のあり方についても考察する。現地調査は研究分担者を務める科研基盤（S）「減災の決め手となる行動防災学の構築」の調査資金を充てる。

・成果

日本災害復興学会で新たに始まった「被災の教訓を未来に伝える研究会」に参加し、そこでの議論も踏まえて、同学会の『日本災害復興学会論文集』への投稿を準備中である。また、科学研究費助成事業（基盤研究（S））

「減災の決め手となる行動防災学の構築」では、2018年2月に東京大学情報学環・福武ホールで最終成果報告会を実施し、「東日本大震災経験後の国際連携と受援」と題して報告した。このときの全発表を収めたDVD「『減災の決め手となる行動防災学の構築』最終成果報告会」を作成した。

◎出版物による業績

[その他]

林 勲男

2017 「旅・いろいろ地球人 被災地からのメッセージ① 未来の担い手たち」『毎日新聞』8月3日夕刊。

2017 「旅・いろいろ地球人 被災地からのメッセージ② 遺構・遺物が伝えること」『毎日新聞』8月10日夕刊。

2017 「旅・いろいろ地球人 被災地からのメッセージ③ 復興への交流」『毎日新聞』8月17日夕刊。

2017 「旅・いろいろ地球人 被災地からのメッセージ④ ため池と暮らし」『毎日新聞』8月24日夕刊。

2017 「旅・いろいろ地球人 被災地からのメッセージ⑤ 思い出を取り戻す」『毎日新聞』8月31日夕刊。

Hayashi, I. and P.J. Matthews

2017 The George Brown Collection. *MINPAKU Anthropology Newsletter* 44: 10-11.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2018年2月13日 「東日本大震災経験後の国際連携と受援——CBRNワークショップへのコメント」減災の決め手となる行動防災学の構築、東京大学情報学環・福武ホール

・みんぱくゼミナール

2017年10月21日 「ジョージ・ブラウン・コレクションの軌跡をたどる」第473回みんぱくゼミナール

・みんぱくウィークエンド・サロン

2017年5月21日 「マランガン儀礼と彫刻——ジョージ・ブラウン・コレクションから」第466回ウィークエンド・サロン

◎調査活動

・国内調査

2017年4月22日～4月24日—新潟県長岡市・十日町市・南魚沼市（中越地震からの復興における文化財の役割に関する調査）

2017年7月16日～7月18日—福島県白河市・福島市・田村郡三春町（福島第一原発事故の記録と教育に関する調査）

・海外調査

2017年8月4日～8月17日—パプアニューギニア独立国・オーストラリア（コレクション調査および博物館ネットワークの拡充に関する協議）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（S））「減災の決め手となる行動防災学の構築」（研究代表者：林春男（京都大学））研究分担者

池谷和信 [いけや かずのぶ] ————— 教授

1958年生。【学歴】東北大学理学部地球科学系卒（1981）、筑波大学大学院環境科学研究科修士課程修了（1983）、東北大学大学院理学研究科博士課程単位取得退学（1990）【職歴】北海道大学文学部附属北方文化研究施設文化人類学部門助手（1990）、国立民族学博物館第1研究部助手（1995）、国立民族学博物館民族社会研究部人類環境部門助教授（1998）、総合研究大学院大学先導科学研究科生命体科学専攻助教授（1999）、国立民族学博物館民族社会研究部教授（2007）、総合研究大学院大学文化科学研究科地域文化学専攻教授（2007）、総合研究大学院大学文化科学研究科地域文化学専攻長（2009-2011）、国立民族学博物館民族文化研究部研究部長（2014）、国立民族学博物館人類文明誌研究部教授（2017）【学位】理学博士（東北大学大学院理学研究科 2003）【専攻・専門】環境人類学、人文地理学、地球学、生き物文化誌学、世界の狩猟採集文化、家畜文化の研究、植民地時代における民族社会の変容に関する研究、地球環境問題および地球環境史に関する研究【所属学会】日本文化人類学会、日本アフリカ学会、日本地理学会、日本沙漠学会、人文地理学会、日本人類学会、日本熱帯生態学会、日本民俗学会、生き物文化誌学会、ヒ

トと動物の関係学会、国際人類学民族学連合（IUAES）、アメリカ人類学会（American Anthropological Association）、日本生態学会、日本動物考古学会、東北地理学会、日本養豚学会、環境社会学会、比較文明学会、生態人類学会

【主要業績】

[単著]

池谷和信

- 2014 『人間にとってスイカとは何か——カラハリ狩猟民と考える』（フィールドワーク選書5）京都：臨川書店。
- 2003 『山菜採りの社会誌——資源利用とテリトリー』仙台：東北大学出版会。
- 2002 『国家のなかでの狩猟採集民——カラハリ・サンにおける生業活動の歴史民族誌』（国立民族学博物館研究叢書4）大阪：国立民族学博物館。

【受賞歴】

- 2007 日本地理学会優秀賞
1998 日本アフリカ学会研究奨励賞

【2017年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

熱帯の家畜飼育に関する人類文明誌的研究

・研究の目的、内容

本研究では、人類文明誌の視点から世界の熱帯における家畜飼育の歴史と現状を把握することが目的である。具体的には、熱帯のモンスーンアジアに注目する。ここでは、野鶏やイノシシなどの野生動物と人、および家畜化された家鶏・ブタなどと人のかかわり方を同時に調査することができるからである。これまでバングラデシュのブタ遊牧やタイの野鶏と人のかかわりを明らかにしてきたので、今回はさらに調査地域を熱帯アフリカにも拡大して、より比較できる地域を増やすことで、歴史的視点をふまえて熱帯の家畜飼育を把握していく。

・成果

熱帯の家畜飼育に関する研究成果は、『熱帯の牧畜における生産と流通に関する政治生態学的研究』（科学研究費（基盤研究（A）26257013：代表 池谷和信）の助成により、2つの形で公開することができた。

第一は、4編の個別論文（英文および和文）を刊行した。①Ikeya, K. 2017 Introduction: Studies of Sedentarization. In K. Ikeya (ed.) *Sedentarization among Nomadic Peoples in Asia and Africa*, *Senri Ethnological Studies* 95, pp.1-15, National Museum of Ethnology. なお、この論文は家畜そのものを対象にしてはいないが、牧畜民の定住化モデルを提示する。②池谷和信 2017「牧畜の起源と伝播」（特集シルクロード：交流を復元する）『科学』、958-962頁、岩波書店。③池谷和信 2017「サバンナ帯における牧畜」島田周平・上田元編『世界地誌シリーズ8 アフリカ』39-45頁、朝倉書店。④高田勝・池谷和信 2017「アジアの中の琉球列島の在来家畜と人」『BIOSTORY』27、pp.8-15、生き物文化誌学会。

第二は、学会での研究発表である。本年度は、①第160回日本獣医学会での招待講演「野生動物から家畜への道——家畜化・品種化からみた人類文明誌——」、②日本熱帯生態学会「熱帯アジアにおけるブタの放牧について」、③日本地理学会「モンスーンアジアの家畜と人」などでの口頭発表を行った。これらの報告は、熱帯の家畜飼育に関する人類文明誌的研究の一部を構成するものと考えている。

◎出版物による業績

[編著]

Ikeya, K. (ed.)

- 2017 *Sedentarization among Nomadic Peoples in Asia and Africa* (*Senri Ethnological Studies* 95). Osaka: National Museum of Ethnology. [査読有]
- 2018 *Beads in the World*. Osaka: National Museum of Ethnology.

[論文]

池谷和信

- 2017 「サバンナ帯における牧畜」『世界の地誌シリーズ8 アフリカ』pp.39-45, 東京:朝倉書店。
2017 「牧畜の起源と伝播」『科学』87(10):958-962。
2018 「現代の「狩猟採集民」にとっての肉食とは何か」野林厚志編『肉食行為の研究』pp.212-238, 東京:平凡社。
2018 「ビーズ研究の枠組み——素材論、技術論、社会文化論からの視点」『パレオアジア文化史学——アジア新人文化形成プロセスの総合的研究(計画研究B01班 2017年度研究報告)』pp.7-10。

池谷和信・岸上伸啓・佐々木史郎・戸田美佳子

- 2018 「最近の狩猟採集民研究の動向——第11回国際狩猟採集社会会議(CHAGS11)に出席して」『国立民族学博物館研究報告』42(3):321-372。[査読有]

高田 勝・池谷和信

- 2017 「アジアの中の琉球列島の在来家畜と人」『BIOSTORY』27:8-15。

Ikeya, K.

- 2017 Introduction: Studies of Sedentarization. *Sedentarization among Nomadic Peoples in Asia and Africa* (Senri Ethnological Studies 95), pp.1-15. Osaka: National Museum of Ethnology. [査読有]
2018 Natural Resource Use by Domestic Pigs in the Tropic. *The Proceedings of the International Workshop on Forest Ecological Resources Security for Next Generation: Development and Routine Utilization of Forest Ecological Resource and their Domestication*, pp.52-57.

Ikeya, K. and S. Nakai

- 2017 Sedentarization and Landscape Change among the Mlabri in Thailand. In K. Ikeya (ed.) *Sedentarization among Nomadic Peoples in Asia and Africa* (Senri Ethnological Studies 95), pp.171-191. Osaka: National Museum of Ethnology. [査読有]

Endo, H., N. Tsunekawa, K. Kudo, Y. Hayashi, K. Ikeya, N.T. Son, and F. Akishinomiya

- 2017 Musculoskeletal System of Huge Tarsometatarsal Region in the Dong Tao Fowls from North Vietnam. *The Journal of Poultry Science* 54(1): 58-65. [査読有]

[その他]

池谷和信

- 2017 「植物のビーズ」『小原流 插花』67(4):39。
2017 「人と家畜のエピソード61 人の歯でつくるビーズ」『JVM 獣医畜産新報』70(4):319。
2017 「座談会 環(めぐ)りの海から北東アジアの諸課題を探求する」『北東アジア研究』28:173。
2017 「鶏(ニワトリ)と人:アジアの森から世界の台所へ」『さざなみ』36:1-9。
2017 「ビーズ つなぐ かざる みせる」『Bead Art & Embroidery』21:78-79。
2017 「BEADS IN THE WORLD Report」『LAMMAGA』39:74-77。
2017 「旅・いろいろ地球人 世界のビーズ① 人類の最高傑作」『毎日新聞』4月6日夕刊。
2017 「世界はビーズでつながった」『hokcier(ホクシエル)』007:11-15。
2017 「みんぱく公開講演会 恵みの水、災いの水 パネル討論(司会:池谷和信)」『毎日新聞』4月11日。
2017 「旅・いろいろ地球人 世界のビーズ② 多種多様なストーリー」『毎日新聞』4月13日夕刊。
2017 「ペーパービーズの魅力」『みんぱく e-news』191号。
2017 「人と家畜のエピソード62 アフリカの野生動物をつくる」『JVM 獣医畜産新報』70(5):325。
2017 「ビーズから見たアジア世界——貝殻とダチョウの卵殻に注目して」野林厚志・彭宇潔編『パレオアジア』第3回研究大会(発表要旨)pp.68-71。
2017 「世界はビーズでつながっている」『ラジオ深夜便』2017年6月号(No.203), 8-17頁, 東京:NHKサービスセンター。
2017 「沖縄の在来家畜から世界へ」『BIOSTORY』27:56-57。
2017 「珍品図鑑 サルの歯の首飾り」『BIOSTORY』27:1。
2017 「人と家畜のエピソード63 アフリカにおけるキリンと人びと」『JVM 獣医畜産新報』70(6):405。
2017 「熱帯アジアにおけるブタの放牧について」『第27回日本熱帯生態学会年次大会(奄美)講演要旨集』, p.84。

- 2017 「趣旨説明」生き物文化誌学会15回学術大会（大阪大会）シンポジウム「私たちは、いかに生き物文化に親しむか？——ミュージアムの挑戦」大阪：国立民族学博物館。
- 2017 「つなぐ・かざる・みせる——ビーズにさぐる人類の多様な営み」『国立民族学博物館 友の会ニュース』239：4，大阪：千里文化財団。
- 2017 「人と家畜のエピソード64 イスラーム文化圏のなかでの豚肉屋」『JVM 獣医畜産新報』70(7)：559。
- 2017 「ビーズに秘められた可能性——みんぱくビーズ展を終えて」『Bead Art & Embroidery』22：78-79。
- 2017 「特別研究プレシンポジウム「歴史生態学から見た人と生き物の関係」」『民博通信』157：26。
- 2017 「人と家畜のエピソード65 ゲムズボックスと人」『JVM 獣医畜産新報』70(8)：639。
- 2017 「書評 宮崎学・小原真史著『森の探偵』」『秋田さきがけ新聞』8月27日。
- 2017 「風変わりな姿をしたイッカクとユニコーン」『月刊みんぱく』41(9)：14-15，大阪：千里文化財団。
- 2017 「人と家畜のエピソード66 消えつつある世界の牛車」『JVM 獣医畜産新報』70(9)：692。
- 2017 「野生動物から家畜への道——家畜化・品種化からみた人類文明誌」（公開シンポジウム「動物たちが人間社会にもたらす恵みと安寧」）『第160回日本獣医学会学術集会講演要旨集』，p.149，第160回日本獣医学界学術集会。
- 2017 「熱帯アジアの家畜生産と流通に関する研究動向」『日本地理学会発表要旨集 No.92』，p.138。
- 2017 「北東アジアのガラス玉の道——アイヌのタマサイを中心に」『民博通信』158：30。
- 2017 「人と家畜のエピソード67 拡大する牛の放牧——ニカラグアのフィールドから」『JVM 獣医畜産新報』70(10)：799。
- 2017 「ビーズに秘められた可能性① 木の実、動物の骨・歯」『Bead Art & Embroidery』23：68-71。
- 2017 「座談会 III 21世紀に金沢で比較文化学を学ぶ意味と意義——地方から世界を、世界から地方を問う姿勢を体得する」山田孝子・小西賢吾編『比較でとらえる世界の諸相』，pp.103-118，英明企画編集。
- 2017 「座談会 II グローバル時代における比較文化学の方法論——飛び込む、考える、問い直す」山田孝子・小西賢吾編『比較でとらえる世界の諸相』，pp.53-74，英明企画編集。
- 2017 「座談会 I 比較文化学とは何か——その学問的性格と魅力、豊かな可能性」山田孝子・小西賢吾編『比較でとらえる世界の諸相』，pp.9-24，英明企画編集。
- 2017 「人と家畜のエピソード68 ニカラグアのウミガメと人」『JVM 獣医畜産新報』70(11)：879。
- 2017 「人は、生き物を描き続ける」『BIOSTORY』28：70-71。
- 2017 「人と家畜のエピソード69 中国の都市の食肉市場」『JVM 獣医畜産新報』70(12)：959。
- 2017 「狩猟採集民と狩猟採集民の相互関係——降水量変動、キャンプの移動、文化伝播（楽器）」小林豊編『パレオアジア文化史学——アジア新人文化形成プロセスの総合的研究第4回研究大会』文部科学省科学研究費補助金新学術領域研究（研究領域提案型）2016-2020「パレオアジア文化史学」pp.56-57。
- 2017 「10万年にわたる地球のビーズ文化——民博・特別展『ビーズ——つなぐ・かざる・みせる』からの展望」『民博通信』159：12-13。
- 2018 「人と家畜のエピソード70 犬と人のかかわり」『JVM 獣医畜産新報』71(1)：79。
- 2018 「野生からペットへ——ネコと人の共存を求めて」特集「ねこ 猫 ネコ」『月刊みんぱく』42(1)：7。
- 2018 「ビーズに秘められた可能性② ダチョウの卵の殻」『Bead Art & Embroidery』24：64-67。
- 2018 Natural Resources Use by Domestic Pig in the Tropics: From Asian Forests to the World. Abstract papers of International Workshop “Forest Ecological Resources Security for Next Generation: Development and Routine Utilization of Forest Ecological Resources and their Domestication”.
- 2018 「人と家畜のエピソード71 アマゾンの森に暮らす豚」『JVM 獣医畜産新報』71(2)：85。
- 2018 「解説」『カラハリ砂漠の狩猟採集民』（84分）国立民族学博物館制作（みんぱく映像民族誌第29集）。
- 2018 「人と家畜のエピソード72 対馬における伝統養蜂の危機」『JVM 獣医畜産新報』71(3)：224。
- 2018 “Human Relationships with Animals and Plants Depicted at the National Museum of Ethnology Exhibition”（国立民族学博物館の展示に表現された人・動物、人・植物関係）特別研究 国際シンポジウム「Human Relationships with Animals and Plants: Perspectives of Historical Ecology（歴史生態学から見た人と生き物の関係）」要旨集，pp.34-35，p.88，大阪：国立民族学博物館。

2018 “Human History, Civilization, and Multiple Historical Ecologies” (人類の歴史、文明と多様な歴史生態学) 特別研究 国際シンポジウム「Human Relationships with Animals and Plants: Perspectives of Historical Ecology (歴史生態学から見た人と生き物の関係)」要旨集, 9-10頁, 71頁, 国立民族学博物館。

Ikeya, K.

2017 Exhibition: Beads in the World. *MINPAKU Anthropology Newsletter* 44: 11-12.

2017 Changing Marine Resources in Japan: Abalone, Kelp, Sea Urchin. Tentative Programme ICAS (International Convention of Asia Scholars) 10, p.384.

2017 Dispersal of prehistoric hunter-gatherers and roles/materials of beads: an ethnoarchaeological approach. Abstract papers of the International Workshop “Across the Movius Line- Cultural Geography of South and Southeast Asia in the Late Pleistocene”, pp.10-11, PaleoAsia Project secretary’s office.

2017 “Environmental Anthropology at the National Museum of Ethnology” *MINPAKU Anthropology Newsletter* 45: 2-3.

◎映像音響メディアによる業績

・ラジオ

2017年5月10日 「ビーズ——つなく・かざる・みせる」『メキキのキキメ〜ホクシェル編集部』ウメダFM Be Happy!789

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2018年2月11日 「趣旨説明」、みんぱく映画会・公開セミナー「渡り鳥と人とのかかわり——北東アジアから考える」、国立民族学博物館

2018年3月11日 「趣旨説明：世界のなかの日本の焼畑、佐々木高明氏の焼畑へのまなざし」人間文化研究機構 北東アジア地域研究推進事業国立民族学博物館拠点国内シンポジウム『北の焼畑、南の焼畑』、国立民族学博物館

2018年3月19日 “Human History, Civilization, and Multiple Historical Ecologies” (人類の歴史、文明と多様な歴史生態学) 特別研究 国際シンポジウム「Human Relationships with Animals and Plants: Perspectives of Historical Ecology (歴史生態学から見た人と生き物の関係)」、国立民族学博物館

2018年3月21日 “Human Relationships with Animals and Plants Depicted at the National Museum of Ethnology Exhibition” (国立民族学博物館の展示に表現された人・動物、人・植物関係) 特別研究 国際シンポジウム「Human Relationships with Animals and Plants: Perspectives of Historical Ecology (歴史生態学から見た人と生き物の関係)」、国立民族学博物館

2018年3月22日 “Introduction”, Seminar of the Research Departments Minpaku (Co-organized with Paleo-Asia research team B01), March 22, National Museum of Ethnology.

・共同研究会

2017年12月16日 「コメント」「消費からみた狩猟研究の新展開——野生獣肉の流通と食文化をめぐる応用人類学的研究」民博共同研究会 (代表：大石高典)、国立民族学博物館

2018年2月3日 「民博展示場からドメスティケーションを考える：日本養蜂の事例を中心として」、民博共同研究会「もうひとつのドメスティケーション——家畜化と栽培化に関する人類学的研究」(代表：卯田宗平)

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2017年5月6日 「ビーズの文化、ビーズの文明」比較文明学会、国立民族学博物館

2017年5月13日 「ビーズから見たアジア世界——貝殻とダチョウの卵殻に注目して」パレオアジア文化史学——アジア新人文化形成プロセスの総合的研究 第3回研究大会、国立民族学博物館

2017年6月18日 「熱帯アジアにおけるブタの放牧について」第27回日本熱帯生態学会年次大会、奄美文化センター

2017年6月24日 「趣旨説明」生き物文化誌学会15回学術大会 (大阪大会) シンポジウム「私たちは、いかに生き物文化に親しむか? ——ミュージアムの挑戦」、国立民族学博物館

2017年6月27日 「クジラ・イルカの文化史」兵庫県阪神シニアカレッジ 国際理解学科、尼崎市中小企業セン

ター

- 2017年6月27日 「ブタの文化史」兵庫県阪神シニアカレッジ 国際理解学科、尼崎市中小企業センター
- 2017年6月30日 「ニワトリの文化史」兵庫県阪神シニアカレッジ 国際理解学科、尼崎市中小企業センター
- 2017年6月30日 「ラクダの文化史」兵庫県阪神シニアカレッジ 国際理解学科、尼崎市中小企業センター
- 2017年7月23日 Changing Marine Resources in Japan: Abalone, Kelp, Sea Urchin (Session “Production and Distribution of Natural Resources in Northeast Asia”). International Convention of Asia Scholars (ICAS) 10, Chiang Mai International Exhibition and Convention Centre (CMECC)
- 2017年10月10日 Utilization and Distribution of the Natural Resources in Japan, The 15th Northeast Asian Academic Network: Ecological Economy & Green Development (NAAN 2017), 10th October, 2017, School of Economics, Central South University of Forestry and Technology, Changsha, China.
- 2017年11月11日 「コメント」2017年度第1回アフリカ・モラル・エコノミー研究会、京都大学農学部
- 2017年11月19日 Dispersal of Prehistoric Hunter-Gatherers and Roles/Materials of Beads: An Ethnoarchaeological Approach. International Workshop on Cultural History of PaleoAsia “Across the Movius Line- Cultural Geography of South and Southeast Asia in the Late Pleistocene”, Intermediateque, JP Tower Museum, Tokyo
- 2017年12月9-10日 「狩猟採集民と狩猟採集民の相互関係——降水量変動、キャンプの移動、文化伝播（楽器）」（ポスターセッション）、パレオアジア文化史学——アジア新人文化形成プロセスの総合的研究第4回研究大会、東京大学
- 2018年1月16日 Natural Resources Use by Domestic Pig in the Tropics: From Asian Forests to the World. International Workshop “Forest Ecological Resources Security for Next Generation: Development and Routine Utilization of Forest Ecological Resources and their Domestication”, Center for Southeast Asian Studies (CSEAS), Kyoto University.
- 2018年3月23日 (高木仁と共同発表)「アマゾン川上流、密林の都イキトスとベレン市場の食肉鮮魚」日本地理学会 2018年春季学術大会、東京学芸大学
- 2018年3月23日 「モンスーンアジアの家畜と人」（モンスーンアジアの風土研究グループ）日本地理学会 2018年春季学術大会、東京学芸大学
- ・研究講演
- 2017年4月1日 「つなぐ・かざる・みせる——ビーズにさぐる人類の多様な営み」みんなく友の会講演会、国立民族学博物館
- 2017年4月12日 「世界はビーズでつながっている」連続講座「みんなく×ナレッジキャピタル ビーズ——つなぐ・かざる・みせる」CAFE Lab. グランフロント大阪北館ナレッジキャピタル1階
- 2017年4月21日 「民博夜話 ビーズ——つなぐ・かざる・みせる」吹田歴史文化まちづくりセンター浜屋敷、吹田歴史文化まちづくり協会
- 2017年9月13日 「野生動物から家畜への道——家畜化・品種化からみた人類文明誌」第160回日本獣医学会学術集会 公開シンポジウム「動物たちが人間社会にもたらす恵みと安寧」、鹿児島大学
- 2018年1月24日 「マイナス30度の世界に生きる——狩猟民チュクチの暮らし」カレッジシアター「地球探検紀行」あべのハルカス近鉄本店
- 2018年1月25日 「犬を使用する狩猟法（犬猟）の人類史」研究会「狩猟採集民と犬の関わり」、東京外国語大学
- 2018年3月24日 「狩猟採集民からみた地球——犬と人とのかわりを中心として」、Liberal Arts Lab Darwin Room 主催、ダーウィンルーム（東京都世田谷区）
- ・展示活動
- 特別展「ビーズ——つなぐ・かざる・みせる」実行委員長（2017年3月9日～6月6日）
- ・広報・社会連携活動
- 2017年4月14日 「総論：生き物と人がつくりだす現代文明」大阪府高齢者大学校「世界の文化に親しむ科」
- 2017年4月21日 「世界のビーズ」大阪府高齢者大学校「世界の文化に親しむ科」
- ・みんなくウィークエンド・サロン
- 2017年4月16日 「世界のビーズ、日本のビーズ」第461回ウィークエンド・サロン

◎調査活動

・国内調査

- 2017年7月18日—岩手県山田町（あわびに関する資料収集）
- 2017年10月1日—静岡県（日本の家畜と野生動物に関する資料収集）
- 2018年2月1日～2月2日—長崎県対馬市（対馬の養蜂についての調査）
- 2018年2月28日～3月2日—熊本県五木村（焼畑の調査）

・国外調査

- 2017年7月1日～7月7日—フランス、パリ人類博物館および社会科学研究所（アジアの食文化に関する資料収集）
- 2017年7月19日～7月24日—タイ・チェンマイで開催された国際会議（ICAS10）に参加
- 2017年8月15日～8月25日—ニカラグア（中米における家畜飼育に関する資料収集）
- 2017年9月1日～9月5日—タイ（狩猟採集に関する資料収集）
- 2017年9月21日～9月26日—タイ（狩猟採集に関する資料収集）
- 2017年10月27日～10月30日—中国・（中南林業科技大学にて開催の研究会議出席）
- 2017年11月3日～11月5日—韓国・ソウル（第7回アジア食会議に参加）
- 2017年12月11日～12月16日—ラオス（狩猟採集に関する資料収集）
- 2017年12月22日～12月27日—タイ（狩猟採集に関する資料収集）
- 2018年1月4日～1月11日—ペルー（森林資源の利用についての資料収集）
- 2018年2月13日～2月19日—南アフリカ、ボツワナ（家畜の乳利用の資料収集）
- 2018年3月26日～3月30日—ラオス（狩猟採集に関する資料収集）

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（3人）、副指導教員（3人）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（A））「乳文化の視座からの牧畜論考——全地球的な地域間比較による新しい牧畜論の創生」（研究代表者：平田昌弘（帯広畜産大学）研究分担者、科学研究費（基盤研究（A））「熱帯の牧畜における生産と流通に関する政治生態学的研究」研究代表者、科学研究費（基盤研究（A））「森林生態資源の地域固有性とグローバル・ドメスティケーションに関する研究」（研究代表者：小林繁男（京都大学）研究分担者、科学研究費（新学術領域研究（研究領域提案型））「人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築」（研究代表者：野林厚志）研究分担者、科学研究費（基盤研究（B））「低生産性品種・形質に向けられる心象の学融合解析と品種継承施策のパラダイム転換」（研究代表者：遠藤秀紀（東京大学）研究分担者、科学研究費（基盤研究（B））「東南アジアにおけるサトイモの遺伝的多様性のマッピングによる栽培化モデルの検証」（研究代表者：ピーター J. マシウス）研究分担者

・他機関から委嘱された委員など

Nomadic Peoples 編集委員、Museum Anthropology (USA) 編集委員、Tribes and Tribals (India) 編集委員、日本アフリカ学会評議員、人文地理学会理事、生き物文化誌学会副会長、ヒトと動物の関係学会評議員、北海道立北方民族博物館研究協力員、家畜資源研究会理事、総合地球環境学研究所 運営会議員、ピオストーリー編集委員（編集長）

・非常勤講師

広島大学大学院国際協力研究科「途上国農村地域研究」（集中講義）

印東道子 [いんとう みちこ] ————— 教授

【学歴】東京女子大学文理学部史学科卒（1976）、ニュージーランド・オタゴ大学大学院人類学部修士課程修了（1982）、ニュージーランド・オタゴ大学大学院人類学部博士課程修了（1988）【職歴】東京女子大学文理学部史学科研究助手（1976）、北海道東海大学国際文化学部助教授（1988）、北海道東海大学国際文化学部教授（1996）、国立民族学博物館民族社会研究部教授（2000）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任教授（2001）、総合研究大学院大学文化科学研究科地域文化学専攻長（2004）、放送大学客員教授（2006）、国立民族学博物館人類文明誌研究部教授

(2017) 【学位】 Ph. D. (ニュージーランド・オタゴ大学大学院人類学部博士課程 1989)、M.A. (ニュージーランド・オタゴ大学大学院人類学部修士課程 1982) 【専攻・専門】 オセアニア先史学・民族学 オセアニアの土器文化、島嶼環境における人間居住 【所属学会】 日本オセアニア学会、日本人類学会、日本考古学協会、New Zealand Archaeological Society、Indo-Pacific Prehistory Association

【主要業績】

[単著]

印東道子

2014 『南太平洋のサンゴ島を掘る——女性考古学者の謎解き』（フィールドワーク選書4）京都：臨川書店。

2002 『オセアニア 暮らしの考古学』（朝日選書715）東京：朝日新聞社。

[編著]

印東道子編著

2013 『人類の移動誌』 京都：臨川書店

【受賞歴】

2006 大同生命地域研究奨励賞

【2017年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

島嶼環境への人類の移動と適応

・研究の目的、内容

1. ファイス島で行ってきた発掘調査と化学分析、骨類分析などの総合報告書の作成を引き続き行う。

2. 科研費（基盤研究（B））「ウォーラシア海域と環太平洋域における人類移住・海洋適応・物質文化の比較研究」（研究代表者：小野林太郎）の研究分担者として、主としてインドネシア多島海地域とオセアニアの物質文化の比較研究を行う。

・成果

1. これまでの研究成果をまとめた単著『島に住む人類——オセアニアの楽園創世記』（臨川書店）を出版した（2017年7月刊行）。

2. 共同研究会「アジア・オセアニアにおける海域ネットワーク社会の人類史的研究：資源利用と物質文化の時空間比較」（研究代表：小野林太郎）の成果を、共同編者として出版した。小野林太郎・長津一史・印東道子（編）『海民の移動誌——西太平洋のネットワーク社会』（昭和堂）から（民博の外部出版助成を受けて2018年3月刊行）。

3. 「もの」に関する共同研究（東京外語大学 AA 研主催）の成果の英訳本（I. Tokoro & K. Kawai (eds.), *An Anthropology of Things*, Kyoto University Press 2018, March）が科研費成果公開の学術図書出版助成を得て刊行され、印東の土器に関する分担執筆論文も含まれた（M. Intoh, An ecological analysis of pottery culture: From clay to “mono”. pp.96-112）

◎出版物による業績

[単著]

印東道子

2017 『島に住む人類——オセアニアの楽園創世記』 京都：臨川書店。

[編著]

小野林太郎・長津一史・印東道子編

2018 『海民の移動誌——西太平洋のネットワーク社会』 京都：昭和堂。[査読有]

[分担執筆]

小野林太郎・長津一史・印東道子

2018 「海民の移動誌とその視座」小野林太郎・長津一史・印東道子編『海民の移動誌——西太平洋のネットワーク社会』 pp.2-37, 京都：昭和堂。[査読有]

印東道子

2018 「オセアニアの島嶼間ネットワークとその形成過程」小野林太郎・長津一史・印東道子編『海民の移

動誌——西太平洋のネットワーク社会』pp.334-363, 京都: 昭和堂。[査読有]

Intoh, M.

2018 An “Ecological” Analysis of the Pottery Culture: from Clay to “Mono”. In T. Ikuya and K. Kawai (eds.) *An Anthropology of Things*, pp.96-111. Kyoto: Kyoto University Press.

2018 Spondylus as a Symbol of Power. In K. Ikeya (ed.) *Beads in the World*, pp.60-61. Osaka: National Museum of Ethnology.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・みんなくウィークエンド・サロン

2017年10月8日 「島に住む人類」第483回ウィークエンド・サロン

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（B））「ウォーラシア海域と環太平洋域における人類移住・海洋適応・物質文化の比較研究」（研究代表者：小野林太郎（東海大学））研究分担者

齋藤 晃 [さいとう あきら]————— 教授

【学歴】 京都大学文学部フランス語学フランス文学専攻卒（1988）、東京大学大学院総合文化研究科文化人類学専攻修士課程修了（1991）、東京大学大学院総合文化研究科文化人類学専攻博士課程単位取得退学（1994）【職歴】 国立民族学博物館第4研究部助手（1996）、国立民族学博物館博物館民族学研究部助手（1998）、国立民族学博物館博物館民族学研究部助教授（2003）、国立民族学博物館先端人類科学研究部助教授（2004）、総合研究大学院大学文化科学研究科兼任（2006）、国立民族学博物館先端人類科学研究部准教授（2007）、国立民族学博物館先端人類科学研究部教授（2014）、国立民族学博物館人類文明誌研究部教授（2017）【学位】 学術修士（東京大学大学院総合文化研究科 1991）【専攻・専門】 文化人類学、ラテンアメリカ研究【所属学会】 日本文化人類学会、日本ラテンアメリカ学会

【主要業績】

[共編]

Saito, A. and C. Rosas Lauro (eds.)

2017 *Reducciones: la concentración forzada de las poblaciones indígenas en el Virreinato del Perú*. Lima: Fondo Editorial de la Pontificia Universidad Católica del Perú.

[共著]

岡田裕成・齋藤 晃

2007 『南米キリスト教美術とコロニアリズム』名古屋：名古屋大学出版会。

[単著]

齋藤 晃

1993 『魂の征服——アンデスにおける改宗の政治学』東京：平凡社。

【2017年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

植民地期アンデスにおける副王トレドの総集住化の総合的研究

・研究の目的、内容

1570年代、スペイン統治下のアンデスにおいて、世界史上希有な社会工学実験が実施された。第5代ペルー副王フランシスコ・デ・トレドの命令により、かつてのインカ帝国の中核地域で約150万の先住民が基盤目状に整然と区画された1千以上の町に強制移住させられた。総集住化と呼ばれるこの政策は、在来の居住形態、社会組織、権力関係、アイデンティティを大きく変えたといわれているが、その内実には不明な点が多い。本研究では、地理情報システム等を活用して、副王トレドの総集住化の全体像の解明を目指す。なお、本研究は、科学研究費補助金基盤研究（A）「アンデスにおける植民地的近代——副王トレドの総集住化の総合的研究」（2015～2019年度、代表者：齋藤晃）の一環として実施される。

・成果

6月3日、東京大学で実施された日本ラテンアメリカ学会第38回定期大会において、「副王フランシスコ・デ・トレドの総集住化の総合的研究——人文情報学の方法による貢献」と題するパネルを開催した。このパネルでは、科研費による国際共同研究「アンデスにおける植民地的近代——副王トレドの総集住化の総合的研究」のマクロ分析班のメンバーがこれまでの研究成果を発表した。齋藤はパネルの責任者として冒頭で趣旨説明をおこなった。

2月23日から24日にかけて、同共同研究の一環として、米国のナッシュビル市において、『Unsettling Resettlement: Forced Concentration of the Native Population in the Colonial Andes』と題する国際シンポジウムを開催した。国立民族学博物館とヴァンダービルト大学が共催したこのシンポでは、研究分担者と海外共同研究者が一堂に会し、これまでの研究成果を発表した。齋藤はシンポの冒頭で趣旨説明をおこなったほか、人文情報学のツールを活用した史料分析の成果を提示した。

◎出版物による業績

[その他]

齋藤 晃

2017 「宣教と適応——グローバル・ミッションの近世」『民博通信』158：22-23。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2018年2月23～24日 International Symposium “Unsettling Resettlement: Forced Concentration of the Native Population in the Colonial Andes” (国際シンポジウムの実行委員長：S.A. Wernke と共同). Vanderbilt University, Nashville, TN, USA.

2018年2月23日 ‘Does Toledo’s Resettlement Remain in the Realm of the Unknown?’ (趣旨説明). International Symposium “Unsettling Resettlement: Forced Concentration of the Native Population in the Colonial Andes”. Vanderbilt University, Nashville, TN, USA.

2018年2月23日 ‘Visualizing the Relationship between *Repatriamientos* and *Reducciones*: An Experiment with the Resource Description Framework’ (研究報告：Y. Kondo, N. Mizota, T. Koyama と共同). International Symposium “Unsettling Resettlement: Forced Concentration of the Native Population in the Colonial Andes”. Vanderbilt University, Nashville, TN, USA.

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2017年6月3日 パネル『副王フランシスコ・デ・トレドの総集住化の総合的研究——人文情報学の方法による貢献』（パネルの責任者）、日本ラテンアメリカ学会第38回定期大会、東京大学

2017年6月3日 「アンデスにおける植民地的近代——副王トレドの総集住化の総合的研究」（趣旨説明）、パネル『副王フランシスコ・デ・トレドの総集住化の総合的研究——人文情報学の方法による貢献』、日本ラテンアメリカ学会第38回定期大会、東京大学

・みんぱくウィークエンド・サロン

2017年7月16日 「チュルカナスのやきもの」第473回ウィークエンド・サロン

◎調査活動

・海外調査

2018年2月21日～2月27日—アメリカ合衆国（アンデスにおける先住民の集住化に関する国際シンポジウムへの出席）

2018年3月4日～3月11日—イタリア（植民地期アンデスの先住民の集住化に関する文献調査）

◎大学院教育

・論文審査（総研大に限る）

博士論文審査委員（1件）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（A））「アンデスにおける植民地的近代——副王トレドの総集住化の総合的研究」研究代表者

關 雄二 [せき ゆうじ] ————— 副館長(企画調整担当)、人類文明誌研究部教授

上羽陽子 [うえば ようこ] ————— 准教授

1974年生。【学歴】大阪芸術大学芸術学部工芸学科染織コース卒(1997)、大阪芸術大学大学院芸術文化研究科博士前期課程修了(1999)、大阪芸術大学大学院芸術文化研究科博士後期課程修了(2002)【職歴】大阪芸術大学大学院芸術文化研究科研究員(2002)、大阪市立クラフトパーク織物工房非常勤指導員(2003)、大阪芸術大学通信教育部工芸学科ファイバーコース非常勤講師(2003)、京都精華大学非常勤講師(2007)、国立民族学博物館文化資源研究センター助教(2008)、国立民族学博物館文化資源研究センター准教授(2013)、総合研究大学院大学准教授併任(2014)、国立民族学博物館人類文明誌研究部准教授(2017)【学位】博士(芸術文化学)(大阪芸術大学2002)、修士(芸術文化学)(大阪芸術大学1999)【専攻・専門】民族芸術学、染織研究、手工芸研究【所属学会】民族芸術学会、意匠学会、日本風俗史学会、日本南アジア学会、生き物文化誌学会

【主要業績】

[単著]

上羽陽子

2015 『インド染織の現場——つくり手たちに学ぶ』京都：臨川書店。

2006 『インド・ラバーリー社会の染織と儀礼——ラクダとともに生きる人びと』京都：昭和堂。

[論文]

上羽陽子

2012 「インド・グジャラート州アーメダバード市における女神儀礼用染色布の製作技術の現状」『国立民族学博物館研究報告』37(1)：1-51。

【受賞歴】

2010 意匠学会作品賞

2007 第4回木村重信民族芸術学会賞

【2017年度の活動報告】

◎各個人研究

・研究課題

現代インドの手工芸文化に関する民族芸術学的研究

・研究の目的、内容

本研究は、現代インドにおける手工芸品のつくり手たちが、急速に変化する自然環境や社会環境にどのように対応しながら、伝統的な手工芸技術の生産形態を保持あるいは変容させつつ、現代的な要素をいかに選択しているかを明らかにすることが目的である。

本年度は、下記2点の視点から調査研究を進めた。

1) インドの女神儀礼用布を事例に、製作技術の改変や販売手法を明らかにし、生産者がローカルな市場の価値志向とグローバル市場の価値志向のそれぞれに応じた戦略的な生産をどのようにしているかについて考察をする。本研究は、科学研究費(基盤研究(C))「現代インドにおける染織技術の戦略的継承法に関する民族芸術学的研究」(代表：報告者、2014～2017年度)による。

2) ファッション素材として、インド国内外で近年流通しているアッサムの野蚕糸および野蚕織布の生産・流通・消費に焦点をあて、グローバル・ネットワークの拡大によって、それらがどのように変化してきたかを明らかにする。本研究は科学研究費(基盤研究(A))「アジア地域における布工芸品の生産・流通・消費をめぐる文化人類学的研究」(代表：中谷文美、2014～2017年度)による。

・成果

本年度は、上記外部資金をもちいて、カナダのオタワで開催された「IUAES2017」(会場：オタワ大学)において、「Fashionable tradition: innovation and continuity in the production and consumption of handmade textiles and crafts」のパネルにて、「Strategic Production in Response to Value Orientations: Dyed and Printed Textiles for Goddess Rituals in Gujarat State, Western India」、『第59回意匠学会大会』(会場：秋田

にぎわい交流館)にて「染織技術の戦略的継承法——インド、グジャラート州の女神儀礼用染色布を事例に」のタイトルで研究発表をおこなった。これらの発表内容については2018年度に英語論文として報告予定である。

◎出版物による業績

[分担執筆]

Ueba, Y.

- 2018 Beadworks of Rabari Society Protecting Infants. In K. Ikeya and National Museum of Ethnology (eds.) *Beads in the World*, pp.74-75. Osaka: National Museum of Ethnology.

[その他]

上羽陽子

- 2017 「編組品を事例に——『線具』研究の可能性」『民族自然誌研究会 第86回例会「ござ・笠・箕・笠・バスケット——編組品とその植物素材」主催：民族自然誌研究会、共催：新学術領域研究（パレオアジア文化史学）「人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築（課題番号16H06411、代表：野林厚志）、於：京都大学 楽友会館 2階大会議室」。(2017年4月15日)
- 2017 「ラクダ部隊と『小学生新聞』」特集「沖守弘インド写真データベース」『月刊みんぱく』41(6)：9。
- 2017 「染織技術の戦略的継承法——インド、グジャラート州の女神儀礼用染色布を事例に」『意匠学会 第59回大会 発表要旨集』p.6, 東京：意匠学会。
- 2017 「国立民族学博物館の収蔵品②⑤ 染織技術解説パネル——技術から知る南アジア」『文部科学 教育通信』419：2。
- 2017 「線からうまれる造形物」『国立民族学博物館 展示案内』pp.162-167, 大阪：国立民族学博物館。
- 2017 「手仕事だから安い世界——インド北東部アッサムの野蚕糸から」『月刊みんぱく』41(12)：18-19。
- 2018 「染織技術の戦略的継承法——インド、グジャラート州の女神儀礼用染色布を事例に」『デザイン理論』(71)：28-29。
- 2018 「インドの刺繍」インド文化事典編集委員会編『インド文化事典』pp.332-333, 東京：丸善出版。
- 2018 「ペイズリーとカシミヤ・ショール」インド文化事典編集委員会編『インド文化事典』p.324, 東京：丸善出版。
- 2018 「牧畜民の世界」インド文化事典編集委員会編『インド文化事典』pp.72-73, 東京：丸善出版。
- 2018 「繊維・衣料品」インド文化事典編集委員会編『インド文化事典』pp.684-685, 東京：丸善出版。

上羽陽子・金谷美和・中谷文美

- 2017 「『線具 lineware』——紐と糸をめぐる技術民族史的研究」野林厚志編『パレオアジア文化史学計画研究 B01班 2016年度研究報告——アジア新人文化形成プロセスの総合的研究』pp.10-15, 文部科学省学術研究費補助金新学術領域研究（研究領域提案型）2016-2020年度計画研究 B01班（研究課題番号16H06411）(2017年5月10日)
- 2017 「アイヌ民族の可塑性『線具』にみる素材・製作技術の多様性」小林豊編『Proceedings of the 4th Conference on Cultural History of PaleoAsia』p.58, 文部科学省学術研究費補助金新学術領域研究（研究領域提案型）2016-2020年度計画研究 B01班。（研究課題番号16H06411）(2017年12月9日)
- 2018 「インド、アッサムにおける生態資源利用——『線具』を中心に」野林厚志編『パレオアジア文化史学計画研究 B01班2017年度研究報告——アジア新人文化形成プロセスの総合的研究』pp.79-80, 文部科学省学術研究費補助金新学術領域研究（研究領域提案型）2016-2020年度計画研究 B01班（研究課題番号16H06411）(2018年3月30日)

Kanatani, A., Y. Ueba, and A. Nakatani

- 2017 Lineware: Usage of Ecological Resources in Assam, India. In A. Nobayashi and Y. Peng (eds.) *Proceedings of the 3rd Conference on Cultural History of PaleoAsia*, pp.81-82. 文部科学省学術研究費補助金新学術領域研究（研究領域提案型）2016-2020年度計画研究 B01班。（研究課題番号16H06411）(2017年5月13日)

Ueba, Y., M. Kanatani, and A. Nakatani

- 2017 Diverse materials mad techniques to produce bendable “lineware” in Ainu culture. In Y. Kobayashi (ed.) *Proceedings of the 4th Conference on Cultural History of PaleoAsia*, p.59. 文部科学省学術研究費補助金新学術領域研究（研究領域提案型）2016-2020年度計画研究 B01班。（研究課題番号16H06411）(2017年12月9日)

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会発表

2017年5月6日 “Strategic Production in Response to Value Orientations: Dyed and Printed Textiles for Goddess Rituals in Gujarat State, Western India”, IUAES 2017, Ottawa University, Canada.

2017年8月9日 「染織技術の戦略的継承法——インド、グジャラート州の女神儀礼用染色布を事例に」意匠学会主催『第59回意匠学会大会』秋田にぎわい交流館

・研究講演

2017年6月7日 「インド、アッサムの野蚕利用」京都市立芸術大学主催、京都市立芸術大学

・共同研究会での報告

2017年5月14日 「インド、アッサムにおける生態資源利用——『線具』を中心に」（金谷美和、中谷文美との共同発表）『(新学術領域研究) 人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築』（代表：野林厚志）『パレオアジア文化史学 第3回研究大会』国立民族学博物館

2017年12月10日 「アイヌ民族の可塑性『線具』にみる素材・製作技術の多様性」（金谷美和、中谷文美との共同発表）『(新学術領域研究) 人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築』（代表：野林厚志）『パレオアジア文化史学 第4回研究大会』東京大学

・その他

2017年5月9日 「模写実践と異文化理解——インド西部の刺繍布を読みとる①」川島テキスタイルスクール主催、川島テキスタイルスクール（依頼あり）

2017年6月6日 「模写実践と異文化理解——インド西部の刺繍布を読みとる②」川島テキスタイルスクール主催、川島テキスタイルスクール（依頼あり）

2017年6月21日 「手織り絨毯の織技術について」絨毯ギャラリー主催、クロス・ウェーブ梅田（依頼あり）

2017年7月4日 「模写実践と異文化理解——インド西部の刺繍布を読みとる③」川島テキスタイルスクール主催、川島テキスタイルスクール（依頼あり）

2017年8月5日 「光放つ布 インド伝統のミラー刺繍を体験！」石川県立歴史博物館主催・国立民族学博物館友の会共催『特別展「イメージの力——国立民族学博物館コレクションにさぐる」関連ワークショップ、石川県立歴史博物館（依頼あり）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（A））「アジア地域における布工芸品の生産・流通・消費をめぐる文化人類学的研究」（研究代表者：中谷文美（岡山大学））研究分担者、科学研究費（基盤研究（C））「現代インドにおける染織技術の戦略的継承法に関する民族芸術学的研究」研究代表者、科学研究費（新学術領域研究（研究領域提案型））「人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築」（研究代表者：野林厚志）研究分担者

卯田宗平 [うだ しゅうへい] ————— 准教授

1975年生。【学歴】立命館大学産業社会学部卒（1998）、立命館大学大学院理工学研究科修士課程修了（2000）、総合研究大学院大学文化科学研究科博士課程修了（2003）【職歴】総合研究大学院大学日本学術振興会特別研究員（2000）、千葉大学文学部非常勤講師（2004）、高崎経済大学地域政策学部非常勤講師（2004）、中央民族大学日本学術振興会海外特別研究員（2005）、中央民族大学民族学社会学学院訪問学者兼外籍講師（2005）、東京大学日本学術振興会特別研究員（2008）、東京大学日本・アジアに関する教育研究ネットワーク機構特任講師（2011）、東京大学東洋文化研究所汎アジア研究部門講師（兼任）（2011）、国立民族学博物館先端人類科学研究部准教授（2015）、総合研究大学院大学文化科学研究科准教授（2016）、国立民族学博物館人類文明誌研究部准教授（2017）【学位】博士（文学）（総合研究大学院大学 2003）【専攻・専門】環境民俗学・東アジア地域研究【所属学会】日本民俗学会、文化人類学会、生態人類学会、The Society for Human Ecology (SHE)、生き物文化誌学会、日本現代中国学会

【主要業績】

[論文]

卯田宗平

2015 「ポスト『北方の三位一体』時代の中国エヴェンキ族の生業適応——大興安嶺におけるトナカイ飼養の事例」『アジアの生態危機と持続可能性——フィールドからのサステナビリティ論』（研究双書 No.616）pp.73-108, 千葉：アジア経済研究所。

[単著]

卯田宗平

2014 『鵜飼いと現代中国——人と動物、国家のエスノグラフィ』東京：東京大学出版会。

[編著]

卯田宗平編

2014 『アジアの環境研究入門——東京大学で学ぶ15講』（古田元夫監修）東京：東京大学出版会。

【受賞歴】

2010 第5回日本文化人類学会奨励賞

1998 学部長コース賞

【2017年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

鵜飼文化の比較研究

・研究の目的、内容

本年度の研究では、(1)日本の鵜飼文化を対象に、従来の鵜飼研究で問われることがなかったウミウの人工繁殖の技術、および雛を飼い馴らす技術を明らかにする。そのうえで、(2)中国の鵜飼い漁におけるカワウの繁殖技術との対比から日本の鵜匠によるウミウの繁殖技術の特徴を導きだす。なお、本研究は科学研究費助成事業（基盤研究（C））「ポスト家畜化時代の鵜飼文化とリバランス論——新たな人・動物関係論の構築と展開（代表・卯田宗平）」に基づいておこなう。

・成果

本年度は、まず京都府宇治市の宇治川の鵜飼を対象とし、鵜小屋で飼育されていたウミウが2014年5月に産卵した要因を明らかにした。既往の鵜飼研究においてウミウの繁殖を取りあげたものはなかった。それは、鵜飼のウミウが産卵し、孵化したという事例がなかったからである。本年度の研究では、茨城県日立市十王町におけるウミウの捕獲作業や、日本各地の鵜飼におけるウミウの飼育方法にかかわる調査を実施し、宇治川の鵜飼でのみウミウが産卵した要因を検討した。その結果、(1)新たに購入するウミウのサイズ要求、(2)日々のウミウの飼育方法、(3)繁殖期前の巣材の有無という三つの要因がウミウの産卵に関係していることを明らかにした。このほか、宇治川鵜飼の鵜匠たちとの共同研究というかたちで、ウミウを産卵させ、それを飼い慣らす技術を明らかにしたうえで、中国の鵜飼におけるカワウの繁殖技術との対比から宇治川の鵜匠たちによる繁殖技術の特徴を導きだした。

これらの一連の研究成果は、卯田宗平（2017）「なぜ宇治川の鵜飼においてウミウは産卵したのか——ウミウの捕獲作業および飼育方法をめぐる地域間比較研究」『国立民族学博物館研究報告』42(2)：1-87、卯田宗平・澤木万理子・松坂善勝・江崎洋子（2017）「宇治川の鵜飼におけるウミウの繁殖・飼育技術の特徴——中国における鵜飼の事例比較」『日本民俗学』292：1-26、卯田宗平（2017）「人・動物関係におけるリバランスという視座——中国と日本の鵜飼でみられるウミウへの働きかけの事例から」『環境社会学研究』23：20-33にまとめた。なお、以上の本研究は科学研究費助成事業（基盤研究（C））「ポスト家畜化時代の鵜飼文化とリバランス論——新たな人・動物関係論の構築と展開（代表・卯田宗平）」に基づいておこなった。

◎出版物による業績

[分担執筆]

卯田宗平

2017 「生業技術の内在的な展開——中国・大興安嶺森林地帯におけるトナカイ飼育技術の事例報告」野林厚志編『パレオアジア文化史学計画研究 B01班2016年度研究報告——アジア新人文化形成プロセスの総合的研究』pp.16-19, 文部科学省科学研究費補助金新学術領域研究（研究領域提案型）2016-

2020年度計画研究 B01班。

[論文]

卯田宗平・澤木万理子・松坂善勝・江崎洋子

2017 「宇治川の鶺鴒におけるウミウの繁殖・飼育技術の特徴——中国における鶺鴒の事例比較」『日本民俗学』292：1-26。[査読有]

卯田宗平

2017 「なぜ宇治川の鶺鴒においてウミウは産卵したのか——ウミウの捕獲作業および飼育方法をめぐる地域間比較研究」『国立民族学博物館研究報告』42(2)：1-87。[査読有]

2017 「人・動物関係におけるリバランスという視座——中国と日本の鶺鴒でみられるウ類への働きかけの事例から」『環境社会学研究』23：20-33。[査読有]

2018 「生業活動の男女差と集団接触の諸相にかかわる予備的メモ」野林厚志編『パレオアジア文化史学計画研究 B01班2017年度研究報告——アジア新人文化形成プロセスの総合的研究』pp.68-70, 文部科学省科学研究費補助金新学術領域研究（研究領域提案型）2016-2020年度計画研究 B01班。

[その他]

卯田宗平

2017 「中国の鶺鴒いは『ウ』任せ——手縄つけず竹棒で引き寄せる 日本との違いに魅了」『日本経済新聞』5月15日。

2017 「なぜウミウは産卵したのか——謎解きはフィールドワークのあとで」『フィールドプラス』18：24-25。

2017 「手段としての動物と人とのかかわり——共通した動物利用の論理を探る」『民博通信』158：14-15。

2017 「旅・いろいろ地球人 鶺鴒文化のこれから① 中国との文化交流」『毎日新聞』9月7日夕刊。

2017 「旅・いろいろ地球人 鶺鴒文化のこれから② 繁殖技術の確立」『毎日新聞』9月14日夕刊。

2017 「旅・いろいろ地球人 鶺鴒文化のこれから③ 捕獲技術の継承」『毎日新聞』9月21日夕刊。

2017 「旅・いろいろ地球人 鶺鴒文化のこれから④ 鶺鴒サミット」『毎日新聞』9月28日夕刊。

2017 「新世紀ミュージアム 滋賀県立琵琶湖博物館」『月刊みんぱく』41(12)：16-17。

2018 「失われつつあるものを、かき集めた」野林厚志編『国立民族学博物館開館40周年記念特別展 太陽の塔からみんぱくへ——70年万博収集資料』pp.25-31, 大阪：国立民族学博物館。

○口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2018年3月19日 ‘Human Impact on Inland Water Fisheries and the Subsistence Strategy of Cormorant Fishermen, Human Relationships with Animals and Plants: Perspectives of Historical Ecology.’ International Symposium and Special research Project of the National Museum of Ethnology.

・機構の連携研究会での報告

2018年1月31日 「『鸕鷀捕鱼・养驯鹿技术——介绍研究内容』『森林与草原生态文明建设与保护研究——中日专家学者情况交流会』人間文化研究機構北東アジア地域研究推進事業東北大学東北アジア研究センター、中国北京市・中央民族大学民族博物館第2层大会议室

2018年2月11日 「ウミウからみた鳥と人とのかかわり——鶺鴒の事例から」みんぱく映画会・公開セミナー『渡り鳥と人とのかかわり——北東アジアから考える』人間文化研究機構北東アジア地域研究推進事業、国立民族学博物館

・共同研究会での報告

2017年10月7日 「これまでの研究会を踏まえて(1)——二つの方向性から考えるドメスティケーション」『もうひとつのドメスティケーション——家畜化と栽培化に関する人類学的研究』国立民族学博物館

2017年12月16日 「これまでの研究会を踏まえて(2)——ドメスティケーションのレベル」『もうひとつのドメスティケーション——家畜化と栽培化に関する人類学的研究』国立民族学博物館

2018年2月3日 「これまでの研究会を踏まえて(3)——ドメスティケーションのレベル」『もうひとつのドメスティケーション——家畜化と栽培化に関する人類学的研究』国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2017年5月13日 「北東アジア地域における生業活動の男女差と集団接触の諸相」文部科学省科学研究費補助

- 金・新学術領域研究2016-2020——パレオアジア文化史学第3回研究大会、国立民族学博物館
2017年6月24日 「なぜ鵜飼のウミウは産卵したのか」第15回生き物文化誌学会、国立民族学博物館
- ・研究講演
 - 2017年12月20日 「鵜飼技術の共通性と相違性——中国における鵜飼とその背後にある文化」連続講座『みんなく×ナレッジキャピタル——フィールドワークを語る』CAFE Lab. グランフロント大阪北館ナレッジキャピタル1階
 - 2018年2月20日 「宇治川の鵜飼におけるウミウの繁殖・飼育技術の特徴——中国における鵜飼の事例比較」学会誌「日本民俗学」掲載論文発表会（宇治日刊記者クラブ・宇治日刊地方記者クラブ）、公益社団法人宇治市観光協会、宇治市観光センター
 - 2018年3月14日 「日本の鵜飼文化」カレッジシアター「地球探究紀行」あべのハルカス近鉄本店
 - ・展示
 - 2018年3月8日 開館40周年記念特別展「太陽の塔からみんなくへ——70年万博収集資料」実行委員国立民族学博物館
 - ・みんなくウィークエンド・サロン
 - 2018年1月14日 「トナカイの角」第494回みんなくウィークエンド・サロン
 - ・広報・社会連携活動
 - 2017年7月8日 「国立民族学博物館とは何か」国立民族学博物館 MMP 新規メンバー養成研修、国立民族学博物館
 - 2017年7月22日 「鵜飼を文化としてとらえる」国立民族学博物館友の会第75回国内体験セミナー「三次の鵜飼漁見学と広島県の民俗芸能に会う」千里文化財団、広島県立みよし風土記の丘・広島県立歴史民俗資料館
 - 2017年7月22日 「鵜飼文化とは何か」サンケイトラベル『長良川鵜飼漁見学』レクチャー、サンケイトラベル、長良川うかいミュージアム（岐阜市長良川鵜飼伝承館）
 - 2017年11月2日 「中国雲南省雲洱海の鵜飼」2017年度第1回長良・小瀬鵜飼習俗総合調査合同委員会、岐阜市役所
- ◎上記以外の研究活動
- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など
 - 科学研究費（基盤研究（C））「ポスト家畜化時代の鵜飼文化とリバランス論——新たな人・動物関係論の構築と展開」研究代表者、人間文化研究機構ネットワーク型「ネットワーク型基幹研究プロジェクト 地域研究推進事業北東アジア地域研究 国立民族学博物館拠点『人とモノの移動と交流』」（研究代表者：池谷和信）メンバー

鈴木 紀 [すずき もと] ————— 准教授

1959年生。【学歴】東京大学教養学部教養学科卒（1982）、東京大学大学院社会学研究科修士課程修了（1985）、東京大学大学院総合文化研究科博士課程単位取得退学（1991）【職歴】ニューヨーク州立大学ビンガムトン校人類学科教務助手（1992）、千葉大学文学部助教授（1996）、国立民族学博物館先端人類科学研究部准教授（2007）、国立民族学博物館民族文化研究部准教授（2013）、国立民族学博物館人類文明誌研究部准教授（2017）【学位】社会学修士（東京大学大学院 1985）【専攻・専門】開発人類学・ラテンアメリカ文化論 開発援助プロジェクト評価、フェアトレード、マヤ・ユカテコ民族の社会変化、先住民族文化の比較展示学【所属学会】日本文化人類学会、国際開発学会、日本ラテンアメリカ学会、古代アメリカ学会、Society for Applied Anthropology、American Anthropological Association

【主要業績】

[論文]

鈴木 紀

- 2014 「開発」山下晋司編『公共人類学』pp.69-84, 東京：東京大学出版会。
- 2011 「開発人類学の展開」佐藤寛・藤掛洋子編『開発援助と人類学——冷戦・蜜月・パートナーシップ』pp.45-66, 東京：明石書店。

[編著]

鈴木 紀・滝村卓司編

2013 『国際開発と協働——NGOの役割とジェンダーの視点』（みんぱく実践人類学シリーズ8）東京：明石書店。

【2017年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

現代ラテンアメリカ文明の輪郭

・研究の目的、内容

本研究は、文明論の視点から現代のラテンアメリカ地域の特徴を分析することを目的とする。ラテンアメリカ地域は先コロンブス時代にメソアメリカ文明やアンデス文明、その他の地域文明を育み、16世紀以降は西洋文明を受容した。したがって文明として現代のラテンアメリカを捉えるためには、先コロンブス時代の文明の継続／再解釈と、西洋文明の受容／再解釈、および両者の結果としての現代文明としてのラテンアメリカの普遍性／固有性の検討が必要になる。

本研究を推進するため、ラテンアメリカ諸国における考古学・人類学・歴史博物館および美術館における文化の通時的展示の比較分析と、先住民族による開発／ポスト開発の事例分析という2種類の調査を必要とする。2017年度は、科学研究費助成事業・新学術領域研究「植民地時代から現代の先住民文化」（研究代表：鈴木 紀）ならびに科学研究費助成事業・国際共同研究加速基金「古代アメリカの比較文明論」（研究分担）を活用して、主にラテンアメリカ諸国の博物館展示研究を行う。

・成果

以下の形で研究成果を発表した。

1) 博物館展示の比較研究

①鈴木 紀、2017、「博物館の中のマヤ文明——表象と政治性」『古代文化』69(1)：96-108

②鈴木 紀、2017、「考古学と民族誌の間で——メキシコ国立人類学博物館の楽しみ方」『チャスキ』55：8-11

③鈴木 紀、2017、「博物館展示の調査技術——私的ヴァーチャル・ミュージアムの構築方法」『古代アメリカ学会会報』42：11-13

以上①～③の研究は、科学研究費助成事業・新学術領域研究「植民地時代から現代の先住民文化」（研究代表：鈴木 紀）の成果の一部である。

2) 博物館展示の比較研究に関する研究発表

①鈴木 紀「「現代」アンデス文明を構想する（分科会趣旨説明）」第38回日本ラテンアメリカ学会定期大会、東京大学教養学部、2017年6月4日

②鈴木 紀「アンデス文明は過去のものか？」第38回日本ラテンアメリカ学会定期大会、東京大学教養学部、2017年6月4日

③鈴木 紀、「A04班：植民地時代から現代の中南米の先住民文化」科学研究費助成事業・新学術領域研究「古代アメリカの比較文明論」全体集会、国立民族学博物館、2017年7月2日

以上①～③の研究発表は、科学研究費助成事業・新学術領域研究「植民地時代から現代の先住民文化」（研究代表：鈴木 紀）の成果の一部である。

④Suzuki, Motoi “Para el “renacimiento” de las civilizaciones prehispanicas: un estudio comparativo de representación museográfica”, XVIII Congreso de la FIEALC (Federación Internacional de Estudios sobre América Latina y el Caribe), Megatrend University, Belgrad, Serbia, 2017年7月27日

⑤Suzuki, Motoi, “Introducción: El pasado como recurso estratégico”, 国際シンポジウム「ラテンアメリカにおける過去の価値と利用：先スペイン期文明と先住民族文化の資源化をめぐる」、国立民族学博物館、2018年3月17日

⑥Suzuki, Motoi, “Representando el tiempo y el espacio de las Américas: la estrategia de exhibición como un museo universal en el Museo Nacional de Etnología, Japón”, 国際シンポジウム「ラテンアメリカにおける過去の価値と利用：先スペイン期文明と先住民族文化の資源化をめぐる」、国立民族学博物館、2018年3月17日

以上④～⑥の研究発表は、科学研究費助成事業・国際共同研究加速基金「古代アメリカの比較文明論」の成果の一部である。

3) 先住民族の開発／ポスト開発に関する研究発表

Suzuki, Motoi “Old and New Challenges of Fair Trade: Lessons learned from fair trade experiences among cacao farmers in southern Belize”, 第28回国際開発学会全国大会、東洋大学白山キャンパス、2017年11月26日

◎出版物による業績

[分担執筆]

鈴木 紀

2017 「メキシコ合衆国」中牧弘允編『世界の暦文化事典』pp.396-399, 東京：丸善出版。

2018 「中南米 遙かな新大陸へ 波乱の旅／豊穰な旅」野林厚志編『国立民族学博物館開館40周年記念特別展 太陽の塔からみんぱくへ——70年万博収集資料』pp.137-152, 大阪：国立民族学博物館。

2018 「日本万国博覧会——あの頃の未来と、あの頃の未開と」野林厚志編『国立民族学博物館開館40周年記念特別展 太陽の塔からみんぱくへ——70年万博収集資料』pp.12-15, 大阪：国立民族学博物館。

[論文]

鈴木 紀

2017 「博物館の中のマヤ文明——表象と政治性」『古代文化』69(1)：96-108, 京都：古代学協会。[査読有]

[その他]

鈴木 紀

2017 「ワールドシネマ・スタディーズのすすめ」『社会科NAVI』16：16-17。

2017 「博物館展示の調査技術——私的ヴァーチャル・ミュージアムの構築方法」『古代アメリカ学会会報』42：11-13。

2017 「考古学と民族誌の間で——メキシコ国立人類学博物館の楽しみ方」『チャスキ』55：8-11。

2018 「国立民族学博物館の収蔵品③ 『太陽の石』の意味」『文部科学 教育通信』427：2。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2018年3月17日 El pasado como recurso estratégico, La valoración y uso del pasado en América Latina: las civilizaciones prehispánicas y culturas indígenas como recurso estratégico, 国立民族学博物館

2018年3月17日 Representando el tiempo y el espacio de las Américas: la estrategia de exhibición como un museo universal en el Museo Nacional de Etnología, Japón, La valoración y uso del pasado en América Latina: las civilizaciones prehispánicas y culturas indígenas como recurso estratégico, 国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2017年6月4日 「アンデス文明は過去のものか？」第38回日本ラテンアメリカ学会定期大会、東京大学

2017年6月4日 「分科会趣旨説明『現代』アンデス文明を構想する」第38回日本ラテンアメリカ学会定期大会、東京大学

2017年7月2日 「A04班 植民地時代から現代の中南米の先住民文化」科学研究費助成事業・新学術領域研究「古代アメリカの比較文明論」第4回全体集会、国立民族学博物館

2017年7月27日 Para el “renacimiento” de las civilizaciones prehispánicas: un estudio comparativo de representación museográfica, XVIII Congreso de la FIEALC, Universidad Megatrend, Beograd, Serbia

2017年11月26日 Old and New Challenges of Fair Trade: Lessons learned from fair trade experiences among cacao farmers in southern Belize, 第28回国際開発学会全国大会、東洋大学白山キャンパス

・研究講演

2017年7月1日 「植民地時代から現代の中南米の先住民文化」科学研究費助成事業・新学術領域研究「古代アメリカの比較文明論」国立民族学博物館

2018年1月27日 「コメント」科学研究費助成事業（基盤研究（S））「アフリカ潜在力」と現代世界の困難の克服——人類の未来を展望する総合的地域研究」、京都大学稲盛記念館

・みんぱくウィークエンド・サロン

2018年2月4日 「優しいチョコレートとはなにか？——倫理的な消費入門」第497回みんぱくウィークエンド・

サロン

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（新学術領域研究（研究領域提案型））「古代アメリカの比較文明論」（研究代表者：青山和夫（茨城大学））研究分担者

藤本透子 [ふじもと とうこ] ————— 准教授

1975年生。【学歴】京都大学文学部史学科卒（1998）、京都大学大学院人間・環境学研究科文化・地域環境学専攻修士課程修了（2002）、京都大学大学院人間・環境学研究科環境相関研究専攻博士課程指導認定退学（2007）【職歴】日本学術振興会特別研究員（2006）、京都桂看護専門学校非常勤講師（2006）、関西学院大学経済学部非常勤講師（2008）、京都大学大学院人間・環境学研究科研究員（2008）、神戸松蔭女子学院大学文学部非常勤講師（2010）、国立民族学博物館先端人類科学研究部機関研究員（2010）、国立民族学博物館民族文化研究部助教（2012）、立命館大学国際関係学部非常勤講師（2015）、国立民族学博物館民族文化研究部准教授（2016）、国立民族学博物館人類文明誌研究部准教授（2017）【学位】博士（人間・環境学）（京都大学大学院人間・環境学研究科 2010）、修士（人間・環境学）（京都大学大学院人間・環境学研究科 2002）【専攻・専門】文化人類学、中央アジア地域研究【所属学会】日本文化人類学会、日本中央アジア学会、日本中東学会、日本イスラム協会

【主要業績】

[編著]

Yamada, T. and T. Fujimoto (eds.)

2016 *Migrations and the Remaking of Ethnic-Micro-Regional Connectedness* (Senri Ethnological Studies 93). Osaka: National Museum of Ethnology. [査読有]

藤本透子編

2015 『現代アジアの宗教——社会主義を経た地域を読む』 神奈川：春風社。

[単著]

藤本透子

2011 『よみがえる死者儀礼——現代カザフのイスラーム復興』 東京：風響社。

【受賞歴】

2013 人間文化研究奨励賞

【2017年度の活動報告】

◎各個研究

- ・研究課題

カザフスタンにおける社会・宗教・身体の人類的研究

- ・研究の目的、内容

1) 伝統医療とイスラームの展開

中央アジアでは、1990年代の体制移行に伴うイスラーム復興と社会変容のなかで伝統医療に携わる治療者が急増し、ある程度まで社会が安定し経済発展を遂げている現在も人々の関心をひきつけて存続している。地域社会の人々が身体を近代医療の対象としてのみ見ず、むしろ宗教的観念が作用する場と捉えてきたことをふまえて、治療者の活動が活発なカザフスタンを中心に、①中央アジアにおける伝統医療の歴史的背景、②伝統医療の再活性化メカニズム、③社会主義を経験した社会の近代医療と伝統医療の関係、④イスラームおよびシャマニズムと伝統医療の布置を、昨年度からひきつづき5年間の計画で明らかにする。特に今年度は、イスラーム及びシャマニズムと伝統医療の布置について、科学研究費助成事業（基盤研究（C））「カザフスタンにおける伝統医療とイスラームの人類的研究」に基づき、現地調査を行う。

2) カザフ村落社会の形成・維持・変容のメカニズム

カザフスタンでは、遊牧民の定住化によって村落社会が形成されたという特徴をもつ。科学研究費助成事業新学術領域「パレオアジア文化史学」B01班「人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的

モデル構築」の分担者として、人の移動と定住化が社会形成に与えた影響に関して、テュルク系定住民およびスラヴ系定住民との接触によるカザフの居住形態の変化に着目して調査研究を行う。また、北東アジア地域研究プロジェクトの一環として移動と定住化に関する比較検討を行うほか、日本の村落部において短期間の調査を行い村落社会の形成・維持・変容のメカニズムを比較検討する。

・成果

科研費基盤Cにより研究を進めている伝統医療とイスラームの展開に関しては、5月の日本文化人類学会研究大会で、「伝統医療におけるコミュニケーションの共有性——カザフのエムシ（治療者）の事例から」と題して発表した。また、6月29日から7月1日までクルグズスタンのビシュケクで行われたヨーロッパ中央アジア学会・アメリカ中央ユーラシア学会合同研究大会（ESCAS-CESS Joint Conference）で、“The Religious and Social Aspects of “Ancestral Lands” in Rural Kazakhstan: An Anthropological Perspective”と題して発表し、参加者と議論した。伝統医療とイスラームに深く関わる聖者崇敬に関しては、7月にカザフスタンで調査を実施し、論文を執筆中である。また、イスラームとカザフの死生観・世界観に関しては、『季刊民族学』に「カザフの子育て——ゆりかごの向こうに広がる世界」を執筆した。

カザフ村落社会の形成・維持・変容のメカニズムに関しては、“Economic Activity and Rituals for Maintaining Regional Society: A Case Study of Kazakh Villages in Central Asia”と題して、琉球大学国際沖縄研究所で行われた国際研究集会“Community Maintenance in Periphery”で発表した。また、カザフを含むイスラーム社会で喜捨が果たす役割について、「イスラーム社会における喜捨——カザフスタンを中心に」と題して、愛知大学人文科学研究所刊行の『功德と喜捨と贖罪』に執筆した。科研費新学術領域「パレオアジア文化史学」研究大会では、カザフを含む中央アジアにおける集団間接触と定住村落および墓地形成に関して研究発表を行った。

このほか、中央・北アジア展示チームの代表者として、民族分布図、「帽子・靴」展示、「カザフ草原のくらし」展示を中心に、展示場の部分改修を行った。この部分改修は、北東アジア地域研究の成果の一部でもある。さらに、『国立民族学博物館展示案内』の「中央・北アジア展示場」解説をまとめ、テーマ別解説「すこやかな成長への願い」も執筆した。

◎出版物による業績

[分担執筆]

藤本透子

2018 「第4章 イスラーム社会における喜捨——中央アジアのカザフスタンを中心に」伊藤利勝編『功德と喜捨と贖罪——宗教の政治経済学』pp.203-245, 愛知：愛知大学人文社会学研究所。

[その他]

藤本透子

2017 「カザフの子育て——ゆりかごの向こうに広がる世界」『季刊民族学』162：67-74。

2017 「カザフスタン」中村弘允編『世界の暦文化事典』pp.156-159, 東京：丸善出版。

2017 「人生儀礼——1 すこやかな成長への願い」『国立民族学博物館展示案内』pp.202-205, 大阪：国立民族博物館。

2017 「中央アジアの人びとが経験した社会主義」特集「20世紀革命の足跡」『月刊みんぱく』41(12)：6。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会での報告

2017年6月11日 「村落部におけるコミュニティ維持の比較検討へ向けて——カザフスタン村落部と沖縄県島嶼部（離島）の事例から」琉球大学国際沖縄研究所共同研究『島嶼・中山間地・農村地域の集落コミュニティ維持機能——アジア国際比較による地域研究対話』琉球大学国際沖縄研究所

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2017年5月13日 「集団間の接触にともなう住居の変化——カザフの定住化に関する人類学調査から」パレオアジア文化史学第3回研究大会、国立民族学博物館

2017年6月29日 The Religious and Social Aspects of “Ancestral Lands” in Rural Kazakhstan: An Anthropological Perspective, ESCAS-CESS Joint Conference, American University of Central Asia

2017年10月9日 「集団間接触と墓制の変遷——中央アジアにおける定性・定量調査の可能性」文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究2016-2020——パレオアジア文化史学第4回研究大会、東京大学

2017年12月16日 Economic Activity and Rituals for Maintaining Regional Society: A Case Study of Kazakh Villages in Central Asia, Community Maintenance in Periphery, 琉球大学国際沖縄研究所

・みんなくウィークエンド・サロン

2017年11月5日 「カザフの天幕——住居から祝祭の空間へ」第486回みんなくウィークエンド・サロン

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（C））「カザフスタンにおける伝統医療とイスラームの人類学的研究」研究代表者、科学研究費（新学術領域研究（研究領域提案型））「人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築」（研究代表者：野林厚志）研究分担者

寺村裕史 [てらむら ひろふみ]————— 助教

1977年生。【学歴】岡山大学文学部歴史文化学科（考古学履修コース）卒（2000）、岡山大学大学院文学研究科歴史文化学専攻修士課程修了（2002）、岡山大学大学院文化科学研究科人間社会文化学専攻博士課程修了（2005）【職歴】同志社大学文化情報学部実習助手（2005）、総合地球環境学研究所研究部プロジェクト研究員（2007）、国際日本文化研究センター研究部機関研究員（2011）、国際日本文化研究センター文化資料研究企画室特任准教授（2013）、国立民族学博物館文化資源研究センター助教（2015）、国立民族学博物館人類文明誌研究部助教（2017）【学位】博士（文学）（岡山大学大学院 2005）、修士（文学）（岡山大学大学院 2002）【専攻・専門】情報考古学、文化情報学【所属学会】考古学研究会、地理情報システム学会、日本情報考古学会

【主要業績】

[単著]

寺村裕史

2014 『景観考古学の方法と実践』東京：同成社。

[共著]

Maekawa, K., E. Matsushima, H. Teramura, and S. Watanabe

2018 *Brick Inscriptions in the National Museum of Iran: A Catalogue*. Edited by K. Maekawa. Kyoto: Kyoto University Press.

[論文]

寺村裕史

2017 「情報考古学的手法を用いた文化資源情報のデジタル化とその活用」『国立民族学博物館研究報告』42(1): 1-47。[査読有]

【受賞歴】

2007 日本情報考古学会優秀賞（日本情報考古学会）

【2017年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

文化資源情報のデジタル化とその手法に関する研究

・研究の目的、内容

本研究は、様々な文化資源に関する「情報」というものをどのようにデジタル化し、そうして得たデータをどのように研究に活用していくのかに焦点をあて、資料「情報」をなぜデジタル化する必要があるのかを検討しながら、デジタル化手法の応用事例を通じて考察することが目的である。今年度は、日本の古墳時代の前方後円墳を対象として、3D レーザースキャナを用いた墳丘の三次元計測で得られたデジタルデータを元に、古墳の墳形および設計原理の検討をおこなう。古墳の墳丘の三次元デジタルデータは、従来用いられてきた紙図面のデータと比較して、より正確で詳細な形状情報を持ったデータであり、それを利用した墳形研究や築造規格研究に飛躍をもたらすものであると考えている。

なお、本研究は、科学研究費補助金 [基盤研究 (B)・一般]、課題名「前方後円墳の三次元計測とそれにも

とづく設計原理の検討」(研究代表者：新納泉、H.27－H.29)にともなう研究の一部として実施する予定である。

・成果

2017年5月に、科学研究費補助金「前方後円墳の三次元計測とそれにもとづく設計原理の検討(15H03265)」[研究代表者・新納泉]の研究分担者として、熊本県鹿央町岩原字塚原に所在する岩原双子塚古墳に赴き測量調査をおこなった。調査内容としては、ドローンや3Dレーザースキャナを用いた岩原双子塚古墳の三次元計測調査を実施し、古墳形状に関する詳細なデジタルデータを取得した。この地域における重要な前方後円墳である岩原双子塚古墳の墳丘のデジタルデータを取得できたことは、墳丘形状に関する新たな研究材料として、今後他の前方後円墳とのデジタルでの比較研究など、さらなる研究の進展が期待できる成果である。

また、上記のような三次元計測手法によるデータ取得から分析までを網羅的に扱った論文「情報考古学的手法を用いた文化資源情報のデジタル化とその活用」を、『国立民族学博物館研究報告』に投稿し、42巻1号(pp.1-47、2017)に掲載された。

◎出版物による業績

[共著]

Maekawa, K., E. Matsushima, H. Teramura, and S. Watanabe

2018 *Brick Inscriptions in the National Museum of Iran: A Catalogue*. Edited by K. Maekawa. Kyoto: Kyoto University Press.

[論文]

寺村裕史

2017 「情報考古学的手法を用いた文化資源情報のデジタル化とその活用」『国立民族学博物館研究報告』42(1)：1-47。[査読有]

[その他]

河村友佳子・日高真吾・園田直子・寺村裕史・末森薫・和高智美・橋本沙知

2017 「3D スキャナー及び3D プリンターの文化財分野での活用についての検証——七宝山神恵院観音寺所蔵扁額のレプリカ制作をとおして」『日本文化財科学会第34回大会研究発表要旨集』pp.270-271。

日高真吾・吉田憲司・丸川雄三・寺村裕史・末森薫・和高智美

2017 「東日本大震災を契機に開発した『津波の記憶を刻む文化遺産「寺社・石碑」データベース』の可能性」『日本文化財科学会第34回大会研究発表要旨集』pp.322-323。

山口欧志・寺村裕史・宇佐美智之・村上智見・ベグマトフ・アリシエル・宇野隆夫

2017 「中央アジアシルクロード都市遺跡カフィル・カラ城の研究」『日本考古学協会第83回総会研究発表要旨』pp.186-187。

寺村裕史

2017 「タンディル——ウズベキスタンのパン焼き窯」『季刊民族学』160：52-62。

2017 「ナンが名ちゃ」『月刊みんぱく』41(5)：20。

2017 「ウズベキスタンにおける『独立以降』の考古学的調査——ウズベキスタン考古研究所主催のシンポジウムより」『民博通信』157：24。

2017 「地図とGPSとデジタル測量」特集「デジタル化するフィールドワーク」『月刊みんぱく』41(10)：5-6。

2018 「国立民族学博物館の収蔵品③⑥ ウズベキスタン・タシュケントの民家の台所」『文部科学 教育通信』430：2。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2018年3月20日 「シルクロードの古代オアシス都市における環境利用——中央アジア・ウズベキスタンにおける遺跡立地と周辺環境」特別研究シンポジウム『歴史生態学から見た人と生き物の関係』国立民族学博物館

・機構の連携研究会での報告

2017年9月9日 「保存科学を通じた地域文化へのアプローチ——神恵院扁額の事例から」人間文化研究機構広領域連携型基幹研究プロジェクト『日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築』FUKURACIA 東京ステーション

- ・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告
 - 2017年 5月28日 「中央アジアシルクロード都市遺跡カフィール・カラ城の研究」日本考古学協会第83回総会、大正大学
 - 2017年 6月11日 「3D スキャナー及び3D プリンターの文化財分野での活用についての検証——七宝山神恵院観音寺所蔵扁額のレプリカ制作をとおして」日本文化財科学会第34回大会、東北芸術工科大学
 - 2017年 6月11日 「東日本大震災を契機に開発した『津波の記憶を刻む文化遺産「寺社・石碑」データベース』の可能性」日本文化財科学会第34回大会、東北芸術工科大学
- ・みんなくウィークエンド・サロン
 - 2017年 7月30日 「タンディル——ウズベキスタンのパン焼き窯」第475回みんなくウィークエンド・サロン
- ・広報・社会連携活動
 - 2018年 2月28日 「シルクロードのオアシス都市——ウズベキスタンの発掘調査から」カレッジシアター『地球探究紀行』あべのハルカス近鉄本店

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など
 - 科学研究費（基盤研究（B））「墳墓からみたインダス文明期の社会景観」研究代表者、科学研究費（基盤研究（B））「前方後円墳の三次元計測とそれにもとづく設計原理の検討」（研究代表者：新納泉（岡山大学））研究分担者、科学研究費（新学術領域研究（研究領域提案型）『学術研究支援基盤形成』）「地域研究に関する学術写真・動画資料情報の統合と高度化」（研究代表者：吉田憲司）研究支援分担者、科学研究費（基盤研究（B））「古代イランとメソポタミア——歴史地理学的アプローチ」（研究代表者：前川和也（国士舘大学））研究分担者

グローバル現象研究部

信田敏宏 [のぶた としひろ]————— 部長(併) 教授

1968年生。【学歴】東京都立大学人文学部人文科学科社会学専攻卒（1992）、東京都立大学大学院社会科学研究科社会人類学専攻修士課程修了（1995）、東京都立大学大学院社会科学研究科社会人類学専攻博士課程単位取得退学（2000）【職歴】東京都立大学人文学部社会学科助手（2001）、国立民族学博物館民族学研究開発センター助手（2003）、国立民族学博物館研究戦略センター助手（2004）、国立民族学博物館研究戦略センター助教授（2006）、総合研究大学院大学文化科学研究科准教授（2012）、国立民族学博物館民族文化研究部准教授（2012）、国立民族学博物館文化資源研究センター准教授（2013）、国立民族学博物館文化資源研究センター教授（2014）、総合研究大学院大学文化科学研究科教授併任（2014）、国立民族学博物館グローバル現象研究部教授（2017）、国立民族学博物館グローバル現象研究部研究部長（2017）【学位】社会人類学博士（東京都立大学 2002）【専攻・専門】社会人類学、東南アジア研究【所属学会】日本文化人類学会、東南アジア学会、日本マレーシア学会、東京都立大学社会人類学会

【主要業績】

[単著]

信田敏宏

2013 『ドリアン王国探訪記——マレーシア先住民の生きる世界』（フィールドワーク選書1）京都：臨川書店。

2004 『周縁を生きる人びと——オラン・アスリの開発とイスラーム化』京都：京都大学学術出版会。

Nobuta, T.

2009 *Living on the Periphery: Development and Islamization among the Orang Asli in Malaysia*. Subang-Jaya, Malaysia: Center for Orang Asli Concerns.

【受賞歴】

2006 第4回東南アジア史学会賞

【2017年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

東南アジアの文化に関する人類学的研究

・研究の目的、内容

本研究は、マレーシアを含む東南アジアの文化に関わる諸現象について、グローバルな状況を視野に入れながら、その最新の動向を探ることを目的とする。具体的には、民族状況や親族制度、生業や食文化など、東南アジアにおける文化現象について情報の収集・整理を行ない、その全体像を把握する。

・成果

今年度は、編集委員長として「東南アジア文化事典」の編集作業を進めてきた。事典は、来年度の刊行をめざしている。本研究に関連する研究成果としては、エッセイおよび口頭発表等がある。

(エッセイ)

2017 「高岳親王とマレーシア」 The Daily NNA マレーシア版 (2017年12月26日)

2017 「マレーシアの『複合社会』と不可視化される多様性」華僑華人の事典編集委員会編『華僑華人の事典』東京：丸善出版、pp.300-301.

2017 「マレーシア (オラン・アスリ)」中牧弘允編『世界の暦文化事典』東京：丸善出版、pp.106-109.

(口頭発表)

2017年12月16日 於：みんぱくゼミナール (国立民族学博物館)

題目：「オラン・アスリの家族——母系制・妻方居住・一夫多妻」

2017年10月6日 於：大阪大学大学院生対象講義 (国立民族学博物館)

題目：「マレーシアの概要」

◎出版物による業績

[その他]

信田敏宏

2017 「マレーシアの『複合社会』と不可視化される多様性」『華僑華人の事典』pp.300-301, 東京：丸善出版。

2017 「マレーシア (オラン・アスリ)」中牧弘允編『世界の暦文化事典』pp.106-109, 東京：丸善出版。

2017 「グローバル支援の人類学——変貌する NGO・市民社会の現場から」『民博通信』159：25。

2017 「高岳親王とマレーシア」『The Daily NNA マレーシア版』第06148号(11), 東京：NNA。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2017年12月7日 「グローバル支援の人類学」みんぱく若手研究者奨励セミナー、国立民族学博物館

・みんぱくゼミナール

2017年12月16日 「オラン・アスリの家族——母系制・妻方居住・一夫多妻」第475回みんぱくゼミナール

・みんぱくウィークエンド・サロン

2017年10月1日 「1962年、世界をめぐる旅」第482回みんぱくウィークエンド・サロン

◎社会活動・館外活動

・他大学の客員、非常勤講師

京都女子大学「家族の人類学」

鈴木七美 [すずき ななみ] ————— 教授

【学歴】 東北大学薬学部薬学科卒 (1981)、お茶の水女子大学大学院人文科学研究科修士課程修了 (1992)、お茶の水女子大学大学院人間文化研究科博士課程修了 (1996) 【職歴】 財団法人仙台複素環化学研究所研究員 (1981)、中外製薬株式会社国際開発部 (1982)、財団法人相模中央化学研究所研究員 (1983)、大東文化大学国際関係学部国際文化学科非常勤講師 (1994)、川村学園女子大学文学部非常勤講師 (1995)、京都文教大学人間学部文化人類学科専任講師 (1997)、東京大学教育学部非常勤講師 (1998)、お茶の水女子大学文教育学部非常勤講師 (1998)、京都大学大学院教育学研究科非常勤講師 (1999)、立命館大学文学部非常勤講師 (1999)、京都文教大学人間学部文化人類学科助教授 (2000)、京都文教大学大学院文化人類学研究科助教授 (2002)、マギル大学文化人類学部客員助教授 (2003)、放送大学分担協力講師 (2004)、京都府立医科大学医学部非常勤講師 (2004)、京都文教大学大学院文化人類学研究

科教授（2005）、京都文教大学人間学部文化人類学専任教授（2005）、広島大学大学院総合科学研究科非常勤講師（2007）、国立民族学博物館先端人類科学研究部教授（2007）、放送大学客員教授（文化人類学'04 主任講師）（2007）、総合研究大学院大学文化科学研究科教授併任（2009）、総合研究大学院大学比較文化学専攻長（2012）、国立民族学博物館研究戦略センター教授（2014）、東北大学文学部人文社会学科（文化人類学各論）・東北大学大学院文学研究科非常勤講師（2014）、国立民族学博物館研究戦略センターセンター長（2015）、国立民族学博物館グローバル現象研究部教授（2017）【学位】博士（学術）（お茶の水女子大学 1996）、修士（人文科学）（お茶の水女子大学 1992）、学士（薬学）（東北大学 1981）【専攻・専門】文化人類学、エイジング研究、医療社会史【所属学会】日本文化人類学会、アメリカ学会、日本アメリカ史学会、Association for Anthropology and Gerontology（AAGE）、The International Union of Anthropological and Ethnological Sciences（IUAES）

【主要業績】

[単著]

鈴木七美

- 2017 『アーミッシュたちの生き方——エイジ・フレンドリー・コミュニティの探求』（国立民族学博物館調査報告141）大阪：国立民族学博物館。
- 2002 『癒しの歴史人類学——ハープと水のシンボリズムへ』京都：世界思想社。
- 1997 『出産の歴史人類学——産婆世界の解体から自然出産運動へ』東京：新曜社。

【受賞歴】

1998 第13回女性史青山なを賞

【2017年度の活動報告】

◎各研究

・研究課題

高齢社会におけるエイジング・イン・プレイスとナラティブの比較研究

・研究の目的、内容

語り、物語などを意味するナラティブを素材とする交流は、高齢期のウェルビーイングに資する活動として注目されている。高齢者をはじめ人々が孤立せず心地よく生活できる地域コミュニティデザインのキーワード「エイジング・イン・プレイス」について、ナラティブに関わる経験、及び開かれた交流の場や安全に管理される場としてのナラティブ・コモンズという観点から検討する。

外部資金「基盤研究B 特設分野研究「多世代共生『エイジ・フレンドリー・コミュニティ』構想と実践の国際共同研究」2014-2016（研究代表者：鈴木七美）の成果公開として実施した国際シンポジウム「エイジフレンドリー・コミュニティ——変わりゆく人生を包み込むまち」における議論を深めて論文集として出版する。

また、2017年度文化資源プロジェクト「企画展『簡素な人々』のウェルビーイングと生活文化——米国のアーミッシュ・キルトとそのストーリーに注目して（仮称）準備」を行う。「エイジング・イン・プレイス」とナラティブ・コモンズ形成について、コミュニティに生きる意味を問い続けてきた米国アーミッシュたちの暮らしから考える。

・成果

I 外部資金：（基盤研究（B））特設分野研究「多世代共生『エイジ・フレンドリー・コミュニティ』構想と実践の国際共同研究」2014-2016（研究代表者：鈴木七美）に基づく成果公開として開催した国際シンポジウム Exploring Age-friendly Communities: Diverse People Aging in Place（エイジフレンドリー・コミュニティ——変わりゆく人生を包み込むまち）（国立民族学博物館 2017年2月25日）の内容を中心に、鈴木七美編『超高齢社会のエイジフレンドリー・コミュニティ——ケアが照らし出すエイジング・イン・プレイスへ』（158頁 2018年2月2日）（日本学術振興会科学研究費助成事業成果公開集会報告書）を編集し、下記の論考執筆、研究会発表、及び一般向け講演を行った。

- ・鈴木七美「スイスの多世代複合型生活施設におけるナラティブとエイジング・イン・プレイス」鈴木七美編『超高齢社会のエイジフレンドリー・コミュニティ——ケアが照らし出すエイジング・イン・プレイスへ』（Aging-friendly Communities in Super Aged Societies: Exploring Diverse Options for Aging in Place）pp.87-100、日本学術振興会科学研究費助成事業成果公開集会報告書、国立民族学博物館、2018年。
- ・鈴木七美「変動の中のエイジング・イン・プレイスと語りの場——東日本大震災後の民間高齢者ケア事業所

スタッフの経験に注目して」(小泉敦保・田仲美智子・猪股陽子・埴織絵と共著) 鈴木七美編『超高齢社会のエイジフレンドリー・コミュニティ』pp.37-66、日本学術振興会科学研究費助成事業成果公開集会報告書、国立民族学博物館、2018年。

- ・鈴木七美「資源共有と多様なエイジフレンドリー・コミュニティの創造——米国の継続ケア退職者コミュニティ住人の活動に注目して」(ジョー・A・スプリングと共著) 鈴木七美編『超高齢社会のエイジフレンドリー・コミュニティ』pp.101-119、日本学術振興会科学研究費助成事業成果公開集会報告書、国立民族学博物館、2018年。

口頭発表(研究会発表)

- ・鈴木七美「エイジフレンドリー・コミュニティの模索——CCRCを中心に」身体・環境史研究会(代表者: 服部伸) 同志社大学今出川キャンパス徳照館(2017年6月25日) 館外活動(大学教育、社会活動等)
- ・鈴木七美「エイジフレンドリー・コミュニティ: 北欧民衆大学の対話・交流から考える」大阪府高齢者大学 世界の文化に親しむ科 大阪市教育会館(2017年7月7日)
- ・鈴木七美「エイジング・イン・プレイス スイスの地方文化・養生から考える」大阪府高齢者大学 世界の文化に親しむ科 大阪市教育会館(2017年6月30日)
- ・鈴木七美「豊かに老いる社会 アメリカやヨーロッパの事例から」カレッジシアター地球探究紀行 あべのハルカス近鉄本店9階スペース9(2017年6月28日)

館内活動

- ・鈴木七美「豊かな高齢期とナラティブ」(みんぱくウィークエンドサロン 研究者と話そう) 国立民族学博物館(2017年5月14日)

II 2017年度文化資源プロジェクト「企画展『簡素な人々』のウェルビーイングと生活文化——米国のアーミッシュ・キルトとそのストーリーに注目して(仮称)準備」を実施し、成果を講演・新聞で広く公開した。

みんぱくゼミナール

- ・鈴木七美「心地よい暮らし(エイジング・イン・プレイス)——コミュニティをつなぐアーミッシュたちの暮らしから」第468回みんぱくゼミナール 於: 国立民族学博物館(2017年5月20日)

新聞

- ・鈴木七美「旅・いろいろ地球人 キルトのある暮らし④ 人生の物語を紡ぐ」『毎日新聞(夕刊)』(2018年1月25日)
- ・鈴木七美「旅・いろいろ地球人 キルトのある暮らし③ 無地から作る鮮やかさ」『毎日新聞(夕刊)』(2018年1月18日)
- ・鈴木七美「旅・いろいろ地球人 キルトのある暮らし② キルティング・ビー」『毎日新聞(夕刊)』(2018年1月11日)
- ・鈴木七美「旅・いろいろ地球人 キルトのある暮らし① 信仰と生きる終の棲家」『毎日新聞(夕刊)』(2018年1月4日)

◎出版物による業績

[編著]

鈴木七美編

- 2018 『超高齢社会のエイジフレンドリー・コミュニティ——ケアが照らし出すエイジング・イン・プレイスへ』(日本学術振興会科学研究費助成事業成果公開集会報告書) 大阪: 国立民族学博物館(鈴木七美研究室)。

[分担執筆]

鈴木七美

- 2018 「スイスの多世代複合型生活施設におけるナラティブとエイジング・イン・プレイス」鈴木七美編『超高齢社会のエイジフレンドリー・コミュニティ——ケアが照らし出すエイジング・イン・プレイスへ』(日本学術振興会科学研究費助成事業成果公開集会報告書) pp.87-100, 大阪: 国立民族学博物館(鈴木七美研究室)。

鈴木七美・小泉敦保・田仲美智子・猪股陽子・埴織絵

- 2018 「変動の中のエイジング・イン・プレイスと語り場——東日本大震災後の民間高齢者ケア事業所スタッフの経験に注目して」鈴木七美編『超高齢社会のエイジフレンドリー・コミュニティ——ケアが照らし出すエイジング・イン・プレイスへ』(日本学術振興会科学研究費助成事業成果公開集会報告書) pp.37-66, 大阪: 国立民族学博物館(鈴木七美研究室)。

鈴木七美・J.A. スプリンガー

2018 「資源共有と多様なエイジフレンドリー・コミュニティの創造——米国の継続ケア退職者コミュニティ住人の活動に注目して」鈴木七美編『超高齢社会のエイジフレンドリー・コミュニティ——ケアが照らし出すエイジング・イン・プレイスへ』（日本学術振興会科学研究費助成事業成果公開集會報告書）pp.101-119, 大阪：国立民族学博物館（鈴木七美研究室）。

[その他]

鈴木七美

2018 「旅・いろいろ地球人 キルトのある暮らし① 信仰と生きる終の棲家」『毎日新聞』1月4日夕刊。
2018 「旅・いろいろ地球人 キルトのある暮らし② キルティング・ビー」『毎日新聞』1月11日夕刊。
2018 「旅・いろいろ地球人 キルトのある暮らし③ 無地から作る鮮やかさ」『毎日新聞』1月18日夕刊。
2018 「旅・いろいろ地球人 キルトのある暮らし④ 人生の物語を紡ぐ」『毎日新聞』1月25日夕刊。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2017年6月25日 「エイジ・フレンドリー・コミュニティの模索——CCRCを中心に」身体・環境史研究会、同志社大学

・みんぱくゼミナール

2017年5月20日 「心地よい暮らし（エイジング・イン・プレイス）——コミュニティをつなぐアーミッシュたちの暮らしから」第468回みんぱくゼミナール

・みんぱくウィークエンド・サロン

2017年5月14日 「豊かな高齢期とナラティブ」第465回みんぱくウィークエンド・サロン

・広報・社会連携活動

2017年6月28日 「豊かに老いる社会——アメリカやヨーロッパの事例から」カレッジシアター「地球探究紀行」あべのハルカス近鉄本店

2017年6月30日 「エイジング・イン・プレイス スイスの地方文化・養生から考える」大阪府高齢者大学校「世界の文化に親しむ科」

2017年7月7日 「エイジ・フレンドリー・コミュニティ——北欧民衆大学の対話・交流から考える」大阪府高齢者大学校「世界の文化に親しむ科」

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

国立民族学博物館2017年度文化資源プロジェクト「企画展『簡素な人々』のウェルビーイングと生活文化——米国のアーミッシュ・キルトとそのストーリーに注目して（仮称）準備（T704）」研究代表者

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

Editorial Advisory Board for Anthropology & Aging (A & A: The Official Publication of the Association for Anthropology and Gerontology (AAGE))

西尾哲夫 [にしお てつお]——副館長（研究・国際交流・IR担当）、グローバル現象研究部教授

三尾 稔 [みお みのる]——教授

1962年生。【学歴】東京大学教養学部卒（1986）、東京大学大学院社会学研究科文化人類学専攻修士課程修了（1988）、東京大学大学院総合文化研究科文化人類学専攻博士課程退学（1992）【職歴】東京大学教養学部助手（1992）、東洋英和女学院大学社会科学部専任講師（1995）、東洋英和女学院大学社会科学部助教授（1999）、東洋英和女学院大学国際社会学部助教授（2001）、国立民族学博物館博物館民族学研究部助教授（2003）、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（2004）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2004）、国立民族学博物館研究戦略センター准教授（2008）、国立民族学博物館先端人類科学研究部准教授（2016）、国立民族学博物館グローバル現象研究部准教授（2017）、国立民族学博物館教授（2018）【学位】社会学修士（東京大学大学院社会学研究科 1988）【専攻・専門】社会人類学・インドの宗教と社会【所属学会】日本文化人類学会、日本南アジア学会

【主要業績】

[共編]

Mio, M. and C. Bates (eds.)

2015 *Cities in South Asia*. London: Routledge. [査読有・書評有・民博共同研究の成果] (http://choiceconnect.org/webclipping/194400/e0bubfitramyrf7jwbc8s12r_hb62uv6swnu3wbhxn7ct2md3o)

三尾 稔・杉本良男編

2015 『現代インド6 環流する文化と宗教』東京：東京大学出版会。

[論文]

三尾 稔

2017 「モノを通じた信仰——インド・メーワール地方の神霊信仰における身体美学的な宗教実践とその変容」『国立民族学博物館研究報告』41(3)：215-281。

【2017年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

インド西部における宗教と文化の変容に関する人類学的研究

・研究の目的、内容

世界市場への直接的な連結や情報テクノロジーの広範な浸透などを背景に、1990年代以降のインドの文化や宗教は地域外の動向と共振しつつ基層的な部分から大きな変容を遂げている。三尾が25年あまりにわたってフィールド調査を継続してきたインド西部の都市や村落においても、それは例外ではない。本年度は昨年度に引き続き、特に情報テクノロジーの浸透や宗教の政治化・商品化といった全インド規模で見られる宗教や文化の変容動向が、地方のサバルタンの宗教実践をどのように変容させているかという点に注目し、フィールド調査や文献調査をもとに、変容の諸相を実証的に解明し、これが政治・経済・社会の動向とどのように関連するのかを明らかにする。この調査に必要な経費として、日本学術振興会科学研究費助成事業の獲得もめざす。

6年計画で進められている人間文化研究機構基幹研究プロジェクト「南アジア地域研究」は今年度で2年目を迎える。三尾は、この研究プロジェクトにおいて国立民族学博物館拠点の拠点代表を引き続きつとめ、拠点構成員や研究分担者とともに国際的な連携協力のもとでインド研究を推進する。各個研究のテーマは、この地域研究プロジェクトの内容に密接に関連するものであり、拠点予算も活用しつつ拠点の研究テーマのもとでの1つの実証的研究として各個研究を遂行する。

また、文化資源プロジェクトとして行ってきた『「沖守弘インド民族文化写真資料アーカイブ」のデータベース作成』プロジェクトでは、上記「南アジア地域研究」プロジェクト経費も活用して、昨年度中に日本語版と英語版双方の一般公開（「沖守弘インド写真データベース」として公開）を行った。今年度は一般利用者からのフィードバックを踏まえて掲載データの改良に取り組むとともに、雑誌等の媒体での研究広報も行い、より多くの人びとにこのデータベースが活用されることを目指す。

・成果

「南アジア地域研究」が毎年実施している本プロジェクト全体の研究成果発信のための国際シンポジウムのうち、三尾が企画・運営・開催の主体となったシンポジウムの英文成果論文集を *Senri Ethnological Studies 96 Structural Transformation in Globalizing South Asia: Comprehensive Area Studies for Sustainable, Inclusive, and Peaceful Development* として国立民族学博物館から刊行した。三尾はこの論文集の筆頭共編者として編集・出版にあたった。

「沖守弘インド写真データベース」は、三尾の監修のもと、新たに発見された沖氏がインドで撮影した写真1000点あまりを日英両言語で検索可能な形で追加した。また、『季刊民族学』160号で「特集 沖 守弘が見たインド」、『月刊みんぱく』2017年6月号で「特集 沖 守弘インド写真データベース」を掲載し、沖氏のインドでの取材活動の足跡や氏の写真の特色や魅力を紹介した。三尾はこれらの特集の企画・編集を行い、主要記事の執筆を行った。

◎出版物による業績

[共著]

杉本良男・三尾 稔他

2018 『インド文化事典』東京：丸善出版。

Mio, M., K. Fujita, K. Tomozawa, and T. Awaya
2017 *Structural Transformation in Globalizing South Asia: Comprehensive Area Studies for Sustainable, Inclusive, and Peaceful Development* (Senri Ethnological Studies 96). Osaka: National Museum of Ethnology. [査読有]

Mio, M. and A. Dasgupta
2017 *Rethinking Social Exclusion in India: Castes, Communities, and the State* (Routledge New Horizons in South Asian). London: Routledge. [査読有]

[論文]

三尾 稔

2017 「モノを通じた信仰——インド・メーワール地方の神霊信仰における身体感応的な宗教実践とその変容」『国立民族学博物館研究報告』41(3)：215-281。[査読有]

[その他]

三尾 稔

2017 「データベースの成り立ち」特集「沖守弘インド写真データベース」『月刊みんぱく』41(6)：2-3。

2017 「沖氏の写真がとらえたもの」特集「沖守弘インド写真データベース」『月刊みんぱく』41(6)：7。

2017 「沖守弘インド写真データベース活用法」特集「沖守弘インド写真データベース」『月刊みんぱく』41(6)：8。

2017 「ポピュラーアートとインドのカレンダー」中牧弘允編『世界の暦文化事典』p.146, 東京：丸善出版。

2018 「名は星をあらわす(?)」『月刊みんぱく』42(1)：20。

2018 「『宗教』としてのヒンドゥー教の成立」インド文化事典編集委員会『インド文化事典』pp.160-161, 東京：丸善出版。

2018 「インド、インド世界、南アジア」インド文化事典編集委員会『インド文化事典』pp.2-3, 東京：丸善出版。

2018 「ターバン」インド文化事典編集委員会『インド文化事典』pp.344-345, 東京：丸善出版。

2018 「デリー」インド文化事典編集委員会『インド文化事典』pp.724, 東京：丸善出版。

2018 「環流」インド文化事典編集委員会『インド文化事典』pp.694-695, 東京：丸善出版。

三尾 稔・五十嵐理奈・竹村嘉章・沖 守弘

2017 「特集 沖守弘が見たインド」『季刊民族学』160：3-43。

三尾 稔・五十嵐理奈・小西正捷・上羽陽子・沖 守弘

2017 「特集 沖守弘インド写真データベース」『月刊みんぱく』41(6)：2-9。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・みんぱくウィークエンド・サロン

2017年7月2日 「南アジアのクリケット文化」第471回みんぱくウィークエンド・サロン

・広報・社会連携活動

2018年2月16日 「暮らしに根差すヒンドゥー教の世界」大阪府高齢者大学校「世界の文化に親しむ科」

2018年2月23日 「インドの日常茶飯——食事と娯楽」大阪府高齢者大学校「世界の文化に親しむ科」

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

日本南アジア学会理事

森 明子 [もり あきこ]————— 教授

【学歴】筑波大学大学院歴史・人類学研究科博士課程単位取得退学（1989）【職歴】筑波大学歴史・人類学系文部技官（1989）、筑波大学歴史・人類学系助手（1990）、国立民族学博物館第3研究部助手（1990）、国立民族学博物館第3研究部助教授（1997）、総合研究大学院大学文化科学研究科兼任（1999）、国立民族学博物館研究戦略センター教授（2006）、国立民族学博物館研究戦略センター教授・センター長（2009）、国立民族学博物館民族文化研究部教授（2011）、独立行政法人日本学術振興会学術システム研究センター専門研究員併任（2016）、国立民族学博物館グローバル現象研究部教授（2017）【学位】文学博士（筑波大学大学院歴史・人類学研究科 1997）、文学修士（筑波大学大学院歴史・人類学研究科 1984）【専攻・専門】文化人類学、ヨーロッパ人類学【所属学会】日本文化人類学会

【主要業績】

[単著]

森 明子

1999 『土地を読みかえる家族——オーストリア・ケルンテンの歴史民族誌』東京：新曜社。

[編著]

森 明子編

2014 『ヨーロッパ人類学の視座——ソーシャルなるものを問い直す』京都：世界思想社。

Mori, A. (ed.)

2013 *The Anthropology of Europe as Seen from Japan: Considering Contemporary Forms and Meanings of the Social* (Senri Ethnological Studies 81). Osaka: National Museum of Ethnology.

【2017年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

人類学的比較の再考

・研究の目的、内容

比較は、文化人類学研究を、基底的に性格づけている。ポストモダン人類学は、比較のための単位を実体的・硬直的にとらえる文化の理解を批判したが、これに対して近年、超越的な比較ではない水平的な比較という議論が起こっている。全体を見通すのではない部分的なヴィジョンに着目して、人類学的な比較を説明しようとするものである。本研究は、こうした議論を参照しながら、ヨーロッパ人類学の実践において、民族誌記述と人類学的比較が、いかに照射しあっているのか、検討するものである。

・成果

研究は、民族誌研究と、ディシプリンの方向性の検討との2方向から、複数のプロジェクトのもとにすすめた。

第一の民族誌研究については、科研「ポスト福祉国家時代のケア・ネットワーク編成に関する人類学的研究」(研究代表者 森)の最終年度として海外学術調査を継続し、海外研究者との議論も深めた。また、同じく最終年度であった本館共同研究「家族と社会の境界面の編成に関する人類学的研究——保育と介護の制度化／脱制度化を中心に」(研究代表者 森)とも連動して、議論を深化させた。さらに、研究分担者として参加している、科研「変動するEU国境地域におけるエスニック集団共生の課題」(研究代表者 加賀美雅弘——東京学芸大学)では、オーストリア国境地域での現地調査をすすめた。成果として以下4項目をあげる。

1) 口頭による成果発表として、日本文化人類学会第51回研究大会(神戸大学、5月27日)において、研究代表者として分科会を組織し、趣旨「ケアの実践を通して編成される社会：場所を奪われた人々が生きる場所について」と研究発表「ネイバーフッドの可能性：ベルリン街区におけるケアの発動について」のプレゼンテーションを行い、フロアとの議論を導いた。

2) 海外の研究者との意見交換として、セルビア、ベオグラード大学で講演し、現地研究者と議論した。

・“Ethnographic Study of Kreuzberg, Berlin: An Event in the City”, Department of Ethnology and Anthropology, Faculty of Philosophy, University of Belgrade, Belgrade. (November 17.)

3) 海外研究者との意見交換として、国際研究集会“Colloquium, Thinking about an anthropology of care: A Discussion with F. Aulino and J. Danely”を企画し、英国と米国から2名の研究者を本館に招聘し、国内研究者を招聘して国際研究会議を開催した。

・“Introduction: Why does an Anthropology of Care arouse our Interest?”, National Museum of Ethnology, Osaka. (December 9.)

4) 出版物による成果として、民博通信巻頭エッセーを刊行した。

・「社会的なものをいかに描くか——ケアが発動する場所への関心」『民博通信』157：4-9(2017.6.25.)

次は、大阪市立大学の研究者による編集で、年度内出版予定であったが、刊行が遅れている。

・「移民が語る都市空間——想像界と場所について」『文化接触のコンテクストとコンフリクト——EU諸地域における環境・生活圏・都市』清文堂、2018年3月刊行予定

第二の人類学ディシプリンに焦点をあてる研究は、受託研究による研究動向調査「文化人類学・民俗学分野に関する学術研究動向——現代世界の諸問題の人類学化」を中心に、ヨーロッパ大陸および連合王国の専門誌 *Anthropos* と *Journal of Royal Anthropological Institute/Man* 誌の分析をすすめた。また、研究分担者として参加している科研「東アジア〈日常学としての民俗学〉の構築に向けて：日中韓と独との研究協業網の形成」

(研究代表者 岩本通弥——東京大学)において、国際シンポジウムに参加した。成果として以下2項目をあげる。

5) 海外研究者との意見交換として、東アジアの映像人類学に関する国際研究会議を企画し、4名の海外研究者を招聘して、意見交換した。

・“Frontiers of East Asian Visual Anthropology: Perspectives from Ethnographic Filmmaking”, National Museum of Ethnology, Osaka. (March 21.)

6) 関連する出版物として

・「新世紀ミュージアム プロイセン文化財 ベルリン国立博物館群 ヨーロッパ諸文化博物館」『月刊みんぱく』42巻3号:16-17 国立民族学博物館 (2018.3.1.)

次は、京都大学研究者の編集であるが、出版助成が不採用となったため、現段階で刊行のめどが立っていない。

・「比較の視点から見た東アジアの民俗学」『東アジア民俗学史』慶応大学出版会

◎出版物による業績

[論文]

森 明子

2017 「社会的なものをいかに描くか——ケアが発動する場所への関心」『民博通信』157:4-9。

[その他]

森 明子

2018 「新世紀ミュージアム プロイセン文化財 ベルリン国立博物館群 ヨーロッパ諸文化博物館」『月刊みんぱく』42(3):16-17。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2017年5月27日 「ケアの実践を通して編成される社会——場所を奪われた人々が生きる場所について (分科会趣旨)」日本文化人類学会第51回研究大会、神戸大学

2017年5月27日 「ネイバーフッドの可能性——ベルリン街区におけるケアの発動について」日本文化人類学会第51回研究大会、神戸大学

2017年11月17日 Ethnographic Study of Kreuzberg, Berlin: An Event in the City, Department of Ethnology and Anthropology, Faculty of Philosophy, University of Belgrade, Belgrade, Republic of Serbia

2017年12月9日 Introduction: Why does an Anthropology of Care arouse our Interest?, Colloquium “Thinking about an Anthropology of Care: A Discussion with F. Aulino and J. Danely”, National Museum of Ethnology

・みんぱくウィークエンド・サロン

2017年12月10日 「仕立物いたします」第490回みんぱくウィークエンド・サロン

・広報・社会連携活動

2017年6月14日 「ドイツのパンを味わう」カレッジシアター「地球探究紀行」あべのハルカス近鉄本店

◎調査活動

・海外調査

2017年9月5日～9月26日—オーストリア (オーストリア国境地域における少数集団に関する調査研究、ケア・ネットワークに関する調査研究)

2017年11月9日～11月25日—ドイツ、セルビア、オーストリア (ケア・ネットワークに関する調査研究)

◎大学院教育

・大学院ゼミでの活動

ヨーロッパ文化研究演習 I 「ヨーロッパ文化研究演習 I (現代人類学とソーシャルなるものの意味)」

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費 (基盤研究 (B)) 「ポスト福祉国家時代のケア・ネットワーク編成に関する人類学的研究」研究代表者、「日本学術振興会 学術システム研究センター 文化人類学・民俗学分野に関する学術研究動向——現代世界の諸問題の人類学化」研究代表者、科学研究費 (基盤研究 (A)) 「東アジア〈日常学としての民俗学〉の

構築に向けて——日中韓と独との研究協業網の形成」(研究代表者：岩本通弥) 研究分担者、科学研究費(基盤研究(B))「変動するEU国境地域におけるエスニック集団共生の課題」(研究代表者：加賀美雅弘) 研究分担者、「JSPS研究拠点形成事業『日欧亜におけるコミュニティの再生を目指す移住・多文化・福祉政策の研究拠点形成』」(研究代表者：坂井一成) メンバー

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

京都大学人文科学研究所共同利用・共同研究拠点共同研究委員会委員、日本民俗学会国際交流特別委員会委員、Wissenschaftlicher Beirat von Historische anthropologie: Kultur-Gesellschaft-Alltag (Köln, Weimar, Wien)

相島葉月 [あいしま はつき] 准教授

【学歴】上智大学比較文化学部比較文化学科卒(2000)、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科一貫性博士課程修士号取得退学(2002)、オクスフォード大学大学院社会文化人類学研究科社会人類学修士課程修了(2005)、オクスフォード大学大学院東洋学研究科イスラーム世界専攻博士課程修了(2011) 【職歴】マンチェスター大学人文学部 Lecturer in Modern Islam (2012)、国立民族学博物館先端人類科学研究部准教授(2016)、総合研究大学院大学文化科学研究科地域文化学専攻准教授(2017)、国立民族学博物館グローバル現象研究部准教授(2017) 【学位】博士(東洋学)(オクスフォード大学大学院東洋学研究科・セントアントニーズカレッジ 2011)、科学修士(社会人類学)(オクスフォード大学大学院社会文化人類学研究科・グリーンカレッジ 2005)、修士(地域研究)(京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 2002) 【専攻・専門】社会人類学、イスラーム学、中東研究 【所属学会】日本中東学会、アメリカ人類学会、日本文化人類学会

【主要業績】

[単著]

Aishima, H.

2016 *Public Culture and Islam in Modern Egypt: Media, Intellectuals and Society*. London: IB Tauris. [査読有]

[分担執筆]

Aishima, H.

2016 Are We All Amr Khaled? Islam and the Facebook Generation of Egypt. In A. Masquelier and B. Soares (eds.) *Muslim Youth and the 9/11 Generation*, pp.105-122. Santa Fe: School for Advanced Research Press. [査読有]

[論文]

Aishima, H.

2017 Consciously Unmodern: Situating Self in Sufi Becoming of Contemporary Egypt. *Culture and Religion: An Interdisciplinary Journal* 18(2): 149-164. Abingdon: Taylor & Francis Online. [査読有]

【2017年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

現代エジプトにおける美と身体文化

・研究の目的、内容

本研究の目的は、エジプトの空手家コミュニティ(競技者、指導者、父兄)の事例より、都市中流層的な倫理観と美的感覚の関係性を再考することにある。本研究の出発点は、なぜエジプト中流層の少年・少女にとって、空手道が「ハラール(イスラーム法的に合法、倫理的)」な習い事であるのに対し、同様の身体動作を行うクラシック・バレエが「ハラーム(イスラーム法的に違法、非倫理的)」なのかという問いにある。ハラール/ハラームと言ったイスラーム法的な語彙を援用しているとはいえ、エジプトの空手人気を支える言説を分析するに際し、中流層的な倫理観になぞられた近代主義との関係性において論じる必要がある。空手道に取り組む意義を「目的」と「効果」で説明し、バレエを享乐的な行為と批判する言説は、国際政治経済の周縁に置かれたエジプトの中流層的な倫理観を如実に反映しているからである。近年、新自由主義経済の広がりにより、学歴や所得で中流層と下流層を差異化することがより困難になる中、「教養」の有無を指標とする新たな「階層観」

が構築されつつある。この文脈において本研究は、空手道の稽古を、都市中流層的な倫理観と美的感覚が実践される場として考察する。

本年度は研究分担者をつとめる「国立民族学博物館・現代中東地域研究拠点」および「科学研究費（基盤研究（B））中東地域における民衆文化の資源化と公共的コミュニケーション空間の再グローバル化（代表者・西尾哲夫）」に加えて研究代表者をつとめる「科学研究費（若手研究（B））エジプト人空手家によるネイションの実践とグローバル化に関する社会人類学的研究」より出張費を捻出して研究課題を進めていく。

・成果

2017年4月30日から5月10日まで「科学研究費（若手研究（B））エジプト人空手家によるネイションの実践とグローバル化に関する社会人類学的研究」より出張費を捻出して、5月3日にバースで開催された国際ワークショップNew Research on the Japanese Martial Arts—From Inside Japan and Outに参加し、「Orientalising the Orient: Searching for Karate's Budo Roots in Contemporary Egypt」と題した研究発表を行った。本発表の録画はMartial Arts StudiesのYouTubeチャンネルで視聴できる（<https://www.youtube.com/watch?v=u4KLjgTk6Ss>）。本研究会は、日本発祥の格闘技のグローバル化を中心テーマとし、カーディフ大学のPaul Bowman教授が主催するMartial Arts Studies Networkと早稲田大学のMichael Molasky教授により企画された。

2017年9月2日と9日は国立民族学博物館・現代中東地域研究拠点の主催で、エジプト映画『ヤギのアリーとイブラヒム』の上映会を行った。本作品では現代アラビア語エジプト方言に加えて手話で会話するシーンがあることから、本館の日本財団手話言語学研究部門と協力して、日本語字幕に加えて環境音字幕も作成した。上映会では、シェリーフ・エル＝ベンダーリー監督を招き、本作品から見られるエジプト社会やエジプト映画についての意見交換を行った。本作品のセリフ集とトークイベントの内容を来年度に出版する準備を進めている。

2017年10月2日から12月29日までNIHU若手研究者海外派遣プログラムを利用して、マンチェスター大学社会科学研究所社会人類学学科に客員研究員として滞在した。「グローバル化する中東とイギリス人ムスリムの身体文化」と題した本研究課題の主たる目的は、ムスリム人口が集中するマンチェスター市内の空手教室において参与観察および聞き取り調査を行い、イギリスに暮らすアラブ諸国出身の空手家が、移民後に経験した身体観や美的感覚の変容を明らかにし、中東のグローバル化について考察することであった。国立民族学博物館現代中東地域研究拠点の中心テーマは「地球規模の変動下における中東の人間と文化」である。グローバル化する中東地域に生きる人々と世界とのつながりを、フィールドワークに基づく民族誌的データの分析を通じて再考することに主眼をおいている。本研究課題は、国境を越えた人と情報の移動をグローバル化の重要な指標ととらえ、イギリスで移民として暮らすアラブ系ムスリムの美的感覚と身体文化の解明を目指した。マンチェスターは多言語が飛び交う、とてもコスモポリタンなイギリス第二の大都市で、他の地域と比べてムスリム住民の割合が多いとされる。滞在期間が短いことから、調査対象をマンチェスター大学空手道部に限定し、稽古に参加しながら参与観察やアラブ系ムスリムへの聞き取りを行った。マンチェスター大学空手道部では同大学の学生だけでなく、大学外の社会人や子供も稽古に参加することができる。監督のギャリー・ハーフォード師範（松濤館8段）は英国代表として欧州大会で活躍したが、指導者に転じからも優秀な空手家を輩出している。大学のある地域がムスリム居住区「カーマイル」から徒歩圏内にあるせいか、子供の生徒はアラブ人が特に多い。アラブ諸国出身の成人男性も数人いる。アラブ諸国において、空手道は子供のお稽古事として人気を博している。競技人口は4～12歳に集中していて、よほど優秀な選手でない限り、中学校に上がる頃には空手をやめてしまう。大人がスポーツをする習慣がないため、社会人になってから空手を始める者は皆無である。空手教室の参加者は、多様なアラブ諸国と社会階層の出身者であるものの、アラブ人ムスリムの連帯があることが挨拶の仕方や言葉かけの様子から伺えた。社会人がスポーツを続けるには強い決意が不可欠だ。家庭のある男性が空手を始め、息子と稽古に励むことによる苦労など、母国に残してきた家族や友達と共有するのは困難を伴う。マンチェスターの空手教室で形成されたアラブ人コミュニティは、移民を通じて新しい主体性を獲得した人々の連帯なのであろう。今後の調査で、イギリスで空手道を始めたきっかけや、続ける意義について明らかにしたい。

2018年2月5日から2月14日は国際ワークショップ French Orientalism and its Afterlives in Japan and the Middle East の企画運営のためにパリに滞在した。本研究会は国立民族学博物館・現代地域研究拠点とパリ日本文化会館の共催で行われた。2月7日はイラク人アラビア語書道家ハサン・マスウーディ氏と本館准教授山中由里子による一般公開講演会が開催された。2月9日は趣旨説明を行い、10日は Orientalising the Orient: Searching for Karate's Budo Roots in Contemporary Egypt と題した研究発表を行った。本研究会の成

果については、来年度に再度ワークショップを開催した後、編著もしくは学術誌の特集号として発表する予定である。

2018年2月14日から3月1日は「科学研究費（基盤研究（B））中東地域における民衆文化の資源化と公共的コミュニケーション空間の再グローバル化（代表者・西尾哲夫）」の分担金を利用してカイロに滞在し、エジプト人空手家コミュニティに関する臨地調査を行った。空手教室だけでなく、エジプト伝統空手道協会の会長の葬儀や選手の婚姻前の儀礼にも参加し、聞き取り調査を実施した。この調査の成果については、Tim Ingoldによる人類学と民族誌の違いに関する論考についての特集号として *HAU: Journal of Ethnographic Theory* に投稿する論文に発表する準備を進めている。

◎出版物による業績

[論文]

Aishima, H.

2017 *Consciously Unmodern: Situating Self in Sufi Becoming of Contemporary Egypt. Culture and Religion: An Interdisciplinary Journal* 18(2): 149-164. [査読有]

[その他]

相島葉月

2017 「『標（しめぎ）コレクション』から考える世界のコーヒー文化」『みんぱく e-news』196。

2018 「国立民族学博物館の収蔵品³⁵ イギリスのコーヒー文化」『文部科学 教育通信』429：2。

2018 「不確実な現実と日常の間で——第116回アメリカ人類学会年次大会にみる中東・イスラーム人類学の研究動向」『民博通信』160：28。

Aishima, H.

2017 *Review of Brinton, Jacqueline G., Preaching Islamic Renewal. Religious Authority and Media in Contemporary Egypt. Anthropos* 112(2): 300-301.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機構の連携研究会での報告

2018年2月9日 ‘Introduction, Viewing the orient: From Whose perspective?’ and ‘Orientalising the Orient?: Searching for Karate’s Budo Roots in Contemporary Egypt’, French Orientalism and its Afterlives in Japan and the Middle East, Maison de la culture du Japon a Paris, France

・共同研究会での報告

2017年7月22日 「現代エジプトのスーフィズムにおける自己主体性とモダニティの位相」民博共同研究会『個——世界論——中東から広がる移動と遭遇のダイナミズム』国立民族学博物館

2018年1月21日 「『1960～70年代エジプトのラジオスター』アブドゥルハリーム・マフムードのメディア戦略とダアワ」NIHU 現代中東地域研究・若手公募研究『アラブ世界における近代的メディアとイスラーム』京都大学

・民博研究懇談会

2017年9月13日 「現代エジプトのスーフィズムにおける自己主体性とモダニティ」国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2017年5月3日 ‘Orientalising the Orient?: Searching for Karate’s Budo Roots in Contemporary Egypt.’ *New Research on Japanese Martial Arts—From Inside Japan and Out*, The Bath Royal Literary and Scientific Institution, United Kingdom

2017年12月2日 ‘Competing Aesthetics of Power in Egyptian Karate Trainings.’ *The 116th Annual Meeting of the American Anthropological Association*, Washington DC, United States

・みんぱくゼミナール

2017年4月15日 「エジプトでイスラーム思想のテキストを読む」第467回みんぱくゼミナール

・研究講演

2017年11月10日 ‘A View of Globalisation from its Margins: Searching for Karate’s Budo Roots in Contemporary Egypt’, Middle East Centre, St Antony’s College, Oxford, United Kingdom

2017年11月28日 ‘Public Culture and Islam in Modern Egypt: Media, Intellectuals and Society’, The Center for Global Islamic Studies and the Center for African Studies, University of Florida, United States

・展示

2017年9月28日～11月14日「標交紀の咖啡の世界」ナビひろば

・みんなくウィークエンド・サロン

2018年3月4日「イスラーム教育における音と文字」第501回みんなくウィークエンド・サロン

・広報・社会連携活動

2017年4月28日「エジプト その①」大阪府高齢者大学校「世界の文化に親しむ科」

2017年5月12日「エジプト その②」大阪府高齢者大学校「世界の文化に親しむ科」

◎大学院教育

・大学院ゼミでの活動

1年生ゼミ「『研究計画シリーズ』及び『リサーチプロポーザルシリーズ』」

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（B））「中東地域における民衆文化の資源化と公共的コミュニケーション空間の再グローバル化」（研究代表者：西尾哲夫）研究分担者、科学研究費（若手研究（B））「エジプト人空手家によるネイションの実践とグローバル化に関する社会人類学的研究」研究代表者

河合洋尚 [かわい ひろなお] ————— 准教授

1977年生。【学歴】関西学院大学社会学部卒（2001）、東京都立大学大学院社会科学研究科修士課程修了（2003）、東京都立大学大学院社会科学研究科博士課程修了（2009）【職歴】中国嘉応大学客家研究所ビジティング・スカラー（2007）、中国嘉応大学客家研究院民族学分野専任講師（2008）、広東外語外貿大学継続学院非常勤講師（2009）、中国嘉応大学客家研究院客員准教授（2010）、中国国立中山大学社会学与人類学院助理研究員〔講師相当〕（2010）、国立民族学博物館研究戦略センター機関研究員（2011）、流通科学大学総合政策学部非常勤講師（2012）、園田学園女子大学シニア専修コース非常勤講師（2013）、国立民族学博物館研究戦略センター助教（2013）、国立民族学博物館研究戦略センター准教授（2016）、国立民族学博物館グローバル現象研究部准教授（2017）【学位】博士（社会人類学）（東京都立大学 2009）、修士（社会人類学）（東京都立大学 2003）【専攻・専門】都市人類学、景観人類学、漢族研究【所属学会】日本文化人類学会、東京都立大学社会人類学会、日本華僑華人学会、中国広東民族学会

【主要業績】

[単著]

河合洋尚

2013 『景観人類学の課題——中国広州における都市環境の表象と再生』東京：風響社。

[編著]

河合洋尚編

2016 『景観人類学——身体・政治・マテリアリティ』東京：時潮社。

2013 『日本客家研究の視角与方法——百年の軌跡』北京：社会科学文献出版社。

【受賞歴】

2001 安田三郎賞

【2017年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

- 1) 中国客家地域の都市景観形成にまつわる人類学的研究
- 2) 環太平洋における客家の移動、文化再生、景観形成にまつわる越境民族誌
- 3) フードスケープの人類学的研究

・研究の目的、内容

①景観人類学・空間論：近年、景観人類学では、視覚を通じた景観の表象だけでなく、聴覚・嗅覚・触覚など他の感覚を通じた景観の捉え方に注目が集まるようになってきている。したがって、これらの感覚と総合的に関わ

るテーマとして食に着目し、とりわけ近年新たな学問領域として現れているフードスケープに関する研究を進める。

②漢族・客家研究：漢族、特に中国南部から世界各地に移住している客家に焦点を当て、国境を越えた社会文化的ネットワークを明らかにする。漢族は、中国研究／華僑華人研究という枠組みで区切ることができず、より俯瞰的な視野から理解しなければならない対象である。したがって、環太平洋における客家の移動やネットワークを加味したうえで、中国華南地方および東南アジア、オセアニア、中南米の客家に関する調査研究をおこなう。

・成果

①景観人類学・空間論：9月から12月にかけて、人間文化研究機構の若手研究者奨励プログラムで香港大学に在籍し、フードスケープ論のレビューに着手した。それにより、フードスケープ論のうち、特に人類学とその隣接領域におけるおおよその動向が明らかになった。その成果の一部は『民博通信』および人間文化研究機構刊行の『きざし』にてすでに公開した。また、2016年の国際シンポジウムで組織した分科会の成果を編著『社会主義制度下の中国飲食文化と日常生活』（中国語；日本語訳『社会主義中国における食文化と日常生活』）として刊行したが、そのうちの私の論文は、広州市のフードスケープに関する内容となっている。

②漢族・客家研究：第一に、中国における歴史の資源化に関する調査研究と『中国における歴史の資源化の現状と課題』（SER142；塚田誠之・河合洋尚編）の編纂をおこなった。第二に、ここ数年従事してきたベトナムの客家をめぐる研究成果をまとめ、京都大学の学術雑誌『アジア・アフリカ地域研究』で公開した。さらに、台湾の交通大学で開催された講演会、および逢甲大学で開催された国際シンポジウムでも、関連の発表をおこなった。第三に、客家の国境を超えたネットワークを明らかにするため、今年度は特に南半球の客家をめぐる研究に従事した。特にフランス領ポリネシア（タヒチ）、及び、ペルーでフィールドワークを展開し、現地の客家および他の華人集団の歴史・社会組織・食文化について、初歩的ではあるが先駆的な調査をおこなった。

③その他：日本文化人類学会からの依頼により、当学会主催の国際発信シンポジウム「東アジアにおける人類学の国際化／グローバル化——第2部 中国と日本」でコーディネーターを務め、趣旨説明と司会を担当した。さらに、その内容を同学会刊行の雑誌『Japanese Review of Cultural Anthropology』の「序文」として執筆し、まもなく刊行される予定である。

◎出版物による業績

[単著]

河合洋尚

2017 『フィールドワーク——中国という現場、人類学という実践』東京：風響社。

[編著]

塚田誠之・河合洋尚編

2017 『中国における歴史の資源化の現状と課題』（国立民族学博物館調査報告142）大阪：国立民族学博物館。[査読有]

河合洋尚・劉征宇編

2018 『社会主義制度下の中国飲食文化と日常生活』（国立民族学博物館調査報告144）大阪：国立民族学博物館。[査読有]

Han, M., H. Kawai, and H.W. Wong (eds.)

2017 *Family, Ethnicity and State in Chinese Culture under the Impact of Globalization*. Los Angeles: Bridge21 Publications.

[分担執筆]

河合洋尚

2017 「創造される文化景観——客家地域の集合住宅をめぐる文化遺産実践」飯田卓編『文明史のなかの文化遺産』pp.151-176, 京都：臨川書店。

2017 「華僑と宗教復興——華南客家地区の宗教景観と靈性」范可・楊德睿編『「俗」と「聖」的文化実践』pp.225-241, 北京：中国社会科学出版社。

2017 「従空間論視角看客家宗教景観與在地信仰實踐——以廣東梅州為例」張維安編『在地、南向與全球客家』pp.477-497, 台北：三民書局。[査読有]

2018 「潮州人と客家——差異と連続」志賀子子編『潮州人——華人移民のエスニシティと文化をめぐる歴史人類学』pp.155-168, 東京：風響社。

[論文]

河合洋尚

- 2017 「作為“調解人”的景觀設計師——文化人類学視角的解説」『景觀設計学』(2) : 56-61。
2018 「馬來西亞沙巴州的客家人——關於移民、認同感、文化標志的多地点考察」韓敏・色音編『人類学視野下的歷史、文化与博物館——当代日本和中国的理論實踐』(Senri Ethnological Studies 97), pp. 265-280. Osaka: National Museum of Ethnology. [査読有]
2018 「越境集団としてのンガイ人——ベトナム漢族をめぐる一考察」『アジア・アフリカ地域研究』17(2) : 180-206. [査読有]

[その他]

河合洋尚

- 2017 「名付けえぬ風景をめざして——ランドスケープデザインの文化人類学」『文化人類学』82(1) : 115-118. [査読有]
2018 「フードスケープをめぐる研究動向」『民博通信』160 : 29。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2017年10月21日 「從艾人到『客家人』——越南華人的移動和認同建構」国際シンポジウム『移動・跨界・交混——17到18世紀台湾与南洋』逢甲大学、台湾
2017年12月17日 「全球客家研究在華僑華人展覽中的意義及作用」国際シンポジウム『博物館与客家研究』苗栗客家文化園區
2017年12月28日 「東アジアにおける人類学の国際化／グローバル化——第2部 中国と日本」日本文化人類学会第4回国際情報発信シンポジウム、首都大学東京

・みんぱくウィークエンド・サロン

- 2017年5月7日 「華僑の移住と暮らし——タヒチ」第464回みんぱくウィークエンド・サロン

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など
科学研究費(基盤研究(A))「中国周縁部における歴史の資源化に関する人類学的研究」(研究代表者:塚田誠之)研究分担者

廣瀬浩二郎 [ひろせ こうじろう]————— 准教授

【学歴】 京都大学文学部国史学科卒(1991)、京都大学大学院文学研究科日本史学専攻修士課程修了(1993)、カリフォルニア大学バークレイ校人類学部留学(1995)、京都大学大学院文学研究科日本史学専攻博士課程指導認定退学(1997) 【職歴】 京都大学文学部研修員(1997)、花園大学社会福祉学部非常勤講師(1999)、国立民族学博物館民族文化研究部助手(2001)、国立民族学博物館民族文化研究部准教授(2008)、関西学院大学非常勤講師(2010)、東海大学非常勤講師(2015)、国立民族学博物館グローバル現象研究部准教授(2017) 【学位】 文学博士(京都大学大学院文学研究科 2000)、文学修士(京都大学大学院文学研究科 1993) 【専攻・専門】 日本宗教史、民俗学(日本の新宗教、民俗宗教と障害者文化、福祉の関わりについての歴史、人類学的研究) 【所属学会】 日本史研究会、「宗教と社会」学会、日本武道学会、日本文化人類学会

【主要業績】

[単著]

廣瀬浩二郎

- 2009 『さわる文化への招待——触覚でみる手学問のすすめ』京都:世界思想社。
2001 『人間解放の福祉論——出口王仁三郎と近代日本』大阪:解放出版社。

[学位論文]

廣瀬浩二郎

- 2000 「宗教に顕れる日本民衆の福祉意識に関する歴史的研究」京都大学大学院文学研究科。

【2017年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

「バリア・フリー」に関する人類学的研究

・研究の目的、内容

今年度も館内外で実施される展示、プロジェクトに積極的に参加・協力していきたい。9月には京都大学で「バリアフリーシンポジウム」が開催される。高等教育の現場における「合理的配慮」のあり方について、しっかり議論できるシンポになるよう、準備を進めている。9月～11月には国民文化祭、障害者芸術・文化祭が奈良県で開かれる。2017年2月のプレイベントの成果を踏まえ、ユニークな「さわって楽しむ体感展示」を行う予定である。京都国立近代美術館では、ユニバーサルな美術鑑賞法を多角的に検討するプロジェクトが今年度から始まる。私は実行委員会の副委員長として本プロジェクトを推進する。その他、昨年度から続けている福島・いわきでのユニバーサル・ツーリズムに関する実践的研究も、さらに発展させる所存である。

上記のような個別事例に取り組む前提として、今年度は、自身のこれまでの研究をまとめ、広く社会に発信する新書（触文化の入門書）の刊行を目標とした。また、小学校等で活用される「さわる絵本」も、関係者と意見交換しつつ、出版に向けて原稿を作成中である。

・成果

2017年度は館内外での講演（学会での基調講演、国際シンポジウムでの発表等を含む）を43回、触覚をテーマとするワークショップを12回担当した。そのうち、海外での講演は3回である。12月に刊行した拙著『目に見えない世界を歩く』（平凡社新書）は新聞8紙、専門誌4誌に紹介記事が掲載された。テレビ出演は2回である（いずれも展示関係）。

今年度は9月～11月に奈良県で開催された国民文化祭、障害者芸術・文化祭の関連イベント「“心”感覚展」に、展示アドバイザーとして全面協力した。国民文化祭の中に「さわる展示」が組み込まれたことは、私の研究成果としても特筆に値する。9月には京都大学でバリアフリーシンポジウムを企画・実施した。「合理的配慮」をテーマとする本シンポは各方面からの反響が大きく、2018年度中に報告書が出版できるように準備を進めている。上述の新書の刊行がきっかけとなり、今年度後半は美術館・博物館の職員・ボランティア研修に招かれる機会が増加した。民博を拠点として続けてきたユニバーサル・ミュージアム、触文化研究が着実に社会に浸透している手応えを感じる。日本ミュージアム・マネジメント学会の大会基調講演、台湾・イギリスの博物館関係の会議での研究報告などができたのも有意義だった。

◎出版物による業績

[単著]

廣瀬浩二郎

2017 『目に見えない世界を歩く』東京：平凡社。

[論文]

廣瀬浩二郎

2017 「視覚障害者の『さわる文化』」バイオメカニズム学会編『手の百科事典』pp.510-513, 東京：朝倉書店。[査読有]

2017 「さわって楽しむ博物館（以触覚遊樂的博物館）」『博物館文化平權國際研討會』pp.57-73, 新北：台湾・文化部博物館事業推展補助計畫。

2017 「触文化展示の意義と方法」『JMMA 会報』22(1)：8-16。

2018 「偏差知からの脱却」北川紘久・原田綾子編『障害者の芸術文化活動における支援のあり方に関する調査・研究報告書』pp.28-31, 滋賀：社会福祉法人グロー。

Hirose, K.

2017 Distinguishing “Barrier Free” and “Universality”. *MINPAKU Anthropology Newsletter* 45: 7-9.

[その他]

廣瀬浩二郎

2017 「『ユニバーサル』の原点は温泉にあり！」『暮らしの手帖』88：125。

2017 「『ユニバーサル・ツーリズム』とは何か」『民博通信』157：16-17。

2017 「そこに宮本武蔵がいる！」『SaTetsu』(8)：10-14。

2017 「みんなく展示の『触り』を体験しよう！」『文部科学 教育通信』421：2。

2017 「心に触れる博物館」『こころ』39：4-5。

- 2018 「日本一文をめざして」『週刊読書人』1月5日。
 2018 「無視覚流鑑賞の極意」『彫刻と生きる』24(26)：18-20。
 2018 「触察鑑賞から無視覚流鑑賞へ」『感覚をひらく——新たな美術鑑賞プログラム創造推進事業・2017年実施報告書』pp.24-25, 京都：京都国立近代美術館。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2017年6月3日 「触文化展示の意義と方法」日本ミュージアム・マネジメント学会第22回大会、東京家政大学
 2017年6月25日 ‘Hands of a Goze.’ 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所主催国際シンポジウム『障害と芸能』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
 2017年9月9日 「『理』で読み解くユニバーサル・ミュージアムの未来」バリアフリーシンポジウム2017、京都大学理学部
 2017年10月17日 「日本におけるユニバーサル・ミュージアム運動」友善平権国際検討会、新北市立十三行博物館
 2017年10月29日 「無視覚流で歩く」京都大学国際文化フォーラム2017『病と雑音の香り』京都大学時計台ホール
 2017年12月2日 「彫刻に触れる」公開シンポジウム第4弾『彫刻と生きる 人類とブロンズの歴史、そして…』東海大学松前記念館

・研究講演

- 2017年5月3日 「さわる文化と視覚障害者の職業」残酷視覚障害者教師の会、神戸市「しあわせの村」
 2017年5月10日 「触文化研究の現在」ユニバーサル社会を創造する事務次官プロジェクト、東京・文部科学省
 2017年5月14日 「さわる展示を楽しもう」JRPS近畿支部、国立民族学博物館
 2017年5月24日 「ユニバーサル・ミュージアムと無視覚流鑑賞」南山大学・博物館学講演会、南山大学
 2017年6月6日 「ユニバーサル・ツーリズムとは何か」兵庫県立大学、国立民族学博物館
 2017年6月10日 「目に見えない世界を歩く」京都大学ポケットゼミ『障害とは何か』国立民族学博物館
 2017年6月14日 「ボランティア活動を考える」山口県立山口図書館
 2017年6月15日 「触文化を体験しよう」下松点訳・音訳友の会、下松市社会福祉協議会
 2017年6月30日 「無視覚流まちあるきの楽しみ」京都文教大学
 2017年7月8日 「観光のユニバーサル化に向けて」つくば市民大学、筑波学院大学
 2017年7月30日 「彫刻に触れる」東海大学
 2017年8月21日 「さわっておどろく！」東海大学主催『ひらめき☆ときめきサイエンス』東海大学
 2017年9月16日 「瞽女文化と現代」岡山県立美術館
 2017年9月20日 「触文化とは何か」群馬大学
 2017年9月21日 「さわって感じる世界」群馬県立盲学校
 2017年9月24日 「『心』感覚ワークショップ」第32回国民文化祭、奈良県・大淀町文化会館
 2017年9月25日 「点字の歴史」大阪女学院中学部、大阪女学院
 2017年9月27日 「触文化体験講座」京都府教育委員会、長岡京市中央生涯学習センター
 2017年9月30日 「日本画にさわる」東京・ステップスギャラリー
 2017年10月2日 「視覚障害者の自立と社会参加」大阪女学院
 2017年10月7日 「彫刻に触れる」豊中市立文化芸術センター
 2017年10月8日 「『心』感覚ワークショップ」第32回国民文化祭、奈良県文化会館
 2017年10月15日 「石の考古学」ひたちなか市『ふるさと考古学講座』ひたちなか市埋蔵文化財センター
 2017年10月23日 「博物館とバリアフリー」2017年度博物館学集中コース、国立民族学博物館
 2017年10月29日 「無視覚流で歩く」京都大学
 2017年10月30日 「さわって楽しむ博物館」智弁学園中学部、国立民族学博物館
 2017年11月5日 「無視覚流情報伝達法の極意」東京・両国門天ホール
 2017年11月9日 「無視覚流という生き方」大阪府立大手前高校
 2017年11月10日 「視覚障害者の歴史」京都文教大学、国立民族学博物館
 2017年11月11日 「ユニバーサル・ミュージアムを創る」泉大津市視覚障害者協会、泉大津市立南公民館
 2017年11月22日 「無視覚流という生き方」兵庫県立篠山鳳鳴高校

- 2017年12月2日 「彫刻に触れる」東海大学
 2017年12月13日 「博物館とボランティア」兵庫県立考古博物館
 2017年12月16日 「無視覚流鑑賞の極意六箇条」第2回フォーラム、京都国立近代美術館
 2018年1月27日 「五感発見、くらやみ探検パート9——年の初めのタメシとて！」キッズプラザ大阪
 2018年1月30日 「無視覚流鑑賞と触文化展示」九州地区学芸員技術研修会、熊本市現代美術館
 2018年2月10日 「さわる世界旅行」和泉市立人権文化センター「にじのとしょかん」
 2018年2月17日～2月18日 「触覚で味わう展示」江戸東京博物館
 2018年2月22日 ‘Creating a New Theory of Tactile Learning.’ 英国・レスター大学
 2018年2月27日 ‘Hands of a Goze.’ 英国・日英大和基金
 2018年3月10日 「無視覚流鑑賞とは何か」米子市立美術館
 2018年3月11日 「目に見えない世界を歩く」米子市・ちいさいおうち
 2018年3月16日 「点字の不思議」豊中市立千里公民館
 2018年3月17日 「『全盲』をフィールドワークする」ロフトワーク
 2018年3月21日 「ユニバーサル・ミュージアムの理論と実践」神奈川県立近代美術館
 2018年3月24日 「感覚をひらく、まちあるき探検」東京・すみだ北斎美術館
 2018年3月25日 「想像をふくらませる」東京・すみだ北斎美術館
 2018年3月27日 「無視覚流鑑賞と触文化」横浜美術館
 2018年3月31日 「写真にさわる」高浜市かわら美術館
- ・みんぱくウィークエンド・サロン
 2017年12月17日 「目に見えない世界を歩く——『全盲』のフィールドワーク」第491回みんぱくウィークエンド・サロン

◎調査活動

・国内調査

- 2017年5月12日～5月13日—福島県（ユニバーサル・ツーリズムに関する現地調査）
 2017年9月5日～9月7日—東京・日本点字図書館（映画の副音声解説に関する動向調査）

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など
 科学研究費（基盤研究（C））「共生の技法としてのユニバーサルツーリズムの理論と実践」（研究代表者：石塚裕子（大阪大学））研究分担者

三島禎子 [みしま ていこ] ————— 准教授

1963年生。【学歴】セネガル共和国国立応用経済学院社会コミュニケーション学部卒（1989）、パリ第5大学大学院社会科学研究科第2課程修了（1992）、津田塾大学大学院国際関係学研究科博士前期課程修了（1992）、パリ第5大学大学院社会科学研究科第3課程修了（1993）【職歴】国立民族学博物館第3研究部助手（1995）、国立民族学博物館民族社会研究部助手（1998）、国立民族学博物館民族社会研究部准教授（2003）、国立民族学博物館グローバル現象研究部准教授（2017）【学位】D.E.A. Sci. Soc（パリ第5大学大学院社会科学研究科1993）、M. Soc.（パリ第5大学大学院社会科学研究科1992）【専攻・専門】文化人類学（西アフリカ研究）【所属学会】アフリカ学会、日本文化人類学会

【主要業績】

[編著]

- Charbit, Y. et T. Mishima (éds.)
 2014 *Questions de migrations et de santé en Afrique sub-saharienne*. Paris: L'Harmattan.

[論文]

- Mishima, T.
 2014 Anthropologie des migrations internationales des Soninké: Formation et transmission de la richesse. In Y. Charbit et T. Mishima (éds.) *Questions de migrations et de santé en Afrique subsaharienne*. Paris: L'Harmattan.

三島禎子

2011 「民族の離散と回帰——ソニンケ商人の移動の歴史と現在」 駒井 洋監修・編, 小川充夫編『グローバル・ディアスポラ』 pp.105-130, 東京: 明石書店。

【2017年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

アフリカ商業民の財の形成と継承に関する文化人類学的研究

・研究の目的、内容

アフリカ商業民によるアジア・アフリカ間貿易は、中国経済の拡大とともに今日のアフリカ経済の主要な現象のひとつになっている。西アフリカに故地をもつソニンケ民族は、地球規模の民族ネットワークでつながり、他の集団に先駆けてこの新しい経済機会をとらえた。その経済倫理には民族文化の伝統が受け継がれていると考えている。

10世紀以上前から商業民として知られるソニンケ民族は、民族文化とともにある種の「財」を継承してきたと考えられる。この有形・無形の「財」の本質と、継承の形態について調査し、移動と商業を生業とするソニンケの民族文化について考察を深めるのが本研究の目的である。

本年度はソニンケ民族の居住地（セネガル）で開催されている第10回目の民族祭に注目している。民族祭は民族文化を次世代に継承し、国を越えた民族的連帯を深め、宗教や政治的な危機によって分断された地域間統合をめざすもので、セネガル人厚志家を中心としておこなわれている。この運動を「財」についての考察の一環に位置づけ、民族祭とその運営についての取材をとおして映像に記録する。この映像取材は民博の本年度の情報プロジェクトとして採択されたものである。

他方、アフリカ商業民によるアジア・アフリカ間貿易はきわめて日常的経済活動にもなり、多くのさまざまな人が参入している。このような今日的な現象を理解するためのあらたな視点が必要である。個別の研究に並行して、移動先でアフリカ商業民が集住できる条件や、宗教や民族の違い、故地での動向などの視点を取り入れた大きな枠組みについても長期的に考察してゆく。

・成果

ソニンケ民族の居住地（セネガル）で開催されている第10回目の民族祭に参加し、民博の情報プロジェクトの資金を得て、映像取材を実施した。

当該の研究課題についてはみんぱく内外で講演をおこなったほか、民族祭についてはその概要と考察を論文にまとめている。

◎出版物による業績

[分担執筆]

三島禎子

2017 「セネガル共和国」中牧弘允編『世界の暦文化事典』 pp.300-303, 東京: 丸善出版。

[その他]

三島禎子

2018 「『もううんざりだ』の『鏡像』と連鎖への期待——セネガルの若者グループによる社会運動を記録」『図書新聞』 3338: 1。

2018 「『西アフリカ』『原始的』なるものへの驕り」野林厚志編『国立民族学博物館開館40周年記念特別展 太陽の塔からみんぱくへ——70年万博収集資料』 pp.105-120, 大阪: 国立民族学博物館。

2018 「国立民族学博物館の収蔵品³⁸ アフリカの意匠」『文部科学 教育通信』 432: 2。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2017年12月7日 「現象の現在と過去——アフリカ系商人の移動と文化」みんぱく若手研究者奨励セミナー、国立民族学博物館

・みんぱくゼミナール

2017年6月17日 「つくられる移民」第469回みんぱくゼミナール

・みんぱくウィークエンド・サロン

2017年7月9日 「アイコンからガラス絵へ」第472回みんぱくウィークエンド・サロン

◎大学院教育

- ・大学院ゼミでの活動
アフリカ文化研究「人の移動に関する文化的研究」

◎社会活動・館外活動

- ・他の機関から委嘱された委員など
Revue Européenne des Migrations Internationales 編集委員（アジア担当）
- ・その他の社会活動・館外活動
講義（大阪府高齢者大学校）

南 真木人 [みなみ まきと] ————— 准教授

1961年生。【学歴】弘前大学人文学部人文学科卒（1985）、筑波大学大学院環境科学研究科修士課程修了（1989）、筑波大学大学院歴史・人類学研究科博士課程退学（1991）【職歴】国立民族学博物館第3研究部助手（1991）、国立民族学博物館民族社会研究部助手（1998）、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（2003）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2005）、国立民族学博物館研究戦略センター准教授（2007）、文化資源研究センター准教授（2011）、国立民族学博物館研究戦略センター准教授（2015）、国立民族学博物館グローバル現象研究部准教授（2017）【学位】学術修士（筑波大学大学院環境科学研究科 1989）【専攻・専門】人類学、南アジア研究【所属学会】日本文化人類学会、日本南アジア学会、生態人類学会

【主要業績】

[共編]

南 真木人・石井 溥編

2015 『現代ネパールの政治と社会——民主化とマオイストの影響の拡大』（世界人権問題叢書92）東京：明石書店。

Yamashita, S., M. Minami, D.W. Haines, and J.S. Eades (eds.)

2008 *Transnational Migration in East Asia: Japan in a Comparative Focus* (Senri Ethnological Reports 77), Osaka: National Museum of Ethnology.

[論文]

Minami, M.

2007 From Tika to Kata?: Ethnic Movements among the Magars in an Age of Globalization. In H. Ishii, D.N. Gellner, and K. Nawa (eds.) *Social Dynamics in Northern South Asia Vol.1: Nepalis Inside and Outside Nepal*, pp.443-466. New Delhi: Manohar.

【2017年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

ネパール地震後の社会再編に関する研究

・研究の目的、内容

本研究は、2015年4月に発生したマグニチュード7.8のネパール地震とその復旧・復興の過程で生起している、社会の再編の具体例を調査し、ネパール社会の包括的理解を深めることを目的とする。現地調査と文献調査から、本地震を契機として生まれた市民的な連帯や共助が、分断しがちであった社会を変えていくのかを考察する。調査研究は、科研費・基盤研究（B）（海外学術調査）「2015年ネパール地震後の社会再編に関する災害民族誌的研究」で実施する。

・成果

科研費・基盤研究（B）（海外学術調査）「2015年ネパール地震後の社会再編に関する災害民族誌的研究」（代表：南 真木人）により現地調査を実施した。地震後2年がたち、現地では2018年2月現在、政府からの耐震モデル型住宅再建に対する補助金の給付期限が迫り、住宅再建ラッシュが起きている。だが、初期費用が工面できず再建に着手できない世帯のほうが多く、再建しようとしても耐震住宅を施工できる技術者や作業員の不足から順番待ちのところが少なくない。自己資金の不足と並び、復旧・復興過程で地域差を生んでいる要因に、海外とくに先進国とのつながりがあることが明らかになってきた。先進国に移住した村人の有無は、そうした

人が海外の NGO を引き寄せる要になっているからである。一つの集落においても自前で建てた波型鋼板の仮設住宅に住み続ける世帯と、住宅再建が達成できた世帯の二極化が進み、元々の社会的・経済的な格差が助長されたり、固定化したりする傾向が進む実態を把握した。成果の一部に、2017「ネパール地震の復旧・復興過程」(特集◇ネパール 大地震後の地域と社会)『地理』62(9)：22-29, 古今書院がある。

◎出版物による業績

[分担執筆]

南 真木人

2017 「ネパール連邦民主共和国」中牧弘允編『世界の暦文化事典』pp.130-133, 東京：丸善出版。

2018 「ネパール人のインド料理店」インド文化事典編集委員会編『インド文化事典』p.719, 東京：丸善出版。

2018 「子どもの遊び・大人のゲーム」インド文化事典編集委員会編『インド文化事典』p.438, 東京：丸善出版。

2018 「携帯電話, SNS」インド文化事典編集委員会編『インド文化事典』pp.704-705, 東京：丸善出版。

南 真木人・吉岡乾他

2018 「異彩を放つ EEM の思想——人間の知恵〈民具〉」野林厚志編『国立民族学博物館開館40周年記念特別展 太陽の塔からみんぱくへ——70年万博収集資料』pp.73-88, 大阪：国立民族学博物館。

名和克郎・石井 溥・中川加奈子・森本 泉・橋 健一・藤倉達郎・佐藤齊華・田中雅子・高田洋平・丹羽 充・別所裕介・南 真木人・上杉妙子・宮本万里

2017 「移住労働が内包する社会的包摂」名和克郎編『体制転換期ネパールにおける「包摂」の諸相——言説政治・社会实践・生活世界』pp.451-483, 東京：三元社。

中溝和弥・南 真木人

2018 「マオイスト」インド文化事典編集委員会編『インド文化事典』pp.302-303, 東京：丸善出版。

[論文]

南 真木人

2017 「ネパール地震の復旧・復興過程」(特集 ネパール 大地震後の地域と社会)『地理』62(9)：22-29, 東京：古今書院。

2018 「34年後のバトゥレチョールとガンダルバの現在」(特集 ヒマラヤの吟遊詩人ガンダルバの現在)『季刊民族学』163：25-36。

[その他]

藤井知昭・寺田吉孝・南 真木人

2018 「《鼎談》映像をとおしたバトゥレチョールとの再開」(特集 ヒマラヤの吟遊詩人ガンダルバの現在)『季刊民族学』163：15-24。

南 真木人

2017 「国立民族学博物館の収蔵品③ ブータンのテント」『文部科学 教育通信』417：2。

2017 「残余にあらわれるネパールの手芸的なるもの」『月刊みんぱく』41(9)：18-19。

2017 「新世紀ミュージアム ネパール民族誌博物館」『月刊みんぱく』41(10)：16-17。

2018 「過去の記録映像を現地に返す」(特集 ヒマラヤの吟遊詩人ガンダルバの現在)『季刊民族学』163：4-6。

◎映像音響メディアによる業績

・国立民族学博物館映像音響資料の制作・監修

南 真木人・寺田吉孝・藤井知昭監修

2018 『みんぱく映像民族誌 第26集 ネパールの30年』(日本語・77分)

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機構の連携研究会での報告

2017年12月16日 「常態化するネパール人移住労働者の移民ネットワーク」『南アジア地域研究拠点・民博(MIN-DAS)【移民・移動】班・第1回研究会』国立民族学博物館

・共同研究会での報告

2017年10月1日 「モノから探るネパールの手芸的なるもの」共同研究会『現代「手芸」文化に関する研究』国立民族学博物館

・みんぱくゼミナール

2017年7月15日 「ネパールの楽師カースト・ガンダルバの現在」 第470回みんぱくゼミナール

・みんぱくウィークエンド・サロン

2017年9月10日 「南アジア展示『生態となりわい』の見どころ」 第480回みんぱくウィークエンド・サロン

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（B））「2015年ネパール地震後の社会再編に関する災害民族誌的研究」研究代表者

学術資源研究開発センター

岸上伸啓 [さしがみ のぶひろ] センター長(併) 教授

1958年生。【学歴】早稲田大学第一文学部社会学科卒（1981）、早稲田大学大学院文学研究科社会学専修修士課程修了（1983）、マギル大学人類学部人類学科博士課程退学（1989）【職歴】早稲田大学文学部助手（1989）、北海道教育大学教育学部函館校専任講師（1990）、北海道教育大学教育学部函館校助教授（1992）、国立民族学博物館第1研究部助教授（1996）、総合研究大学院大学文化科学研究科助教授（1997）、国立民族学博物館先端民族学研究部助教授（1998）、国立民族学博物館先端人類科学研究部助教授（2004）、総合研究大学院大学文化科学研究科教授（2005）、国立民族学博物館先端人類科学研究部教授（2005）、総合研究大学院大学文化科学研究科比較文化学専攻長（2006）、国立民族学博物館館長補佐（2008）、国立民族学博物館先端人類科学研究部部長（2009）、国立民族学博物館研究戦略センター教授（2012）、国立民族学博物館研究戦略センターセンター長（2012）、国立民族学博物館副館長（2013）、国立民族学博物館学術資源研究開発センターセンター長（2017）【学位】博士（文学）（総合研究大学院大学文化科学研究科 2006）、文学修士（早稲田大学大学院文学研究科 1983）【専攻・専門】文化人類学 カナダ・イヌイットの社会変化、都市在住のイヌイットの民族誌的研究、先住民による海洋資源の利用と管理、アラスカ先住民イヌピアットとカナダ・イヌイットの捕鯨、環北太平洋先住民文化の比較研究【所属学会】日本文化人類学会、日本カナダ学会、国際極北社会科学学会、民族芸術学会、生き物文化誌学会、函館人文学会

【主要業績】

[単著]

岸上伸啓

2007 『カナダ・イヌイットの食文化と社会変化』京都：世界思想社。

[編著]

Kishigami, N., H. Hamaguchi, and J.M. Savelle (eds.)

2013 *Anthropological Studies of Whaling* (Senri Ethnological Studies 84). Osaka: National Museum of Ethnology.

[論文]

Kishigami, N.

2004 A New Typology of Food-Sharing Practices among Hunter-Gatherers, with a Special Focus on Inuit Examples. *Journal of Anthropological Research* 60: 341-358.

【受賞歴】

2007 第18回カナダ首相出版賞

1998 第9回カナダ首相出版賞（審査員特別賞）

【2017年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

カナダ先住民社会の歴史的变化と現状に関する文化人類学的研究

・研究の目的、内容

本研究の目的は、カナダにおける多様な先住民文化の歴史的变化と現状について比較するとともに、同地域における先住民の文化資源資料に関する情報を吟味し、フォーラム型情報ミュージアムのコンテンツを作成し、発信することである。具体的には、下記のことを行う。

(1) カナダにおける諸先住民文化の変化と現状について、2015年度から行ってきた既存の民族誌や学術論文などの調査および現地調査の成果に基づき、国家と先住民との関係に着目して比較を行う。

(2) カナダ歴史博物館やマギル大学人類学部サベール研究室、北海道立北方民族博物館ほかと連携しながら、国立民族学博物館が収蔵している同地域の先住民の文化資源資料に関する情報を吟味し、その高度化と多言語化を実施する。

(3) (1)と(2)の研究成果を統合し、2017年度秋季企画展「カナダ先住民の文化の力」で公開するとともに、標本資料情報をフォーラム型情報ミュージアムのコンテンツを完成させ、発信する。また、成果の一部を論文で発表する。

なお、本研究は、国立民族学博物館の2017年度「人類の文化資源に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築」プロジェクトおよび2017年度（基盤研究（A））（一般）「ネットワーク型博物館学の創成」（研究代表者：須藤健一）、2017年（基盤研究（A））（海外）「グローバル化時代の捕鯨文化に関する人類学的研究」（研究代表者：岸上伸啓）の一部として実施する。

・成果

本年度は、カナダにおける多様な先住民文化の歴史的变化と現状についてカナダの北西海岸地域および東部地域で現地調査および博物館調査を行うとともに、これまでの成果を取りまとめ、次のような成果をあげた。なお、カナダにおける現地調査は、2017年度（基盤研究（A））（一般）「ネットワーク型博物館学の創成」（研究代表者：須藤健一）および2017年（基盤研究（A））（海外）「グローバル化時代の捕鯨文化に関する人類学的研究」（研究代表者：岸上伸啓）の一部として実施した。

(1) 2017年度秋季企画展「カナダ先住民の文化の力」（2017年9月7日～12月5日）を開催し、研究成果の一部を一般公開した。また、企画展に関連したカナダ先住民の歴史的变化と文化の現状に関する講演を第472回民博ゼミナールや第471回みんぱく友の会講演会等で行うとともに、第42回カナダ学会（国際シンポジウム）や第51回日本文化人類学会年次研究大会、第9回国際極北社会科学会議等において口頭発表した。

(2) 民博が収蔵する北アメリカ北方先住民文化関連標本資料（約3000件）に関するデータベースを完成させ、2018年3月にフォーラム型情報ミュージアムから一般公開した。

(3) カナダ先住民社会の歴史的变化と現状に関する研究成果の一部として「現代の鯨類利用に関する文化人類学的研究：カナダ北西海岸地域のホエール・ウォッチングを中心に」（『人文論究』87号2018）等4本の論文を出版した。

◎出版物による業績

[分担執筆]

岸上伸啓

2018 「ネオリベラリズムとカナダ・イヌイットの社会変化」関根康正編『ストリート人類学——方法と理論の実践的展開』pp.415-431, 東京：風響社。

2018 「北アメリカ極北先住民社会における肉食」野林厚志編『肉食行為の研究』pp.33-61, 東京：平凡社。

[論文]

岸上伸啓・池谷和信・佐々木史郎・戸田美佳子

2018 「資料 最近の狩猟採集民研究の動向——第11回国際狩猟採集社会会議（CHAGS11）に出席して」『国立民族学博物館研究報告』42(3)：321-372。[査読有]

岸上伸啓

2018 「現代の鯨類利用に関する文化人類学的研究——カナダ北西海岸地域のホエール・ウォッチングを中心に」『人文論究』87：49-60。[査読有]

2018 「アラスカ・イヌピアット社会におけるホッキョククジラ漁をめぐる宗教実践と社会変化」『社会分析』45：19-35。[査読有]

[その他]

岸上伸啓

2017 「新世紀ミュージアム カナダ歴史博物館」『月刊みんぱく』41(4)：16-17。

- 2017 「先住民生存捕鯨と動物福祉の問題」日本文化人類学会第51回研究大会準備委員会編『日本文化人類学会第51回研究大会研究発表要旨集』 p.120, 神戸：日本文化人類学会第51回研究大会準備委員会。
- 2017 「第42回年次研究大会へのお誘い」『ニューズレター』 107：11。
- 2017 「カナダの先住民社会——多様な文化の展開」細川道久編『カナダの歴史を知るための50章』 pp.34-39, 東京：明石書店。
- 2017 「カナダ建国150周年と先住民政策」『みんぱく e-news』 195。
- 2017 「カナダ・イヌイット社会の歴史的变化と現状」日本カナダ学会第42回年次大会企画委員会編『日本カナダ学会第42回年次研究大会 プログラム・報告要旨』 p.21, 大阪：国立民族学博物館。
- 2017 「カナダ先住民社会の変貌」特集「多様なカナダ先住民文化」『月刊みんぱく』 41(9)：2-3。
- 2017 「イヌイット村落再訪」特集「多様なカナダ先住民文化」『月刊みんぱく』 41(9)：8-9。
- 2017 「一般公開国際シンポジウム——カナダ先住民の歴史と現状」『ニューズレター』 108：4-6。
- 2017 「日本カナダ学会第42回年次研究大会を終えて」『ニューズレター』 108：1-2。
- 2017 「イヌイットの醃酵肉料理」『Vesta』 108：22-23。
- 2017 「生きるための移動」国立民族学博物館編『国立民族学博物館 開館40周年 展示案内』 pp.186-189, 大阪：国立民族学博物館。
- 2017 「カナダ（一般）」中牧弘允編『世界の暦文化事典』 pp.356-359, 東京：丸善出版。
- 2017 「北アメリカ北方地域における先住民文化の多様性と定量化」小林豊編『第4回研究大会パレオアジア文化史学プログラム・要旨集』 pp.16-17, 東京：東京大学。
- 2017 「先住民による捕鯨と動物の権利」『民博通信』 159：10-11。
- 2018 「カナダ先住民と建国150年——北西海岸先住民を事例に」『国立民族学博物館友の会ニュース』 242：4。
- 2018 「カナダ先住民の文明論——ヨーロッパ文明との遭遇を中心に」『比較文明学会会報』 68：8。
- 2018 「カナダ先住民の文化の力——イヌイット・アートを中心に」『民族藝術学会会報』 92：5。
- 2018 「北アメリカ・アラスカ地域におけるホッキョククジラと人類をめぐる歴史生態学」『国立民族学博物館 特別研究「歴史生態学から見た人と生き物の関係」要旨集』 p.86, 大阪：国立民族学博物館。
- Kishigami, N.
- 2017 Indigenous Trading Networks Across the Bering Strait from the Eighteenth to the Twentieth Centuries. ICAS 10 Organizing Committee (ed.) *Conference Abstracts Overview of the ICAS 10*, pp.355-356. Leiden: ICAS Secretariat.
- 2017 Minpaku Info-forum Museum Project: Progress Report. *MINPAKU Anthropology Newsletter* 45: 4-5.
- 2017 History and Current Status of Indigenous People in Canada, International Symposium September 9, 2017. *MINPAKU Anthropology Newsletter* 45: 14-15.
- 2017 Recent Trends in Inuit Migration to Southern Regions of Canada: A focus on Montreal. In ICASS IX Organizing Committee(ed). Full Session Programme with Abstracts p.333. Umea: International Arctic Social Sciences Association.
- 2017 Whaling Right and Animal Welfare. In ICASS IX Organizing Committee (ed.) Full Session Programme with Abstracts, p.132. Umea: International Arctic Social Sciences Association.
- 2018 Comments on Ready and Power's "Why Wage Earners Hunt Food Sharing, Social Structure, and Influence in an Arctic Mixed Economy". *Current Anthropology* 59(1): 89-90.
- ◎口頭発表・展示・その他の業績
- ・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告
- 2018年3月20日 「北アメリカ・アラスカ地域におけるホッキョククジラと人類をめぐる歴史生態学」国立民族学博物館特別研究シンポジウム『歴史生態学から見た人と生き物の関係』国立民族学博物館
- ・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告
- 2017年5月28日 「先住民生存捕鯨と動物福祉の問題」日本文化人類学会第51回研究大会、神戸大学
- 2017年6月8日 Recent Trends in Inuit Migration to Southern Regions of Canada: A focus on Montreal. Session 22.2b "Arctic Dwellers on the Move: Studying Social Dynamics beyond the Ethnicity Lens", the 9th International Congress on Arctic Social Sciences (ICASS IX), University of Umea, Sweden

- 2017年6月11日 Whaling Right and Animal Welfare. Session 8.10 “Recognition, Protection and Management of Indigenous Land Resource Rights in the Arctic – Domestic and International Approaches”, the 9th International Congress on Arctic Social Sciences (ICASS IX), University of Umea, Sweden
- 2017年7月13日 「北太平洋沿岸における先住民社会と交易について——北太平洋地域の交流史の復元と同地域のグローバルヒストリーへの位置づけのための序論」2017年度第2回北東アジア地域研究月例研究会、国立民族学博物館
- 2017年7月23日 Indigenous Trading Networks across the Bering Strait from the Eighteenth to the Twentieth Centuries, Panel 262 at the 10th International Convention of Asian Scholars, Chiang Mai Exhibition and Convention Center, Thailand
- 2017年9月9日 「カナダ・イヌイット社会の歴史的变化と現状」一般公開国際シンポジウム『カナダ先住民の歴史と現状』日本カナダ学会第42回年次研究大会、国立民族学博物館
- 2017年9月30日 「カナダ先住民の文化の力——イヌイット・アートを中心に」民族藝術学会第149回研究例会、国立民族学博物館
- 2017年10月28日 「イヌイット・アートと和紙 和紙を通じて見る高知のグローバルなつながり」高知大学人文社会科学部門研究プロジェクト『高知に関する人文学・社会科学の拠点づくり』研究会、高知県立高知城歴史博物館
- 2017年12月2日 「カナダ先住民の文明論——ヨーロッパ文明との遭遇を中心に」第36回比較文明学会関西支部例会、国立民族学博物館
- 2017年12月9日 「北アメリカ北方地域における先住民文化の多様性と定量化」『パレオアジア文化史学』第4回研究大会、東京大学
- ・ **みんぱくゼミナール**
 - 2017年9月16日 「多文化主義の国カナダにおける先住民文化」第472回みんぱくゼミナール
 - ・ **研究講演**
 - 2017年4月14日 「(コメント) 人類社会における贈与、交換、分配」京都大学稲森記念財団会館
 - 2017年7月15日 「カナダの大自然と先住民文化の魅力——西から東、南から北へ訪ね歩く」屋書店枚方 T-SITE
 - 2017年10月7日 「カナダ先住民と建国150年——北西海岸先住民を事例に」国立民族学博物館
 - 2017年10月7日 「カナダ先住民の文化の力——イヌイット・アートを中心に」民族藝術学会第149回研究例会、国立民族学博物館
 - ・ **展示**
 - 2017年9月7日～12月5日 「カナダ先住民の文化の力——過去、現在、未来」国立民族学博物館
 - ・ **みんぱくウィークエンド・サロン**
 - 2017年12月3日 「カナダ先住民の文化の力——過去、現在、未来」第489回みんぱくウィークエンド・サロン
 - ・ **広報・社会連携活動**
 - 2017年6月19日 「カナダ・イヌイット社会の変化」川西市明峰公民館
 - 2017年10月27日 「カナダにおける先住民の歴史と文化」国立民族学博物館
 - 2017年11月22日 「カナダ・イヌイットの生活」川西市清和台公民館
 - 2017年11月29日 「カナダ北西海岸先住民の生活」川西市清和台公民館
 - 2017年12月1日 「カナダ先住民のモノと精神世界(I) ——極北地域と北西海岸地域」国立民族学博物館
 - 2017年12月8日 「カナダ先住民のモノと精神文化——大平原地域と東部森林地域」大阪府高齢者大学校
- ◎調査活動
- ・ **海外調査**
 - 2017年7月29日～8月7日—カナダ（カナダ国北西海岸地域（ブリティッシュコロンビア州アラートベイおよびキャンベルリバー）の先住民社会における鯨類利用に関する調査）
 - 2018年1月24日～2月6日—カナダ（カナダ東部の博物館とのネットワーク化およびイヌイットの捕鯨活動に関する調査）
 - 2018年3月1日～3月11日—アメリカ合衆国（北東アジア地域の先住民文化の研究動向に関する調査とスミソニアン極北研究センター・アラスカ支局との展示連携に関する調査）

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（3人）、副指導教員（1人）

・大学院ゼミでの活動

講義「比較社会研究特論I」、演習「比較社会研究演習II」

・博士論文審査委員（総研大に限る）

博士論文審査委員（1件）、予備審査委員（1件）

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（A））「ネットワーク型博物館学の創成」（研究代表者：須藤健一）研究分担者、科学研究費（基盤研究（A））「グローバル化時代の捕鯨文化に関する人類学的研究——伝統継承と反捕鯨運動の相克」研究代表者、人間文化研究機構機関拠点型「北米北方先住民の文化資源に関するデータベースの構築に関する研究——民博コレクションを中心に」研究代表者

◎社会活動・館外活動

・その他の社会活動・館外活動

日本カナダ学会理事、日本文化人類学会評議員、民族芸術学会理事、日本学術会議連携会員（地域研究）、Journal of Anthropological Research の associate editor

◎学会の開催

2017年9月9日、10日 日本カナダ学会第42回年次研究大会、国立民族学博物館

笹原亮二 [ささはら りょうじ] ————— 教授

1959年生。【学歴】早稲田大学第一文学部卒（1982）、神奈川大学大学院歴史民俗資料科学研究科博士前期課程修了（1995）、神奈川大学大学院歴史民俗資料科学研究科博士後期課程退学（1995）【職歴】国立民族学博物館第1研究部助手（1996）、国立民族学博物館民族文化研究部助手（1998）、国立民族学博物館民族文化研究部助教授（2001）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2004）、国立民族学博物館民族文化研究部教授（2011）、国立民族学博物館学術資源研究開発センター教授（2017）【学位】博士（歴史民俗資料学）（神奈川大学大学院歴史民俗資料科学研究科2001）、修士（歴史民俗資料学）（神奈川大学大学院歴史民俗資料科学研究科1995）【専攻・専門】民俗学、民俗芸能研究 日本の獅子舞の民俗学的研究、日本の民俗芸能の近代～現代における伝承の研究、民俗学における資料論【所属学会】日本民俗学会、民俗芸能学会、芸能史研究会

【主要業績】

[単著]

笹原亮二

2003 『三匹獅子舞の研究』京都：思文閣出版。

[編著]

笹原亮二編

2009 『口頭伝承と文字文化——文字の民俗学 声の歴史学』京都：思文閣出版。

[論文]

笹原亮二

2005 「用と美——柳田国男の民俗学と柳宗悦の民藝を巡って」熊倉功夫・吉田憲司編『柳宗悦と民藝運動』pp.273-294, 京都：思文閣出版。

【2017年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

日本の獅子舞の多様性

・研究の目的、内容

日本列島には、南九州から奄美群島北部や壱岐対馬等一部の地域を除き、各地に獅子舞が伝来している。それ

らの獅子舞は、古代に大陸から伝来した伎楽・舞楽に由来する、1匹の獅子を2人以上の演者で演じる二人立と、古代末から中世にかけての風流踊に由来する、1匹の獅子を1人の演者が演じる一人立といった、成立の歴史的経緯が異なる2系統に大別される。しかし、一説には数千ともいわれるが、正確な捕捉が不可能なほど膨大な数が伝来している各地の獅子舞の実態を理解するには、そうした区分では必ずしも十分ではない。

例えば、二人立の獅子舞では、東北地方の「権現舞」や「虎舞」、佐渡島の「大獅子」、「伊勢大神楽」「継ぎ獅子」「梯子獅子」等の曲芸・軽業的な演技を行う獅子舞、伊勢志摩地方の「御頭神事」の獅子舞、鳥取地方の「麒麟獅子舞」、長崎地方の「獅子浮立」、沖縄・奄美群島南部の全身が毛に覆われた着ぐるみ形式の獅子舞等、一人立の獅子舞では、北海道南部の「鹿子舞」、東北地方の「鹿踊」、関東甲信越から東北地方にかけての三匹獅子舞、佐渡の「小獅子舞」、中京地方の山車で演じられる獅子舞、九州北西部の「浮立」等があり、それらは、特定の地域に同系統の獅子舞が複数分布し、地域的な類型を構成するかたちで全国的な多様性が形成されている。更に、そうした各地の獅子舞の類型は、その地域内でより細かな差異を有する地域的な類型を形成したり、近接する同じ種類の獅子舞であっても様々な差異が認められたり、その多様性は類型化と差異化が入り組んで複雑な様相を呈している。こうした獅子舞の多様性は、獅子頭の形態や芸態の面に止まらず、演者集団のあり方についても、氏子組織によって行われたり、トウヤ（当屋・頭屋）制度と結び付いたり、若者組や子供組と結び付いたり、地域によって様々である。

全国各地に伝来する夥しい数の獅子舞が、どのような原因により、どのような経緯を経てそうした複雑な多様性を形成するに至ったのか、その1つの理解モデルの構築を目指して、伊勢志摩地方の御頭神事、鳥取地方の麒麟獅子舞等、同一の種類の獅子舞が同一地域内に数多く分布する事例を基に、現地調査や文献調査等を行い、まずは地域的な実態のより詳細、精確な把握を試みたい。

本研究の実施にあたっては、申請者が研究代表者の科学研究費助成事業（基盤研究（C））「本州とその周辺の島々及び多島海海域における民俗芸能の研究」を活用する。

・成果

本研究では、同一種類の獅子舞が同一地域内に数多く分布する地域として、宮城県石巻市・気仙沼市・女川町、新潟県佐渡島、三重県伊勢志摩地方、鳥取県旧因幡国域、島根県隠岐などの獅子舞について、現地調査を初めとした調査研究を行った。

宮城県石巻市・気仙沼市・女川町では、「雄勝法印神楽」や「本吉法印神楽」の際に行われる獅子舞や、石巻市や女川町の「春祈祷」や「獅子振り」の獅子舞について調査を行った。現在、法印神楽で行われている獅子舞は、この地域の春祈祷で行われていた獅子舞が法印神楽の上演の際にも行われるようになったともいわれ、獅子頭の形状や舞い方が近隣の春祈祷の獅子舞と類似が見られた。春祈祷や獅子振りの獅子舞は、震災で中断を余儀なくされたところも多いが、徐々に再開されてきていた。これらの獅子舞は、それぞれの集落の人々が自ら演じてきたもので、獅子頭が「権現舞」風から「大神楽」風まで様々で、舞い方なども併せて考えると、集落毎の違いが意外に目に付いた。

佐渡島では、胴幕に多くの演者が入る「大獅子」、二人で1匹の獅子を演じる二人立の獅子舞、一人で1匹の獅子を演じる一人立の「小獅子舞」について調査を行った。二人立の獅子舞は立体的な赤い獅子頭を舞わせる大神楽系統の獅子舞で、「鬼太鼓」と共に島内各地で広域的に見られた。それに対し、大獅子は島内の南部や西部に比較的多く見られ、小獅子舞は南部や北部の沿岸部に見られて分布の偏りが認められた。小獅子舞には花笠を被った「側踊」の演者と共に獅子が踊り、全体が「花笠踊」と呼ばれているところもあり、一人立の獅子舞と風流踊の密接な関係を想起させる事例として注目された。

三重県伊勢志摩地方では、年頭を中心に「御頭神事」と呼ばれる獅子舞が各集落で行われる。この地域は伊勢大神楽の本拠地に比較的近いにも関わらず、御頭神事の獅子舞は、獅子頭の形状や舞い方が伊勢大神楽と異なり、更に、集落毎に差異が認められる場合が少なくないが、本年度調査を行った獅子舞も同様であった。このことは、御頭神事の獅子舞が、伊勢大神楽が流行する江戸時代初期以前にこの地域で行われていた、伊勢大神楽とは別系統の獅子舞の流れを汲むことの現れとも考えられる。

鳥取県旧因幡国域では、域内に休止も含めて200カ所近く分布する「麒麟獅子舞」について調査を行った。麒麟獅子舞は前後に細長い一本角の獅子頭に「カヤ」と呼ばれる胴幕を持ち、「猩々」と呼ばれる獅子あやしが付く二人立の獅子舞である。各地の麒麟獅子舞は、前述の特徴がほぼ共通する一方で、獅子頭や猩々面の形状や舞い方に獅子舞ごとの差異が少なからず認められ、全体として極めて多様性に富んだ様相を呈していた。各地の獅子舞は、かつては若者たちに上演や伝承が一切任されているところが多く、教授する側の若者の交代が頻繁に行われ、その結果、舞い方に変化を来す場合も少なくなかった。このことは、そもそも獅子舞の伝承の制度自体が変化を生む仕組みを有していたと見ることができる。

鳥根県隠岐では、島後においては寺院の法会の際の芸能上演に由来する舞楽由来の獅子舞や、複数の地域が合同で行う大規模な祭において、特定の集落が代々演じてきた獅子舞が見られたのに対し、島前の島々では、寺社の祭の際に演じられる田楽の中で演じられる獅子舞や、各集落の祭の際の神幸に供奉する獅子舞が見られ、島後と島前の島々毎に獅子舞の差異が認められた。

以上、これらの各地域の獅子舞の様相で目に付くのは、それぞれの地域にはほぼ同系統の獅子舞が多数分布する一方で、獅子頭の形状や芸態など、様々な面での差異がそれぞれの獅子舞毎に顕著に見られたことである。こうした差異がいかに生じたのかを明らかにすることが新たに課題となるが、その場合、麒麟獅子舞に見られた変化を生む伝承の仕組みは一つの手がかりになりそうである。

また、各地の獅子舞は、明治以降その数を増加させて、多様性に富む多数の獅子舞の分布状況が形成された場合も見られた。全国一律の一元的な社会制度が人々の生活を半ば強制的に再編していった明治時代以降、却って地域毎の差異や多様性が増加したとすると、逆説的で興味深い。明治時代の地域社会と獅子舞を初めとする民俗的な生活文化の関係も、本研究を通じて浮上してきた新たな課題といえる。

以上の内容を初め、本研究の成果は、『「因幡の麒麟獅子舞」調査報告書』（鳥取県教育委員会 2018）所収の拙稿「獅子舞の系譜と麒麟獅子舞」「麒麟獅子舞の芸態」などの著作、民博共同研究や鳥根県立古代文化センター研究会での発表、『みんぱく映像民族誌第27集 民俗芸能と軽業』（国立民族学博物館 2018）などを通して公表した。

なお、本研究の実施にあたっては、申請者が研究代表者の科学研究費助成事業（基盤研究（C））「本州とその周辺の島々及び多島海海域における民俗芸能の研究」を活用した。

◎出版物による業績

[単著]

笹原亮二

2018 『民俗芸能と軽業』（みんぱく映像民族誌第27集）大阪：国立民族学博物館。

[分担執筆]

笹原亮二

2018 「総論 獅子舞の系譜と麒麟獅子舞 麒麟獅子舞の芸態」『国選択記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財「因幡の麒麟獅子舞」調査報告書』pp.35-52, 鳥取：鳥取県教育委員会。

2018 「麒麟獅子舞の芸態」『国選択記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財「因幡の麒麟獅子舞」調査報告書』pp.53-124, 鳥取：鳥取県教育委員会。

2018 「晩稲の麒麟獅子舞」『国選択記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財「因幡の麒麟獅子舞」調査報告書』pp.241-249, 鳥取：鳥取県教育委員会。

2018 「下味野の麒麟獅子舞」『国選択記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財「因幡の麒麟獅子舞」調査報告書』pp.257-266, 鳥取：鳥取県教育委員会。

2018 「だんじりの諸相——そのルーツと広がり」鳥根県古代文化センター編『しまねの古代文化』25：124-143。

[その他]

笹原亮二

2017 「『琉球人』を演じる人々」特集「異国をまとう」『月刊みんぱく』41(7)：7-8。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・みんぱくウィークエンド・サロン

2018年2月18日 「日本の文化の展示場（祭りと芸能）から」第499回みんぱくウィークエンド・サロン

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（C））「本州とその周辺の島々及び多島海海域における民俗芸能の研究」研究代表者

寺田吉孝 [てらだ よしたか] ————— 教授

【学歴】ワシントン大学総合学部学士課程修了（1979）、ワシントン大学音楽部民族音楽学科修士課程修了（1983）、ワシントン大学音楽部民族音楽学科博士課程修了（1992）【職歴】ワシントン大学音楽部講師（1994）、ピッツバーグ大学船上大学プログラム講師（1995）、国立民族学博物館第2研究部助手（1996）、国立民族学博物館民族文化研

究部助教授（1998）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（1999）、国立民族学博物館民族文化研究部教授（2008）、国立民族学博物館先端人類科学研究部教授（2012）、国立民族学博物館民族文化研究部教授（2016）、国立民族学博物館学術資源研究開発センター教授（2017）【学位】 Ph. D.（ワシントン大学音楽部民族音楽学科 1992）、M. A.（ワシントン大学音楽部民族音楽学科 1983）【専攻・専門】 民族音楽学【所属学会】 東洋音楽学会、Society for Ethnomusicology、International Council for Traditional Music

【主要業績】

[編著]

Terada, Y. (ed.)

2008 *Music and Society in South Asia: Perspectives from Japan* (Senri Ethnological Studies 71). Osaka: National Museum of Ethnology.

2001 *Transcending Boundaries: Asian Musics in North America* (Senri Ethnological Reports 22). Osaka: National Museum of Ethnology.

[論文]

Terada, Y.

2000 T.N. Rajaratnam Pillai and Caste Rivalry in South Indian Classical Music. *Ethnomusicology* 44(3): 460-490.

【受賞歴】

2000 Jaap Kunst Award (Society for Ethnomusicology, USA)

【2017年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

音楽・芸能の伝承における博物館・アーカイブズの役割と映像音響メディアの活用

・研究の目的、内容

音楽・芸能に関する映像音響資料は、世界各地の博物館やアーカイブズに保管されている。このような資料の収集と保管は、それ自体大きな価値があるが、これらを音楽芸能の振興、とくに伝承が危ぶまれている伝統の再興や活性化に果たす役割については未だ十分な議論の蓄積がない。民博においても、映像音響メディアを用いて収集してきた音楽・芸能の情報は膨大な量に達しており、その資料的価値は高いが、活発な収集・制作活動に比べ、映像音響メディアの活用の可能性に関する議論はこれまで十分に行われておらず、館外での利用、特に取材対象国・地域における利用は限定的である。本研究は、民博における番組作成と活用のプロセスを見直すことから、博物館・アーカイブズの伝統継承に果たしうる役割を再検討することを目的とする。

・成果

1) イタリア（2017年5月）、タイ（6月）、中国（11月）、インド（2018年）で開催された国際研究集会に参加し、それぞれ映像音響資料を保管する博物館やアーカイブズの役割について民博の活動を事例とした研究発表を行った。

2) アイルランドで開催された国際伝統音楽学会の第44回世界大会（7月）において、音楽・芸能の伝承における博物館の役割に関するパネルを組織し、その中で民博の音楽資料の活用について研究発表を行った。

3) 民博において国際シンポジウム「無形文化遺産を巡る交渉」（11月～12月）を開催し、研究発表を行った。

4) 2015～2016年度に収集した在日コリアンの音楽文化に関する映像素材をもとに、映像番組「アラン岬を越えていく——在日コリアンの音楽」（76分）を制作した。

◎出版物による業績

[分担執筆]

寺田吉孝

2018 「西洋楽器の受容」インド文化事典編集委員会編『インド文化事典』pp.508-509, 東京：丸善出版。

2018 「音楽・芸能」インド文化事典編集委員会編『インド文化事典』p.483, 東京：丸善出版。

[その他]

藤井知昭・寺田吉孝・南 真木人

2018 「映像をととしたバトゥレチョールとの再会」『季刊民族学』163：15-24。

寺田吉孝

- 2017 「国立民族学博物館の収蔵品② 紛争と楽器」『文部科学 教育通信』415：2。
- 2017 「旅・いろいろ地球人 音楽の名手たち① 神につながる音」『毎日新聞』11月2日夕刊。
- 2017 「旅・いろいろ地球人 音楽の名手たち② 不動の上半身」『毎日新聞』11月9日夕刊。
- 2017 「旅・いろいろ地球人 音楽の名手たち③ 語り継がれるカリスマ」『毎日新聞』11月16日夕刊。
- 2017 「旅・いろいろ地球人 音楽の名手たち④ 在日のパンソリ」『毎日新聞』11月30日夕刊。

◎映像音響メディアによる業績

・国立民族学博物館映像音響資料の制作・監修

- 南 真木人・寺田吉孝・藤井友昭監修
2017 『ネパール 楽師の村 バトゥレチョールの現在』（日本語、91分31秒）
- 南 真木人・寺田吉孝・藤井知昭監修
2018 『みんぱく映像民族誌第26集 ネパールの30年』（日本語、77分）
- 高 正子・寺田吉孝監修
2018 『アリラン峠を越えていく——在日コリアンの音楽』（日本語、76分）

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

- 2017年12月1日 “Drumming and marginalized community: Museum documentation of a cultural heritage in the making”, *Negotiating Intangible Cultural Heritage*, National Museum of Ethnology

・機構の連携研究会での報告

- 2017年10月21日 「ヴィーナ系弦楽器の系譜」南アジア地域研究民博拠点「音楽・芸能」班第1回研究会『南アジアの弦楽器——歴史の変遷と現代的展開』国立民族学博物館
- 2018年3月17日 「南インド古典舞踊とスリランカ系タミル人——トロントの現状」南アジア地域研究民博拠点「音楽・芸能」班第2回研究会『南アジアの弦楽器——歴史の変遷と現代的展開』国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2017年5月26日 “Making films in the southern Philippines: Shooting, editing and post-production applications.” 1st International Seminar of Visual Ethnomusicology. Museo del Paesaggio Sonoro, Italy
- 2017年6月9日 “Documenting interviews.” *Laon Laon 2017: Ethnomusicology and Field Research in the Digital Age*. Srinakharin Wirot University, Thailand
- 2017年7月19日 “Museum as an intermediary zone: Zainichi Korean Music Project.” 44th World Conference of the International Council for Traditional Music. University of Limerick, Ireland
- 2017年11月10日 “Visiting Nepal after 34 years.” *Repatriation: History and Significance of Early Sound Recordings Made in China*, Shanghai Conservatory of Music, China
- 2017年12月1日 “Drumming and marginalized community: Museum documentation of a cultural heritage in the making.” *Negotiating Intangible Cultural Heritage*, the National Museum of Ethnology
- 2018年1月25日 “Roles of museums in safeguarding performing arts.” Conference for Rajasthan Folk Music Project, Jaipur Virasat Foundation, India

・みんぱくウィークエンド・サロン

- 2018年1月21日 「音楽を展示する試み」第495回ウィークエンド・サロン

・広報・社会連携活動

- 2017年6月30日 「チャルメラの遙かな旅」大阪日本ポルトガル協会 第89回例会，リーガロイヤルホテル（大阪），大阪
- 2017年9月23日 「カンボジア音楽入門」第28回福岡アジア文化賞市民フォーラム，イムズホール，福岡
- 2017年10月12日 「和太鼓の響き 北米へ渡る」品川区人権啓発・社会同和教育講座『名曲で考える人権』品川区立荏原第五区民集会所，東京

◎調査活動

・国内調査

- 2017年7月25日一名古屋市中区（研究用番組「ネパール 楽師の村 バトゥレチョールの現在」の試写ならびに

聞き取り調査)

2017年11月5日—東京都中野区(李政美・安聖民ジョイントコンサート「アリラン峠を越えて行く」の取材)

・海外調査

2017年5月24日～5月31日—イタリア(トリノ市周辺リヴァで開催された第1回映像民族音楽学国際セミナーにおいて研究発表及びトリノ市内博物館で楽器の調査)

2017年6月8日～6月15日—タイ(シーナカリンウィロート大学・バンコク市で開催された第5回オンライン国際会議において研究発表ならびにバンコク市内のインド系地域の視察)

2017年7月10日～7月23日—アイルランド(アイルランド世界音楽舞踊アカデミー(リメリック市)で開催された国際伝統音楽学会第44回世界大会への参加、研究発表)

2017年8月16日～9月7日—カナダ(トロント市内のスリランカ系タミル人コミュニティにおける古典舞踊バラタナーティヤムの実践形態に関する調査)

2017年11月8日～11月12日—中国(上海音楽学院(上海市)で開催された国際ワークショップ On Repatriation: History and Significance of Early Sound Recordings Made in China 出席、研究発表)

2018年1月23日～2月3日—インド(ラージャスターン州の民俗芸能に関する国際会議への出席、およびジャワハルラル・ネルー大学における映像番組上映会の開催)

2018年2月22日～3月1日—マレーシア(特別研究「マイノリティと多民族共存」の予備調査)

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員(2人)、副指導教員(1人)

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費(基盤研究(C))「スリランカ系タミル人によるインド舞踊の発展と再々構築化に関する全体関連的研究」(研究代表者:竹村嘉晃)研究協力者

野林厚志 [のばやし あつし] ————— 教授

1967年生。【学歴】東京大学理学部生物学科卒(1992)、東京大学大学院理学系研究科修士課程修了(1994)、東京大学大学院理学系研究科博士課程退学(1996)【職歴】国立民族学博物館第3研究部助手(1996)、国立民族学博物館民族社会研究部助手(1998)、国立民族学博物館民族学研究開発センター助手(2000)、総合研究大学院大学先導科学研究科併任(2000)、国立民族学博物館民族学研究開発センター助教授(2003)、国立民族学博物館文化資源研究センター准教授(2004)、国立民族学博物館研究戦略センター准教授(2010)、国立民族学博物館研究戦略センター教授(2012)、国立民族学博物館文化資源研究センター教授・センター長(2014)、国立民族学博物館文化資源研究センター教授(2015)、国立民族学博物館文化資源研究センターセンター長(2015)、国立民族学博物館学術資源研究開発センター教授(2017)【学位】博士(学術)(総合研究大学院大学2003)、修士(理学)(東京大学大学院理学系研究科1994)【専攻・専門】人類学、民族考古学 人間と動物との関係史、生業文化論【所属学会】日本台湾学会、日本文化人類学会

【主要業績】

[著書(単著・共著)]

野林厚志

2008 『イノシシ狩猟の民族考古学——台湾原住民の生業文化』東京:御茶の水書房。

[編著]

野林厚志編

2018 『肉食行為の研究』東京:平凡社。

2014 『台湾原住民研究の射程』台北:順益台湾原住民博物館。

【2017年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

生態資源獲得の道具と技巧の人類学的研究

・研究の目的、内容

本研究の目的は、人類が生態資源の獲得に使用してきた道具の特徴を、(1)形態上の要素、(2)機能上の要素の2点に注目して分析し、(1)と(2)について、通文化的に比較可能な指標の抽出を試みることである。オズワルト(1983 [1976])の導入した「技術単位」に発想を得ながらも、自然環境への適応と文化伝達の課題を念頭に置きながら、道具の機能形態論へ展開させることをねらいとしている。

台湾、フィリピン、インドネシア等で、野外調査、博物館資料の熟覧調査を行い、生業活動、生産活動に際して活用される生態資源(動物、植物、鉱物、水等)を獲得するための道具のインデックスを作成する。そのうえで、自然環境への適応、集団接触による文化変容を切り口とした道具の機能形態論を考察する。

なお、本研究は、新学術領域研究「パレオアジア文化史」の計画研究「人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築」の一環で実施する。

・成果

本年度は、当初の研究計画にしたがい、1)マレー半島およびサラワクの槍製品、骨角器の形態学的研究、2)フィリピンにおける編製品の分布状況についての予備的調査を行った。

1)については、マレーシア国立博物館に収蔵されている槍資料の55点の計測調査を実施した。計測項目は、槍の全長、刃長、刃部の幅、重量等の12項目である。また、骨格器については装身具を中心に25点の形態観察と写真撮影を実施した。槍の形態に関する定量的な分析から特に留意すべき点として見られたのが、刃長(a)と全長(b)の比がおおむね0.1~0.25(a/b)の範囲に、重量は500~1500gの範囲に含まれる点であった。これらの槍の基本的な使用法は突き槍であり、突く機能と槍の形態との関係を考えるうえでの定量的な性質に関するデータモデルを与えることになった。

2)についてはフィリピン国立博物館の収蔵資料についての予備的観察を行い、文献資料等も参照しながら、編製品の分布、素材、製作集団の相違等の傾向を把握したうえで、国立民族学博物館に収蔵している資料の参照を行った。集団によって製作される編製品の種類が異なること、漁労具には素材の自然形態を利用した製品が観察され、それらの使用方法を民族誌データで検証する継続的な課題を得た。

これらの調査は、新学術領域研究「パレオアジア文化史」の計画研究「人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築」によって遂行し、その成果の一部は計画研究報告書で発表している。

◎出版物による業績

[編著]

野林厚志編

2017 『パレオアジア文化史学計画研究B01班2016年度研究報告——アジア新人文化形成プロセスの総合的研究』文部科学省科学研究費補助金新学術領域研究(研究領域提案型)2016-2020年度計画研究B01班。

2018 『肉食行為の研究』東京:平凡社。

2018 『国立民族学博物館開館40周年記念特別展 太陽の塔からみんぱくへ——70年万博収集資料』大阪:国立民族学博物館。

2018 『パレオアジア文化史学計画研究B01班2017年度研究報告——アジア新人文化形成プロセスの総合的研究』文部科学省科学研究費補助金新学術領域研究(研究領域提案型)2016-2020年度計画研究B01班。

[論文]

野林厚志

2017 「伝統と創作のはざま——台湾原住民族の『伝統智慧創作』を事例として」飯田卓編『文明史のなかの文化遺産』pp.261-228, 京都:臨川書店。[査読有]

2018 「序文」野林厚志編『肉食行為の研究』pp.5-30, 東京:平凡社。

2018 「食肉の原産地証明の課題——ハモン・イベリコを事例として」野林厚志編『肉食行為の研究』pp.411-444, 東京:平凡社。

[その他]

野林厚志

- 2017 「旅の読書室76 暗闇のほうへ」『まほら』91:50-51。
- 2017 「はじめに」野林厚志編『パレオアジア文化史学計画研究 B01班2016年度研究報告——アジア新人文化形成プロセスの総合的研究』文部科学省科学研究費補助金新学術領域研究（研究領域提案型）。
- 2017 「生態資源獲得の道具と技巧の人類学的研究にむけて」野林厚志編『パレオアジア文化史学計画研究 B01班2016年度研究報告——アジア新人文化形成プロセスの総合的研究』pp.20-24, 文部科学省科学研究費補助金新学術領域研究（研究領域提案型）。
- 2017 「計画研究 B01班のねらい」野林厚志編『パレオアジア文化史学計画研究 B01班2016年度研究報告——アジア新人文化形成プロセスの総合的研究』pp.1-4, 文部科学省科学研究費補助金新学術領域研究（研究領域提案型）。
- 2017 「台湾における家畜の供犠」『BIOSTORY』27:28-33。
- 2017 「世界生き物文化誌博物館を構想する——民博からの発信」『生き物文化誌学会第15回学術大会』pp.16-17, 神奈川:生き物文化誌学会。
- 2017 「観察された自然と文化のかたち」特集「シーボルトの日本博物館」『月刊みんぱく』41(8):4-5。
- 2017 「旅の読書室78 自由へのあこがれと恐れ」『まほら』93:50-51。
- 2017 「人類と肉食——本特集にあたり」『vesta』108:2-5。
- 2017 「健康を維持するための料理——台湾原住民族の食文化」『第82回日本健康学会総会 サテライト・セッション——伝統的健康観と近代的健康観の相克と融合』pp.190-191, 茨城:日本健康学会。
- 2017 「胡家瑜編『文物 造型與臺灣原住民藝術:臺大人類學博物館宮川次郎藏品圖録』」『台湾原住民研究』21:244-248。
- 2018 「特別展縁起」特集「万博資料収集団」『月刊みんぱく』42(3):2-3。
- 2018 「あとがき」『国立民族学博物館開館40周年記念特別展 太陽の塔からみんぱくへ——70年万博収集資料』p.203, 大阪:国立民族学博物館。
- 2018 「万博からみんぱくへ」『国立民族学博物館開館40周年記念特別展 太陽の塔からみんぱくへ——70年万博収集資料』pp.197-200, 大阪:国立民族学博物館。
- 2018 「傀儡劇 傀儡劇人形」『国立民族学博物館開館40周年記念特別展 太陽の塔からみんぱくへ——70年万博収集資料』p.53, 大阪:国立民族学博物館。
- 2018 「原住民族の工芸 家屋の柱」『国立民族学博物館開館40周年記念特別展 太陽の塔からみんぱくへ——70年万博収集資料』p.56, 大阪:国立民族学博物館。
- 2018 「原住民族の工芸 木彫」『国立民族学博物館開館40周年記念特別展 太陽の塔からみんぱくへ——70年万博収集資料』p.54, 大阪:国立民族学博物館。
- 2018 「原住民族の工芸 木彫像」『国立民族学博物館開館40周年記念特別展 太陽の塔からみんぱくへ——70年万博収集資料』p.55, 大阪:国立民族学博物館。
- 2018 「原住民族の工芸 護身用刀剣」『国立民族学博物館開館40周年記念特別展 太陽の塔からみんぱくへ——70年万博収集資料』p.55, 大阪:国立民族学博物館。
- 2018 「原住民族の工芸 連杯」『国立民族学博物館開館40周年記念特別展 太陽の塔からみんぱくへ——70年万博収集資料』p.55, 大阪:国立民族学博物館。
- 2018 「台湾漢族の道教信仰 神像 中壇元帥」『国立民族学博物館開館40周年記念特別展 太陽の塔からみんぱくへ——70年万博収集資料』p.53, 大阪:国立民族学博物館。
- 2018 「台湾漢族の道教信仰 神像 張法主」『国立民族学博物館開館40周年記念特別展 太陽の塔からみんぱくへ——70年万博収集資料』p.53, 大阪:国立民族学博物館。
- 2018 「台湾漢族の道教信仰 神像 玄天上帝」『国立民族学博物館開館40周年記念特別展 太陽の塔からみんぱくへ——70年万博収集資料』p.53, 大阪:国立民族学博物館。
- 2018 「台湾漢族の道教信仰 神像 王爺」『国立民族学博物館開館40周年記念特別展 太陽の塔からみんぱくへ——70年万博収集資料』p.52, 大阪:国立民族学博物館。
- 2018 「台湾漢族の道教信仰 神像 福德正神」『国立民族学博物館開館40周年記念特別展 太陽の塔からみんぱくへ——70年万博収集資料』p.52, 大阪:国立民族学博物館。
- 2018 「台湾漢族の道教信仰 神像 閻公」『国立民族学博物館開館40周年記念特別展 太陽の塔からみんぱくへ——70年万博収集資料』p.53, 大阪:国立民族学博物館。

- 2018 「日本万国博覧会世界民族資料調査収集団」『国立民族学博物館開館40周年記念特別展 太陽の塔からみんぱくへ——70年万博収集資料』pp.16-21, 大阪：国立民族学博物館。
- 2018 「根源に存在する多様性 仮面と彫像」『国立民族学博物館開館40周年記念特別展 太陽の塔からみんぱくへ——70年万博収集資料』pp.186-189, 大阪：国立民族学博物館。
- 2018 「統営五広大 かぶりもの（怪獣ヨンノ）」『国立民族学博物館開館40周年記念特別展 太陽の塔からみんぱくへ——70年万博収集資料』p.50, 大阪：国立民族学博物館。
- 2018 「近くて遠い国の収集 韓国・台湾」『国立民族学博物館開館40周年記念特別展 太陽の塔からみんぱくへ——70年万博収集資料』pp.41-46, 大阪：国立民族学博物館。
- 2018 「韓国の仮面劇 両班」『国立民族学博物館開館40周年記念特別展 太陽の塔からみんぱくへ——70年万博収集資料』p.47, 大阪：国立民族学博物館。
- 2018 「韓国の仮面劇 僧」『国立民族学博物館開館40周年記念特別展 太陽の塔からみんぱくへ——70年万博収集資料』p.47, 大阪：国立民族学博物館。
- 2018 「韓国の仮面劇 名脇役たち」『国立民族学博物館開館40周年記念特別展 太陽の塔からみんぱくへ——70年万博収集資料』p.47, 大阪：国立民族学博物館。
- 2018 「韓国の仮面劇 巫女」『国立民族学博物館開館40周年記念特別展 太陽の塔からみんぱくへ——70年万博収集資料』p.47, 大阪：国立民族学博物館。
- 2018 「韓国の仮面劇 翁と姫」『国立民族学博物館開館40周年記念特別展 太陽の塔からみんぱくへ——70年万博収集資料』p.47, 大阪：国立民族学博物館。
- 2018 「オーストロネシア系諸集団の物質文化に関する人類学的研究」野林厚志編『パレオアジア文化史学計画研究 B01班2017年度研究報告——アジア新人文化形成プロセスの総合的研究』pp.1-6, 文部科学省科学研究費補助金新学術領域研究（研究領域提案型）。
- 2018 「研究の目的と概要」野林厚志編『パレオアジア文化史学計画研究 B01班2017年度研究報告——アジア新人文化形成プロセスの総合的研究』, 文部科学省科学研究費補助金新学術領域研究（研究領域提案型）。
- Nobayashi, A.
2018 ‘Tradition of beads remaining in indigenous peoples’ culture. *Beads in the world*, pp.82-83. Osaka: The National Museum of Ethnology.
2018 *Hornet. Beads in the world*, pp.82-83. Osaka: The National Museum of Ethnology.
- ◎口頭発表・展示・その他の業績
- ・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2018年3月25日 「万博資料収集団の足跡」開館40周年記念シンポジウム 民族誌コレクションの役割とその未来——人間の理解にむけた博物館の挑戦、国立民族学博物館
 - ・機構の連携研究会での報告

2017年9月23日 「原住民族の飲食文化」人間文化研究機構基幹研究プロジェクト「アジアにおける『エコヘルス』研究の新展開」全体会議、総合地球環境学研究所

2017年10月28日 「台湾原住民族のアワをめぐる慣習的社会関係」人間文化研究機構基幹研究プロジェクト「アジアにおける『エコヘルス』研究の新展開」文明社会における食の布置班 第2回研究会、東京大学
 - ・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2017年4月22日 「台湾原住民族のビーズ」世界のビーズをめぐる人類学的研究、国立民族学博物館

2017年5月2日 Taste or cuisine: changes in “authentic” Taiwanese indigenous culinary practices, A joint inter-congress/conference of the International Union of Anthropological and Ethnological Sciences (IUAES) and Canadian Anthropology Society(CASCA), University of Ottawa, Canada

2017年5月13日～14日 「『適応』を再考する——ニッチと文化の境界」第3回研究大会パレオアジア文化史学——アジア新人文化形成プロセスの総合的研究、国立民族学博物館

2017年6月24日～25日 「世界生き物文化誌博物館を構想する——民博からの発信」生き物文化誌学会第15回学術大会、国立民族学博物館

2017年11月11日 「健康を維持するための料理——台湾原住民族の食文化」第82回日本健康学会総会（2017.11.10-11）、沖縄科学技術大学院大学

- 2017年11月28日 Detecting correlations between cultural factors in Paleoasian populations, International workshop “Theoretical Models of Cultural Evolution during Modern Human Dispersals” (2017.11.27-29), Meiji University
- 2017年12月9日 「民族誌の定量的分析の方法論的課題と解釈上の課題」パレオアジア文化史学第4回研究大会 (2017.12.9-10)、東京大学
- ・ **みんぱくゼミナール**

2017年8月19日 「シーボルトの日本展示と博物学」第471回みんぱくゼミナール

2018年3月17日 「万博資料収集団——太陽の塔に集った仮面、神像、なりわいの道具」第478回みんぱくゼミナール
 - ・ **研究講演**

2017年4月7日 「デジタル時代の原住民族イメージ」展覧会開幕式典『台湾原住民族の装飾イメージと美』台北駐日経済文化代表処 台湾文化センター

2017年8月20日 「伝統？健康？——原住民族の食文化」連続講座「台湾の飲食文化」国立民族学博物館第5セミナー室

2017年11月17日 「文明と文化のはざまの料理」みんぱく公開講演会「料理と人間——食から成熟社会を問いなおす」日経ホール
 - ・ **研究公演**

2017年10月14日 台湾映画鑑賞会 映画から台湾を知る「祝宴！シェフ」、国立民族学博物館
 - ・ **展示**

2018年3月8日～5月29日 「国立民族学博物館開館40周年記念特別展 太陽の塔からみんぱくへ——70年万博収集資料」
 - ・ **みんぱくウィークエンド・サロン**

2017年4月2日 「身近な素材、貴重な素材——台湾原住民族のビーズの多様性」第459回ウィークエンド・サロン 研究者と話そう
 - ・ **広報・社会連携活動**

2017年4月19日 「装身具から考える台湾原住民族の文化」連続講座『みんぱく×ナレッジキャピタル ビーズ——つなぐ・かざる・みせる』CAFE Lab. グランフロント大阪北館ナレッジキャピタル1階

2017年5月19日 「台湾現住民族の服飾文化」大阪府高齢者大学校「世界の文化に親しむ科」

2017年6月2日 「台湾原住民族の飲食文化」大阪府高齢者大学校「世界の文化に親しむ科」

2017年7月28日 「博物館のジレンマ」大阪府高齢者大学校「世界の文化に親しむ科」

2017年8月11日 「狩猟の民族考古学——台湾のイノシシ猟から」Gallery Parc (HAPS)

2018年1月10日 「みんぱくの台湾研究」カレッジシアター「地球探究紀行」あべのハルカス近鉄本館

2018年1月19日 「フィールドワークをはじめよう」兵庫県立伊丹高校スーパーグローバルハイスクール研究開発事業、兵庫県立伊丹高校

2018年1月28日 「イヌとヒト——人類史と民族誌から考える」西宮自然保護協会、西宮市中央公民館
- ◎上記以外の研究活動
- ・ **人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など**

科学研究費（基盤研究（B））「台湾原住民族の分類とアイデンティティの可変性に関する人類学的研究」研究代表者、科学研究費（基盤研究（A））「ネットワーク型博物館学の創成」（研究代表者：須藤健一）研究分担者、科学研究費（新学術領域研究（研究領域提案型）『学術研究支援基盤形成』）「地域研究に関する学術写真・動画資料情報の統合と高度化」（研究代表者：吉田憲司）研究支援分担者、科学研究費（新学術領域研究（研究領域提案型））「人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築」研究代表者、A joint inter-congress/conference of the International Union of Anthropological and Ethnological Sciences (IUAES) and Canadian Anthropology Society (CASCA) University of Ottawa, Canada
 - ◎ **社会活動・館外活動**
 - ・ **他の機関から委嘱された委員など**

アジア太平洋フォーラム・淡路会議アジア太平洋研究賞選考委員、味の素食の文化センター食の文化フォーラム会員、奈良県文化財保存・活用会議委員、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所フィールド・サ

イエンス・コロキウム運営委員

飯田 卓 [いいだ たく] 准教授

1969年生。【学歴】北海道大学文学部行動科学科卒（1992）、京都大学大学院人間・環境学研究科人間・環境学専攻修士課程修了（1994）、京都大学大学院人間・環境学研究科人間・環境学専攻博士後期課程研究指導認定退学（1999）【職歴】日本学術振興会特別研究員（DC1）（1994）、日本学術振興会特別研究員（PD）（1999）、国立民族学博物館民族文化研究部助手（2000）、国立民族学博物館研究戦略センター助手（2006）、国立民族学博物館研究戦略センター助教（2007）、国立民族学博物館文化資源研究センター准教授（2008）、総合研究大学院大学文化科学研究科比較文化学専攻准教授（2012）、国立民族学博物館民族社会研究部准教授（2012）、国立民族学博物館先端人類科学研究部准教授（2013）、国立民族学博物館学術資源研究開発センター准教授（2017）【学位】博士（人間・環境学）（京都大学 2000）、修士（人間・環境学）（京都大学 1994）【専攻・専門】生態人類学 漁撈社会、技術と知識、物質文化、文化人類学 視覚メディア、文化遺産、日本人類学史【所属学会】生態人類学会、日本アフリカ学会、日本文化人類学会、地域漁業学会、日本島嶼学会、環境社会学会、Association of Critical Heritage Studies

【主要業績】

[単著]

飯田 卓

2014 『身をもって知る技法——マダガスカルの漁師に学ぶ』京都：臨川書店。

2008 『海を生きる技術と知識の民族誌——マダガスカル漁撈社会の生態人類学』京都：世界思想社。

[編著書]

飯田 卓・朝倉敏夫編

2017 『日本民族学協会附属民族学博物館（保谷民博）旧蔵資料の研究』（国立民族学博物館調査報告139）大阪：国立民族学博物館。

【受賞歴】

2010 第22回日本アフリカ学会学術研究奨励賞（日本アフリカ学会）

【2017年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

文化遺産の人類学に関する理論的研究

・研究の目的、内容

1990年代以降、日本では世界遺産が脚光を浴びて指定文化財の観光資源化が進んでいるが、いっぽうで、ユネスコが先導する国際文化行政の場では、担い手との結びつきを視野に入れたあらたな文化遺産概念がたち現れつつある。本研究は、これらの情勢に目を配りつつ、文化や文化財、文化資源、観光資源、国立公園、自然保護区、自然遺産などとの関連をふまえて、文化遺産概念の歴史的形成と現代的意義を考察する。

この研究は昨年度に引き続いて実施するものだが、本年度は、アフリカ全般の文化状況とアイデンティティ構築の関わりをテーマに本年度から始まる民博のフォーラム型情報ミュージアムプロジェクト「アフリカ資料の多言語双方向データベースの構築」（プロジェクトリーダー：飯田卓）に連動しておこなう。ふまえる事例はアフリカのものが多くなる可能性があるが、理論研究であるため特段の支障はない。

・成果

2013～2015年度に民博で実施した機関研究「マテリアリティの人間学」の一環としておこなわれたプロジェクト「文化遺産の人類学——グローバル・システムにおけるコミュニティとマテリアリティ」の成果出版として、日本語論文集2冊を刊行した。現在、英語論文集2冊の刊行をひき続き準備中である。

また、Routledge社から刊行予定の論文集「The World Multiple: The Quotidian Politics of Knowing and Generating Entangled Worlds」（Keiichi Omura, Shino Satsuka, Grant Jun Otsuki, and Atsuro Morita編）に寄稿した論文「Travelling and Indwelling Knowledge: Learning and Technological Exchange among Vevo Fisherfolk in Madagascar」が採用され、2018年のうちに刊行される予定である。この論文は、とくに無形の文化遺産継承に関わる物質的・非物質的な継承条件に関する概念提示をおこなっており、本研究課題と密接に

結びついている。

◎出版物による業績

[編著]

飯田 卓編

2017 『文化遺産と生きる』 京都：臨川書店。

2017 『文明史のなかの文化遺産』 京都：臨川書店。[査読有]

[分担執筆]

飯田 卓

2017 「人類的課題としての文化遺産——二つの文化が会う現場」 飯田卓編 『文明史のなかの文化遺産』 pp.12-35, 京都：臨川書店。[査読有]

2017 「『人間不在の文化遺産』という逆説」 飯田卓編 『文化遺産と生きる』 pp.12-35, 京都：臨川書店。

2017 「商品化と反商品化——マダガスカル山村の無形文化遺産」 飯田卓編 『文化遺産と生きる』 pp.315-342, 京都：臨川書店。

2017 「海で遊び、生きかたを学ぶ——マダガスカルの漁民ヴェズ」 清水貴夫・亀井伸孝編 『子どもたちの生きるアフリカ』 pp.196-208, 京都：昭和堂。

Lida, T.

2018 Use of Explosives in the Southwestern Archipelago Immediately after World War II. In G. Bulian and Y. Nakano (eds.) *Small-Scale Fishery in Japan: Environmental and Socio-Cultural Perspectives*, pp.15-30. Venezia: Ddizioni Ca' Fostari.

[その他]

飯田 卓

2017 「マダガスカルで考える、文化と無形文化遺産」『SYNODOS 最前線のアフリカ』。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2017年10月8日 「DiPLAS——20世紀の写真を対象とした学術画像プラットフォーム」国際シンポジウム 人類基礎理論研究部学術潮流フォーラム I『変容する世界のなかでの文化遺産の保存』国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2017年10月17日 Dissemination Projects at National Museum of Ethnology, Japan: Toward the Holothèque of the World, Annual Conference of International Committee of Museums and Collections of Ethnography (ICME), International Council of Museums (ICOM), National Museum of American Indians, Washington, DC

2017年12月7日 「国立民族学博物館における地域研究画像デジタルライブラリの構築と研究者支援」デジタルアーカイブ学会関西支部第1回例会、エル大阪、大阪

・みんぱくウィークエンド・サロン

2017年11月26日 「博物館の中の文化遺産、博物館の外の文化遺産」第490回みんぱくウィークエンド・サロン

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（2人）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（A））「『在来知』と『近代科学』の比較研究：知識と技術の共有プロセスの民族誌的分析」（研究代表者：大村敬一（大阪大学））研究分担者、科学研究費（基盤研究（A））「アフリカ漁民文化の比較研究——水域環境保全レジームの構築に向けて」（研究代表者：今井一郎（関西学院大学））研究分担者、科学研究費（基盤研究（A））「アフリカにおける文化遺産の継承と集団のアイデンティティ形成に関する人類学的研究」（研究代表者：吉田憲司）研究分担者、科学研究費（新学術領域研究（研究領域提案型）『学術研究支援基盤形成』）「地域研究に関する学術写真・動画資料情報の統合と高度化」（研究代表者：吉田憲司）研究支援分担者、科学研究費（基盤研究（B））「朝鮮海出漁の歴史とその文化的影響の研究——イワシをめぐる韓国の民俗変化」（研究代表者：松田睦彦）連携研究者、科学研究費（基盤研究（B））「東南アジアにおけるサトイモ

の遺伝的多様性のマッピングによる栽培化モデルの検証」(研究代表者: Peter Matthews) 連携研究者、科学研究費(基盤研究(S))『『アフリカ潜在力』と現代世界の困難の克服——人類の未来を展望する総合的地域研究』(研究代表者: 松田素二) 連携研究者、国立民族学博物館共同研究「呪術的实践=知の現代的位相——他の諸実践=知との関係性に着目して」(研究代表者: 川田牧人) メンバー、国立民族学博物館共同研究「宇宙開発に関する文化人類学からの接近」(研究代表者: 岡田浩樹) メンバー、国立民族学博物館共同研究「確率的事象と不確実性の人類学——『リスク社会』化に抗する世界像の描出」(研究代表者: 市野澤潤平) メンバー、国立民族学博物館フォーラム型情報ミュージアムプロジェクト「日本民族学会附属民族学博物館(保谷民博)資料の履歴に関する研究と成果公開」研究代表者、国立民族学博物館フォーラム型情報ミュージアムプロジェクト「アフリカ資料の多言語双方向データベースの構築」研究代表者、国立民族学博物館共同研究「人類学/民俗学の学知と国民国家の関係——20世紀前半のナショナリズムとインテリジェンス」(研究代表者: 中生勝美) メンバー、国立民族学博物館共同研究「文化人類学を自然化する」(研究代表者: 中川 敏) メンバー、人間文化研究機構広域連携型「日本列島における地域文化の再発見とその表象システムの構築」(研究代表者: 日高真吾) メンバー、「国立歴史民俗博物館の共同研究『海の生産と信仰・儀礼をめぐる文化体系の日韓比較研究』」(研究代表者: 松田陸彦) メンバー

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

京都大学東南アジア研究所 CIRAS センター(京都大学地域研究情報統合センター) 共同研究課題選考委員、文化遺産国際協力コンソーシアム委員(運営委員会/企画分科会/アフリカ分科会)

・他大学の客員、非常勤講師

静岡県立大学国際関係学部「国際社会論」(集中講義)、神戸大学大学院国際文化科学研究科「文化情報リテラシー特殊講義」(集中講義)

伊藤敦規 [いとう あつのり] ————— 准教授

1976年生。【学歴】東京都立大学人文学部社会学卒(2000)、東京都立大学大学院社会科学研究科社会人類学修士課程修了(2003)、東京都立大学大学院社会科学研究科博士課程単位取得退学(2009)【職歴】国立民族学博物館特別共同利用研究員(2007)、三重大学人文学部非常勤講師(2008)、北海道大学アイヌ・先住民研究センター研究員(2008)、A: shiwi A: wan Museum and Heritage Center Visiting Researcher(2009)、立教大学兼任講師(2009)、日本学術振興会特別研究員PD(2009)、国立民族学博物館外来研究員(2009)、三重大学人文学部非常勤講師(2010)、東北大学東北アジア研究センター共同研究員(2010)、北海道大学アイヌ・先住民研究センター客員研究員(2010)、国立民族学博物館2010年度文化資源プロジェクト共同研究員(2010)、国立民族学博物館若手共同研究員(2010)、国立民族学博物館文化資源研究センター助教(2011)、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同研究員(2012)、国立民族学博物館研究戦略センター助教(2012)、Museum of Northern Arizona Research Associate(2015)、国立民族学博物館研究戦略センター准教授(2016)、総合研究大学院大学文化科学研究科准教授(2016)、国立民族学博物館文化資源研究センター准教授(2016)、国立民族学博物館学術資源研究開発センター准教授(2017)【学位】博士(社会人類学)(東京都立大学 2011)、修士(社会人類学)(東京都立大学 2003)【専攻・専門】社会人類学・米国先住民研究、先住民の知的財産権問題、博物館人類学【所属学会】日本文化人類学会、東京都立大学社会人類学会、民族藝術学会、西洋史学会、アメリカ学会、日本知財学会、American Anthropological Association、デジタルアーカイブ学会

【主要業績】

[編著]

伊藤敦規編

2017 『国立民族学博物館収蔵「ホビ製」木彫人形資料熟覧——ソースコミュニティと博物館資料との「再会」1』(国立民族学博物館調査報告140)。

[論文]

伊藤敦規

2016 「ホストとして関わる人類学——米国南西部先住民ホビと私のこれまでとこれから」(特集 人類学者の存在論)『社会人類学年報』42: 67-90。

2015 「国立民族学博物館における研究公演の再定義——『ホビの踊りと音楽』の記録とフォーラムとしての

【2017年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

日本国内博物館等所蔵アメリカ先住民資料の協働管理に向けた調査研究

・研究の目的、内容

本研究は5年計画（2016～2020年度）で実施する。その目的は、第1に日本国内の博物館等が所蔵するアメリカ先住民資料の来歴、情報管理、保存状況を総合的に把握することである。第2の目的は日本国内での調査結果をソースコミュニティと共有し、将来的な管理に向けた要望等を聞き取り調査することである。第3の目的は、先住民コミュニティから寄せられる声を博物館等と共有することによって、今後の資料管理に反映されるだろう協働の制度的な枠組みを整理・検討することである。

2年度となる本年度は、調査対象機関を、松永はきもの資料館（広島）、野外民族博物館リトルワールド（愛知）、天理大学附属天理参考館（奈良）、国立民族学博物館（大阪）とする。また、資料調査対象とする民族集団は、ホビを中心とする。

2017年度の計画として、2014年度に採択された科研プロジェクト（若手A）および民博のフォーラム型情報ミュージアムの開発型プロジェクト、2015年度に採択された科研プロジェクト（国際共同研究強化）と連動させながら、日本国内での調査を進め、ソースコミュニティ（ホビの人びと）を招聘して実施した資料熟覧調査の成果の刊行を目指す。

・成果

2017年度は、これまでに実施した資料熟覧調査の成果公開に向けた作業を行った。研究出版物や口頭発表を数字にまとめると、2つの国際ワークショップの主催、招待講演や国際学会等での研究発表（15本）、2カ国6機関の収蔵資料を対象とする直接・間接熟覧調査、5本の短文エッセイの執筆、5本の新聞記事の執筆、約320本の資料熟覧映像作品の監修を行った。

なお、本研究の実施にあたり、以下の2つの研究助成の一部を使用した。

①科学研究費助成事業（若手研究（A）「日本国内の民族学博物館資料を用いた知の共有と継承に関する文化人類学的研究（JSPS KAKENHI Grant Number JP26704012）」、研究代表者：伊藤敦規）。

②科学研究費助成事業（国際共同研究加速基金（国際共同研究強化）「日本国内の民族学博物館資料を用いた知の共有と継承に関する文化人類学的研究（国際共同研究強化）（JSPS KAKENHI Grant Number JP15KK0069）」、研究代表者：伊藤敦規）。

本研究の成果は、以下の民博の共同利用型研究プロジェクトの成果の一部でもある。

③国立民族学博物館フォーラム型情報ミュージアム・プロジェクト、開発型プロジェクト（「北米先住民製民族誌資料の文化人類学的ドキュメンテーションと共有」、研究代表者：伊藤敦規）。

④国立民族学博物館共同研究（「米国本土先住民の民族誌資料を用いるソースコミュニティとの協働関係構築に関する研究」、研究代表者：伊藤敦規）

◎出版物による業績

[著書（単著・共著）]

Ito, A.

2017 *Mimbres Workshops 2017: Reconnecting Hopi Artists with Mimbres Landscape and Pottery Designs*. Self-publishing.

[分担執筆]

伊藤敦規

2017 「アメリカ合衆国（ホビ族）」中牧弘允編『世界の暦文化事典』pp.342-345, 東京：丸善出版。

[その他]

伊藤敦規

2017 「新世紀ミュージアム アシウィ・アワン博物館・遺産センター」『月刊みんぱく』41(5)：16-17。

2017 「国立民族学博物館の収蔵品⑧ ソースコミュニティと博物館資料との『再会』」『文部科学 教育通信』422：2。

2018 「旅・いろいろ地球人 先住民ホビの銀細工① 宝飾品作りの昨今」『毎日新聞』3月1日夕刊。

2018 「旅・いろいろ地球人 先住民ホビの銀細工② 民族ブランドの創出」『毎日新聞』3月8日夕刊。

- 2018 「北米——間接収集と半世紀後の試み」『国立民族学博物館開館40周年記念特別展 太陽の塔からみんぱくへ——70年万博収集資料』pp.153-168, 大阪：国立民族学博物館。
- 2018 「旅・いろいろ地球人 先住民ホピの銀細工③保留地に暮らし続ける」『毎日新聞』3月15日夕刊。
- 2018 「旅・いろいろ地球人 先住民ホピの銀細工④作品に祈りを込める」『毎日新聞』3月22日夕刊。
- 2018 「旅・いろいろ地球人 先住民ホピの銀細工⑤未来につなぐ」『毎日新聞』3月29日夕刊。
- 2018 「映像を用いた博物館資料情報の再収集」『民博通信』160：14-15。
- 2018 「異文化配慮『見せない』展示」『産経新聞』3月31日夕刊。

◎映像音響メディアによる業績

- ・その他、映像メディアによる業績（論文型映像を含む）

伊藤敦規 監修

『国立民族学博物館収蔵「ホピ製」資料』の熟覧映像作品（英語・日本語）計293件

『天理大学附属天理参考館収蔵「ホピ製」資料』の熟覧映像作品（英語・日本語）計26件

◎口頭発表・展示・その他の業績

- ・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2017年4月21日 Hopi Collections Review in the US and Japan, *Kakenhi Project*, Cultural Resources Center of the National Museum of the American Indian
- 2017年7月1日 Revitalization of Hopi Jewelry: Through the Collections Review in the US and Japan, *Museum of Northern Arizona 84th Hopi Festival*, Museum of Northern Arizona
- 2017年7月2日 Revitalization of Hopi Jewelry: Through the Collections Review in the US and Japan, *Museum of Northern Arizona 84th Hopi Festival*, Museum of Northern Arizona
- 2017年7月6日 Reconnecting Source Community with Museum Collections and Anthropological Documentation, *Kakenhi Project meeting*, National Museum of Ethnology, Japan
- 2017年8月28日 Introduction of the Reconnecting Projects, National Museum of Ethnology International Workshop *Reconnecting Archaeological Materials with Descendant & Source Communities: Collections Review, Field Trip, Art Work Creation, and Exhibition Planning*, New Mexico State University Museum
- 2017年8月28日 Reconnecting Hopi Artists with Mimbres Landscape and Pottery Designs, National Museum of Ethnology International Workshop *Reconnecting Archaeological Materials with Descendant & Source Communities: Collections Review, Field Trip, Art Work Creation, and Exhibition Planning*, New Mexico State University Museum
- 2017年10月3日 Introduction: Reconnecting Source Communities with Museum Collections, National Museum of Ethnology International Workshop *Reconnecting Source Communities with Museums for Education: Revitalizing Hopi Silversmithing Traditions*, Museum of Northern Arizona
- 2017年10月3日 Hopi Silversmithing and Mimbres: Fred Kabotie's activities in the late 1940s, National Museum of Ethnology International Workshop *Reconnecting Source Communities with Museums for Education: Revitalizing Hopi Silversmithing Traditions*, Museum of Northern Arizona
- 2017年10月3日 Revitalizing Hopi Silversmithing Traditions, National Museum of Ethnology International Workshop *Reconnecting Source Communities with Museums for Education: Revitalizing Hopi Silversmithing Traditions*, Museum of Northern Arizona
- 2017年11月19日 Reconnecting Source Community with Museums, *Kakenhi Project meeting*, National Museum of Ethnology, Japan
- 2017年12月6日 Reconnecting Hopi Silversmiths with NMAI Collections, *Kakenhi Project meeting*, National Museum of the American Indian
- 2018年2月12日 Revitalization of Hopi Jewelry through the Collections Review in the US and Japan, *Friends Program: Gerald Lomaventema and Mentees*, Wheelwright Museum of the American Indian, Wheelwright Museum of the American Indian
- 2018年3月30日 「北米と歴史的遺物返還」日本学術会議地域研究委員会「歴史的遺物返還に関する検討分科会」第24期第2回、日本学術会議

・研究講演

2018年1月10日 「ソースコミュニティの人々との資料熟覧——博物館収蔵庫でのフィールドワーク」連続講座『みんぱく×ナレッジキャピタル——フィールドワークを語る』CAFE Lab. グランフロント大阪北館ナレッジキャピタル1階

・展示

2018年3月8日～5月29日 「『太陽の塔からみんぱくへ——70年万博収集資料』」国立民族学博物館本館特別展示場

・みんぱくウィークエンド・サロン

2018年3月18日 「『博物館資料情報の再収集——EEM北米資料とソースコミュニティとの「再会」』」第505回みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（若手研究（A））「日本国内の民族学博物館資料を用いた知の共有と継承に関する文化人類学的研究」研究代表者、科学研究費（国際共同研究加速基金（国際共同研究強化））「日本国内の民族学博物館資料を用いた知の共有と継承に関する文化人類学的研究（国際共同研究強化）」研究代表者、人間文化研究機構機関拠点型「北米先住民製民族誌資料の文化人類学的ドキュメンテーションと共有（国立民族学博物館フォーラム型情報ミュージアム・開発型プロジェクト）」研究代表者

◎社会活動・館外活動

・他大学の客員、非常勤講師

北海道大学アイヌ・先住民研究センター・客員研究員、Museum of Northern Arizona Research Associate

齋藤玲子 [さいとう れいこ] ————— 准教授

1966年生。【学歴】北海道大学文学部行動科学科卒（1989）【職歴】北海道教育委員会社会教育課学芸員（1989）、北海道立北方民族博物館学芸員（1990）、北海道立北方民族博物館主任学芸員（2005）、北海道立北方民族博物館学芸主幹（2010）、国立民族学博物館民族文化研究部助教（2011）、国立民族学博物館民族文化研究部准教授（2016）、国立民族学博物館学術資源研究開発センター准教授（2017）【専攻・専門】文化人類学・アイヌの文化変容と表象、北アメリカ北西海岸先住民の美術工芸【所属学会】日本文化人類学会、北海道民族学会

【主要業績】

[編著]

齋藤玲子編

2015 『カナダ先住民芸術の歴史的展開と現代的課題——国立民族学博物館所蔵のイヌイトおよび北西海岸先住民の版画コレクションをとらえて』（国立民族学博物館調査報告131）大阪：国立民族学博物館。

齋藤玲子・大村敬一・岸上伸啓編

2010 『極北と森林の記憶——イヌイトと北西海岸インディアンの版画』京都：昭和堂。

[論文]

齋藤玲子

2012 「アイヌ工芸の200年——その歴史概観」山崎幸治・伊藤敦規編『世界のなかのアイヌ・アート（先住民アート・プロジェクト報告書）』pp.45-60, 札幌：北海道大学アイヌ・先住民研究センター。

【2017年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

アイヌ文化の継承と社会的背景の研究

・研究の目的、内容

本テーマは、当館の共同研究やフォーラム型情報ミュージアムプロジェクトなどを関連させながら、2014年度から続けている。アイヌ民族は、江戸時代中ごろから徐々に和人の支配下におかれ、明治・大正・昭和と時代を経るにつれて独自の文化の継承は次第に困難になった。しかし、現在も形を変えながらも多くの文化要素が

受け継がれている。こうしたアイヌ文化の継承と当時の社会状況との関係について、物質文化と芸能に注目し、研究を続けている。最終的に、物質文化や芸能が、記録の多く残る江戸時代後期からどう変化してきたかを明らかにし、現代のアイヌ文化の位置づけを示すことを目指す。

今年、アイヌの木彫について改めて調査をおこない、みやげものからアート作品へと展開するに至った過程や、アイヌに対するイメージの変化等について研究する。

また、科学研究費（基盤研究（B））「アイヌ民族の衣文化交流——博物館資料から北東アジア史を見直す」（佐々木史郎代表・2017～2019年度）の研究分担者としてアイヌの織物技術の調査を進め、製作技術の実験や記録とともに、博物館資料の比較研究をおこなう。

・成果

アイヌ文化の継承に関しては、開館40周年記念企画展 アイヌ工芸品展『現れよ。森羅の生命——木彫家 藤戸竹喜の世界』本館会場での実行委員長として開催し、（公財）アイヌ文化振興・研究推進機構編の同展図録に木彫り熊の歴史とその作家に関する論考を寄稿した。また、同じく（公財）アイヌ文化振興・研究推進機構のアイヌ文化普及啓発セミナー（東京・札幌の2会場）で講話をおこない、その記録は報告書として刊行予定である（印刷中）。

アイヌの織物については、当館の収蔵資料の調査をおこなうとともに、樹皮繊維製のアットゥシ織りの工芸家と共同で糸づくり技術の調査と実験をおこなった。科研のメンバーらとともに、釧路市立博物館と共催の公開研究会「『北方寒冷地域の衣文化交流——釧路市立博物館所蔵のアイヌ民族衣服を中心に』」で発表をした。

関連して、帝国データバンク史料館で開催した特別展「地場“贅”業——伝統と革新の軌跡」で、経産省の伝統的工芸品に指定されている平取町二風谷のアットゥシとイタ（木彫盆）の展示パネルを監修した。

当館のアイヌの織物・木彫をはじめとする資料について、フォーラム型情報ミュージアムプロジェクトで作成予定のデータベース（試験運用版）の情報を補足した。

◎出版物による業績

[分担執筆]

齋藤玲子

- 2017 「民族文化の振興と工芸——北海道二風谷の木彫盆・イタから考える」飯田卓編『文明史のなかの文化遺産』pp.209-232, 京都：臨川書店。
- 2017 「藤戸竹喜と木彫り熊とアイヌ文化——旭川から阿寒湖、そして世界へ」公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構編『現れよ。森羅の生命——木彫家 藤戸竹喜の世界』pp.216-221, 大阪：国立民族学博物館。
- 2017 「アイヌの文化」国立民族学博物館編『国立民族学博物館展示案内』pp.134-143, 大阪：国立民族学博物館。
- 2017 「日本（アイヌ）」中牧弘允編『世界の暦文化事典』pp.22-25, 東京：丸善出版。
- 2018 「木彫り熊とみやげ」手塚薫・出利葉浩司編『アイヌ文化と森～人々と森の関わり～』pp.74-84, 札幌：風土デザイン研究所。

[その他]

齋藤玲子

- 2017 「旅・いろいろ地球人 アイヌの木彫り① 江戸時代からのみやげ」『毎日新聞』7月6日夕刊。
- 2017 「旅・いろいろ地球人 アイヌの木彫り② 伝統的工芸品の指定」『毎日新聞』7月13日夕刊。
- 2017 「旅・いろいろ地球人 アイヌの木彫り③ 熊ブーム」『毎日新聞』7月20日夕刊。
- 2017 「旅・いろいろ地球人 アイヌの木彫り④ アートモニュメント」『毎日新聞』7月27日夕刊。
- 2018 「『アイヌ工芸品展』のあらたな時代」特集「熊こそが原点——木彫家 藤戸竹喜の創作の軌跡」『月刊みんぱく』485(2)：2。
- 2018 「座談会 アイヌとして熊彫りとして」特集「熊こそが原点——木彫家 藤戸竹喜の創作の軌跡」『月刊みんぱく』485(2)：3-8。
- 2018 「収集後の資料にいかん情報を付加するか（基幹研究 民博が所蔵するアイヌ民族資料の形成と記録の再検討）」『民博通信』160：10-11。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2017年12月1日 「博物館とアイヌ文化の復興」国際シンポジウム「無形文化遺産をめぐる交渉」、国立民族学博物館

・機構の連携研究会での報告

2017年5月17日 「アイヌのタマサイ（首飾り）研究の概観」北東アジア地域研究会・国立民族学博物館拠点民博・歴博合同研究会・第11回月例会、国立民族学博物館

・共同研究会での報告

2017年11月19日 “アイヌ文様刺しゅう”を教える（教える×関係性・伝承）、共同研究会「現代「手芸」文化に関する研究」、国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2017年9月9日 「カナダ先住民とアイヌ民族の文化交流」日本カナダ学会第42回年次研究大会、国立民族学博物館

2017年9月30日 「公共的空間でのアイヌ文化の発信とアート展示」民族藝術学会146回研究例会、国立民族学博物館

・みんぱくゼミナール

2018年1月20日 「木彫り熊からアートモニュメントまで」第476回みんぱくゼミナール

・展示

2017年3月9日～6月6日 「開館40周年記念特別展『ビーズ——つなぐ・かざる・みせる』」実行委員

2017年7月22日～9月3日 「イメージの力」石川県立歴史博物館、実行委員

2017年8月10日～10月10日 「開館40周年記念特別展『よみがえれ！ シーボルトの日本博物館』」実行委員

2017年9月7日～12月5日 「開館40周年記念・カナダ建国150周年記念企画展『カナダ先住民の文化の力——過去、現在、未来』」実行委員

2018年1月11日～3月13日 「開館40周年記念企画展 アイヌ工芸品展『現れよ。森羅の生命——木彫家 藤戸竹喜の世界』」実行委員長

2018年3月 「『アイヌの文化』展示場（部分改修）」リーダー

・みんぱくウィークエンド・サロン

2017年4月9日 「北アメリカ先住民とアイヌのガラスビーズ利用」第460回ウィークエンド・サロン 研究者と話そう

2018年2月25日 「木彫家 藤戸竹喜の世界」第500回ウィークエンド・サロン 研究者と話そう

・広報・社会連携活動

2017年5月10日 「アイヌとガラス玉の交易」連続講座『みんぱく×ナレッジキャピタル ビーズ——つなぐ・かざる・みせる』CAFE Lab. グランフロント大阪北館ナレッジキャピタル1階

2017年7月27日 「平成29年度アイヌ文化普及啓発セミナー 東京会場『アイヌの木彫と世相——木彫り熊からアートモニュメントまで』」公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構、アイヌ文化交流センター

2017年8月7日 「平成29年度アイヌ文化普及啓発セミナー 札幌会場『アイヌの木彫と世相——木彫り熊からアートモニュメントまで』」公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構、北海道立道民活動センター（かでの2・7）

2017年9月29日 「『日本の先住民族アイヌ』JICA 博物館学コース講義」国立民族学博物館

2017年10月31日 「『アイヌ民族の歴史と文化』智辯学園奈良カレッジ中学部 講義」国立民族学博物館

2017年11月30日 「ミンパク オッタ カムイノミ」国立民族学博物館

2017年11月30日 「アイヌ工芸 in みんぱく」国立民族学博物館 エントランスホール

2018年2月14日 「ラジオ ウメダFM be-happy789! 『目キキノキキ目～ホクシエル編集部』出演」

2018年2月15日 「北海道アイヌ協会 工芸者技術研修（外来研究員）受け入れ」

◎調査活動

・国内調査

2017年4月14日～4月16日—北海道釧路市阿寒町（藤戸竹喜氏の作品調査）

2017年6月17日～6月18日—北海道沙流郡平取町二風谷ほか（アットゥシ織の素材に関する調査）

2017年8月21日～8月24日—北海道釧路市阿寒町（藤戸竹喜氏への聞き取り調査ほか）

2018年2月2日～2月3日—北海道札幌市（アイヌ関連古文書の調査ほか）

2018年2月10日～2月11日—北海道釧路市（アイヌ衣類の調査）

2018年3月25日～3月27日—国立民族学博物館（アイヌ衣類の調査）

◎大学院教育

・指導教員

副指導教員（1人）

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（B））「アイヌ民族の衣文化交流——博物館資料から北東アジア史を見直す」（研究代表者：佐々木史郎（独立行政法人国立文化財機構東京国立博物館））研究分担者、国立民族学博物館共同研究「現代『手芸』文化に関する研究」（研究代表者：上羽陽子）メンバー、国立民族学博物館フォーラム型情報ミュージアムプロジェクト「民博が所蔵するアイヌ民族資料の形成と記録の再検討」研究代表者、国立民族学博物館共同研究「世界のビーズをめぐる人類学的研究」（研究代表者：池谷和信）メンバー

◎社会活動・館外活動

- ・その他の社会活動・館外活動

北海道立北方民族博物館研究協力員（網走市）、（公財）アイヌ文化振興・研究推進機構平成29年度アイヌ工芸品展企画委員（札幌市）、公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構評議員（札幌市）

佐藤浩司 [さとう こうじ] ————— 准教授

【学歴】 東京大学工学部卒（1977）、東京大学大学院修士課程修了（1983）、東京大学大学院博士課程単位取得退学（1989）**【職歴】** 国立民族学博物館助手（1989）、国立民族学博物館助教授（1998）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2000）、国立民族学博物館文化資源研究センター助教授（2004）、国立民族学博物館民族社会研究部准教授（2008）、国立民族学博物館学術資源研究開発センター准教授（2017）**【学位】** 工学修士（東京大学工学部 1989）**【専攻・専門】** 民族建築学、建築史学**【所属学会】** 建築史学会、民俗建築学会、家具道具室内史学会

【主要業績】

[編著]

佐藤浩司編

1998～1999 『シリーズ建築人類学《世界の住まいを読む》1～4』京都：学芸出版社。

【2017年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

東南アジア木造建築史の再構築

・研究の目的、内容

東南アジアの木造建築史を概観するための資料の作成と東南アジア史の再構築（継続）

・成果

科研「伝統的生産システムによる保存手法の研究——熱帯地域木造建造物保存の国際共同研究」（代表：上北恭史・筑波大学）により、インドネシアのニアス島、スマトラ島、フローレス島、ロンボック島で調査に従事。成果はホームページにて逐次公開。

<http://www.sumai.org/index.html>

情報プロジェクト「三次元CGを利用した民族建築デジタルアーカイブの構築」によりデータベース「3次元CGで見せる建築データベース「東南アジア島嶼部の木造民家」」を作成、公開。

<http://htq.idc.minpaku.ac.jp/databases/3dcdg1/>

◎口頭発表・展示・その他の業績

・みんなくウィークエンド・サロン

2017年6月11日 「民家調査のいゝろゝは——建築人類学者はなにをめざす」第469回ウィークエンド・サロン
研究者と話そう

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（A））「伝統的生産システムによる保存手法の研究——熱帯地域木造建造物保存の国際共同研究」（研究代表者：上北恭史（筑波大学））研究分担者

山中由里子 [やまなか ゆりこ] ————— 准教授

1966年生。【学歴】カラマズー大学フランス語／美術専攻卒（1988）、東京大学大学院総合文化研究科修士課程修了（1991）、東京大学大学院総合文化研究科博士課程退学（1993）【職歴】東京大学東洋文化研究所助手（1993）、国立民族学博物館博物館民族学研究部助手（1998）、国立民族学博物館民族文化研究部助手（2004）、国立民族学博物館民族文化研究部准教授（2009）、国立民族学博物館学術資源研究開発センター准教授（2017）【学位】学術博士（東京大学 2007）、学術修士（東京大学 1991）【専攻・専門】比較文学比較文化 西アジアにおけるアレクサンドロス伝説の比較文学的研究、「驚異」の文化史【所属学会】日本比較文学会、日本中東学会、オリエント学会、日本比較文明学会、国際比較文学会、International Society for Iranian Studies

【主要業績】

[単著]

山中由里子

2009 『アレクサンドロス変相——古代から中世イスラームへ』名古屋：名古屋大学出版会。

[編著]

山中由里子

2015 『〈驚異〉の文化史——中東とヨーロッパを中心に』名古屋：名古屋大学出版会。

[共編]

Yamanaka, Y. and T. Nishio (eds.)

2006 *The Arabian Nights and Orientalism: Perspectives from the East and West*. London: I.B. Tauris.

【受賞歴】

2011 第7回日本学士院学術奨励賞

2011 第7回日本学術振興会賞

2010 第15回日本比較文学会賞

2010 島田謹二記念学藝賞

【2017年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

驚異と怪異の比較文明論：想像界と自然界の相関

・研究の目的、内容

本研究は、常識や慣習から逸脱した「異」なるもの（異境・異界・異人・異類・異音）をめぐる人間の心理と想像力の働きをこの「驚異」と「怪異」をキーワードに、比較文明論的な視点から考察する。自然界のどのような現象が「驚異」や「怪異」として認識され、どのような言説や視覚表象物が表れたのか、その背景にはどのような自然観があるのか、知識体系に接点はあるのかといった点に注目し、ユーラシアにおける人間と自然の相関関係の歴史の変遷を多元的視点から究明する。ユーラシア三大文明圏における生態系と人間の想像力と表象物の相関関係を明らかにし、その基層にある自然思想——「異」なるものへの視線に内包される自己と他者、自己と宇宙の境界認識——の歴史の変遷を解明する。

・成果

本年度は、科学研究費新学術領域研究「人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築」（代表：野林厚志）および科学研究費（基盤研究（C））「ヨーロッパ中世における博物学的知識の伝承——中東および古代・近世との関わり」（代表：大沼由布）の分担金を得て研究を行い、以下の成果を発表した。

【論文】

- 山中由里子 (2018) 「イスラームにおける地獄」 西山克編『地獄への招待』臨川書店、87-106頁。
- Yamanaka, Y. (2018) “Authenticating the Incredible: Comparative Study of Narrative Strategies in Arabic and Persian ‘Ajā’ib Literature.” *Jerusalem Studies in Arabic and Islam*.
- Yamanaka, Y. (2018) “The Tear-bottle Quest: European Perception of the Biblical Orient and Iranian Shiite Ritual. Regina F. Bendix, D. Noyes eds., *Terra Ridens*, Dortmund, Verlag für Orientkunde.
- 「物質文化を『翻訳』する——国立民族学博物館における展示解説の多言語化実践現場から」『国立民族学博物館研究報告』42(1), pp.49-70. (2017.9.29)

【学会発表、講演】

- 山中由里子 (2018) 「ヒュードロドロの系譜——この世ならざるものの出現にともなう音」、第477回みんなくゼミナール、国立民族学博物館、2018年2月17日。
- Yuriko Yamanaka (2017) “How to Uproot a Mandrake: Reciprocity of Knowledge in Medieval Europe, Middle East and China” International Colloquium, CULTURAL EXCHANGE IN THE MIDDLE AGES: FROM DIALOGUE TO THE CONSTRUCTION OF CULTURES, 奈良、大和文華館、2017.11.18-19 (招待講演).
- Yuriko Yamanaka (2017) Incredible India, the Land of Wonders in Persian ‘Ajā’ib Literature. International Conference on Indo-Persian Studies, Academy of Persian Language and Literature, February 19-20, 2017. (Iran, Tehran)

【研究報告】

- 山中由里子 (2018) 「先史時代の想像的行為と生態系の相関関係——ペリゴール地方の先史時代洞窟画の調査報告——」『パレオアジア文化史学 B01班2017年度研究報告書』No.2、38-42頁
- 山中由里子 「<自然>の内と外」『民博通信』160：24-25。

【ポスター発表】

- 山中由里子 (2017) 「想像界の生物相——マンティコラにみる名付けと形象化」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究2016-2020：パレオアジア文化史学第2回研究大会』名古屋大学野依記念学術交流館、2017年2月12日 (予稿集62頁)。
- 山中由里子 (2017) 「想像界の生物相(2)：人魚イメージの世界的分布と水棲動物の棲息地」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究2016-2020：パレオアジア文化史学第3回研究大会』国立民族学博物館、2017年5月13-14日 (予稿集87-88頁)。
- 山中由里子 (2017) 「想像界の生物相(3)——天狗の進化系統樹」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究2016-2020：パレオアジア文化史学第4回研究大会』東京大学、2017年12月9-10日 (予稿集62-63頁)。

◎出版物による業績

[編著]

- 山中由里子編
2017 『国立民族学博物館展示案内』, 国立民族学博物館。

[分担執筆]

- 山中由里子
2017 「イスラームの世界史観——アレクサンドロスは『大王』?」『「世界史」の世界史』京都：ミネルヴァ書房。
2018 「イスラームにおける地獄」 西山克編『地獄への招待』 pp.87-106, 京都：臨川書店。

[論文]

- 山中由里子
2017 「物質文化を『翻訳』する——国立民族学博物館における展示解説の多言語化実践現場から」『国立民族学博物館研究報告』42(1)：49-70。
2018 「<自然>の内と外」『民博通信』160：24-25。

[その他]

- 山中由里子
2017 「想像界の生物相 半人半魚の女神たち」『月刊みんなく』41(4)：14-15。
2017 「想像界の生物相(2)：人魚イメージの世界的分布と水棲動物の棲息地」『パレオアジア文化史学第3回研究大会予稿集』 p.87, 大阪：国立民族学博物館。

- 2017 「新世紀ミュージアム ラウテンシュトラウフ=ヨスト博物館」『月刊みんぱく』41(6)：16-17。
 2017 「国立民族学博物館の収蔵品⑳ 世界各地のイスラームの日常」『文部科学 教育通信』414：2。
 2017 「世界各地のイスラーム」『国立民族学博物館展示案内』pp.214-217, 大阪：国立民族学博物館。
 2017 「想像界の生物相(3)——天狗の進化系統樹」『パレオアジア文化史学第4回研究大会予稿集』p.62, 東京：東京大学。
 2018 「旅・いろいろ地球人 異界とつながる音① 鬼のどくろの唸り声」『毎日新聞』2月1日夕刊。
 2018 「旅・いろいろ地球人 異界とつながる音② 河童襲撃アラート」『毎日新聞』2月8日夕刊。
 2018 「旅・いろいろ地球人 異界とつながる音③ 神を運ぶポリフォニー」『毎日新聞』2月15日夕刊。
 2018 「旅・いろいろ地球人 異界とつながる音④ 境界突き破る『乱声』」『毎日新聞』2月22日夕刊。

Yamanaka, Y.

- 2017 Multilingualization of Displays at Minpaku. *Minpaku Anthropology Newsletter* 45: 9-11.
 2017 The Biota of the Imaginary (2): Global Distribution of Mermaid Imagery in Relation to the Habitat of Aquatic Animals. *The 3rd Conference on Cultural History of PaleoAsia*, p.88. Osaka: National Museum of Ethnology.
 2017 The Biota of the Imaginary (3): The Evolutionary Tree of Tengu. *The 4th Conference on Cultural History of PaleoAsia*, p.63. Tokyo: University of Tokyo.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2017年5月13日 「想像界の生物相(2)：人魚イメージの世界的分布と水棲動物の棲息地」パレオアジア文化史学第3回研究大会、国立民族学博物館
 2017年11月18日 How to Uproot a Mandrake: Reciprocity of Knowledge in Medieval Europe, Middle East and China, International Colloquium, Cultural Exchange in the Middle Ages: from Dialogue to the Construction of Cultures, 大和文華館（奈良）
 2017年12月9日 「想像界の生物相(3)——天狗の進化系統樹」パレオアジア文化史学第4回研究大会、東京大学
 2018年2月7日 En France, l'Orient s'est révélé à moi...: Entretien avec calligraphe Hassan Massoudy, French Orientalism and its Afterlives in Japan and the Middle East, Maison de la culture du Japon, Paris

・みんぱくゼミナール

- 2018年2月17日 「ヒュードロドロの系譜——この世ならざるものの出現にともなう音」第477回みんぱくゼミナール

・広報・社会連携活動

- 2017年11月8日 「誰がために涙をためる：涙壺をめぐる文化考」カレッジシアター「地球探究紀行」あべのハルカス近鉄本店

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

- 科学研究費（基盤研究（B））「日本現代文学・文化の世界展開の比較文学的研究——〈ポップ〉なテキストを中心に」（研究代表者：平石典子（筑波大学））研究分担者、科学研究費（新学術領域研究（研究領域提案型））「人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築」（研究代表者：野林厚志）研究分担者、科学研究費（基盤研究（C））「ヨーロッパ中世における博物学的知識の伝承——中東及び古代・近世との関わり」（研究代表者：大沼由布（同志社大学））研究分担者

国際研究統括室

西尾哲夫 [にしお てつお]——室長(併)、副館長(研究・国際交流・IR担当)、グローバル現象研究部教授

池谷和信 [いけや かずのぶ]——兼：人類文明誌研究部教授

卯田宗平 [うだ しゅうへい]——兼：人類文明誌研究部准教授

河合洋尚 [かわい ひろなお]——兼：グローバル現象研究部教授

野林厚志 [のばやし あつし]——兼：学術資源研究開発センター教授

山中由里子 [やまなか ゆりこ]——兼：学術資源研究開発センター准教授

吉岡 乾 [よしおか のぼる]——兼：人類基礎理論研究部助教

IR室

西尾哲夫 [にしお てつお]——室長(併)、副館長(研究・国際交流・IR担当)、グローバル現象研究部教授

梅棹資料室

飯田 卓 [いいだ たく]——併：学術資源研究開発センター准教授

機関研究員

内田吉哉 [うちだ よしや]——研究員

1971年生。【学歴】関西大学文学部史学地理学科卒業（1996）、関西大学大学院文学研究科史学専攻博士課程前期課程修了（1999）、関西大学大学院文学研究科史学専攻博士課程後期課程修了（2008）【職歴】関西大学第一高等学校非常勤講師（1999-2001）、箕面市文化財総合調査団調査員（2000-2002）、財団法人八尾市文化財調査研究会調査員（2002）、吹田市立吹田南小学校教員補助員（2003-2004）、上宮高等学校非常勤講師（2004-2005）、関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センターリサーチ・アシスタント（2005-2008）、関西大学非常勤講師（2008-現在）、関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター特別任用研究員（2008-2010）、関西大学大阪都市遺産研究センター特別任用研究員（2010-2015）、大阪商業大学非常勤講師（2012-2014）、関西大学研究推進部非常勤研究員（2015-2016）、京都市立堀川高等学校非常勤講師（2015-2016）、国立民族学博物館機関研究員（2016）【学位】博士（文学）（関西大学 2008）、修士（文学）（関西大学 1999）【専攻・専門】歴史学、文化遺産学、大阪地域研究、デジタル人文学【所属学会】情報処理学会（人文科学とコンピュータ研究会）、日本民俗学会、大阪歴史学会、関西大学史学地理学会

【主要業績】

[著書]

内田吉哉

2015 『「豊臣期大坂図屏風」の謎を解く』（大阪都市遺産研究叢書別集10）大阪：関西大学大阪都市遺産研究センター。

林 武文・内田吉哉

2014 『「牧村史陽氏旧蔵写真」目録』（大阪都市遺産研究叢書別集6）大阪：関西大学大阪都市遺産研究センター。

高橋隆弘・イサベル 田中 ファン ダーレン・内田吉哉

2010 『新発見 豊臣期大坂図屏風』大阪：清文堂出版。

【2017年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

人文社会科学分野の学術コンテンツの作成と公開に関する実証的研究

・研究の目的、内容

本研究は、人文社会科学分野で活用される研究資料、とりわけ写真や絵画等の非文字資料について、そのデータ整理の手法および、非文字資料を用いた学術研究の成果を学校教育、社会教育に還元するためのコンテンツ手法を開発することを目的とする。

本研究の特徴は、非文字資料の中でも印画紙に焼き付けされた、いわゆる「紙焼き写真」を研究の対象とする点にある。ネガ・ポジ・スライドとして残された写真資料の場合とは異なり、紙焼き写真の取り扱い、これまでにあまり顧みられることがなかった。本研究では、紙焼き写真資料のデジタルアーカイブ化の手法および、原資料（紙焼き写真）の保管手法、さらにデジタル化された写真資料を活用するためのデジタルコンテンツ手法についての実証的研究を行う。

・成果

2017年度は、前年度におこなった大阪市史編纂所が所蔵する写真資料の調査およびデジタルアーカイブ化の実証的研究に基づき、その調査・研究成果を大阪市史編纂所が刊行する出版物『大阪の歴史』に論文として投稿した。掲載予定は2018年度となる。

◎出版物による業績

[その他]

内田吉哉

2017 「デジタル人文学はアナログの世界——写真資料のデジタル化研究から」『みんぱく e-news』190。

2018 「戌年で絵馬でネコ」特集「ねこ 猫 ネコ」『月刊みんぱく』42(1)：9。

2018 「大阪の都市景観の変遷を探る」『月刊みんぱく』42(2)：10。

2018 「梅棹忠夫アーカイブズに見る収集団の奮闘録」特集「万博資料収集団」『月刊みんぱく』42(3)：7。

2018 「1960年代の日本 高度経済成長期の歴史的意義」野林厚志編『国立民族学博物館開館40周年記念特別展 太陽の塔からみんぱくへ——70年万博収集資料』pp.8-11, 大阪：国立民族学博物館。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・研究講演

2017年11月11日 「大阪名所の今昔——浪花百景との対比」川西市生涯学習短期大学レフネック、川西市、於アステ川西

2017年11月4日 「水の都の風景——写真に残る堀川」川西市生涯学習短期大学レフネック、川西市、於アステ川西

・展示

2017年度文化資源計画事業 年末年始展示イベント「いぬ」展示監修、国立民族学博物館

・広報・社会連携活動

2017年6月18日 音楽の祭日 実行委員会メンバー、国立民族学博物館

◎社会活動・館外活動等

・他大学の客員、非常勤講師

関西大学非常勤講師、「日本の文化と人間を考える」（全学共通教養科目）

左地亮子 [さち りょうこ] ————— 研究員

【学歴】筑波大学第二学群比較文化学類卒（2003）、筑波大学大学院人文社会科学研究科現代文化・公共政策専攻博士課程休学（2007）、フランス国立 Université de Pau et des Pays de l'Adour 大学院社会人文科学研究科留学（2009）、筑波大学大学院人文社会科学研究科現代文化・公共政策専攻博士課程修了（2012）【職歴】筑波大学博士特別研究員（2013）、獨協大学非常勤講師（2014）、日本学術振興会特別研究員 PD（2014）、四天王寺大学非常勤講師（2017）、国立民族学博物館外来研究員（2017）、国立民族学博物館グローバル現象研究部機関研究員（2017）【学位】博士（学術）（筑波大学大学院博士課程人文社会科学研究科 2012）、修士（学術）（筑波大学大学院博士課程人文社会科学研究科 2007）【専攻・専門】文化人類学、ジプシー／ロマ研究【所属学会】日本文化人類学会、早稲田人類学会、日仏社会学会、日本居住福祉学会

【受賞歴】

- 2017 第39回サントリー学芸賞（思想・歴史部門）
2015 第10回日本文化人類学会学会奨励賞

【2017年度の活動報告】

◎出版物による業績

[論文]

Sachi-Noro, R.

- 2017 Decline and Restructuring of Gypsies' Nomadism in France: Beyond the Nomadic/Sedentary Binary. *Sedentarization among Nomadic Peoples in Asia and Africa* (Senri Ethnological Studies 95), pp.87-116. Osaka: National Museum of Ethnology. [査読有]

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2017年5月27日 「旅の生活を語るモノと迫害を告発するアーカイヴ——フランスのジプシー社会における『想起』の始まりに関する考察」日本文化人類学会第51研究大会、神戸大学
2018年2月20日 「めぐりあう沈黙とアーカイヴ——フランスにおけるジプシーの服喪とコメモラシオン」筑波大学人文社会科学研究科現代語・現代文化専攻講演会、筑波大学人文社会科学研究科現代語・現代文化専攻
2018年3月3日 「不確実性に満ちた環境に寄り沿い<動く>こと——居住地再編に揺らぎ、変態するフランスのマヌーシュ共同体」『不確実な世界に住まう——遊動/定住の狭間に生きる身体』南山大学

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など
科学研究費助成事業（若手研究（B））「フランスにおけるジプシーの『旅の共同体』に関する文化人類学的研究」研究代表者

戸田美佳子 [とだ みかこ] ————— 研究員

【学歴】 神戸大学理学部物理学科卒（2006）、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科五年一貫制博士課程満期認定退学（2011）【職歴】 日本学術振興会特別研究員（DC1）（2008）、京都大学アフリカ地域研究資料センター特任研究員（産官学連携）（2011）、日本学術振興会特別研究員（PD）（2012）、成安造形大学非常勤講師（2014）、国立民族学博物館文化資源研究センター機関研究員（2015）【学位】 博士（地域研究）（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 2013）、修士（地域研究）（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 2010）【専攻・専門】 生態人類学、アフリカ地域研究（中部アフリカ）【所属学会】 日本アフリカ学会、生態人類学会、日本文化人類学会、国際開発学会、障害学会

【主要業績】

[単著]

戸田美佳子

- 2015 『越境する障害者——アフリカ熱帯林に暮らす障害者の民族誌』東京：明石書店。

[論文]

戸田美佳子

- 2016 「国境をまたぐ障害者——コンゴ川の障害者ビジネスと国家」森壯也編『アフリカの「障害と開発」——SDGsに向けて』（研究双書 No.622）pp.153-193, 千葉：日本貿易振興機構アジア経済研究所。
2014 People and Social Organizations in Gribé, Southeastern Cameroon. *African Study Monographs Supplementary Issue* 49: 139-168.

【受賞歴】

- 2016 生存学奨励賞「審査員特別賞」

【2017年度の活動報告】

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など
- 科学研究費助成事業（若手研究（B））「アフリカ障害者の生活基盤に関する地域研究」研究代表者

永田貴聖 [ながた あつまさ] ————— 研究員

1974年生。【学歴】京都学園大学法学部法学科卒（1997）、University of the Philippines, Diliman Master of Anthropology 修士課程留学（2003）、立命館大学大学院文学研究科史学専攻地域文化領域博士前期課程修了（2004）、立命館大学大学院先端総合学術研究科先端総合学術専攻共生領域博士課程修了（2008）【職歴】立命館大学第一号助手（2005）、日本学術振興会特別研究員 DC 立命館大学（2007）、日本学術振興会特別研究員 PD 京都大学（2008）、立命館大学衣笠総合研究機構ポスドクフェロー（2009）、立命館大学大学院 先端総合学術研究科研究指導助手（2010）、立命館大学衣笠総合研究機構専門研究員（2012）、京都学園大学人文学部非常勤講師（2015）、国立民族学博物館先端人類科学研究部機関研究員（2015）【学位】博士（学術）（立命館大学大学院 2008）【専攻・専門】文化人類学・移民研究（日本・韓国におけるフィリピン人移民と他の移民グループとの社会関係形成に関する研究）【所属学会】日本文化人類学会、日本移民学会、社会学研究会、関西社会学会

【主要業績】

[著書]

永田貴聖

2011 『トランスナショナル・フィリピン人の民族誌』京都：ナカニシヤ出版

[論文]

永田貴聖

2016 「日本・韓国のフィリピン人たちによる複数の国家・国民とかわる実践」黒木雅子・李恩子編『「国家」を超えるとは——民族・ジェンダー・宗教』pp.151-199, 東京：新幹社。

2016 「『韓国』を消費するだけではない日本人の存在——政治的な日韓関係を越える関係についての試論」『生存学』9：94-107。

【2017年度の活動報告】

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など
- 科学研究費助成事業（基盤研究（C））「島嶼への結婚移住をめぐる比較研究——フィリピン人を中心に」（研究代表者：野入直美（琉球大学））研究分担者、科学研究費助成事業（基盤研究（C））「京都市東九条における日本人・在日コリアン・フィリピン人の関係形成についての人類学」研究代表者

プロジェクト研究員

石原 和 [いしはら やまと] ————— 研究員

【学歴】立命館大学文学部人文学科日本史学専攻卒（2011）、立命館大学大学院文学研究科人文学専攻日本史学専修博士前期課程修了（2012）、立命館大学大学院文学研究科人文学専攻日本史学専修博士後期課程修了（2017）【職歴】日本学術振興会特別研究員 DC2（2014）、国立民族学博物館人類基礎理論研究部プロジェクト研究員（2017）【学位】博士（文学）（立命館大学大学院 2017）【専攻・専門】日本史学 思想史、宗教史、宗教学【所属学会】日本歴史学会、日本史研究会、「宗教と社会」学会、日本思想史学会、日本宗教学会

【2017年度の活動報告】

◎出版物による業績

[分担執筆]

石原 和

2017 「南照寺の大般若経勧進とその経過」奥会津博物館編『修験南照寺聖教典籍文書・川島家文書書籍目録』pp.35-40, 福島：南会津町教育委員会。

[学位論文]

石原 和

2017 『一八〇〇年前後の宗教社会と民衆宗教の展開——名古屋城下の如来教を中心に』京都：立命館大学。

[論文]

石原 和

2017 「民衆宗教世界の形成過程——如来教の秋葉信仰との対峙をめぐって」『日本思想史学』49：113-131。
[査読有]

[その他]

石原 和

2018 「大阪大学 URA インターンシップ参加記」『URA MAIL MAGAZINE』54。

2018 「書評：川村邦光『出口なお・王仁三郎——世界を水晶の世に致すぞよ』」『日本思想史研究会会報』(34)：66-74。

2018 「近代教団と対峙する如来教——如来教機関紙『このたび』から」『宗教研究』（別冊）：110-111。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2017年5月18日 「近世仏教から近世（思想）史像を捉え返す——大桑齊『仏教的世界としての近世』を読む」日本思想史研究会、立命館大学

2017年7月1日 「如来教にみる宗教知の連鎖——常陸国枕石寺蔵『高祖親鸞聖人御枕石』縁起を題材に」日韓次世代学術フォーラム、亞洲大学校、大韓民国

2017年8月20日 「近世宗教の多領域活動の中の如来教——如来教説教と近世親鸞伝」西郊民俗談話会、信濃町大島建彦邸

2017年9月17日 「近代教団と対峙する如来教——如来教機関紙『このたび』から」日本宗教学会、東京大学

2017年10月28日 「如来教説教の想像力としての近世親鸞伝」日本思想史学会、東京大学

小林直明 [こばやし なおあき]————— 研究員

【2017年度の活動報告】

◎出版物による業績

[その他]

小林直明

2017 「記憶に残った一枚の写真」『月刊 みんぱく』41(10)：10-11。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2018年3月16日 『『タンザニアにおける博物館の動向と協力関係の構築』調査報告』『ネットワーク型博物館の創成』調査報告会、国立民族学博物館

馬場幸栄 [ばば ゆきえ]————— 研究員

【学歴】国際基督教大学教養学部社会科学科卒（1994）、東京大学大学院人文社会系研究科文化資源学専攻修士課程修了（2008）、お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科比較社会文化学専攻博士課程単位取得退学（2015）

【職歴】お茶の水女子大学グローバルリーダーシップ研究所特任講師（2015）、国立民族学博物館プロジェクト研究員（2016）、国立民族学博物館共同研究員（2017）、一橋大学附属図書館研究開発室助教（2017）、一橋大学社会科学古典資料センター助教（2018）【学位】修士（文学）（2008）、東京大学大学院【専攻・専門】文化資源、比較文化、

【主要業績】

[論文]

馬場幸栄

- 2010 「児童養護施設としての修道院——中世西欧世界における社会的養護の一形態」『公募研究成果論文集』（格差センシティブな人間発達科学の創成12） pp.109-114。
- 2009 「中世シトー会の修練者生活指導書——『修練者の鏡』試訳」『お茶の水史学』52：77-136。
- 2005 「XMLを利用した記録史料画像閲覧用 GUI の設計」『記録と史料』第15号、全国歴史資料保存利用機関連絡協議会、pp.41-53。

【受賞歴】

- 2016 図書館総合展運営委員会特別賞
- 2009 グッドデザイン賞（ネットワーク領域デジタルコンテンツ）

【2017年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

共住共同体の地域史料とその文化資源化

・研究の目的、内容

岩手県奥州市水沢は1899（明治32）年に文部省によって設置された緯度観測所とともに発展してきた。緯度観測所で中心的な役割を果たした研究者の多くは東京帝大や京都帝大などを卒業した岩手県外からの出身者たちであったが、彼らは趣味のスポーツや芸術などを通して市民と交流を深め、また、水沢の若者を積極的に所員として雇用していった。その結果、緯度観測所は水沢の地域文化の中心的存在となり、緯度観測所所員と彼らと交流のある市民で構成された「緯度観測所コミュニティ」とでも呼ぶべき新たな共同体が誕生した。緯度観測所の所員と水沢の市民はその後90年近くにわたり密接で友好的な関係を築いてきたが、昭和63年に緯度観測所が東京天文台等と統合改組されて国立天文台が誕生したことによって、緯度観測所という組織は消滅した。これに伴い、「緯度観測所コミュニティ」も一部の構成員を除き殆どが離散してしまった。だが、水沢に暮らす多くの高齢者にとって緯度観測所は今でも地域のシンボルであり、失われた「緯度観測所コミュニティ」のつながりを取り戻したい、緯度観測所の歴史と文化を若い世代に伝え、緯度観測所関連文化財を人口減少が続く地域の振興に活かしたい、と考える人々がいる。そこで、緯度観測所関連文化財の調査や元所員らへの聴き取り調査から「緯度観測所コミュニティ」の歴史と文化を再構築し、その成果を展覧会や講演会などで広く公開することによって、「緯度観測所コミュニティ」ネットワークの再構築と緯度観測所関連文化財の文化資源化を目指す。

・成果

緯度観測所および水沢にある学校の文献調査によって、緯度観測所が大正12年から水沢の女学校卒業生を積極的に所員として雇用していたという事実が明らかになった。また、女性所員やその家族に聴き取り調査を行った結果、女性所員の多くが「計算係」を担当していたことが判明した。

奥州宇宙遊学館（緯度観測所本館の建物を再利用した奥州市の施設）において「緯度観測所を支えた岩手の女性たち」という展示を開催し、緯度観測所時代に撮影された女性所員らの写真や手回し計算機などを展示した。この展示をきっかけに、緯度観測所所員や彼らと交流のあった市民が再会したり、高齢者が若い世代の人々に緯度観測所についての昔語りをする機会が生まれたりした。かつての「緯度観測所コミュニティ」を復活させることはできないが、緯度観測所文化財の展示というイベントを通して、緯度観測所の歴史・文化を共有する新たな人的ネットワークが構築されつつある。

国立天文台が収蔵する緯度観測所建造物群の文書・図面・写真等を修復・分析し、それら建造物の機能や特徴について元所員らに聴き取り調査を行った結果、それらが歴史的証拠となり、水沢に現存する緯度観測所建造物4棟が国の登録有形文化財になった。このことは岩手のメディアで広く取り上げられ、緯度観測所建造物への見学者が増えた。

◎出版物による業績

[論文]

馬場幸栄

2018 「国際緯度観測事業を陰で支えた岩手の少女たち——知られざる科学の歴史」『比較日本学教育研究センター研究年報』14：151-154。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2017年7月2日 「国立天文台水沢VLBI観測所収蔵 緯度観測所ガラス乾板『記念写真』コレクション」全日本博物館学会第43回研究大会、滋賀県立琵琶湖博物館

2017年9月12日 「大正末期の建築指図に描かれた緯度観測所の建造物」日本天文学会2017年秋季年会、北海道大学

2017年11月7日～11月9日 「小規模図書館でもできる 地域の古い建物を登録有形文化財にする方法」第19回図書館総合展、パシフィコ横浜

2017年12月2日 「知られざる科学史のヒロイン——国際緯度観測事業を支えた岩手の少女たち」第12回国際日本学コンソーシアム『壁をこえる』お茶の水女子大学

2018年3月14日～3月17日 「第三代所長・池田徹郎が描いた緯度観測所絵巻」日本天文学会2018年春季年会、千葉大学

・展示

2017年8月19日 いわて銀河フェスタ「木村榮記念館特別展示」木村榮記念館

2018年3月3日～3月4日 特別展「緯度観測所を支えた岩手の女性たち」奥州宇宙遊学館

◎調査活動

・国内調査

2017年4月14日—東京都三鷹市（共住共同体の地域史料とその文化資源化）

2017年4月21日—東京都三鷹市（共住共同体の地域史料とその文化資源化）

2017年4月28日～5月7日—岩手県奥州市（共住共同体の地域史料とその文化資源化）

2017年6月9日～6月12日—岩手県奥州市（共住共同体の地域史料とその文化資源化）

2017年6月19日—滋賀県栗東市（共住共同体の地域史料とその文化資源化）

2017年11月23日～11月27日—岩手県奥州市（共住共同体の地域史料とその文化資源化）

2017年12月8日～12月11日—岩手県奥州市（共住共同体の地域史料とその文化資源化）

◎上記以外の研究活動

・民間の奨学金および助成金からのプロジェクト

お茶の水女子大学グローバルリーダーシップ研究所平成29年度研究プロジェクト「科学研究施設と地域社会——緯度観測所と近代岩手の文化」研究協力員

◎社会活動・館外活動等

・他大学の客員、非常勤講師

奥州宇宙遊学館講師「平成29年度自然体験学習『紙って何者?』」

白百合女子大学非常勤講師「キリスト教と英米文化」

彭 宇潔 [ほう うけつ]————— 研究員

【学歴】北京外国語大学日本語学部卒（2008）、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科アフリカ地域研究専攻5年一貫制博士課程修了（2016）【学位】修士（地域研究）（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科2012）、博士（地域研究）（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科2016）【専攻・専門】文化人類学、狩猟採集民研究、アフリカ地域研究【所属学会】日本アフリカ学会、生態人類学会、日本文化人類学会、国際狩猟採集民学会、英国王立人類学協会、国際民族生物学会

【主要業績】

[単著]

彭 宇潔

2017 Inscribing the Body: An Anthropological Study on the Tattoo Practice among the Baka Hunter-

Gatherers in Southeastern Cameroon. Kyoto: Shokado.

[著書]

彭 宇潔

- 2016 Transmission of Body Decoration among the Baka Hunter-Gatherers. In H. Terashima and Barry S. Hewlett (eds.) Social Learning and Innovation in Contemporary Hunter-Gatherers: Evolutionary and Ethnographic Perspectives, pp.83-93. Tokyo: Springer.

[論文]

彭 宇潔

- 2016 The Evidence of Proximity: Tattoo Practices of the Baka in Southeastern Cameroon. Hunter Gatherer Research 2(1): 63-95.

【受賞歴】

- 2012 英国王立人類学協会主催 Body Canvas Photography Competition 「Runner-up 賞」

【2017年度の活動報告】

◎出版物による業績

[論文]

彭 宇潔

- 2017 「女性のファッション——バカ・ピグミーの刺青実践を事例に」『コンタクト・ゾーン=Contact zone』9: 331-346。[査読有]

[その他]

彭 宇潔

- 2017 「良い肉は森にある——アフリカ狩猟採集民バカの肉食」『vesta』108: 13-15。
2017 「国際人類学民族学科学連合2016年国際大会参加報告」『アフリカ研究』2017(92): 131-133。
2018 「狩猟採集民に見られる道具利用の通文化的研究——アジアとアフリカの森林地帯を中心に」野林厚志編『パレオアジア文化史学計画研究 B01班2017年度研究報告——アジア新人文化形成プロセスの総合的研究』pp.43-47, 文部科学省学研究費補助金新学術領域研究(研究領域提案型)2016-2020年度計画研究 B01班。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2017年5月13日 「民族誌的視点からの装身具と身体装飾——狩猟採集民と他集団との関係に注目して」文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究2016-2020: パレオアジア文化史学第3回研究大会、国立民族学博物館
2017年7月8日 「中部非洲地区俾格米人在装饰文化中的植物利用——以巴卡的传统医疗饰品为例」中国民族生态学学会第2届全国大会、凯里学院、贵州凯里市
2017年12月9日 「狩猟採集民にみられる道具と道具利用の多様性に関する比較研究」文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究2016-2020: パレオアジア文化史学第4回研究大会、東京大学

拠点研究員

■人間文化研究機構総合人間文化研究推進センター・「北東アジア地域研究」国立民族学博物館拠点

辛嶋博善 [からしま ひろよし] ————— 研究員

1974年。【学歴】慶應義塾大学文学部史学科民族学考古学専攻卒業(1998)、東京外国語大学大学院地域文化研究科博士前期課程アジア第一専攻地域研究コース修了(2001)、東京外国語大学大学院地域文化研究科博士後期課程単位取得退学(2008)【職歴】東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所ジュニア・フェロー(2008-2013)、北海道大学スラブ研究センター非常勤研究員(2013-2014)、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター非常勤研究員(2014-2015)、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター地域比較共同研究員(2015-)【学位】博士(学術)(東

京外国語大学 2011)【専攻・専門】日本文化人類学会、日本モンゴル学会、生き物文化誌学会、IUAES (International Union of Anthropological and Ethnological Sciences)

【主要業績】

[論文]

辛嶋博善

2017 「家業を起業する——モンゴル牧畜社会における牧夫の自立」(特集：市場化・脱工業化時代の生業論——
牧畜戦略の多様化を例に)『文化人類学』82(1)：35-49。

2016 「拡張する柔軟性——モンゴル国現代牧畜社会における居住単位のサイズと構成の変遷」『文化人類学』
81(1)：44-61。

[学位論文]

辛嶋博善

2010 「衝突する未来——ポスト社会主義期におけるモンゴル国ヘンティール県ムルン郡の牧畜社会を事例とし
て」東京外国語大学。

【2017年度の活動報告】

◎出版物による業績

[論文]

辛嶋博善

2017 「家業を起業する——モンゴル牧畜社会における牧夫の自立」『文化人類学』82(1)：35-50。[査読
有]

2017 「『遊』動するくらし」『武庫川女子大学生生活美学研究所紀要』27：15-25。

2017 「モンゴル牧畜民による地形に関する認識と表象、過剰な知識——モンゴル国ウブスハンガイ県ハラ
ホリン郡の事例から」沈衛榮編『西域歴史語言研究集刊 第九輯』pp.477-490, 北京：科学出版社。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2017年7月23日 “Reduction of Transaction Costs: a Case Study of the Market Economy of Mongolian
Pastoralists.” The Tenth International Convention of Asia Scholars (ICAS10) (Panel:
Production and Distribution of Natural Resources in inNortheast Asia (Convenor: H.
Karashima, Chair: K. Ikeya, Discussant: Sakkarin Na Nan, Rajamangala University of
Technology, Thailand, Institutional Panel by: National Museum of Ethnology) The Chiang
Mai International Exhibition and Convention Centre (CMECC) in Chiang Mai, Thailand
from 20-23 July 2017

2017年12月27日 「家を訪問するということ」分科会『共食、宴、歓待と社会——モンゴルの訪問と接客の技法
から歓待を考える』(代表：寺尾萌) 東アジア人類学研究会第4回大会、大学セミナーハウ
ス、東京

・広報・社会連携活動

2017年5月4日 招待講演「近年におけるモンゴル牧畜社会の変化」ハワリンバヤル2017・モンゴルカレッジ、
練馬区光が丘図書館2階視聴覚室

■人間文化研究機構総合人間文化研究推進センター・「現代中東地域研究」国立民族学博物館拠点

黒田賢治 [くろだ けんじ]————— 研究員

1982年生。【学歴】北海道大学文学部人文科学科卒(2005)、北海道大学文学研究科退学(2006)、京都大学大学院ア
ジア・アフリカ地域研究研究科修了(2011)【職歴】日本学術振興会特別研究員(DC)(2008-2011)、京都大学科学
研究員(2011-2012)、京都大学東南アジア研究所特別研究員(2011-2012)、カリフォルニア大学中近東研究所客員
研究員(2011-2012)、日本学術振興会特別研究員(PD)(2012-2015)、広島大学総合科学研究科研究員(2015-2016)、
人間文化研究機構総合人間文化研究推進センター研究員(2016)【学位】博士(地域研究)(京都大学大学院 2011)
【専攻・専門】中東地域研究、イスラーム研究【所属学会】宗教と社会学会、日本文化人類学会、日本中東学会、

【主要業績】

[単著]

黒田賢治

2015 『イランにおける宗教と国家——現代シーア派の実相』京都：ナカニシヤ出版。

[論文]

黒田賢治

2010 「ハーメネイ——指導体制下における法学界支配の構造——ホウゼの運営組織改革と奨学金制度を中心に」『日本中東学会年報』26(1)：75-97。

[学位論文]

黒田賢治

2011 『現代イランにおけるイスラーム国家と法学界の研究——イスラーム指導体制下の宗教と政治をめぐって』京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科。

【2016年度の活動報告】

◎出版物による業績

[論文]

黒田賢治

2017 「『法学者の統治』体制における政治勢力としての法学者の行方——第12期イラン大統領選挙をてがかりに」『中東研究』530：70-82。

Kuroda, K.

2017 Pioneering Iranian Studies in Meiji Japan: Between Modern Academia and International Strategy. *Iranian Studies* 50: 651-670.

[書評]

黒田賢治

2017 「書評 「八木久美子著『慈悲深き神の食卓——イスラムを「食」からみる』」『宗教と社会』23：210。

[その他]

黒田賢治

2017 「英霊の記憶保存」『月刊みんぱく』41(5)：10-11。

◎口頭発表・展示・その他の業績

2017年5月26日 「近代日本のイランをめぐる知的系譜と権力構造：明治期日本の『イラン研究』をてがかりに」第6回現代中東地域研究レクチャーシリーズ、国立民族学博物館

2017年7月20日 “Training Body for the Hidden Imam: The Creation of an Alternative Public Space and Indigenized Karate Culture in Contemporary Iran”. International Convention of Asia Scholars, Chiang Mai, Thailand

2018年1月27日 「イランにおける身体文化の現代的展開——ズールハーネから空手道場へ」第51回関西イラン研究会、大阪大学箕面キャンパス

2018年1月30日 「1396年抗議運動／騒乱にみられるイランの国家——社会関係の変容」笹川平和財団主催 中東情勢研究会『イランにおける抗議運動』笹川平和財団本部

■人間文化研究機構総合人間文化研究推進センター・「南アジア地域研究」国立民族学博物館拠点

竹村嘉晃 [たけむら よしあき]————— 研究員

【学歴】 日本大学芸術学部演劇学科卒（1995）、沖縄県立芸術大学大学院音楽芸術研究科音楽学専攻修士課程修了（2001）、大阪大学大学院人間科学研究科人間科学専攻博士前期課程修了（2003）、大阪大学大学院人間科学研究科人間科学専攻博士後期課程修了（2012）【職歴】 独立行政法人日本学術振興会特別研究員（DC2）（2005）、大阪大学国際企画推進本部特任研究員（2008）、和歌山県立医科大学保健看護学部非常勤講師（2009-2013）、国立民族学博物館

外来研究員（2010-2014）、奈良大学社会学部非常勤講師（2011-2012）、国立民族学博物館共同研究員（2011-2014）、関西大学文学部非常勤講師（2012-）、人間文化研究機構地域研究推進センター・現代インド地域研究国立民族学博物館拠点研究員（2014）【学位】博士（人間科学）（大阪大学大学院 2012）、修士（人間科学）（大阪大学大学院 2003）、修士（音楽学）（沖縄県立芸術大学大学院2001）【専攻・専門】芸能人類学、南アジア地域研究【所属学会】日本文化人類学会、日本南アジア学会、舞踊学会、民族藝術学会、日本スポーツ人類学会、東洋音楽学会、The Congress on Research in Dance

【主要業績】

[単著]

竹村嘉晃

2015 『神霊を生きること、その世界——南インド・ケーララ社会における「不可触民」の芸能民族誌』東京：風響社。

[論文]

竹村嘉晃

2015 「踊る現代インド——グローバル化の中で躍動するインドの舞踊文化」三尾稔・杉本良男編『現代インド 6 環流するインドの文化と宗教』pp.159-179, 東京：東京大学出版会。

2014 「インド・ケーララ州出身者たちの神霊を介した故地とのつながり」細田尚美編『湾岸アラブ諸国における移民労働者——「多外国人国家」の出現と生活実態』pp.229-250, 東京：明石書店。

中川加奈子 [なかがわ かなこ]————— 研究員

【学歴】関西学院大学社会学研究科博士課程修了（2007）【職歴】外務省在ネパール日本国大使館 専門調査員（2007-2010）、京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科日本学術振興会特別研究員（2014-2016）、人間文化研究機構総合人間文化研究推進センター国立民族学博物館南アジア研究拠点拠点研究員（2016）【学位】博士（社会学）（関西学院大学）【専攻・専門】文化人類学、南アジア地域研究、肉食の比較民族誌【所属学会】日本文化人類学会、日本南アジア学会、日本社会学会、環境社会学会

【主要業績】

[単著]

中川加奈子

2016 『ネパールでカーストを生きぬく——供犠と肉売りを担う人びとの民族誌』京都：世界思想社。

客員教員

■人類基礎理論研究部

宇陀則彦 [うだ のりひこ]————— 教授

【学歴】図書館情報大学図書館情報学部卒（1989）、図書館情報大学大学院図書館情報学研究科修士課程修了（1991）、筑波大学大学院博士後期課程工学研究科修了（1994）【職歴】図書館情報大学図書館情報学部助手（1994）、図書館情報大学総合情報処理センター講師（1999）、図書館情報大学図書館情報学部助教授（2001）、筑波大学図書館情報学系助教授（2002）、筑波大学図書館情報メディア系准教授（2011）【学位】博士（工学）（筑波大学 1994）【専攻・専門】図書館情報学・知識情報学【所属学会】情報処理学会、情報知識学会

【主要業績】

[共著]

宇陀則彦・三森弘

2015 「ワークプレイスとしてのラーニング・コモンズ」溝上智恵子編著『世界のラーニング・コモンズ大学教育と「学び」の空間モデル』pp.39-57, 東京：樹村房。

【論文】

常川真央・松村敦・宇陀則彦

2013 「日本十進分類法を用いた類似読者発見手法」『情報メディア研究』12(1)：42-51。

宇陀則彦・山田太造・村田良二・山本泰則

2012 「転写資料記述のための概念モデルの特徴と課題」『国立歴史民俗博物館研究報告』176：239-266。

【受賞歴】

2007 情報知識学会論文賞

【2017年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

文化資源の人文社会情報学的研究——高度情報化とデータベースの連携

・研究の目的、内容

博物館資料と図書館資料の両方が充実している民博の特長を活かし、モノ中心の展示ではなく、ドキュメント中心に展示を行う新しい展示手法「ドキュメント展示」の確立を目指す。ここでいうドキュメントとは、図書、雑誌、ポスター、パンフレット、図録、データベース等、知識が記述されたもの全般を指す。ドキュメント展示の手法を確立するために、展示として成立するドキュメントのタイプの特定、博物館資料との組み合わせ方法、展示空間における配列方法、モノの展示とデジタル展示の選択等、多面的に検討する。また、博物館資料と図書館資料の組み合わせにおける知識リンクにあたっては、Linked Open Dataによる記述方法についても検討する。

・成果

今年度はモノとドキュメントの組み合わせ展示に焦点を当て、ドキュメント展示を小規模に実施した。展示場所はつくば駅前の複合施設Bivi内の筑波大学サテライトオフィスである。ここは一般の人が立ち寄れるという意味で博物館と共通点がある。また、みんなく図書室での実施を想定して筑波大学附属図書館でも実施した。具体的には、「ショウジョウバエとマウスに共通する遺伝子」、「おたふくかぜの原因ウイルス」、「パルス光からガラスへのエネルギー移行」、「睡眠・覚醒制御の分子ネットワーク解明」、「樹液の流れの可視化」等、筑波大学の注目の研究を題材に、関連図書と関連するオブジェを組み合わせ展示した。今回は図書を先に決め、それに合うオブジェを探す順番で行ったが、図書のメッセージ性と多様性に比べ、オブジェは抽象度が高く、適切なオブジェを探すのに苦労した。その点、博物館資料のようにモノとしてのメッセージ性が高いものに図書を合わせるほうが展示の構成として容易であることが示唆された。

◎出版物による業績

【論文】

宇陀則彦

2018 「図書館における高齢者の資料選択理由の分析」『図書館情報メディア研究』15(2)：17-27。

【その他】

Uda, N., C. Mizoue, S. Donkai, and S. Ishimura

2017 Information Seeking Behaviors of Older Adults in Public Libraries. *2017 A-LIEP Proceedings of the 8th International Conference on Asia-Pacific Library and Information Education and Practice*, pp.395-407.

野田香蓮・松村 敦・宇陀則彦

2018 「絵図の理解を目指した読図プロセスの可視化」『第116回人文科学とコンピュータ研究会』p.7。

渡部航太郎・松村 敦・宇陀則彦

2018 「図書館情報学アーカイブスの理解を目的としたDBpediaの活用」『第116回人文科学とコンピュータ研究会』p.4。

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

人間文化研究機構基幹研究プロジェクト「総合資料学の創成と日本歴史文化に関する研究資源の共同利用基盤構築」連携研究員及び国立歴史民俗博物館共同研究員

■人類基礎理論研究部・日本財団助成手話言語学研究部門（附置）

原 大介 [はら だいすけ] 教授

1965年生。【学歴】早稲田大学第一文学部卒業（1989）、国際基督教大学大学院教育学研究科修了（1991）、シカゴ大学大学院言語学科修了（2003）【職歴】愛知医科大学看護学部専任講師（2000）、愛知医科大学看護学部助教授（2004）、愛知医科大学看護学部教授（2007）、豊田工業大学工学部教授（2010）【学位】博士（言語学）（シカゴ大学大学院、2003）【専攻・専門】音韻論、形態論、手話言語学【所属学会】日本言語学会、日本手話学会、電子情報通信学会

【主要業績】

[論文]

Hara, D.

2016 An Information-based Approach to the Syllable Formation of Japanese Sign Language. In M. Minami (ed.) *Handbook of Japanese Applied Linguistics*, pp.457-482. Boston, MA: GRUYTER MOUTON.

原 大介

2010 「手話言語研究はどうあるべきか——捨象と抽象」『手話学研究』19：29-41。

2009 「手話」中島平三監修・今井邦彦編『言語学の領域 II』（シリーズ朝倉「言語の可能性」2），pp.72-98，東京：朝倉書店。

【2017年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

手話言語における音節構造の成り立ちとその適格性条件に関する研究

・研究の目的、内容

日本手話では、「手型」、「手の位置」、「手の動き」の3つのカテゴリに属する要素と「掌の方向」、「指先の方向」、「利き手の接触」等のいくつかのマイナーな要素が構成素として関与している。各カテゴリにはそれぞれ有限個の要素が存在するが、カテゴリ間の要素結合は自由ではなく数学的に可能な組み合わせの多くが不適格な音節と判定される。本研究では、どのような要素結合が適格な日本手話音節形成を可能にするのか（すなわち日本手話の音素配列論）を研究することを目的とする。日本手話の音素配列を論じるには、日本手話において認可されている要素同士の結合であるにもかかわらず不適格であると判断される音節をできるだけ多く収集する必要があり、前年度からの調査で約200個の不適格音節を確定し、その音節のコーディング作業を行った。今年度は、更に不適格音節を収集するとともに、同時並行的に、不適格音節と適格音節間の構成要素の組み合わせの違いを調査・比較し、日本手話音節に許される構成要素の組み合わせの抽出作業を試みる。手話音節には、「手型」、「位置」、「動き」のように複数のカテゴリ（次元）が関与しており、各カテゴリには多くの要素（変数）が含まれているため、人間の手作業で行うには限界がある。そのため、音節構成要素の適格な組み合わせを見いだすために、ロジスティック回帰やSVMのような機械学習を援用する計画である。なお、この研究の一部は以下の研究費の助成を受けている。

1. 文部科学省科学研究費（基盤研究（C））2015年度～2017年度（予定）「機械学習を援用した日本手話音節の適格性の解明」研究代表者：原大介（課題番号：15K02536）

2. 財団法人大幸財団 第5回人文・社会科学系学術研究助成，2016年9月～2018年3月（予定）「日本手話音節の適格性条件の解明——言語学と言語情報処理からのアプローチ」研究代表者：原大介

3. 豊田工業大学研究促進費 A 2016年7月～2017年3月「機械学習を援用した日本手話音節適格性解明の研究に用いるデータ収集およびデータの記号化」研究代表者：原大介

4. 文部科学省科学研究費（基盤研究（B））2016年度～2018年度（予定）「学術手話通訳養成システムの開発——認知・言語的アセスメントに基づいたアプローチ」研究代表者：中野聡子（課題番号：16H03813）

5. 公益財団法人三菱財団 平成29年度助成金人文科学研究 2017年10月～2018年9月（予定）「日本手話音節の適格性の解明——言語学・機械学習からのアプローチ」研究代表者：原大介

・成果

適格音節データベースおよび不適格音節データベース（以下、「データベース」は「DB」と表記）を拡充し、

適格音節約2600個、不適格音節約400個を収集した。それぞれの音節は、音節構成要素に分解・記号化して適格音節DB、不適格音節DBに登録した。拡充した不適格DBに登録されている個々の不適格音節の音節構成要素の組み合わせを検討することにより音節の不適格性の原因となる音節構成要素の組み合わせ特徴を提案した。それらのうち代表的なものとして、(1)両手を使用する音節のうちタイプ3と呼ばれる左右の手型の異なる音節では、日本手話で利用可能な49種類の手型のうち25種類しか使用されない、(2)タイプ3では、非利き手は利き手と異なる位置に現れることができず、かつ利き手（および非利き手）が出現可能な位置はニュートラルスペース（neutral space）および例外的に胴体（truck）に限られる、(3)タイプ3の非利き手では、接触を伴わない場合、B手型（パーの手型）・掌前方向・中手骨上方向の組み合わせは認められない等が挙げられる。これらの成果は、2017年6月にイタリアで開催された国際学会 Language as a Form of Action や、2018年3月に関西学院大学・手話言語研究センター主催の手話言語学研究会で発表した。

音節不適格性の分析には機械学習も援用した。適格音節DB、不適格音節DBには、音節を複数の構成要素に分解し記号化して記録してある。これら音節構成要素を0と1からなる数値ベクトルで表現し、ロジスティック回帰モデルを用いて分類器を作成し能動学習を行った。その際、任意の2つの音節構成要素の組み合わせ（組み合わせ特徴）を利用することにより分類器の学習性能の向上と学習すべきデータの選択制度の向上を図った。その結果、分類器が音節適格性を判断する際に利用した上位20種類の音節構成要素の組み合わせ特徴を得た。この成果は、2017年度11月に台湾で行われた The 8th International Joint Conference on Natural Language Processing (IJCNLP2017) で発表した。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2017年4月22日・23日（原大介）「日本手話非母語話者の日本手話音節の適格性判定能力」電子情報通信学会リアルタイムコミュニケーション言語（LARC）時限研究専門委員会第3回研究会，民族学博物館
- 2017年4月22日・23日（三輪誠・原大介）「日本手話音節の適格性解析のための効率的な能動学習」電子情報通信学会リアルタイムコミュニケーション言語（LARC）時限研究専門委員会第3回研究会，民族学博物館
- 2017年6月21日—23日 Hara, Daisuke, and Makoto Miwa, 2017, The well-formedness condition of the Japanese Sign Language syllable, Conference: Language as a Form of Action, Rome, Italy.
- 2017年9月16日—18日（中野聡子・原大介・金澤貴之・川鶴和子・細井裕子・望月直人・楠敬太・伊藤愛里）「学術手話通訳に求められる訳出スキルに関する予備的検討——ろう通訳者を講師とした日本手話翻訳研究講座の記録から」日本特殊教育学会第55回大会
- 2017年11月27日—12月1日（Yawata, Satoshi, Makoto Miwa, Yutaka Sasaki and Daisuke Hara）‘Analyzing Well-Formedness of Syllables in Japanese Sign Language,’ The 8th International Joint Conference on Natural Language Processing (IJCNLP2017), Taipei, Taiwan

・広報・社会連携活動

- 2017年6月3日「講座1 手話言語学の始まり1（二重分節性、音素の抽出）」・「講座2 手話言語学の始まり2（手話言語の音素と異音）」《手話言語学関連》『手話通訳者のための「みんなばくで手話言語学を学ぼう！』』国立民族学博物館
- 2017年6月10日「講座3 手話言語の音素とその組み合わせ（音素配列論）」・「講座4 手話言語の形態素とその組み合わせ」《手話言語学関連》『手話通訳者のための「みんなばくで手話言語学を学ぼう！』』国立民族学博物館
- 2017年7月29日「講座9 手話言語の動詞の種類とその成り立ち」・「第10講座 手話言語の文のつくり&まとめ」《手話言語学関連》『手話通訳者のための「みんなばくで手話言語学を学ぼう！』』国立民族学博物館

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

1. 公益財団法人三菱財団 第46回人文科学研究助成、2017年10月～2018年9月「日本手話音節の適格性の解明——言語学・機械学習からのアプローチ」研究代表者

2. 文部科学省科研費（基盤研究（S））2017年5月31日～2021年3月31日「多用途型日本手話言語データベース構築に関する研究」課題番号17H06114 研究分担者
3. 文部科学省科研費（基盤研究（C））2017年度～2019年度「日本手話における文末指さしの指示対象に関する統語研究」課題番号17K02691 研究分担者
4. 公益財団法人大幸財団 第5回人文・社会科学系学術研究助成, 2016年9月～2018年3月「日本手話音節の適格性条件の解明——言語学と言語情報処理からのアプローチ」研究代表者
5. 文部科学省科研費（基盤研究（B））2016年度～2018年度「学術手話通訳養成システムの開発——認知・言語的アセスメントに基づいたアプローチ」課題番号16H03813 研究分担者
6. 文部科学省科研費（挑戦的萌芽研究）2015年度～2018年度「日本手話と台湾手話の歴史変化の解明：歴史社会言語学の方法論の確立に向けて」課題番号16K13229 研究分担者
7. 文部科学省科学研究費（基盤研究（C））2015年度～2017年度「機械学習を援用した日本手話音節の適格性の解明」課題番号15K02536 研究代表者

◎社会活動・館外活動等

・他大学の客員、非常勤講師

大阪大学文学研究科「国語学講義 手話の世界と世界の手話言語☆入門」、関西学院大学「手話言語学基礎」、岐阜聖徳学園大学「日本手話」（集中講義）

■グローバル現象研究部

Narum, Paul [ネルム、ポール]————— 准教授

【学歴】プリンストン大学卒（1982）、東京大学卒（1985）、【職歴】Newsweek Japan 編集顧問（1985）、横浜市立大学非常勤職員（1994）、東京工業大学非常勤職員（2009）、獨協大学非常勤職員（2010）、国立民族学博物館先端人類科学研究部客員准教授（2015）【学位】M. A.（東京大学 1985）

特別客員教員

■人類基礎理論研究部

高野明彦 [たかの あきひこ]————— 教授

1956年生 【学歴】東京大学理学部数学科卒（1980）【職歴】（株）日立製作所入社（1980）、東京大学大学院理学系研究科非常勤講師（1996）、国立情報学研究所ソフトウェア研究系教授（2001）、東京大学大学院情報理工学系研究科教授（2002-）、国立情報学研究所情報学資源研究センター長（2005）、特定非営利活動法人連想出版理事長（2005-）、国立情報学研究所コンテンツ科学研究系教授（2006-）、国立情報学研究所連想情報学研究開発センター長（2006）、立命館大学アトリサーチセンター客員教授（2012-2016）、（株）出版デジタル機構最高技術顧問（2012-2014）、（一社）タイムマップ理事（2015-）【学位】博士（理学）（東京大学大学院理学系研究科2000）【専攻・専門】連想情報学、関数プログラミング、プログラム変換【所属学会】ACM、デジタルアーカイブ学会、日本ソフトウェア科学会、情報処理学会、言語処理学会

【主要業績】主要業績

[監修・共著]

高野明彦

2015 『検索の新地平』（角川インターネット講座第8巻）（監修・共著）カドカワ。

高野明彦・吉見俊哉・三浦伸也

2012 『311情報学——メディアは何をどう伝えたか』東京：岩波書店。

高野明彦・太田光・田中裕二

2008 『検索エンジンは脳の夢を見る——連想情報学』東京：講談社。

【受賞歴】

- 2011 科学技術分野の文部科学大臣表彰科学技術賞（理解増進部門）「連想情報技術による自発的学びのための情報理解増進」
2013 岩瀬弥助記念書物文化賞「デジタル技術による書物文化の開発」

【2017年度の活動報告】

・研究課題

フォーラム型情報ミュージアムにおける情報の統合と発信に関する研究

・研究の目的、内容

フォーラム型情報ミュージアムの実現へ向けて、収蔵資料に関する情報を研究者からだけでなく、他のミュージアムやソースコミュニティからも収集して、多様な視点からの分析を可能にする情報システムが備えるべき基本機能について検討する。

・成果

「地域研究画像デジタルライブラリ」のプラットフォーム提供を題材に、研究コミュニティにとって有意義で持続性のあるデジタルライブラリ構築のための情報構造に関する基本要件を検討した。

具体的には、DiPLAS プロジェクトを通じてデジタル化を進めているデジタル画像データを対象に、各研究者や研究コミュニティにとって、どのようなメタデータを付与することが求められているかを明らかにし、それらを研究者自らが付与しやすい環境について検討した。試作システムを画像データ提供者に提供して、使い勝手やメタデータの妥当性についてフィードバックをもらった。これらを現在開発中のメタデータ編集支援システムに反映する。

下道基行 [したみち もとゆき] ————— 准教授

【学歴】 武蔵野美術大学造形学部油絵科卒業（2001）、東京総合写真専門学校研究科（2003）【職歴】 テレビ番組制作リサーチ会社オフィス HIT（2001-2007）、美術研究所アトリエフラン裸婦絵画コース／陶芸コース講師（2001-2005）、東北芸術東北芸術工科大学ゲスト講師（2012-2016）【学位】 学士【専攻・専門】 写真映像、平面表現、現代美術

【受賞歴】

- 2015年 さがみはら写真新人奨励賞
2014年 第1回鉄犬ヘテロトピア文学賞
2013年 第6回岡山県新進美術家育成『I氏賞』大賞
2012年 韓国・光州ビエンナーレ2012 NOON 芸術賞（新人賞）

【2017年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

写真、動画資料の創造的な活用とアーカイブに関する研究

・研究の目的、内容

写真家／美術家として、本館が所蔵する映像資料、特にスチール写真のアーカイブ法や活用の在り方に関して、創造的なアイデアを提供し、本館が目指す、情報生成型のマルチメディア・データベース構築や新たな活用を様々な角度から模索し協働する。

・成果

- ・人類学者とアーティストの映像とフィールドワーク実践についての対話をテーマにした『Anthro-film Laboratory』への参加、さらにセミナー『合コン/jam』を開催し、交流の機会を作り、展示などの企画と運営のベースを検討した。
- ・本館が所蔵する映像資料、さらに人類学の研究実践について、いくつかの新たな発見を行ない、今後の展開を検討している。
- ・企画展示などに合わせて行なえるアウトリーチとして、instagram を使い路上観察を参加者と共に行なう事をテーマにしたワークショップを検討中。

◎出版物による業績

[著作]

下道基行

2017 写真集『New Stone Tools / 新しい石器』愛知：Michilaboratory。

[カタログ]

下道基行

2017 『IMMORTAL MAKESHIFTS』（展覧会カタログ）ソウル：Mullae Studio M30。

[新聞など]

下道基行

2017 「14歳と世界と境」『民報』連載全10回。

◎口頭発表展示・その他の業績

・ワークショップ

2017年5月～6月 ワークショップ「14歳と世界と境」香港の中学校にて

2017年6月14日 ワークショップ「香港路上」香港

2017年9月2日 ワークショップ「見えない風景——清澄白河」東京都現代美術館

2017年10月15日 ワークショップ「見えない風景——丸亀」丸亀市猪熊弦一郎美術館

2017年11月10日 ワークショップ「見えない風景——清澄白河」東京都現代美術館

・研究講演

2018年3月16日 「Think Party & Traveling」旅するリサーチラボラトリー

・展示

2017年6月 個展「香港路上」V54、香港

2017年8月 個展「ははのふた」千鳥文化、大阪

2017年7月 企画展「MOVING/IMAGE」アルコ美術館、韓国ソウル

2017年9月 企画展「IMMORTAL MAKESHIFTE」Mullae Studio M30、韓国ソウル

2017年10月 企画展「MOT サテライト」東京都現代美術館、東京

2018年2月 個展「津波石」COT、山口

◎調査活動

・国内調査

宮古島八重山諸島のフィールドワークによる「津波石」調査と撮影記録

■人類基礎理論研究部・日本財団助成手話言語学研究部門（附置）

武居 渡 [たけい わたる]—————教授

1971年生【学歴】筑波大学第二学群人間学類卒業（1994）、筑波大学大学院心身障害学研究科中途退学（1999）【職歴】金沢大学教育学部講師（1999）、金沢大学教育学部助教授（2002）、金沢大学教育学部准教授（2007）、金沢大学人間社会研究域学校教育系准教授（2008）、金沢大学人間社会研究域学校教育系（2014-現在）、国立民族学博物館特別客員教授（2017-現在）【学位】博士（心身障害学）（筑波大学2004年）【専攻・専門】発達心理学・聴覚障害心理学【所属学会】日本特殊教育学会、日本発達心理学会、日本手話学会、日本コミュニケーション障害学会、日本聴覚言語障害学会

【主要業績】

武居 渡

2016 「聴覚障害児教育をめぐる環境の変化とろう学校の課題（特集 特別支援学校における現状と教育要求）」『障害者問題研究』44(1)：26-31。

2012 「言語を作り出す力——ホームサイン研究・手話研究を通じて見えてくるもの」『ENERGEIA』37：1-15。

2008 「手話研究の現状と展望——手話研究が言語獲得研究に貢献できること」『認知科学』15(2)：289-301。

【受賞歴】

- 2010 博報児童教育振興会第4回ことばと教育 研究助成事業 優秀賞
- 2002 日本発達心理学会第11回論文賞
- 2001 日本特殊教育学会研究奨励賞

【2017年度の活動報告】

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外でのシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2017年4月16日-25日 招待講演及び成果発表「Acquisition of Japanese Sign Language」(国立中正大学, 台湾)
- 2017年7月8日、22日 手話通訳者のための「みんなくで手話言語学を学ぼう」(国立民族学博物館)
- 2017年9月17日 日本手話版言語流暢性検査の開発(1)——表出型手話語彙検査の試行版作成について——. 日本特殊教育学会第55回大会(名古屋国際会議場)

◎社会活動・館外活動等

- 2017年度 NHK Eテレ「みんなの手話」監修

■超域フィールド科学研究部

高城 玲 [たかぎ りょう]————— 教授

1969年生。【学歴】東京外国語大学外国語学部卒(1992)、東京外国語大学大学院地域文化研究科博士前期課程修了(1994)、総合研究大学院大学文化科学研究科博士後期課程単位取得退学(2000)【職歴】日本学術振興会特別研究員(PD)(2000)、国立民族学博物館機関研究員(2006)、神奈川大学経営学部助教(2007)、神奈川大学経営学部准教授(2009)、神奈川大学日本常民文化研究所所員(2009)、神奈川大学アジア研究センター所員(2013)神奈川大学経営学部教授(2016)【学位】博士(文学)(総合研究大学院大学2006)、修士(国際学)(東京外国語大学1994)【専攻・専門】文化人類学、東南アジア(タイ)研究【所属学会】日本文化人類学会、東南アジア学会

【主要業績】

[単著]

高城 玲

- 2014 『秩序のマイクロロジー——タイ農村における相互行為の民族誌』横浜：神奈川大学出版会。

[共編著]

宮本瑞夫・佐野賢治・北村皆雄・原田健一・岡田一男・内田順子・高城 玲共編

- 2016 『DVDブック 甦る民俗映像——洪沢敬三と宮本馨太郎が撮った1930年代の日本・アジア』東京：岩波書店。

[論文]

高城 玲

- 2018 「分断される国家と声でつながるコミュニティ——タイにおける政治的対立と地方コミュニティラジオ局」永野善子編著『帝国とナショナリズムの言説空間——国際比較と相互連携』pp.125-152, 東京：御茶の水書房。

【2017年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

タイにおける社会運動の相互行為に関する人類学的研究

・研究の目的、内容

本研究は、現在変動の中にあるタイ社会の動態を、主に社会運動に着目し、鳥瞰図的なマクロな視点のみではなく、人々が不断に繰り返りひろげる相互行為の過程というミクロな視点から人類学的に記述し探求することを目的とする。特に、タイ北部チェンマイ県や中部ナコンサワン県、バンコクなどにおいて、都市部と農村部双方での政治・社会運動に関する現地調査と資料収集を行い、分析を進める。

・成果

2017年度は、タイ北部チェンマイ県やバンコクなどにおける都市部と農村部双方での政治・社会運動に関する現地調査・資料収集を継続するとともにその分析をすすめた。特に、2016年10月の前国王の死去以降、政治社会的な環境が変動する中で、政治・社会的運動がどのような状況に置かれているのかに関して、相互行為や言説などのミクロな視点に着目した現地調査と資料収集を継続し、それらの分析を進めた。これまでの成果の一部は、2018年3月に刊行された共著書において論文として発表した。

◎出版物による業績

[論文]

高城 玲

2018 「分断される国家と声でつながるコミュニティ——タイにおける政治的対立と地方コミュニティラジオ局」永野善子編著『帝国とナショナリズムの言説空間——国際比較と相互連携』pp.125-152, 東京：御茶の水書房。

2018 「タイにおける水と人とのかかわり——その多様性と多義性をめぐって」後藤晃・秋山憲治編著『アジア社会と水——アジア社会が抱える現代の水問題』pp.188-210, 東京：文眞堂。

◎口頭発表・展示・その他の業績

[口頭発表]

2018年2月17日 「これまでの研究とこれから」総合研究大学院大学文化科学研究科卒業生ワークショップ、国立民族学博物館

◎調査活動

・海外調査

2017年8月17日～8月28日—タイ王国チェンマイ県およびバンコク（タイ農村部と都市部における社会運動の相互行為に関する現地調査）

2018年3月7日～3月17日—タイ王国チェンマイ県およびバンコク（タイ農村部と都市部における社会運動の相互行為に関する現地調査）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機関や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科研「グローバル化における権力編成の変動と新たなコミュニティ運動——東南アジア大陸部から」研究分担者、神奈川大学共同研究「帝国とナショナリズムの言説空間——国際比較と相互連携の総合的研究」共同研究者、神奈川大学日本常民文化研究所共同研究「日本常民文化研究所所蔵資料からみるフィールド・サイエンスの史的展開」共同研究者、神奈川大学アジア研究センター共同研究「アジアの水に関する総合的研究」共同研究者

飯高伸五 [いいたか しんご]——准教授

1974年生。【学歴】慶應義塾大学文学部卒（1998）、東京都立大学大学院社会科学研究所修士課程修了（2001）、東京都立大学大学院社会科学研究所博士課程単位取得退学（2008）【職歴】神奈川県立平塚看護専門学校非常勤講師（2005-2008）、専修大学法学部兼任講師（2007-2008）、日本学術振興会特別研究員PD（筑波大学）（2008-2011）、ハワイ大学マノア校訪問研究員（2010）、高知県立大学文化学部講師（2011）、首都大学東京非常勤講師（2011）、国立民族学博物館客員教員（2014）、高知県立大学文化学部准教授（2016）【学位】博士（社会人類学）（東京都立大学、2009）、修士（社会人類学）（東京都立大学、2001）【専攻・専門】社会人類学、オセアニア研究【所属学会】日本文化人類学会、日本オセアニア学会、東京都立大学社会人類学会、Association for Social Anthropology in Oceania

【主要業績】

[論文]

Itaka, S.

2015 Remembering *Nan'yō* from Okinawa: Deconstructing the Former Empire of Japan through Memorial Practices. *History and Memory* 27(2): 126-151.

飯高伸五

2017 「帝国の記憶を通じた共生——ミクロネシアにおける沖縄人の慰霊活動から」風間計博編『交錯と共生の

人類学——オセアニアにおけるマイノリティと主流社会』pp.241-265, 京都：ナカニシヤ出版。
2016 『『ニッケイ』の包摂と排除——ある日本出自パラオ人の埋葬をめぐる論争から』『文化人類学』81(2)：228-246。

【2017年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

アジア・太平洋地域における日本統治の記憶と記録に関する歴史人類学的研究

・研究の目的、内容

本研究の目的は、研究従事者が旧南洋群島（ミクロネシア）のパラオで収集してきた、現地人の日本統治経験に関する民族誌的データとともに、国立民族学博物館の民族学アーカイブズの史資料を精査することによって、日本統治経験の記録と記憶を歴史人類学的に検討していくことである。具体的には（1）日本の民族学者がパラオ社会に対して向けたまなごしを検討しつつ、かれらが記録した当該社会の変動を検討すること、（2）ポスト植民地期のパラオ社会における植民地期の史資料の活用可能性や日本統治期の記憶のありようを検討することである。事例の検討によって、アジア・太平洋地域における日本統治の記憶と記録の比較研究に向けた基盤を提供することも視野に入れている。

本研究はアーカイブズとフィールドを往復しながら実施するが、パラオでの現地調査は、科研費基盤研究（C）「ミクロネシアの太平洋戦争戦跡のレジャー化とヘリテージ化に関する観光人類学的研究」（2015年4月1日～2018年3月31日、課題番号15K03049）の研究代表者として実施する。

・成果

本年度は研究成果のとりまとめを中心に行った。民族学アーカイブズを利用した研究については、神奈川大学日本常民文化研究所における「日本常民文化研究所所蔵資料からみるフィールド・サイエンスの史的展開」にて「杉浦健一による南洋群島島民土地制度調査の検証」と題した発表を実施した（神奈川大学、2017年9月27日）。戦跡観光に関する調査に関しては、東アジア人類学再考研究会にて「ミクロネシアにおける戦跡観光のアクター分析」と題した研究発表を行った（中京大学、2017年10月28日）。年度末には、科研費基盤研究（C）「ミクロネシアの太平洋戦争戦跡のレジャー化とヘリテージ化に関する観光人類学的研究」の一環として補足的な調査を米領グアム島で実施し、今後の投稿論文作成の準備を行った。

また、上水流久彦・大田心平・尾崎孝宏・川口幸大（編）『東アジアで学ぶ文化人類学』には「植民地主義——パラオの日本統治経験から考える」を寄稿し、一般向けの解説書を通して研究成果の幅広い社会的還元を図った。

◎出版物による業績

[論文]

飯高伸五

2017 「植民地主義——パラオの日本統治経験から考える」上水流久彦・大田心平・尾崎孝宏・川口幸大編『東アジアで学ぶ文化人類学』pp.97-111, 京都：昭和堂。

[その他]

飯高伸五

2017 「書評 丹羽典生・石森大知編『現代オセアニアの〈紛争〉——脱植民地期のフィールドから』」『文化人類学』81(4)：749-753。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2017年9月27日 「杉浦健一による南洋群島島民土地制度調査の検証」日本常民文化研究所所蔵資料からみるフィールド・サイエンスの史的展開、神奈川大学日本常民文化研究所

2017年10月28日 「ミクロネシアにおける戦跡観光のアクター分析」東アジア人類学再考研究会、中京大学

◎調査活動

・国内調査

2017年4月～2018年3月一高知県土佐郡大川村（村史編纂のための現地調査、生活圏研究の調査）

・海外調査

2018年2月20日～2月24日—グアム（太平洋戦争戦跡のレジャー化とヘリテージ化に関する調査および資料収集）

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機関や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費助成事業（基盤研究（C）「ミクロネシアの太平洋戦争戦跡のレジャー化とヘリテージ化に関する観光人類学的研究」研究代表者、高知県立大学戦略的研究推進プロジェクト「中山間地域における生活圏の確保に向けて——土佐郡大川村における地域創造」研究代表者

◎社会活動・館外活動等

- ・他の機関から委嘱された委員など
高知県土佐郡大川村史編纂アドバイザー

- ・他大学の客員、非常勤講師

高知大学「文化人類学入門」、土佐リハビリテーションカレッジ「人間科学概論」、放送大学高知学習センター面接授業「オセアニアの歴史と文化」、高知大学人文社会学部「アジア・オセアニア特殊講義」

■グローバル現象研究部

縄田浩志 [なわた ひろし] ————— 教授

1968年生。【学歴】早稲田大学第一文学部史学科東洋史学専攻卒業（1992）、ハルトゥーム大学アフリカ・アジア研究所民俗学ディプロマ課程修了（1994）、京都大学大学院人間・環境学研究科文化・地域環境学専攻修士課程修了（1997）、京都大学大学院人間・環境学研究科文化・地域環境学専攻博士課程修了（2003）【職歴】鳥取大学乾燥地研究センター講師（2004）、国立民族学博物館特別客員准教授（2007）、総合地球環境学研究所客員准教授（2007）、鳥取大学乾燥地研究センター准教授（2007）、総合地球環境学研究所准教授（2008）、秋田大学新学部創設準備担当教授（2013）、秋田大学国際資源学部教授（2014）、秋田大学大学院国際資源学研究科教授（2016）【学位】人間・環境学博士（京都大学 2003）【専攻・専門】資源管理学、文化人類学、社会生態学、地域研究（中東・アフリカ）、乾燥地研究、環境影響評価、村落開発、人間・家畜関係論【所属学会】日本沙漠学会、日本文化人類学会、日本アフリカ学会、日本中東学会、日本ナイル・エチオピア学会、国際社会・自然資源学会（The International Association for Society and Natural Resources）

【主要業績】

[共編著]

縄田浩志・篠田謙一

2014 『砂漠誌——人間・動物・植物が水を分かち合う知恵』神奈川：東海大学出版部。

[編著]

Nawata, H. (ed.)

2015 *Human Resources and Engineering in the Post-oil Era: A Search for Viable Future Societies in Japan and Oil-rich Countries of the Middle East.* (Arab Subsistence Monograph Series 3) Kyoto: Shokado.

2013 *Dryland Mangroves: Frontier Research and Conservation.* (Arab Subsistence Monograph Series 2) Kyoto: Shokado.

【受賞歴】

2015 大同生命地域研究奨励賞

2003 日本沙漠学会奨励賞

【2017年度の活動報告】

◎各個研究

- ・研究課題

中東における自然資源の管理と物質文化の変容に関する研究

- ・研究の目的、内容

本研究の目的は、アラビア半島の沙漠のオアシスでおおよそ半世紀前に片倉もとこ（文化人類学者／地理学者、本館名誉教授）が実施・収集した（1968-2008）現地調査資料（写真・地図・スケッチを含む）のデータベース

作成による学術情報基盤形成の作業を通じたデータの再検証を軸として、中東の5つの異なるオアシス（アラビア半島、サハラ沙漠、ナイル河岸、紅海沿岸、イラン）を比較検討することにより、自然資源の管理方法と物質文化の変容の動態を明らかにすることにある。

現代の土地利用、生業形態、水管理と比較しつつ、グローバル化後の生活空間の変動を具体的に追って行くことにより、特に中東地域においてドラスティックな現象として観察される生活様式や資源利用形態の「世代間ギャップ」を浮き彫りにしつつ、未来世代にとっての研究資料としての活用を地域住民との共同作業により行い、文化資源と知識資源の共有が可能となる。

なお、現地調査と共同研究、また研究成果の発信に関しては、以下の関連プロジェクトと連携しながら推進する。

(1) 人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト地域研究「現代中東地域研究推進事業」(国立民族学博物館中心拠点代表者：西尾哲夫、秋田大学国際資源学部拠点研究代表者：縄田浩志、2016～2021(予定))

(2) 科学研究費助成事業(基盤研究(B))(海外学術調査)「半世紀に及ぶアラビア半島とサハラ沙漠オアシスの社会的紐帯の変化に関する実証的研究」(研究代表者：縄田浩志、2016～2019(予定))

(3) 片倉もところ記念沙漠文化財団「アラムコ・片倉沙漠文化協賛金」(評議委員会議長：片倉邦雄、2015～2019)

(4) 国立民族学博物館共同研究「物質文化から見るアフロ・ユーラシア沙漠社会の移動戦略に関する比較研究」(申請者：縄田浩志、2016～2019(予定))

(5) 【今年度継続申請】新学術領域研究(研究領域提案型)『学術研究支援基盤形成』研究基盤リソース支援プログラム「地域研究に関する学術写真・動画資料情報の統合と高度化」(課題番号16H06281、中核機関：国立民族学博物館)の支援による資料整理「地域研究画像デジタルライブラリ(略称DiPLAS)」

(6) 国立民族学博物館フォーラム型情報ミュージアムプロジェクト「中東地域民衆文化資料コレクションを中心とするフォーラム型情報データベース」(代表者：西尾哲夫、2017～2018(予定))。

・成果

①片倉もところ記念沙漠文化財団所蔵資料を財団と協力してデータベース化を進め、最終的には民博の片倉もところ収集資料データベースと統合し、現地社会や海外研究者との情報共有化を図るために、民博の所蔵品の実見を開始した。②2019度における国立民族学博物館企画展ならびに巡回展(国内と海外を予定。片倉もところ記念沙漠文化財団と横浜ユーラシア文化館の共催。海外巡回展はアラムコの協力事業)を通じた研究成果の発信に向けて、テーマと中心的な展示品について検討し、中心的な展示品とテーマの軸を定めた。

◎出版物による業績

[その他]

縄田浩志

2017 「スーダン共和国」中牧弘允編『世界の暦文化事典』pp.296-299, 東京：丸善出版。

2017 「移動戦略を沙漠の物質文化から探る」『民博通信』157：18-19。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2017年12月2日 「資源とリソース——多元的資源観をどのように醸成できるか」人間文化研究機構基幹プロジェクト『現代中東地域研究』研究会、京都大学

・共同研究会での報告

2017年7月22日 「西アジア・北東アフリカのコーヒー文化にみる移動戦略」『物質文化から見るアフロ・ユーラシア沙漠社会の移動戦略に関する比較研究』

2017年10月1日 「エジプト、ハーン・ハリールにおける黒サンゴ及び木製数珠製作工房とその技術」(遠藤仁との共同発表)『物質文化から見るアフロ・ユーラシア沙漠社会の移動戦略に関する比較研究』

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2017年4月24日 ‘Ecological, Social, Cultural and Religious Responses of Local People to Drought: A Case Analysis of Rain-beg Ritual Ceremony among the Bani Amir on the Sudanese-Eritrean Border of the Red Sea Coast.’ “Resource Management and Conflict Resolution: Cases from Muslim Societies in Northeast Africa,” Akita University Center, NIHU Area Studies Project for the Modern Middle East

2017年5月14日 「黒サンゴ製の数珠“sibhat al-yusr”の特質について」日本中東学会第33回年次大会、九州大学

- 2017年5月28日 「複数時期の衛星画像からみたサウジアラビア、ワディ・ファーティマの土地被覆変化」(渡邊三津子、古澤文、石山俊、遠藤仁との共著) 日本沙漠学会第28回学術大会、千葉工業大学
- 2017年6月21日 ‘Humans and One-humped Camels Relationships in Arid Tropical Mangrove Ecosystems.’ International Symposium on Society and Resource Management (ISSRM) “Contested Spaces: Bridging Protection and Development in a Globalizing World” Umeå University, Umeå, Sweden
- 2017年8月13日 ‘Methods for Selecting and Processing Red Sea Black Coral into Muslim Prayer Beads in Cairo, Egypt.’ Commission on the Middle East “Continuity and Change: Diaspora, Religion, Kingship, Food, Art and Architecture” Institute of Ethnology and Cultural Anthropology, Jagiellonian University, Krakow, Poland

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機関や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト地域研究「現代中東地域研究推進事業」秋田大学国際資源学部拠点研究代表者、科学研究費助成事業（基盤研究（B））（海外学術調査）「半世紀に及ぶアラビア半島とサハラ沙漠オアシスの社会的紐帯の変化に関する実証的研究」研究代表者、新学術領域研究（研究領域提案型）『学術研究支援基盤形成』研究基盤リソース支援プログラム「地域研究に関する学術写真・動画資料情報の統合と高度化」（課題番号16H06281、中核機関：国立民族学博物館）の支援による資料整理「地域研究画像デジタルライブラリ（略称DiPLAS）採択プロジェクト研究代表者

◎社会活動・館外活動等

- ・他の機関から委嘱された委員など

日本沙漠学会沙漠誌分科会会長、日本沙漠学会評議員、日本沙漠学会編集委員、日本ナイル・エチオピア学会評議員、片倉もとこ記念沙漠文化財団代表理事、国連砂漠化対処条約専門家（日本、人類学・社会学分野）、秋田市環境審議会委員

- ・他大学の客員、非常勤講師

東北大学大学院教育学研究科・教育学部「比較人間形成論」（集中講義）

■学術資源研究開発センター

中生勝美 [なかお かつみ] 教授

1956年生。【学歴】中央大学法学部法律学科卒（1979）、明治大学法学研究科博士前期課程修了（1981）、上智大学文学研究科博士後期課程満期退学（1989）【職歴】外務省嘱託専門調査員（在香港日本国総領事館）（1987）、日本学術振興会特別研究員（1989）、宮城学院女子大学・短期大学助教授（1992）、和光大学人間関係学部助教授（1995）、大阪市立大学文学研究科助教授（2002）、東洋英和女学院大学教授（2005）、桜美林大学教授（2007）、国立民族学博物館先端人類学研究部特別客員教員（2016）【学位】論文博士（京都大学人間・環境研究科 2014）【専攻・専門】社会人類学、中国地域研究【所属学会】日本文化人類学会、日本民俗学会、アジア政経学会、現代中国学会、比較家族史学会

【主要業績】

[単著]

中生勝美

2016 『近代日本の人類学史——帝国と植民地の記憶』東京：風響社。

1990 『中国村落の権力構造と社会変化』東京：アジア政経学会。

[編著]

中生勝美編

2000 『植民地人類学の展望』東京：風響社。

【2017年度の活動報告】

◎各研究

・研究課題

「民族学研究アーカイブズ」に基づく日本人類学史の研究

・研究の目的、内容

長年続けていた日本人類学史の研究は、2016年3月に『近代日本の人類学史——帝国と植民地の記憶』（風響社）として刊行できた。本年度は、民博の共同研究で人類学史のプロジェクトを申請し、学史研究を深めたいと考えている。また「民族学研究アーカイブズ」にある資料を精査し、その資料的価値にコメントを付け、また公開のための著作権者との承諾書の交渉に関しても、著作権的に有効な文書であるか、また遺族との交渉に関しても提言をおこないたい。

また外部資金は、戦間期の人類学と民俗学を日独伊の3か国の学史を比較するテーマでReinhard Johler教授（ドイツ・チュービンゲン大学）と連絡を取り、EUの研究資金が申請できなかつた検討中である。

・成果

本年度は、国立民族学博物館共同研究会（一般）に応募して採択され、「人類学／民俗学の学知と国民国家の関係——20世紀前半のナショナリズムとインテリジェンス」というテーマで、総勢12人の共同研究を立ち上げた。この研究会は、1920年代から40年代にかけての戦間期における欧米と日本の人類学／民俗学を比較対照することで、学知として成立する人類学／民俗学を歴史の基礎研究をめざして組織した。欧米では人類学者のアーカイブ整理が進み、これを利用した新しい角度での人類学史の研究が盛んになっているので、こうした学会動向をふまえ、民族学博物館が所蔵するアーカイブ資料の利用について、共同研究する場を設けることができた。このメンバーを中心に科研Bを申請したが、不採択であった。

また、「統治初期の台湾原住民調査」の原稿執筆のため、国立民族学博物館図書館が所蔵している資料、特に瀬川孝吉の寄贈した台湾総督府関係の資料、および『台湾日日新報』のマイクロフィルムの調査をした。その過程で、当館の映像・音響資料部に小林保祥資料があることに気づいた。この資料は、小林保祥が台湾総督府蕃族調査会、および授産事業で工芸品製作の指導員として勤務した1910年代から1930年代後半の貴重な写真資料1545点、さらに未発表原稿であった。この資料の受け入れた経緯、また小林保祥氏の著作権継承者の調査を行い、東京に在住する親戚を見つけることができた。小林保祥資料は極めて歴史的、文化的な価値のある資料群なので、その公開に向けて公的手続の基礎作業を完遂できたのは、今年度の成果である。

平井康之 [ひらい やすゆき] ————— 教授

1961年生。【学歴】京都市立芸術大学デザインコース卒（1983）、英国王立芸術大学院修士課程修了（1992）【職歴】コクヨ株式会社本社設計部（1983）、コクヨ株式会社家具事業本部オフィス家具部商品開発課（1988）、コクヨ株式会社人事部人材開発課付（1990）、コクヨ株式会社オフィス家具事業本部商品開発部商品開発室主任（1992）、コクヨ株式会社オフィス家具事業本部商品開発部商品戦略グループ課長補佐（1995）、コクヨ株式会社オフィス家具事業本部商品開発部商品戦略グループ課長（1997）、IDEO Product Development Senior Designer（1997）、IDEO Product Development Grand Rapids Studio（米国）Senior Designer（1998）、九州芸術工科大学芸術工学部助教授（2000）、九州大学大学院芸術工学研究院助教授（2003）、九州大学大学院芸術工学研究院准教授（2017）【学位】修士（英国王立芸術大学院 1992）、博士（芸術工学）（九州大学 2016）【専攻・専門】デザイン専攻【所属学会】日本インテリア学会、日本デザイン学会、芸術工学会

【主要業績】

[共著]

平井康之・藤 智亮・野林厚志・真鍋 徹・川窪伸光・三島美佐子

2014 『知覚を刺激するミュージアム——見て、触って、感じる博物館のつくりかた』東京：学芸出版社。

ジュリア・カセム・塩瀬隆之・森下静香・水野大二郎・小島清樹・荒井利春・岡崎智美・梅田亜由美・小池 禎・田邊友香・木下洋二郎・家成俊勝・桑原あきら著

2014 『インクルーシブデザイン』京都：学芸出版社。

朝廣和夫・尾方義人・古賀 徹・近藤加代子・谷 正和・田上健一・富板 崇・平井康之

2012 『デザイン教育のススメ——体験・実践型コミュニケーションを学ぶ』東京：花書院。

【受賞歴】

- 2014 2014年度グッドデザイン賞（研究活動・研究手法カテゴリー）
- 2014 第8回キッズデザイン賞（子ども視点の安全安心デザイン 子ども部門）
- 2013 「ユニバーサル都市・福岡賞 みんなにやさしい部門」最優秀賞（こども×くすり×デザイン実行委員会）
- 2013 The Include Asia Conference Awards「Champion of Inclusive Design」賞
- 2013 IAUD アワード2013 入賞「みんなの美術的プロジェクト」
- 2010 第4回キッズデザイン賞（ソーシャルキッズサポート部門）
- 2009 2009年度グッドデザイン賞（パブリックコミュニケーションデザイン部門）
- 2009 第3回キッズデザイン賞（コミュニケーションデザイン部門）
- 2008 2008年度グッドデザイン賞（子どもの服薬に関するデザイン研究、こども＋くすり＋デザイン）
- 2008 第2回キッズデザイン賞（リサーチ部門、子どもの服薬に関するデザイン研究、こども＋くすり＋デザイン）
- 2003 三菱オスラム LED デザインコンテスト審査員奨励賞
- 2002 富山プロダクトデザインコンペティション入選
- 2002 2002年度国際デザイン年鑑（英国）掲載（審査付、Full Metal Jacket Chair）
- 1996 1996年度グッドデザイン賞（シナジアシリーズ）
- 1996 海南デザインコンペティション大賞（健康器具バンボレオ）
- 1996 1996年度レッド・ドット賞<ドイツ・エッセンデザインセンター>（インタープレイスシリーズ）
- 1994 1994年度グッドデザイン賞（インタープレイスシリーズ）
- 1993 第2回旭川国際家具デザインコンペティション入選（インタープレイスシリーズ）
- 1993 コクヨ株式会社功労賞（インタープレイスシリーズ）
- 1992 1992年度国際デザイン年鑑（英国）掲載（審査付、Perch Chair, Stacking Table）
- 1991 1991 Office Design Competition, EIMU, Milano, Italy 入選

【2017年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

ユニバーサルミュージアム構築の理論と実践

・研究の目的、内容

本研究では、民博が目指すユニバーサルミュージアム構築にむけて、障がい者をはじめとする外国人や高齢者、その他鑑賞が難しい多様な来館者を対象に、サイン計画などの展示空間のアクセスに関わる情報計画の実践的研究を行った。また、昨年度に開発した展示空間における知覚鑑賞を可能にする展示デザイン評価項目を用いた実践的研究も継続し行うこととする。

・成果

展示空間のアクセスに関わる情報計画の実践的研究を行った。サイン計画については、展示空間までのパブリックスペースにおけるサイン計画へのアドバイスをを行い、三月末に実際のサインが設置された。また展示空間においては、展示デザイン評価項目研究の項目をまとめたところまで研究が進んだ。さらに昨年度から継続のiBeaconを用いたアクセス研究については、試作を製作し、三月に被験者4人による評価実験を行った。また、デジタル触地案内板の展示室への設置計画を進めた。筐体の設計を終わり、1台目の設置を完了した。

◎上記以外の研究活動

・民間の奨学金および助成金からのプロジェクト

九州大学次世代アントレプレナー育成事業『多様性と創造的協働に基づくアントレプレナー育成プログラム』（EDGE NEXT）、九州大学グローバルイノベーション人材育成エコシステム形成事業（EDGEプログラム）、共同研究『デザイン思考を用いたサイエンスコミュニケーションに関する共同研究』、共同研究『介護施設における人材育成、及び入居者とのコミュニケーション』、共同研究『商業施設における居心地の良い空間に関する共同研究』、受託研究『イノベーションスタジオ福岡プロジェクト4の企画及び運営等の業務委託』、社会連携『福岡市動物園 いのちの大切さをコミュニケーションする社会プロジェクト』、社会連携『Design for SDGs in FUKUOKA 2017』、社会連携『ユニバーサル都市 福岡デザインワークショップ2016』

◎社会活動・館外活動等

- ・他の機関から委嘱された委員など
福岡市地下鉄デザイン委員会委員
- ・他大学の客員、非常勤講師
明石工業高等専門学校「インクルーシブデザイン概論」

北原次郎太 [きたはら じろうた] ————— 准教授

【学歴】 千葉大学修士課程ユーラシア言語文化論講座修了（2002）、千葉大学博士課程社会文化科学研究科修了（2007）【職歴】 財団法人アイヌ民族博物館（2005）、北海道大学アイヌ・先住民研究センター准教授（2010）【学位】 学術博士（千葉大学）【専攻・専門】 アイヌ民族の宗教文化、物質文化、口承文学【所属学会】 文化人類学会、口承文芸学会

【主要業績】

[著書]

北原次郎太・今石みぎわ

2015 『花とイナウ——世界の中のアイヌ文化』札幌：北海道大学アイヌ・先住民研究センター。

北原次郎太

2014 『アイヌの祭具 イナウの研究』札幌：北海道大学出版会。

[論文]

北原次郎太

2018 「アイヌの動物変身譚における『第3の変身』について」『口承文芸研究』41：29-45。

2018 「アイヌ文様は魔除けか——異文化に付随する通説を検証する」『北海道博物館アイヌ民族文化研究センター研究紀要』3：1-18。

2017 「アイヌ口承文芸に見るシャマン儀礼の再検討」『口承文芸研究』40：36-49。

【2017年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

アイヌ文化と日本およびその周辺諸文化の比較研究

・研究の目的、内容

アイヌ民族の文化と、日本国および周辺諸国の文化、とくに宗教文化と音楽文化について比較研究を行う。民博に蓄積された資料を元に、これらの文化における祭具類・楽器類の製作技法および使用法の比較を通じ、アジアにおけるアイヌ文化の位置付けを検討し、当該文化の形成過程や周囲との類似性・独自性について考察する。

・成果

民博が所蔵するアイヌ民族の儀礼具のうち、特にサハリン、アムール川流域の木製偶像を調査し、その形態的特徴について詳細に検討した。それらの成果も踏まえつつ、アイヌ文化における世界観や儀礼を短文にまとめ「異界と人をつなぐモノたち」と題して『季刊 民族学』第162号に寄稿した。

◎出版物による業績

[論文]

北原次郎太

2017 「アイヌ口承文芸に見るシャマン儀礼の再検討」『口承文芸研究』40：36-49。[査読有]

2017 「展示に探る民族の世界観・死生観 異界と人をつなぐモノたち」『季刊民族学』162：75-82。[査読無]

2017 「文庫版解説——記録から保持、復興へ」萱野茂著『アイヌ歳時記——二風谷のくらしと心』（ちくま学芸文庫）東京：筑摩書房。（『web ちくま』<http://www.webchikuma.jp/articles/-/789>）

2018 「シンリッウレシパ（祖先の暮らし）26 これってどこの文様？ ウイルタ文様・ニヅフ文様・アイヌ文様」『月刊シロロ』2月号。（<http://www.ainu-museum.or.jp/siror/monthly/201802.html#01>）

[査読無]

- 2018 「シンリウレシバ（祖先の暮らし）27 アイヌ語でバスアナウンス——アイヌ語が響く空間を」『月刊シロロ』3月号。(http://www.ainu-museum.or.jp/siror/monthly/201804.html#01) [査読無]
- 2018 「アイヌの動物変身譚における『第3の変身』について」『口承文芸研究』41:29-45。[査読有]
- 2018 「アイヌ文様は魔除けか——衣文化に付随する通説を検証する」『北海道博物館アイヌ民族文化研究センター研究紀要』3:1-18。[査読有]

田森雅一 [たもり まさかず] ————— 准教授

【学歴】 東京大学大学院総合文化研究科後期博士課程・単位取得満了（2005年3月）**【職歴】** 東洋英和女学院大学（1999年4月～現在）、埼玉大学（2000年4月～現在）、慶應義塾大学（2012年4月～2015年3月）、千葉大学（2012年4月～2014年3月）、東洋大学（2014年4月～現在）、埼玉学園大学（2014年4月～2017年3月）、東京外国語大学（2015年4月～現在）などの非常勤講師を兼任。現在、東京大学大学院総合文化研究科・学術研究員（2012年4月～現在）および国立民族学博物館・特別客員教員（2016年4月～現在）**【学位】** 博士（学術）（東京大学大学院総合文化研究科2011）**【専攻・専門】** 社会人類学・比較文化論・南アジア研究**【所属学会】** 日本文化人類学会、日本南アジア学会、日本口承文芸学会、東洋音楽学会

【主要業績】

[単著]

田森雅一

2015 『近代インドにおける古典音楽の社会的世界とその変容——「音楽すること」の人類学的研究』東京：三元社。

[論文]

Tamori, T.

2008 The Transformation of *Sarod Gharānā*: Transmitting Musical Property in Hindustani Music. In Y. Terada (ed.) *Music and Society in South Asia: Perspectives from Japan* (Senri Ethnological Studies 71), pp.169-202. Osaka: National Museum of Ethnology.

田森雅一

1998 「都市ヒンドゥー命名儀礼における主体構築と命名慣習の変容」『民族学研究』63(3):302-325。

【2017年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

グローバル化と南アジア音楽文化の変容に関する人類学的研究

・研究の目的、内容

本研究の目的は、グローバル化された“地続きの世界”における南アジアと欧米・日本という、より拡大された空間における「音楽・文化と宗教・社会」の動態について検討することにある。より具体的には、ヒンドゥーとイスラームが共生する南アジア社会、特にインドとパキスタンの国境の砂漠地帯で、「ジブシー」の発祥地としても注目を集めるラージャスターンをルーツとする音楽芸能カーストのローカルな社会組織と音楽家たちのトランス・ローカルな活動・ネットワーク形成を調査・検討することで、近代における伝統音楽の再生産とグローバル化のあり方について明らかにすることにある。

・成果

ラージャスターン地方の村落に生活の基盤を置き、支配カーストの人生儀礼や村落の祭礼において音楽演奏を生業としてきた世襲音楽家たちは、インド独立にとまなう藩王制度の廃止とともにパトロンとの間に築き上げてきた持続的な関係を失った。彼らの多くは演奏機会を求めて都市に移住し、その技芸を存続させてきたが、音楽教師やラジオ局付音楽家といった職業のポストは限られ、一回限りのコンサートやホテルでの観光客相手のイベントへの出演で安定した生計を立てるのは困難であった。そのような状況が変化したのは、1980年代からのインドの経済開放というグローバル化の流れのなか、個人的なネットワークを頼って海外に演奏機会を求める者たちが増加してからである。

本研究ではこのような実態をとらえるために、ラージャスターン州の州都ジャイプルからフランスに渡って成功をおさめた一族に対する追跡調査を行った。本調査は、「南アジア地域研究・国立民族学博物館拠点」の資

金援助によって行なわれた2014年からの一連のもので、複数のインフォーマントへのインタビューにより、インドのグローバル化の流れの中で、彼らがどのようなネットワークを築き上げ、音楽演奏の機会を見いだしてインドとヨーロッパを往来して今日に至っているのかという、マクロ（社会の動向）とミクロ（個人の動向）との関係の一端を明らかにすることができた。

本研究の成果の一部は、『日本文化人類学会・第51回研究大会』個人発表「ダーディー・ミラーズィーの口頭伝承と社会組織——インド北西部ラージャスターンのムスリム楽士カーストの民族誌に向けて」（於：神戸大学、2017年5月28日）として発表した。また、関西学院大学で行なった招聘講演録「“再帰的グローバル化”と音楽伝統の再生産——インド・ラージャスターンにおけるムスリム世襲音楽家一族の100年」が出版された。その他に、丸善書店より2018年1月に出版された『インド文化事典』インド文化事典編集委員会（委員長・杉本良男）編において6つの事項（各2頁、事項タイトルは以下を参照）を分担執筆した。

外国人研究員

ARAKAWA, Fumiyasu [荒川 史康]——准教授

任期：2017年11月1日～2018年6月30日

研究課題：ミンブレス土器資料を対象とした先住民との協働解釈調査

【学歴・学位】 アイダホ大学人類学部（1996）、アイダホ大学大学院人類学部修士課程修了（2006）、ワシントン州立大学大学院人類学部博士課程修了（2006）【職歴】 ワシントン州立大学人類学部講師（2007）、ワシントン州立大学人類学部助教（2011）、ニューメキシコ州立大学附属博物館館長（2015）、ニューメキシコ州立大学人類学部准教授（2016）【学位】 博士（ワシントン州立大学 2006）、修士（アイダホ大学 2006）【専攻・専門】 考古学・先史学

【主要業績】

[共著]

Arakawa, F., D. Gonzales, N. McMillan, and M. Murphy

2016 Evaluation of Trachyte Tempered Pottery Sherds from Chaco and Chaco Outlier Sites in the American Southwest. *Journal of Archaeological Science: Report* 6: 115-124.

Arakawa, F., M. Varien, and T. Kohler

2016 American Southwest. In Chapter 8 Special Issue on North American Archaeology, *Cultural Antiqua*, translated and edited by K. Sasaki.

Gonzales, D., F. Arakawa, and A. Koenig

2015 An Application and Appraisal of Different Methods to Determine the Source of Sanidine-Bearing Pottery Temper, Four Corners Region, U.S.A. *Geoarchaeology* 30: 59-73.

【2017年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

ミンブレス土器資料を対象とした先住民との協働解釈調査

・研究の目的、内容

1. 「フォーラム型情報ミュージアム・プロジェクト」への貢献

民博招聘に先立ち、2017年8月28日から9月2日の6日間にわたり、民博のフォーラム型情報ミュージアム・プロジェクトが主催する国際ワークショップを米国ニューメキシコ州で開催した（国際ワークショップ「博物館とディセンダントコミュニティおよびソースコミュニティとの協働——米国ニューメキシコ州Mimbres遺跡出土資料熟覧と遺跡実見を介したアート作品制作と展示計画」）。このワークショップでは、荒川氏が館長を務めるニューメキシコ州立大学附属博物館が収蔵するメンブリス遺跡出土土器と同州トゥルースオアコンシクエンシーズ市のジェロニモ・スプリングス博物館収蔵土器資料の合計37点を先住民ホビが熟覧を行った。

民博滞在中に、そのワークショップ時に熟覧者が発した土器解説コメントを分析した。これはソースコミュニティに協力を仰ぐことによって民族学博物館が収蔵する民族誌資料の文化的な生命力の蘇生を目指す当プロジェクトにおいて、対象を考古学資料にも応用した初の試みであり、メンブリス土器を対象とする米国南西部

考古学の分野においてもこれまでほとんどなされてこなかったアプローチであった。

2. 国際連携展示の企画を含めた研究成果の国際発信・教育利用

「1」で得られたデータの一部は、民博研究懇談会（2018年5月16日、第285回研究懇談会）や米国コロラド州コロラド大学で口頭発表を行った。また上記したように英文編著としてまとめている最中である。さらに、今後も、例えば『American Antiquity』、『Kiva』といった学術雑誌への投稿や以下の米国内・国際学会等での口頭発表も計画している（Joint Seminar of the Research Department, American Anthropological Association, Society for American Archaeology, Mogollon conferences）。

2019年4月には、国際連携展示として荒川氏が館長を務めるNMSU附属博物館での常設展の一部改修・新規展示を計画している。展示会の仮題は『Alternative Narratives: the Singular Case Study of the Mimbres Pottery Workshop』である（別紙）。当館は日本でいう小学校一年生から大学四年生までを対象とした、展示場における教育活動を重視しているため、国際連携展示という形式での成果発信だけでなく、教育活動利用にも努める。

3. 民博収蔵米国南西部先住民関連の土器資料の同定作業（先史考古学者による資料熟覧）

2018年6月21日、22日、25日に、民博1階展示準備室にて、民博が収蔵する米国南西部先住民関連の土器資料35点について、資料熟覧を行い、米国南西部考古学に準じた分析と解説を行った。

これらの35点の土器資料は、1979年にニューヨーク州のブルーム交易会社付設インディアン博物館から一括で購入したもののだが、受入当初から資料情報が僅少で、展示利用の可能性が極めて少なかった。そういった状況に対して、ソースコミュニティ（ズニ族とホピ族）ならびにこの地域を専門とする考古学者による見解を付したことで、資料情報の厚みが加わったばかりか、今後、分析視点の異なる両者の見解を併置して展示・提示することも可能となった。

・成果

「1」の成果として、荒川・伊藤編の『Alternative Narratives: A Singular Case Study of the Mimbres Pottery Workshop』として初稿を書き上げ、今後は改稿を重ね、2019年もしくは2020年に米国アリゾナ大学出版会に投稿して刊行を目指している。また、資料熟覧コメントの部分に関しては日本語訳も行き、当プロジェクトで構築したデータベース『RECONNECTING Source Communities with Museum Collections』(<http://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/>)にもデータを移行し、公開する予定である。

「2」の成果として、民博研究懇談会（2018年5月16日、第285回研究懇談会）と米国コロラド州コロラド大学での口頭発表がある。また、2019年4月には、国際連携展示として荒川氏が館長を務めるNMSU附属博物館での常設展の一部改修・新規展示を計画している（展示会の仮題は『Alternative Narratives: the Singular Case Study of the Mimbres Pottery Workshop』、別紙）。

「3」に関しては、今回熟覧した35点の土器資料の中で16点の「Zuni」製資料は、2009年7月に元ズニ博物館長のJim Enoteが民博にて資料熟覧を行っており（『国立民族学博物館研究報告』35(3)として刊行済み）、それ以外の19点の「Hopi」製土器資料も2015年11月に2名のホピによって民博にて熟覧が行われており、そこで語られた内容はフォーラム型情報ミュージアムの国際発信プログラムとして刊行の準備を進めている。収蔵機関である民博が保持してきた資料情報、この数年で行ってきたソースコミュニティ（ズニ族とホピ族）による資料解説といった二種類の情報に対して、当該土器資料が制作された地域を専門とする先史考古学者による資料解説を新たに付した。資料情報の厚みが加わったばかりか、今後、分析視点の異なる三者の見解を併置して展示・提示することが可能となった。

CHEN PICHLER, Deborah [チェン・ピクラー, デボラ] ————— 准教授

任期：2017年5月17日～2017年7月20日

研究課題：日本語および日本手話話者の第二言語としてのアメリカ手話習得

【学歴・学位】ペンシルベニア州立大学一般生物学専攻・フランス言語文化学専攻卒業（1990-1995）、コネチカット大学修士課程言語学修士号（1990-1998）、コネチカット大学言語学博士号取得（1998-2001）【職歴】パデュー大学ポスドク研究員（2001-2002）、ギャローデット大学言語学学部助教（2002-2007）、ギャローデット大学言語学学部准教授（2007-2014）、ギャローデット大学言語学学部学部長（2009-2012）、ギャローデット大学言語学学部教授（2014-）【学位】Ph.D.取得（コネチカット大学言語学専攻 2001）、修士（コネチカット大学修士課程言語学専攻 1998）【専攻・専門】言語学、応用言語学

【主要業績】

[共編著]

Chen Pichler, D., M. Kuntze, D. Lillo-Martin, R. Quadros and M. Stumpf
in press *Sign language acquisition by Deaf and hearing children: A bilingual introductory digital course*
[bilingual, signed textbook in full video format]. Washington, D.C.: Gallaudet University Press.

[論文]

Chen Pichler, D. and E. Koulidobrova

2015 Acquisition of sign language as a second language. In M. Marschark (ed.) *The Oxford Handbook of Deaf Studies in Language: Research, Policy and Practice*, pp.218-230. Oxford: Oxford University Press.

Chen Pichler, D., J. Hochgesang, D. Lillo-Martin, R. Quadros and W. Reynolds

2016 Best practices for building a bi-modal bi-lingual bi-national child corpus. *Sign Language Studies* 16(3): 361-388.

【2017年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

日本語および日本手話話者の第二言語としてのアメリカ手話習得

・研究の目的、内容

自身の専門であるバイモーダルバイリンガル研究の手法および成果をもとに、日本手話話者のアメリカ手話習得に関するデータを収集し、分析をすすめた。受け入れ教員としては、通訳者および日本手話話者の紹介、調査のための場所の手配、みんぱく手話部門構成員の協力要請などの面で、サポートを行った。日本滞在は短かったが、日本ではまだほとんど行われていない言語習得や手話言語の第二言語習得について三件の招待講演を引き受けた。また、日常的に手話部門メンバーの研究に対するアドバイスがあった。

・成果

国内で手話言語学研究もしくは手話言語学推進のキーとなる機関からの招待による講演を行ったことは、国内外の手話研究界に大きなインパクトを与え、部門が今後、日本における手話言語学研究をけん引してゆくにあたり、有意義であったと考える。さらに、氏の滞在を通して、さまざまな研究機関へのネットワークが広がり、今後、手話部門の国際展開という面でも、大きな意義があった。手話部門メンバー各自の今後の研究においては、世界でトップレベルの研究者から研究方法やデータの収集・分析方法等について、各自の進捗段階に応じたアドバイスがあり、今後の研究の発展に大きく結びついたと考える。所属大学がろうの学生を対象としていることから、事業に対するさまざまな視点からのアドバイスがあったこと、また、通訳関係のビデオ作成などにも協力したなど、手話部門の研究の発展に直接・間接に貢献した。

KUEHN, Susanne [クーン, スザンネ] ————— 准教授

任期：2017年11月6日～2018年1月29日

研究課題：怪物表象の地域間伝播——ヨーロッパ、西アジア、東アジア

【学歴・学位】 国際基督教大学文学部卒業学士取得（1987～1991）、ロンドン大学 SOAS 美術史考古学科修士課程修了修士取得（1997～1998）、ベルリン自由大学美術史考古学科博士課程修了博士取得（1999～2009）【職歴】 クウェー
ト国立博物館アル・サバーフ・コレクション学芸コンサルタント（1998～2008）、バイルート東洋研究所リサーチ・
フェロー（2012～2013）、新欧州大学（NEC）高等研究所ジュニア・フェロー（2013～2014）、エックス・マルセイユ
大学高等研究所リサーチ・フェロー（2015）、ナント高等研究所リサーチ・フェロー（2016）、ウィーン大学宗
教学研究部講師（2017～）【学位】 博士（ベルリン自由大学美術史考古学科 2009） 修士（ロンドン大学 SOAS 美術史
考古学科 1998）【専攻・専門】 美術史

【主要業績】

[単著]

Kuehn, S.

2016 *Monsters as Bearers of Life-Giving Powers? Trans-Religious Migrations of an Ancient Western Asian*

Symbolism. With a Foreword by Lokesh Chandra, New Delhi: Indira Gandhi National Centre for the Arts, Co-Published: D.K. Printworld, 2016.

[論文]

Kuehn, S.

- 2016 Vestiges of the Ourobóros in Medieval Islamic Visual Tradition, In Proceedings of the 9th *International Congress on the Archaeology of the Ancient Near East (ICAANE)*, pp.169–182. Wiesbaden: Harrassowitz.
- 2016 The Eclipse Demons Rāhu and Ketu in Islamic Astral Sciences. In D. Antonov and O. Khristoforova (eds.) *Umbra: Demonology as a Semiotic System*, Issue 5, pp.211–244. Moscow: Indrik.

【2017年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

怪物表象の地域間伝播——ヨーロッパ、西アジア、東アジア

・研究の目的、内容

2019年秋に予定されている特別展「超自然史博物館（仮題）」の構成や展示資料選定に協力し、ヨーロッパ・西アジア・東アジアの怪物表象の図像学的知識をもって展示企画に積極的に参加した。特別展示の実行委員や共同研究メンバーと議論を重ね、みんぱく所蔵標本資料の選定・分類・分析し、展示の概念的枠組みを構築した。また、共同研究などにおいて研究発表を行った。

・成果

滞在中、以下の研究発表を行い、ネットワーク型基幹研究プロジェクト地域推進事業、共同研究などに貢献した。

現代中東地域研究拠点レクチャーシリーズ（2017年12月5日）

- “Taming the Animal Soul (Nafs): Esoteric Meaning in Sufi Visual Symbolism in the Western Balkans,” 10th MINPAKU Lecture Series in Modern Middle East Studies.

共同研究「驚異と怪異——想像界の比較研究」（2018年1月20日。体調不良のため、研究会サイトでレジュメ発表）

- “Traditions of Divine Service of the Sufi Orders in the Balkans: On Forms of Loud Dhikr (Remembrance of God),” *Strange Sounds: Auditory Connections to the Other World*

また、東京大学東洋文化研究所の招へいで以下の発表を行った。（2018年1月26日）

- “A Supernatural Creature in a Transcultural and Transreligious Framework: The Case of the so-called ‘Sēnmurw’,” Institute for Advanced Studies on Asia, University of Tokyo.

特別展の実行委員会に参加し、資料の選定、分類について意見交換を行った。また、韓国において幻獣表象の調査、国内において天狗表象の調査を行った。

招へい中の活動は、2019年秋の特別展に反映される。また、『国立民族学博物館研究報告』に以下の論文を寄稿する予定である。

“‘A Dervish is Covered with a Thousand and One Signs’: On the Visual Materiality of the Bektashis in the Balkans”

LAVÉDRINE, Bertrand [ラヴェドリン ベルトラン]————— 教授

任期：2017年4月10日～2017年10月10日

研究課題：写真資料の持続可能な保存環境構築に関する保存科学研究

【学歴】パリ第6大学・ESCOM 卒（化学）（1978）、パリ第6大学・ESCOM 修士号（化学）（1981）、パリ第1大学（パンテオン・ソルボンヌ）修士号（芸術・考古学）（1989）、パリ第1大学（パンテオン・ソルボンヌ）博士号（芸術・考古学）（1993）取得 【職歴】ランス防衛省第89大隊 科学者（1981～1982）、ローヌ・プーラン Rhône-Poulenc、カリ・アンド・ケミカルズ社 科学者（1982～1983）、紙資料保存研究所 Centre de Recherche sur la Conservation des Documents Graphiques 写真部門長（1983～1997）、紙資料保存研究所 Centre de Recherche sur la Conservation des Documents Graphiques 所長（1998～2007）、パリ第1大学教授・文化財の保存修復学士・修士コース責任者（併任）（2002～2007）、保存研究所 Centre de Recherche sur la Conservation 所長（2007～）、パリ自然史博

物館教授（併任）（2007～）【学位】博士（芸術・考古学）（パリ第1大学 1993）、修士（芸術・考古学）（パリ第1大学 1989）、修士（化学）（パリ第6大学・ESCOM 1981）【専攻・専門】保存科学（写真・映像資料）

【主要業績】

[単著]

ЛАВЕДРИН Б.

2013 *Руководство по профилактической консервации фотографических коллекций: в 2 т. - СПб., РОСФОТО, Т. I - 188 с. - пер. с французского. (LAVÉDRINE B., Guidelines for preventive conservation of photographic collections: T.1 - St. Petersburg: ROSPHOTO, 188p.)*

[編著]

Lavédrine, B. and J-P. Gandolfo

2013 *The Lumière Autochrome: History, Technology, and Preservation.* Los Angeles: Getty Conservation Institute.

Lavédrine, B., A. Fournier, G. Martin (eds.)

2012 *Preservation of plastic artefacts in museum collections.* Paris: Éd. du CTHS.

【2017年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

写真資料の持続可能な保存環境構築に関する保存科学研究

・研究の目的、内容

「写真資料の持続可能な保存環境構築に関する保存科学研究」をテーマに、研究活動をおこなった。

写真・映像資料の保存環境に関する調査と助言としては、受け入れ教員の園田と協力し、本館の収蔵庫（映像音響収蔵庫、フィルム収蔵庫、酢酸吸着棚）を視察し、本館でこれまで実施してきたフィルム酸性度調査の結果を検証した。本館では、フィルムの酸性度調査に A-D strips（フィルムの酸性度調査で一般的に用いられている試験紙。酸性度が強いほど、青色から緑色を経て黄色へと色が変化する）を用いているが、色変化の評価が個人でばらつきがあるため、同時期の調査結果は相互に比較検証できるが、異なる年度での調査結果の比較検証には問題があることが明らかになった。そこで調査者が替わっても、共通のものさしで色変化をよみとることができるような色見本スケールを、酸性度調査に携わる情報課の職員の協力のもと、作成した。また、東京国立近代美術館フィルムセンター（京橋および相模原分館）において、写真・映像資料収蔵庫を視察し、ニトロセルローススペースのフィルムやアセテートセルローススペースのフィルム、それぞれの材質に特化した収蔵庫の保存環境、その空調設備にまで及ぶ意見交換をおこなった。

積極的に国内外の研究者と交流し、各種の講演をおこなった。東京大学史料編纂所画像史料解析センター研究集会「写真資料の保存と学術資源化をめぐる」での基調講演「デジタル時代におけるアナログ写真の保存」（7月15日）、台湾・故宮美術館の保存部のスタッフを対象におこなった講演（7月28日）、立命館大学で開催されたリスクマネジメントの国際ワークショップ参加時の発表（9月15日）、そして後述の本館の国際シンポジウムでの発表「デジタル時代の写真と保存」（10月8日）があげられる。

日本滞在中、新たな研究テーマを開拓している。温度・湿度の変化が有機物の微妙な物理的変化に与える影響を計測により明らかにする試みである。3D計測を取り入れた実験に取り組み、基礎的なデータの集積をおこなっており、今後への展開が期待される。

2017年10月に開催された学術潮流フォーラムⅠ 人類基礎理論研究部・国際シンポジウム「変容する世界のなかでの文化遺産の保存」の企画にあたっては、外国から招聘する研究者の人選とその発表内容の策定において、これまでの人脈と経験を最大限に活用した。

・成果

ベルトラン・ラヴェドリン氏は、写真資料の保存に関する多くの著書を持つ。このうちの1冊『写真技法と保存の知識 デジタル以前の写真——その誕生からカラーフィルムまで』の日本語訳（白岩洋子訳、高橋則英監修）が、青幻舎から、2017年6月30日に刊行された。写真技法および写真資料の保存に関する専門書が日本語で刊行されたことは、本館だけでなく、他の機関にとっても大いに役立つものである。

ベルトラン氏発案のもと、園田と共同で作成した酸性度調査用の色見本スケールにより、今後、本館でのフィルムの酸性度調査においては、調査時期あるいは調査者が異なる場合でも、色の判定を同じ基準で判断するこ

とができるようになった。すなわち、一回の調査結果の検証だけでなく、何年後かの調査とも長期的視点での比較ができるという、新たな可能性が生まれた。

学術潮流フォーラムI 人類基礎理論研究部・国際シンポジウム「変容する世界のなかでの文化遺産の保存」の成果の刊行に向けて、現在、準備を進めている。この刊行物により、ふたつの効果が期待される。ひとつは、これまで国外への発信が限られていた日本国内の事例を、ひろく世界へ紹介することができることである。同時に、保存の分野における世界の潮流や問題提起を日本へ展開することができる、という双方向の学術交流の推進である。

またシンポジウムを契機とし、次の展開を考えている。シンポジウムのテーマであった「環境の変化」と「媒体の変化」が、文化遺産の保存にどのように影響を与えてきたのか、そして今後どのように対処していくのか（対処していけばよいのか）については、2017年秋から始まった共同研究「博物館における持続可能な資料管理および環境整備——保存科学の視点から」（研究代表者：園田直子）でさらに追究していく。

氏の所属先であるフランス国立自然史博物館は、博物館であるとともに大学院教育をおこなう機関であり、本館と研究分野が重なるところも多い。今後、両機関の間で学術協定を結び、さらなる研究交流を進めることを検討したい。具体的には、紙の同定に関する研究（現在、東京藝術大学と二国間交流事業実施中、園田もメンバーの一人）、民族資料や楽器コレクションの保存に関する研究、特別展における協力関係の構築などが考えられる。

NAIR, Janaki [ナーヤル, ジャナキ] ————— 教授

任期：2017年8月10日～2017年12月11日

研究課題：後期植民地期インドにおける教育、象徴権力、および「世俗的なものの形成」

【学歴・学位】バンガロール聖ヨセフ大学・聖ヨセフカレッジ卒業（1976）、ジャワーハルラルネルー大学（インド）修士課程修了（1983）、シラキユース大学博士課程修了（1991）【職歴】コルゲート大学（アメリカ合衆国）非常勤助教（1992）、バンガロール大学（インド）非常勤講師（1998）、カルカッタ大学（インド）非常勤講師（2000）、社会経済変動研究所（インド）講師（2002）、カルカッタ社会科学研究所（インド）講師（2008）、カリフォルニア大学パークレー校（アメリカ合衆国）非常勤講師（2009）、ジャワーハルラルネルー大学（インド）教授（2009-）【学位】Ph.D.（シラキユース大学 1991）、修士（ジャワーハルラルネルー大学 1983）【専攻・専門】インド歴史学

【主要業績】

（単著）

Nair, J.

2011 *Rethinking Modernity in Colonial and Postcolonial Indian History*. Minneapolis: University of Minnesota Press.

2005 *The Promise of the Metropolis: Bangalore's Twentieth Century*. Oxford: Oxford University Press.

（編著）

Ghosh, A, T. Guha-Thakurta, and J. Nair

2011 *Theorising the Present: Essays For Partha Chatterjee*. New Delhi: Oxford University Press.

【2017年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

後期植民地期インドにおける教育、象徴権力、および「世俗的なものの形成」

・研究の目的、内容

ジャナキ・ナーヤル氏は、上記研究課題に関して、国立民族学博物館の図書館資料を活用し、また同館の南アジア研究者と日常的にディスカッションを行いながら、文献渉猟や執筆活動を精力的に行った。また、受入期間中にケンブリッジ大学やバーゼル大学に先方経費で出張し、上記の課題に関して講演を行ったり、ワークショップに参加したりして、成果を発表する一方、現地の研究者との討論によってさらに知見を深めた。受入期間中は東京大学、東京外国語大学、香川大学等も訪れ、講演等を通じて日本の研究者とも積極的に意見交換を行った。

ディスカッションを通じて、国立民族学博物館の南アジア研究者の上記課題に関する理解や視点の深化・多様化が進んだ。また、同館「南アジア研究拠点」が計画している国際シンポジウムの企画や英文論文集の編集について積極的に提案・助言を行った。さらに、同拠点が11月に実施した国際セミナーでは自身の知見に基づき現代インドの大学教育に関する講演を行い、関心のある研究者と意見交換を行うなど、同拠点の活動推進に貢献した。

・成果

上記国際セミナーでの講演は2017年11月11日に“The Provocations of the Public University of India”と題して行われた。同氏が編集に助言を行った英文論文集は *Senri Ethnological Studies* 96 “Sustainable, Inclusive, and Peaceful Development of South Asia”として間もなく刊行される。

研究課題に関連した論文は2本が完成したほか、4本が執筆中であり、これらは順次海外の学術雑誌や出版社から出版される。一方内外の大学等での講演等は国立民族学博物館のものを含めて6回実施（ないし参加）している。

SAVELLE, James Michael [サベール、ジェイムズ マイケル]——教授

任期：2017年1月10日～6月30日

研究課題：過去と現在の捕鯨文化に関する人類学的研究

1950年生。【学歴】オタワ大学地質学部（1973）、オタワ大学大学院地質学部修士課程（1976）、アーカンソー大学大学院人類学部修士課程（1979）、アルバータ大学大学院人類学部博士課程（1985）【職歴】ケンブリッジ大学（ウルフソン・カレッジとスコット・ポラー研究所）客員研究員（1985）、マニトバ大学人類学部助教授（1987）、マッギル大学人類学部助教授（1988）、マッギル大学人類学部准教授（1994）【学位】Ph.D.（アルバータ大学 1986）、修士（人類学）（アーカンソー大学 1981）、修士（地質学）（オタワ大学 1979）【専攻・専門】民族考古学【所属学会】アメリカ考古学会、カナダ考古学会

【主要業績】

[単著]

Savelle, J.M.

1987 *Collectors and Foragers: Subsistence-Settlement System Change in the Central Canadian Arctic, AD 1000-1960*. London: British Archaeological Reports.

[編著]

Savelle, J.M., N. Kishigami and H. Hamaguchi (eds.)

2013 *Anthropological Studies of Whaling* (*Senri Ethnological Studies* 84). Osaka: National Museum of Ethnology, Japan.

[論文]

Savelle, J.M. and A.S. Dyke

2014 Paleoeskimo occupation history of Foxe Basin: Implications for the core-area model and for Dorset origins. *American Antiquity* 79(2): 249-276.

【2017年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

過去と現在の捕鯨文化に関する人類学的研究

・研究の概要

ジェイムズ・サベール博士は、外国人研究員として民博に滞在中に「過去と現在の捕鯨文化に関する人類学的研究」に関連した下記の研究活動を行なった。

- (1) 各個研究としては、捕鯨の起源や日本における捕鯨の歴史的展開に関する研究を行った。
- (2) 共同研究としては、受入教員らとともにこれまでに実施してきた捕鯨文化に関する研究の成果をとりまとめ、論文集の編集作業を行った。
- (3) 受入教員を代表者とするフォーラム型情報ミュージアムプロジェクト「北米北方先住民の文化資源に関するデータベースの構築に関する研究——民博コレクションを中心に」のデータベースを構築するために、民

博が収蔵しているアラスカ、カナダ、グリーンランドのイヌイットを中心とした考古学資料（102点）を熟覧し、情報の修正や付加を行なった。

- (4) 2017年2月29日開催のみんなく研究懇談会で研究報告を行うとともに、受入教員が参画する民博特別研究に参加し、2017年3月26日開催の2016年度特別研究シンポジウム「歴史生態学から見た人と生き物の関係」で研究報告を行った。

・成果

- (1) 各個研究の成果としては、論文 *Origins and Development of Subsistence Whaling* と論文 *Prehistoric and Early Historic Whaling in Japan* を書き上げるとともに、単著編“Prehistory of Whaling”の執筆を進めた。
- (2) 共同研究の成果として11章からなる論文集“Subsistence Whaling: Past History and Contemporary Issues.”の編集を進め、Springer もしくは *Senri Ethnological Studies* から出版する予定である。この出版は、民博の共同研究の成果の国際発信に大きく寄与すると考える。なお、上記の2本の各個研究論文は同編著書に所収する予定である。
- (3) 民博収蔵のアラスカ・カナダ・グリーンランドのイヌイット関係の考古学資料（102点）に関する修正・付加情報を現在構築中の「北米北方先住民の文化資源に関するデータベース」に反映させた。民博による文化資源の国際的な共有や共同利用に貢献すると考える。
- (4) 民博懇談会と特別研究シンポジウムにおいて下記の研究発表を行った。

2017 *Paleoeskimo Demographic History (ca.4800-800 B.P.) in the Canadian Arctic and its Relationship to Mid-Late Holocene Climate Variability*. Paper presented in the Joint Research Seminar series, National Museum of Ethnology, Osaka, February 29, 2017.

2017 *Of Inuit and Whales in Canadian Arctic Prehistory*. Paper presented at the Symposium ‘Human Relationships with Animals and Plants: Perspectives from Historical Ecology’, National Museum of Ethnology, Osaka, March 26, 2017.

民博の共同研究の推進や成果の発信に貢献したと考える。

以上のように、ジェイムズ・サベール博士の研究活動は、民博の共同研究の推進や文化資源情報の共有・共同利用化に貢献した。

SHELTON, Anthony Alan [シェルトン, アンソニー・アラン]————— 教授

任期：2018年1月4日～2018年6月29日

研究課題：フォーラム型情報ミュージアム構築のための方法論的研究：ブリティッシュコロンビア大学人類学博物館の互恵的調査ネットワーク（RRN）の応用

【学歴・学位】 B.A. (Hons.), Upper Second in Sociology and Social Anthropology, Hull University, UK, (1976)、M. Litt., Social Anthropology, Oxford University, UK (1978)、D.Phil., Social Anthropology, Oxford University, UK (2002) 【職歴】 Tutor, Interlingua (full-time), Ciudad Satelité Naucalpan, Mexico (1982)、Headmaster, Centro Escolar Tolteca (full-time) Atotonilco, Hidalgo, Mexico (1983)、Institute Assistant, Institute of Social Anthropology, Oxford University, UK (1986)、Curator, American Collections, British Museum, Department of Ethnography (Museum of Mankind), London, UK (1991)、Keeper, Non-Western Art and Anthropology & Founding Director, The Green Centre for Non-Western Art and Culture, The Royal Pavilion, Art Gallery and Museums, Brighton, UK (1995)、Keeper and Head of the Anthropology Collections and Research Group, The Horniman Museum, London, UK (1998)、Head of Collections, Research and Development, The Horniman Museum, London, UK (2001)、Professor, Department of Social and Cultural Anthropology, Co-ordinator, Research Group in Material, Visual and Performative Cultures, University of Coimbra, Portugal (2004)、Professor, Department of Anthropology University of British Columbia, Vancouver, Canada (2004-) 【専攻・専門】 人類学

【主要業績】

[著書]

Shelton, A. A.

2015 *Heaven, Hell and Somewhere in Between: Portuguese Popular Art*. Vancouver: Vancouver Figure 1 Publishing and UBC MOA.

[編著]

Shelton, A.

2012 *Luminescence: The Silver of Peru*. Lima: Patronato Plata del Peru.

Shelton, A. and C. Mayer

2009 *The Museum of Anthropology*. Vancouver: D&M Publishing.

【2017年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

フォーラム型情報ミュージアム構築のための方法論的研究：ブリティッシュコロンビア大学人類学博物館の互恵的調査ネットワーク（RRN）の応用

・研究の概要

シェルトン教授は、外国人研究員としての在任中、ブリティッシュコロンビア大学の人類学博物館（MOA）が、民族学的研究資料とその関連情報、とりわけソースである様々な民族や世界中のコミュニティの学術的・一般的情報の共同利用を目的として構築してきた「互恵的調査ネットワーク（RRN）」の知識・経験、方法論研究を生かし、本館のフォーラム型情報ミュージアム構築に貢献した。データベースの管理運営に関して岸上教授と意見交換を行い、アメリカ展示チームがこれから立ち上げるデータベース構築に協力することに合意した。鈴木紀、山中由里子両准教授らとともに収蔵庫でメキシコ仮面関連の標本資料の熟覧を行い、データベースに蓄積すべき研究情報のサンプルを提供した。熟覧した資料に関するエッセーを、『月刊みんぱく』（42巻11号及び42巻12号）の「想像界の生物相」にも寄稿した。

鈴木紀准教授らとともに準備を進め、6月末に民博で開催予定であった世界博物館学ワークショップは、残念ながら震災の影響のために延期となってしまったが、民博創立の背景とその発展について得た知見を、英仏、北米における人類学と民族誌資料コレクションの歴史に照らし合わせ、民博を世界の博物館史の中に位置づけた論文を『研究報告』43巻1号に寄稿した。その他にも、ロンドンで開催された「美術、物質文化、表象」の国際会議において、神戸大学の窪田幸子氏とパネルを共同企画し、「クリティカル・ミュージオロジー」の分野において成果発表を行った（詳細は本人の報告書参照）。

在任中には、民博の標本資料や図書資料を活用しながら、メキシコ仮面と仮面劇に関するこれまでの調査研究を総括した研究書の原稿も執筆し、来年刊行の予定である。民博のメキシコ仮面コレクションが想像以上に充実した、世界的にも有数のものであることを今回の滞在で初めて知り、熟覧の時間が足りなかったため、機をあらためて来日し、標本資料の精査をしたいとのことであった。

SIMON, Scot Eliot [サイモン、スコット・エリオット]——教授

任期：2017年8月1日～2018年7月27日

研究課題：日本と台湾における人間と動物との関係の物質環境学

【学歴・学位】 インディアナ大学文学部卒（1988）、アイオワ大学大学院宗教学部卒（1990）、マギル大学大学院人類学部修士課程修了（1994）、マギル大学大学院人類学部博士課程修了（1998）【職歴】 台湾文藻大学英語学部助理教授（助教）（1999）、台湾中央研究院社会学研究所PD研究員（2001）、オタワ大学社会学部助手（アシスタント・プロフェッサー）（2004）、オタワ大学社会学部准教授（2014）、オタワ大学社会学部教授（2014-）【学位】 Ph.D.（マギル大学）、修士（マギル大学）【専攻・専門】 人類学

【主要業績】

[単著]

Simon, S.

2012 *Sadyaq Balae! L'autochtonie formosane dans tous ses états*. Québec: Presses de l'université de Laval.

[論文]

Simon, S.

2015 Real People, Real Dogs, and Pigs for the Ancestors: The Moral Universe of “Domestication” in Indigenous Taiwan. *American Anthropologist* 117(4): 983-709.

Simon, S. and A. Mona

2015 Indigenous Rights and Wildlife Conservation: The Vernacularization of International Law on Taiwan. *Taiwan Human Rights Journal* 3(1): 3-31.

【2017年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

日本と台湾における人間と動物との関係の物質環境学

・研究の概要

オタワ大学社会学部サイモン・スコット教授は受入期間中に、研究課題である日本と台湾における人間と動物との関係物質環境学に関わる調査、研究に従事するとともに、本館で進めているフォーラム型情報ミュージアムのプロジェクトの推進に努めた。

前者においては、日本における人間と動物との関係なかでも、鳥を結節点とする人間関係の動態に関する調査、研究を、日本の探鳥愛好家で構成される野鳥の会の諸活動に参加し、人間の社会関係を探究する新たな切り口を見出すことになった。

後者においては、受入教員である野林が代表を務める「台湾および周辺島嶼生態環境における物質文化の生態学的適応」の推進に尽力し、野林とともに国際シンポジウムの開催を行った。また、野林とともに、フォーラム型情報ミュージアムのプロジェクトに関わる台湾におけるフィールド調査に共同で従事するとともに、海外の国際学会等での発表、講演を実施した。

・成果

- 1) 国際シンポジウム“Ecological and Cultural Approaches to Taiwan and Neighbouring Islands” held at Minpaku, July 19–20, 2018. 報告書を野林と共編でSES等で出版を計画している。
- 2) 雑誌論文3本、国際会議発表等11本（招待講演含）、書評2本、その他。

SMIDT, Wolbert G.C. [シュミット ヴォルバート G.C.] ————— 准教授

任期：2017年1月24日～5月16日

研究課題：写真・動画資料の分析と活用を通じたエチオピア近代史の研究

【学歴】ベルリン自由大学法律学科・哲学科卒（1992）、ベルリン自由大学歴史人文学科修士課程修了（1998）、ハンブルグ大学社会科学科博士課程修了（2005）【職歴】ハンブルグ大学アジア・アフリカ研究所研究員、メケレ大学歴史文化学部准教授【学位】博士（ハンブルグ大学）【専攻・専門】歴史人類学

【主要業績】

[単著]

Smidt, Wolbert G.C.

2015 *Photos as Historical Witnesses: The First Ethiopians in Germany and the First Germans in Ethiopia, the History of a Complex Relationship*. Münster: Lit-Verlag (Afrika Visuell).

[編著]

Smidt, Wolbert G.C., and S. Thubauville (eds.)

2015 *Cultural Research in Northeastern Africa, German Histories and Stories*. Frankfurt/Main: Frobenius-Institut-Goethe-Institut-Mekelle University (Publication of the Frobenius Institute).

Ficquet, É., Wolbert G.C. Smidt (eds.)

2014 *The Life and Times of Lij Iyasu of Ethiopia: New Insights* (Northeast African History, Orality and Heritage 3). Münster: Lit-Verlag.

【2017年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

写真・動画資料の分析と活用を通じたエチオピア近代史の研究

・研究の概要

約4か月にわたる民博での滞在期間中、シュミット博士は、精力的に研究活動に取り組むことができた。シュミット博士は、日本ナイルエチオピア学会第26回学術大会（於：富山大学、4月15日）や、国際シンポジウム『Resource Management and Conflict Resolution: Cases from Muslim Societies in Northeast Africa』（於：秋田大学、4月24日）等の国内の学術大会やシンポジウムに参加し、エチオピア近代史研究の観点から積極的に研究発表を行い、数多くの研究者と交流を行った。民博においては、受け入れ教員の川瀬がエチオピア北部地域で収集した映像音響資料の分析を、計画通り進めると同時に、川瀬とともにエチオピア近代史や、アーカイブ写真・動画の創造的な活用をテーマにしたセミナーを定期的に開催した。第278回民博研究懇談会においては当時民博で開催中であった特別展「ビーズ——つなぐ・かざる・みせる」に関連する研究報告『The cowrie in Ethiopia and Eritrea: an ethnohistorical study of a traditional protective charm and object of value and beauty』を行った。

・成果

シュミット博士は、今回の滞在期間中、上記の研究発表にとどまらず、精力的な執筆活動に従事した。国立民族学博物館研究報告へは“Coins as cultural objects at the fringes of the Indian Ocean: Spanish silver dollars in Tigray and Eritrea between value and magic”というタイトルの論文を投稿。また、共著論文“(Self-) Images of life during invasion and occupation: Atrocities and ethnographic beauty, Ethiopia 1936”を学術雑誌『Cahiers d'études africaines』に提出予定である。シュミット博士は、今回の民博滞在期間中、興味関心を共有する館内の教員と密な交流を重ねた。シュミット博士と民博の交流を足がかりに、アフリカ北東部における資料収集をはじめ、エチオピア諸機関との研究提携、人的交流が期待できるであろう。

VUCINIC-NESKOVIC, Vesna [ヴチニッチ・ネスコヴィッチ、ヴェスナ]————— 教授

任期：2017年2月10日～2017年6月9日

研究課題：中国都市の公共的空間における日常生活——日本との比較

【学歴】ベオグラード大学哲学大学院（1994）【職歴】ベオグラード大学教授【学位】人類学博士（ベオグラード大学哲学大学院 1994）【専攻・専門】文化人類学【所属学会】国際人類学東南ヨーロッパ学会（InASEA）、人類学会世界協議会（WCAA）

【主要業績】

[単著]

B. Вучинић Нешковић (Vucinic-Neskovic Vesna)

1999 *Просторно понашање у Дубровнику: антрополошка студија града са ортогоналном структуром* [Spatial Behavior in Dubrovnik: An Anthropological Study of a City with Orthogonal Structure]. Одељење за етнологију и антропологију Филозофског факултета Универзитета у Београду, Београд. [Dept. of Ethnology and Anthropology, School of Philosophy of University of Belgrade, Belgrade].

2008 *Божић у Боки Которској: антрополошки есеји о јавном налагању бадњака у доба постсоцијализма* [Christmas in the Bay of Kotor: Anthropological Essays on the Public Burning of Yule Logs in the Time of Postsocialism]. Филозофски факултет Универзитета у Београду и Чигоја штампа, Београд. [School of Philosophy of University of Belgrade, Belgrade and Cigoja Press, Belgrade].

2013 *Методологија теренског истраживања у антропологији: од нормативног до искуственог* [Methodology of Anthropological Fieldwork: From the Normative to the Experiential]. Српски генеалогски центар и Филозофски факултет Универзитета у Београду, Београд. [Serbian Genealogical Centre and School of Philosophy of University of Belgrade, Belgrade].

【2017年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

中国都市の公共的空間における日常生活——日本との比較

・研究の概要

ヴチニッチ教授は、受け入れ教員である韓敏と連携のうえ、民博に滞在した4ヶ月の間に、英語を中心とした

関連文献を収集し、日本と中国などの世界他の地域の公共的空間における市民の日常的活動について、教員や院生の中で聞き取り調査を行い、また、大阪、京都、奈良、神戸と東京で参与観察も行った。ヴチニッチ教授は、これまでに文化人類学の視点から東南ヨーロッパの露天公共的空間における日常生活および祭祀活動に関する成果と見解を、日本と中国の研究に導入し、比較のアプローチを試みた。また、ヴチニッチ教授は、二重または多重の文化体験者に接触し、本館、大阪大学、京都大学、神戸大学、立命館大学など日本の他の学術機関の多数の社会学者および人文科学者の間で、質問票にもとづいて詳細なインタビューを行うことができた。

他方で、ヴチニッチ教授は、研究・大学共同利用・教育の多機能を持つ本館において、積極的に大学院生と交流し、国際シンポジウム「現代アジアにおけるお盆・中元節・七月の祭り——あの世とこの世をめぐる儀礼」(2017年3月4～5日)などにも参加し、都市人類学や東南ヨーロッパ、日本と中国についての交流をおこなってきた。私は、彼女の受け入れ教官として研究活動において資料、人脈、環境のうえで情報や便宜をはかり、日本と中国の都市部と農村部の公共的空間の認識及びその利用の相違点についても議論を交わした。さらにわれわれは、東アジア、さらにヨーロッパの人類学界におけるネットワーク構築の可能性についても検討した。

・成果

ヴチニッチ教授は、これまでに東南ヨーロッパの都市部の公共的空間の研究で使用された諸概念：露天的公共空間、イベント・儀礼空間、社会活動の空間を日本の研究に導入した結果、日本の公共的空間で観察された多様な活動は、ヨーロッパや他の東アジア諸国(中国など)には見られないほど、実に賑やか多様であることがわかった。ヴチニッチ教授は、超域フィールド科学研究部主催の一回目の公開研究会において、「ヨーロッパと東アジアのオープンな公共空間における日常生活：比較アプローチの可能性」というタイトルで進行中の研究結果を発表した(2017年5月31日)。研究会では、26名の参加者と活発な議論をおこなった。今後、上記の本館滞在中で得られたデータを分析し、さらなる考察と資料を加えた上で研究ノートか論文を執筆する予定である。地域と民族を超えたヴチニッチ教授のアプローチは、新しくできた超域フィールド科学研究部の研究活動の模索と展開に重要な示唆を与えてくれた。

他方で、本館招聘期間中、JASCAの活動や国際人類学・民族学の国際組織(IUAES)(WCAA)とのつながりをもつヴチニッチ教授は、本館の多数の教員や小泉潤二先生、窪田幸子先生との交流を積極的に行い、民博及び日本の人類学研究者が国際ネットワークをさらに拡大していく、重要な契機になったと考えられる。